

SD

9604 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第379号 1996年4月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

大地と光の変様 オーストラリア建築1788-

Australian Architecture 1788-

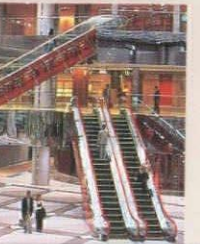
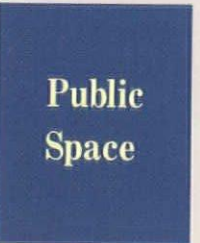
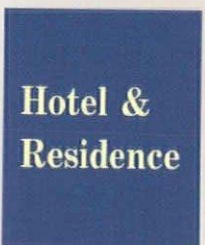
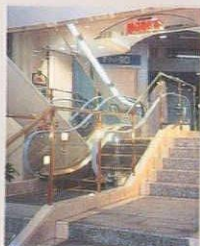
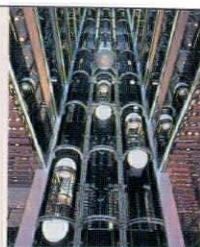


HITACHI

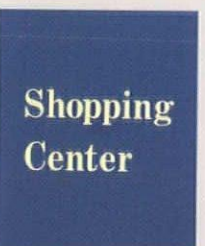
広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の「超高速エレベーター」や、身近な暮らしの中で利用される「車いす用ステップ付きエスカレーター」、「ホームエレベーター」など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Office Building



超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



Hotel & Residence

Public Space

Shopping Center

すべての条件を高水準でクリアー

水槽には、耐震性、保温性、止水性、さらに高い衛生性など、様々な要素をハイレベルな水準でクリアーし、メンテナンスも一段と容易にしたのが、ブリヂストンのFRP製パネル水槽「スーパーウォータージャック」です。

藻の増殖がなく衛生的

藻の増殖は光透過が原因ですが、設計用水槽照度率を0.06%以下にコントロールした「スーパーウォータージャック」は、藻の増殖がなく、非常に衛生的です。

■製品仕様

標準サイズ (高さ)	1.0m, 1.5m, 2.0m, 2.5m, 3.0m
(幅×横)	1m×1m—5m×5m
耐震仕様	3G仕様、1.0G仕様、1.5G仕様
保温仕様	単板型、保温型
標準色	クリアー (ツレセルNo. = 2.5V%)
用途	飲料水槽、工業用水槽など

■設計条件

地震	水槽設計用水平震度 K_h : 3/4, 1.0, 1.5			
風圧	風速60m/秒			
積雪	積雪60kgf/m ² (積雪60kgf/m ² を超える積雪仕様の場合は別設計となります)			
水圧	水槽高さ(m)	1.0	1.5	2.0
	パネル強度(kgf/cm ²) [*]	0.6以上	1.0以上	1.3以上
	常用水圧(kgf/cm ²)	0.07	0.12	0.16

* パネル強度 (水圧による破壊強度)

FRPパネル水槽 スーパー ウォータージャック

株式会社ブリヂストン

建築用品販売部

東京都中央区京橋1-10-3 〒104 TEL (03) 3563-6926

BRIDGESTONE

National/Panasonic

AV&C FT APS

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5500-7504
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

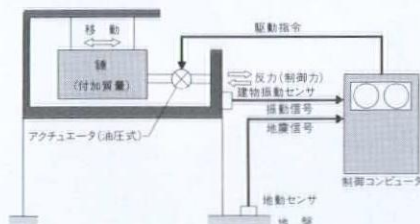
本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

世界初のアクティブ制震システム。

AMD【エー・エム・ディ】

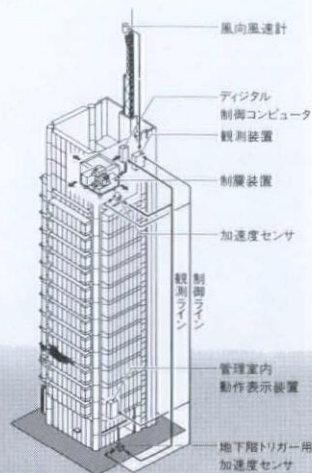
カジマが世界で初めて実用化したアクティブ制震システム。建物荷重の約1%の錘を屋上に設置。コンピュータ制御で錘を駆動して揺れを制御。地震や強風時にビル内では全く揺れを感じさせない優れた制震効果を発揮します。高層、超高層、超々高層ビルなどに。



優れた頭脳とバランス感覚をもった新しい制震システム。

DUOX【デュオックス】

AMDをさらに進化させた複合型アクティブ制震システム。高度な技術力により省エネ化、小型化を図りながら、制震効果は大型装置と同等以上の優れた性能を実現。高層、超々高層ビルはもちろん、リニューアルでの既存のビルへの設置と適用範囲を大きく広げた新しい制震システムです。

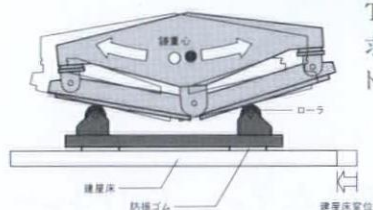


小さな装置で大きな制震効果を発揮。

TRIGON【トリゴン】

振子運動を行う錘をアクティブに駆動するハイブリッド制震システム。コンパクトな装置でイニシャルコスト、ランニングコストともにわずか。地震や強風による揺れも1/2以下に制御。

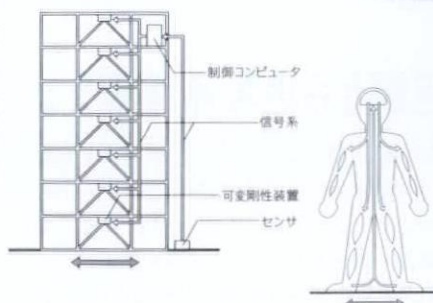
TRIGONは居住性と快適性が求められる超高層インテリジェントビルに採用されています。



建物の剛性を変えて揺れをかわす。

AVS【エー・ブイ・エス】

走る電車の中に立っている人が身体のバランスを保つように、ブレースに接続された可変剛性装置が瞬時にブレースの〈有効〉〈無効〉を切替え、揺れをかわします。中小地震から大地震まで効率よく対応し、大地震にともなう停電時にも確実に作動。シンプルで確実なアクティブ制震装置です。



地震から交通振動まで、あらゆる振動をカット。

免震防振構法

建物をまるごと積層ゴムで支え、大地震から交通振動まで、あらゆる振動をカットします。交通振動などの細かな振動から建物を守り、静かな室内環境を確保。道路や線路に隣接した建物に優れた効果を発揮します。

安全で快適な環境を創造するカジマの高度な制震技術。

快適をより確かなものに。

ビルを連結して揺れを抑える。

JDS 【ジェー・ディ・エス】

360度あらゆる方向の揺れに対応する制震システム。高さの違う建物(=振動周期の異なる建物)を特殊ダンパで連結し、双方の揺れを相殺します。シンプルな構造のダンパは素材・製造・設置コストも少なく、構造体コストの低減を実現します。

高性能オイルダンパが振動を吸収。

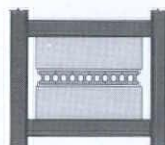
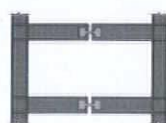
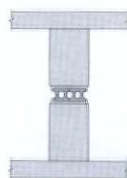
HiDAM 【ハイダム】

建物の骨組みと一体化されたオイルダンパが地震や強風による振動を吸収します。優れた振動減衰性能により建物の軽量化が可能となり、構造体コストを低減。建物耐用年数より長い耐久性が自慢です。

壁や梁が振動を吸収。

HDS 【エイチ・ディ・エス】

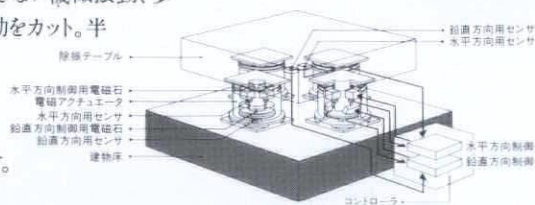
壁や梁など構造体そのものにハチの巢型のダンパ等を組み込み、振動エネルギーを吸収させます。特に震度5以上の大地震に大きな効果を発揮。中高層から超高層に至るまで幅広く対応。低コストで設置でき、柱や梁などを軽減しても快適さは変わりません。



精密機器を磁気で浮上させる
次世代の除振装置。

MLIS 【エムリス】

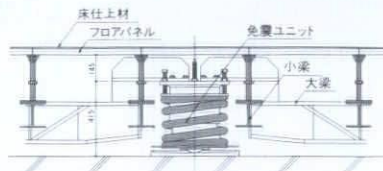
完全非接触型の理想的な除振を実現した磁気浮上式除振装置です。建物レベルの振動対策ではカバーできない機械振動、歩行振動などの微細な振動をカット。半導体をはじめ、先端テクノロジーの分野でこれから、ますます求められる次世代のシステムです。



コンピュータを地震から守る
免震床システム。

KIFS 【ケー・アイ・エフ・エス】

コンピュータなど精密機器を載せた床を建物本体から分離して振動を遮断。必要なフロアだけを免震構造にすることができ、地震の規模を問わず優れた効果を発揮します。コンピュータセンターや医療施設、精密機器生産施設、美術館など振動を嫌う設備機器のある建物に最適です。



in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合わせは—
技術営業部 03(3404)2011

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:

ホテル 鹿島/森 予約係

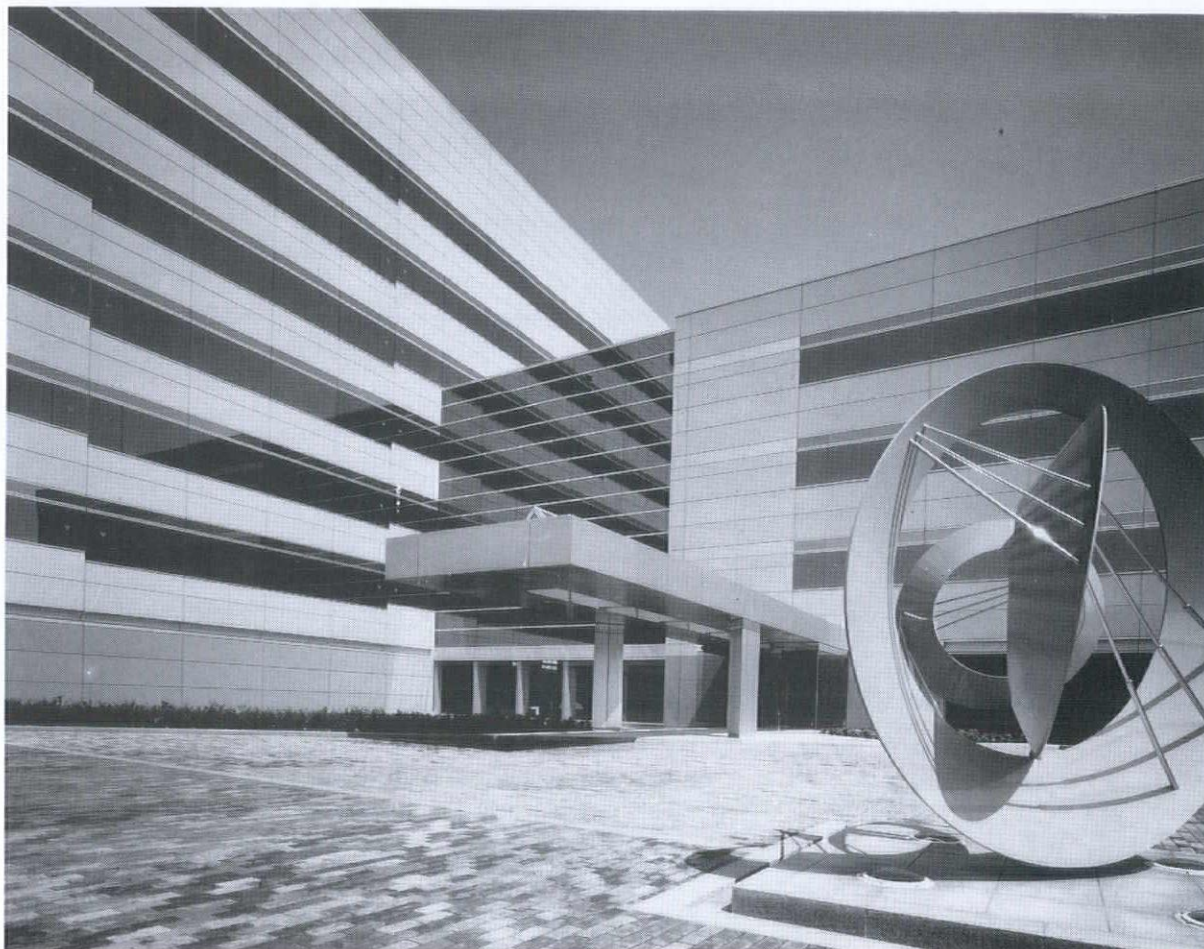
☎ 03(3478)6220

現地 ☎ 0267(42)3535(代)

FAX: 0267(42)5335

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
T O K Y O

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775



マルチメディアのNEC

NEC

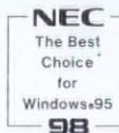
魅せるノート
ラヴィ誕生。



98で、Windows 95

これがWindows 95搭載、 マルチメディアカラーノートの最新作。

- ・プラグ&プレイをはじめ、32ビットマルチタスク、強力なネットワーク機能など、さまざまな高機能が凝縮された最新のOS・Windows 95を搭載しています。
- ・CPUには、先進・高速のPentium™プロセッサを搭載。さらにメモリは16MB(最大48MBまで搭載可能)内蔵しています。
- ・ディスプレイには高解像度で、ハイレゾ表示が可能な10.4インチTFTカラー液晶ディスプレイを採用しています。
- ・高音質のPCM録音・再生機能やFM音源、さらに重低音再生EBAP回路を採用したステレオスピーカ(オーセンテック社製)など高品質サウンド機能を標準装備しています。
- ・マルチメディアカラーノートとしての醍醐味をたっぷりと味わえるよう、4倍速CD-ROMドライブを新搭載しました。
- ・さらに、赤外線通信インタフェース、98スライドパッド、そして使い勝手を広げる2つの拡張ベイなど、快適機能を満載しています。



98 NOTE Lavie Na

PC-9821 Na12/H10	Pentium™プロセッサ (120MHz)・16MB/HDD1GB	・4倍速CD-ROMドライブ内蔵	標準価格690,000円(税別)
PC-9821 Na12/H8	Pentium™プロセッサ (120MHz)・16MB/HDD810MB	・4倍速CD-ROMドライブ内蔵	標準価格660,000円(税別)
PC-9821 Na9/H8	Pentium™プロセッサ (90MHz)・16MB/HDD810MB	・4倍速CD-ROMドライブ内蔵	標準価格620,000円(税別)
PC-9821 Na7/H7	Pentium™プロセッサ (75MHz)・8MB/HDD720MB	・2倍速CD-ROMドライブ内蔵	標準価格498,000円(税別)
PC-9821 Na7/H5	Pentium™プロセッサ (75MHz)・8MB/HDD540MB	・CD-ROMドライブオプション	標準価格458,000円(税別)

98NOTE Lavie Naの主な仕様 ●ディスプレイ:10.4インチTFTカラー液晶(ハイレゾ表示)(800×600ドット/65,536色表示) ●サウンド:PCM録音・再生機能とFM音源・マイクホン・ステレオスピーカ(EBAP回路搭載)内蔵 ●PCカードスロット:JEIDA Ver4.2/PCMCIA2.1仕様の標準TYPE I X2スロット内蔵(TYPE II X1スロットとして使用可能) ●高速ウィンドウアクセラレータTident社製 Cyber9320™標準搭載 ●赤外線通信インタフェース内蔵など。 ●Windows使用時、ウィンドウアクセラレータのデザイン機能により実現。Windows 95の正式名称はMicrosoft Windows 95 Operating Systemです。Microsoft Windowsは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標です。PentiumはIntel Corporationの商標です。ソフトウェア、周辺機器、増設ボード等はWindows 95の互換動作可能なものを確認の上ご使用下さい。画面はイメージ合成です。

本商品には、Microsoft Windows 95とMS-DOS 6.22/Microsoft 3.11の両方の基本ソフト(Operating System)がインストールされていますが、本体を最初に起動したときに選択した片方の基本ソフトのみ使用可能となります。尚、選択されなかった基本ソフトは固定ディスクドライブから自動的に削除されますのでご注意ください。

※ご使用の際は、必ず「取扱説明書」をよくお読みのうえ、正しくお使いください。

コストパフォーマンスに優れた、
Windows 95搭載フルカラーノート。



Nb	PC-9821 Nb7/C8	標準価格 448,000円(税別)
	PC-9821 Nb7/5	標準価格 398,000円(税別)
	PC-9821 Nb7/D5	標準価格 358,000円(税別)

FAXサービス 東京: 03-3552-9801 大阪: 06-304-9821 (電話番号・FAX番号は、よくお確かめのうえおかけください) 平成8年6月1日より東京の番号は 03-3769-9821に変更致します

本広告に掲載している商品のカタログ、アップデートサービス情報、インターネット体験キャンペーン、及びWindows 95についての導入ガイドをFAXでお送りします。お手持ちのFAXからダイヤルしてください。おアナウンスにしたがってBOX番号をダイヤルしてください。

70114	70171	71501	71506	71510	71507	アップデートサービス情報BOX	71431	71422	71421
(PC-9821 Na搭載BOX)	(PC-9821 Nb搭載BOX)	(Windows 95安心メニュー)	(98ユーザのための導入ガイド)	(5.25インチディスク情報)	(インターネット体験キャンペーン)		(Windows 95 東京)	(Windows NT3.5)	(OS/2 2.11)

トビの98シリーズをインターネットにアクセスしよう
「98でインターネット10時間無料体験キャンペーン」
期間: 2月24日～4月7日
詳しくは販売店またはFAXサービスにお問い合せください。

新商品情報はPC-VANでも提供中/
PC-VANに接続したら、J-NECPC™とキー入力してください。接続するには、PC-VANに加入している必要があります。加入については、PC-VAN事務局 TEL: 03-3454-8909にお問い合せください。

パソコンに関する技術的な質問・ご相談にお電話でお答えします。NECパソコンインフォメーションセンター
東京: 03-3552-9801 大阪: 06-304-9821 札幌: 011-251-2511 仙台: 022-251-2511 名古屋: 052-251-2511 福岡: 092-251-2511
(本広告に関するカタログを差し上げます。) FAX: 03-3552-9801 受付時間: 午前9時～午後5時(土・日・祭日を除く) 電話番号はよくお確かめの上おかけください。

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

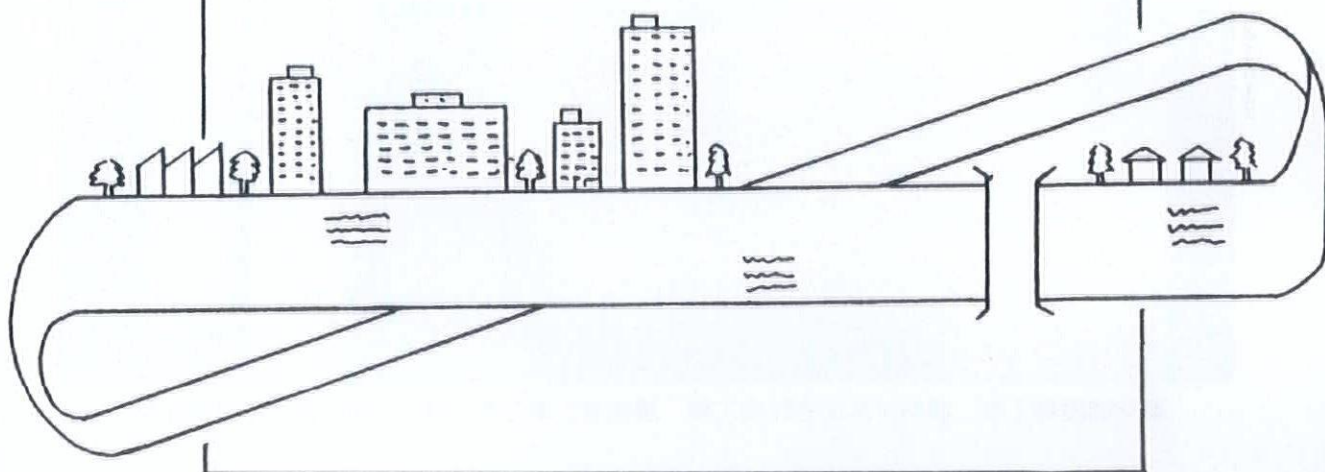
日新工業株式会社

営業本部 103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福井	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	高松	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

水環境を

クリエイトする

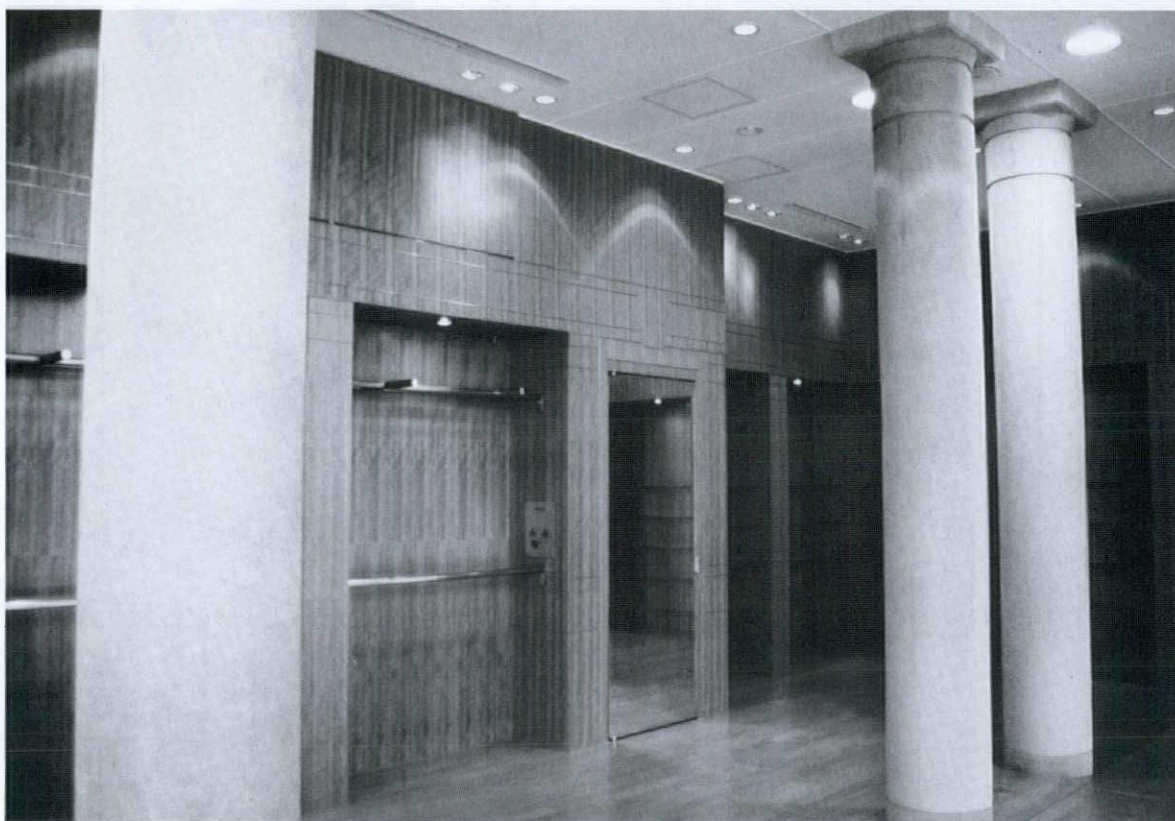


株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

清らか、
爽やか、
和やかな環境づくり。



■空調設備工事 ■給排水衛生設備工事 ■給湯設備工事 ■その他建築付帯設備工事

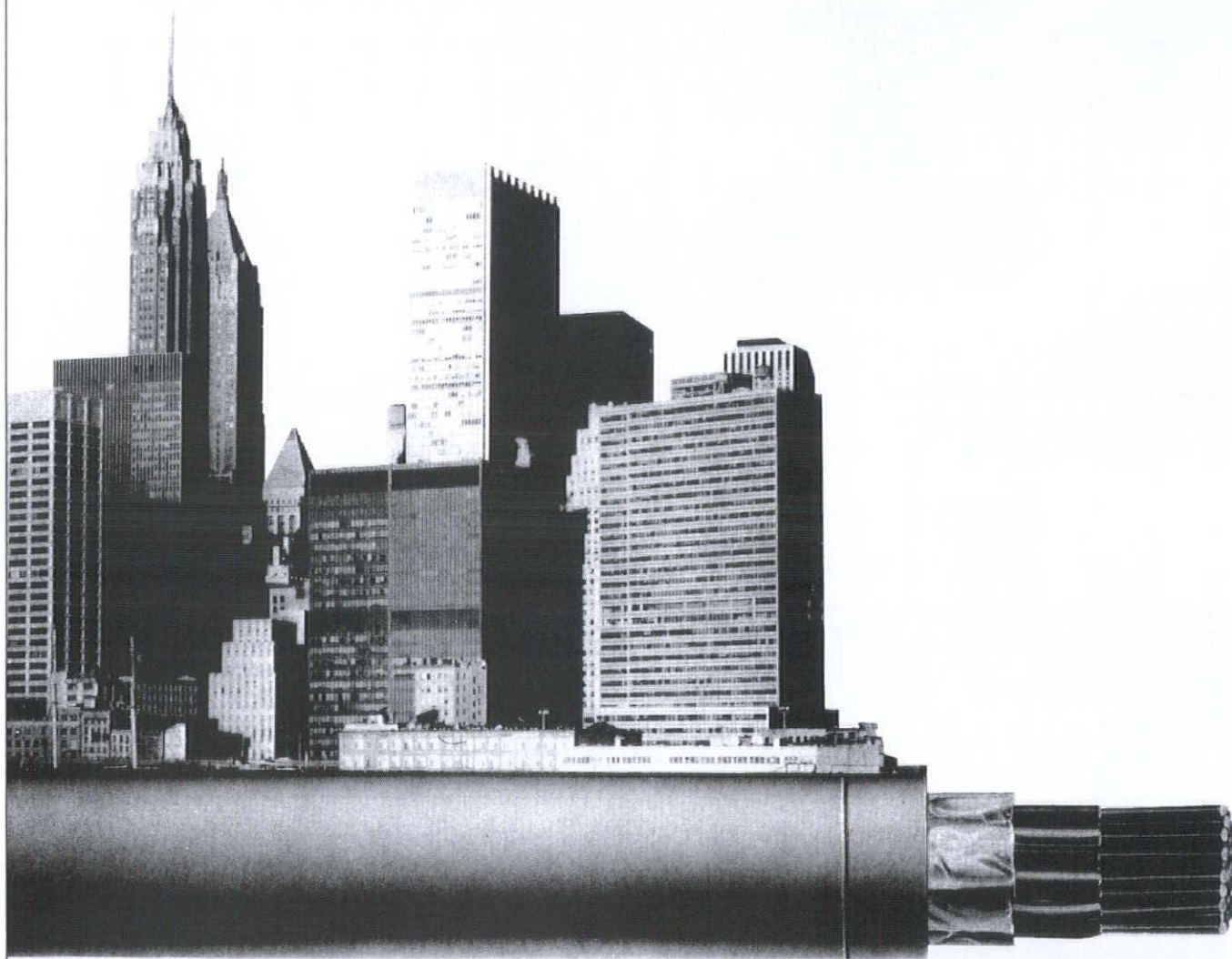
ヤナセ設備工業

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

株式会社ヤナセ設備工業
〒105 東京都港区芝浦1-11-4
電話(代表)東京(03)3455-8091

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中樞神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア

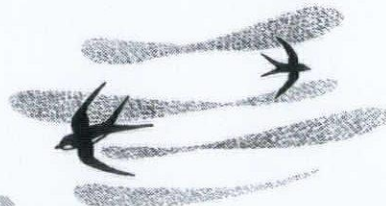


株式会社 弘電社

取締役社長 成 吉 信
〒104東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイー、ピュイー。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

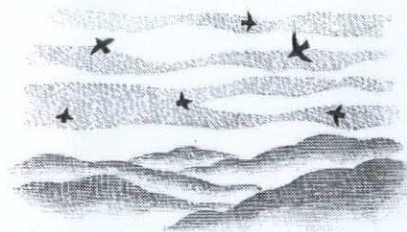
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして
近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

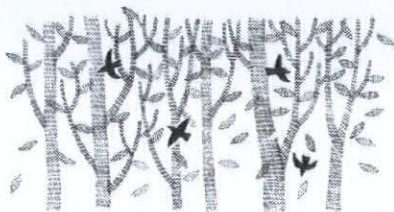
見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代) 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京支店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪支店/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181



確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工

電気・水・空気・光・情報の各施設

心のふれあい大切に――

株式会社 中電工

本店/広島市西区上天満町1番15号

TEL(082)291-7411

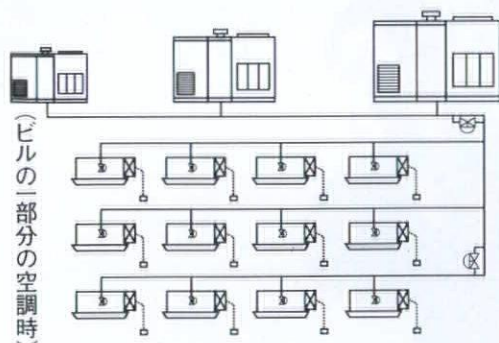
支店/広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

あつ
もつた
ない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
トロールパネル[DCP]のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

札幌支社 TEL.011-852-2914 名古屋支社 TEL.052-833-8415 中国支社 TEL.0829-23-2115
仙台支社 TEL.022-284-9115 大阪支社 TEL.06-458-4825 四国支社 TEL.0878-33-3336
東京支社 TEL.03-3298-3140 北陸支社 TEL.0764-41-6516 九州支社 TEL.092-411-4835



バックナンバー

鹿児島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話 03-5561-2111(代)
振替 00160-2-180883

年間定額購読料

25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店

【東京】
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
【大阪】
松屋書店本店

柳屋堂 06-443-0167

【札幌】
松屋書店 011-241-3007
【横浜】
有隣堂本店 045-261-1231
【京都】
大盛堂書店 075-231-3036
【大学生協内書店】
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9404 堂夢の時感／木島安史の世界 3000円

作品：春燈庵、孤風院、YAS居、球泉洞森林館、折尾スガツセンター、設計競技作品、他。文：木島安史、桐敷真次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。略年譜、作品データ、執筆一覧

9405 東ドイツの近代建築 1950円

旧東ドイツの近代を席巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンヘルプのダム、[H. ヘルツェヒ]、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真：長谷川謙

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円

「働く人々のための空間とアート」に目直し、海外の事例を紹介。文：南條史生、D. F. ハンセン。アーティストアンドレア・プラム、他。企業等：IBM、ブリティッシュ・カウンスル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円

アメリカランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、バーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円

フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所、他。文：D. マントレリ、堀池秀人、他。[異界の備院——モルドバのルーマニア正教会堂] 写真：平岡、文：山崎揚史

9409 思考と建築・都市：アメリカ東海岸の新たな動向 1950円

B. シャーテル&ギブニス、マイケル・ソークン、他。文：松塚雄、他。[「手法」から「確証」へ／吉川油脂寄宿舍] TAO ARCHITECTS／野田俊太郎、写真：堀内広治

9410 トロハの通した構造と空間 3000円

鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。[芸術都市への蘇生／イタリア・ジベリーナの試み] 地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円

世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルに技術的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、フウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文：ディヤニス・ジック、他

9412 SDレビュー1994 1950円

第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J. ビザル+P. ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田端繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。[国際競作プロジェクト／オシヴィエンチム風見院]

9501 山本理顕 3000円

作品：緑園都市、岩出山町立統合中学校、恒泉性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真：北嶋俊治、大野誠。論文：山本理顕、宇野求、T. ヘネガン。鼎談：横文彦+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのバロック建築 1950円

地中海の島シチリアとプリアア地方サレント半島のレッチェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。総教都市バレルモ、シクリ、他。写真：小野一郎、文：竹山博英、長谷川正光、岡田哲史

9503 集合住宅の現風景 1950円

近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文+作品：荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴、座談会：植田実+室伏次郎+松隈洋



9504 テクノスケープ 3000円

テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視座を提示する。文：宇野求、岡河貢、永瀬唯、A. ロジェ、他。座談会：中村良夫+三谷徹+宇野求、東京湾岸マップ

9505 メガ・アーキテクチャ 1950円

巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-REX駅、他。対談：安藤忠雄+P. アンドルー、[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成：坂本勝比古

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性 1950円

インタビュー：原広司、伊東豊雄、N.M. ティナリ、他。CAD研究室 将来の可能性：菅田研究室、両角・佐野研究室、他。[自然と共存する家具] 写真：浅川敏

9507 柳澤孝彦／美術館の空間とディテール 2700円

作品：東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文：鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏、座談会：宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦、写真：村井修

9508 まちのバブリックスペース 1950円

人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文：中川理、仙田満。オンライン座談会：青木淳+中川理+花田佳明

9509 丹下健三 3800円

最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。



9510 環境に呼応する建築：シーザー・ヘリの最新作 1950円

近年、海外での活躍が目されるヘリの最新作を紹介。[ランドマーク・クラフティ——「タワー・アート in 通天閣」ヴァンキュラーな電脳都市展] より]

9511 長谷川透子：1985—95 3000円

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川透子の現在を紹介。作品：山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文：ピーター・クック、他。対談：多木浩二×長谷川透子

9512 SDレビュー1995 1950円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、李鏡男、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー、[Villa Romana、ローマのヴィラと庭園] [水戸同親治のトランスポート・デザイン]

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践 2800円

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブ・TOWN岡山、長崎アーバン・ネットワークス、白石メディア・ポリス

9602 建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ 1950円

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネスティローリ、フランコ・ステラ、他。

9603 アジア同時代シリーズ 2 ベトナム建築大博覧 2500円

ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンバク遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文＝重松豊、中沢信一郎、村松伸、他



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタポリスト菊竹清訓の初期から1960年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、夙別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安住町農協市民センター、名護市庁舎、富代町立並座小学校、道修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多様性を加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群。その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、ほだされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣I、III、他。

3800円



Kusuhiko Hayakawa

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



ドイツ表現主義の建築

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円

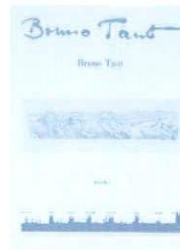


Wooden Architecture Today

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖かみのある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善樹、杉山英男、内田祥哉。対談：今川喜英×安村基。

3708円



Bruno Taut

ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ポスポラス海浜に臨む邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円

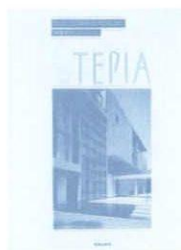


ゴッセル その栄光と歴史

ゴッセル：その栄光と歴史

ゴッセルの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ゴッセルーその歴史と思想：三宅理一編、ゴッセルの成立とネオ・グレンの形成、折衷主義の世界。近代の墓型、戦後のゴッセル、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



Arita Isazaki

磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



Arita Isazaki

磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、ハラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



Carlo Scarpa

カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地和めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



Tadashi Ando

安藤忠雄④ アンビト・プロジェクト

70年代からの見過せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハワジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトI、II、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



Urban Design Yokohama

都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×義澤敬×小澤恵一、他。

5000円

特集

大地と光の変様

オーストラリア建築1788-

文+写真=東京都立大学建築学科 小林研究室

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚リズ
アートバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

6	オーストラリアの建築の魅力	小林克弘
8	1. オーストラリア植民の始まり 2. シドニーのコロニアル建築 3. タスマニアの教会建築 4. オーストラリアン・ハウス	写真=東京都立大学 建築学科 小林研究室
18	オーストラリア建築 1. オーストラリア植民の始まり 原住民アボリジニと流刑地の建設	岡本美樹
20	オーストラリア建築 2. シドニーのコロニアル建築 マクワリー総督とF. H. グリーンウェイのシドニー	
26	オーストラリア建築 3. タスマニアの教会建築 J. L. アーチャーとJ. ブラックバーンの建築	
30	オーストラリア建築 4. オーストラリアン・ハウス ジョージアのペランダ・ハウス	
36	5. メルボルンのヴィクトリアン建築 6. 都市住居テラスハウス 7. キャンベラの新首都計画 8. 現代建築の可能性	写真=東京都立大学 建築学科 小林研究室
44	オーストラリア建築 5. メルボルンのヴィクトリアン建築 ゴールドラッシュが生んだ華やかな建築群	岡本美樹
50	オーストラリア建築 6. 都市住居テラスハウス アイアン・レースの町並み	
56	オーストラリア建築 7. キャンベラの新首都計画 アメリカ人建築家W. B. グリフィンの活躍	安藤貴昭
58	オーストラリア建築 8. 現代建築の可能性 世界的標準化と地域的固有化との振幅の中に	佐々木龍郎
60	オーストラリア建築と植民の痕跡	ジェニファー・テイラー
64	建築の〈メタモルフォーシス〉 オーストラリアン・バンガローの系譜	片木 篤
67	自然と建築についての考察	ピーター・ウィルソン
71	オーストラリアの歴史+建築家年表	
72	参考文献および図版出典リスト	
81	ネクストジェネレーション in New York——スミス=ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダース	
82	●スミス=ミラー+ホーキンソン コーニング・クラス・コンプレックス マスター・プラン、「未完のユートピア、新世界のための公園」 マクスミン・ハウス L. A. アーツ・パーク アトリウムと屋外劇場	
92	●ジョエル・サンダース 「視覚限定性(サイト・スビーシフィック)」 ベダーセン邸	
102	批評的な境界、あるいはモダニズム／ミニマリズムからの逃走の線、 スミス=ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダースの建築への序	松畑 強
74	連載：apple tomology MOVE FORM トムの時空形象学 7 HAND461：不易流行	戸村 浩
78	照明探偵団：アーユーワイアード？ 連続実践講座レポート 2 近代化と夜景	葛西玲子/LPA
105	連載：ヤマトホテル巡礼 3. 都市とホテルの空間文化誌 リゾート／星ヶ浦ヤマトホテル	ホテル文化研究会 橋爪紳也
109	展覧会レポート：環境デザインは隠れデザインなどではない 「環の会：80人の環境デザイナー／その仕事と視点」展	曾根幸一
110	展覧会レポート：もうひとつの写真空間 石元泰博展「現在の記憶」	平木 収
112	展覧会レポート：キャンパスのデザイン 「リチャード・マイヤーとフランク・ステラ：建築と絵画の接点」展	堀田典裕
113	新刊紹介	
114	書評	
116	お知らせ	
119	海外建築情報リミックス：エンペロブ その1 「単一素材」	

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大塚屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：1,950円
[本体1,893円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号・送料込み

表紙：ハンプルトン・ハウス
(メルボルン)
表紙写真：小林克弘
表紙デザイン：小泉均

Special
Feature:

Text+Photo:
Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab.

Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-

Chief Editor: Koji Akawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Izuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

6	Preface-Fascinating aspects of Australian Architecture.	Katsuhiro Kobayashi
8	1. Aborigines and Prisional architecture 2. Colonial architecture in Sydney 3. Church architecture in Tasmania 4. "Australian" house	Photo: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab.
18	Australian Architecture 1. Aborigines and Prisional architecture—a dreary treasury	Miki Okamoto
20	Australian Architecture 2. Colonial architecture in Sydney—Governor-general L. Macguarie and F. H. Greenway	
26	Australian Architecture 3. Church architecture in Tasmania—works of J. L. Archer and J. Blackburn	
30	Australian Architecture 4. "Australian" house—veranda houses of Georgian style	
36	5. Victorian architecture in Melbourne 6. "Terrace houses" as urban housing 7. Canberra project for a new capital 8. Possibilities of contemporary architecture	Photo: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab.
44	Australian Architecture 5. Victorian architecture in Melbourne—gowgeous buildings after the Gold Rush	Miki Okamoto
50	Australian Architecture 6. "Terrace houses" as urban housing—townscape full of laces	
56	Australian Architecture 7. Canberra project for a new capital—Significant roles played by W. B. Griffin, an American architect	Takaaki Ando
58	Australian Architecture 8. Possibilities of contemporary architecture—between world wide standardization and local identification	Tatsuro Sasaki
	Australian Architecture and the Imprint of Colonization	Jennifer Taylor
60	Architectural Metamorphosis: The Lineage of the Australian Bungalow	Atsushi Katagi
64	Some Reflections on Landscape and Architecture	Peter Wilson
67	The History of Australia + Australian Architect	
71	List of References and Sources of Illustrations	
72		
	Next Generation in New York—Smith-Miller+Hawkinson and Joel Sanders	
81	82 ●Smith-Miller+Hawkinson Corning Glass Center Complex Entry Atrium and Amphitheater L. A. Arts Park Maxmin House Master Plan "Imperfect Utopia: A Park for the New World"	
	92 ●Joel Sanders "Sight Specific" Pedersen Residence	
102	The Critical Boundaries, or the Escape Lines from Modernism/Minimalism: An Introduction to the Architecture of Smith-Miller+Hawkinson and Joel Sanders	Tsuyoshi Matsuhata
74	Series: apple tomology 7 MOVE FORM HAND461: Impermanence and Change	Hiroshi Tomura
78	Symposia on Illumination: Are you Wired? Modernization and Nightscape	Reiko Kasai /LPA
105	Series: Yamato Hotel Pilgrimage A Cultural Record of Hotel Space in the City 3. Resort / Hoshigaura	Hotel Culture Research Society Shinya Hashizume
109	Exhibition Report: Environmental Design Does Not Mean Design for Concealment From the Exhibition: "Kan no Kai: Eighty Environmental Designers, Their Work and Perspective"	Koichi Sone
110	Exhibition Report: Another Kind of Photographic Space Yasuhiro Ishimoto Exhibition: Remembrance of things present	Osamu Hiraki
112	Exhibition Report: Canvas Design From the Exhibition: Richard Meier and Frank Stella "Meeting Point of Architecture and Painting"	Norihiro Hotta
113	Book Information	
114	Book Review	
116	Announcements	
119	Eminent Works Abroad: Envelop 1 Using a Single Material	

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03-5561-2551 (Management)
03-5561-2555 (Editing)
FAX:
03-5561-2561 (Management)
03-5561-2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 132

Cover: Hambleton

Photo:
Katsuhiro Kobayashi
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/VID

特集

大地と光の変様

オーストラリア建築 1788—

Special Feature

Transformation of Ground and Light

Australian Architecture 1788—



オーストラリア建築の歴史は、西洋の建築様式が、オーストラリアの気候風土、自然環境に対応すべく、様々な独自の変形、工夫を生み出していく過程であった。

環境と調和した建築が求められている今日、オーストラリア建築の中には、多くの示唆を見い出すことができる。

本特集は、日本においてほとんど触れられてこなかった、オーストラリア建築の見所と魅力を、現代建築よりむしろ歴史を遡って、今日に至るその変遷に視線を向け紹介する。

オーストラリアの主要地域での本格的な実地調査による豊富な写真・資料と的確な解説が、その素朴にして独特な環境建築の世界を提示してくれるだろう。

文＋写真＝東京都立大学建築学科 小林研究室

Text＋Photo＝Tokyo Metropolitan University, KOBAYASHI Lab.

オーストラリアの建築の魅力

小林克弘

本特集は、オーストラリアの建築を対象として、1788年の入植以来今日に到るまでの建築的發展を概観しつつ、その見どころ及び魅力を紹介することを目的としている。

オーストラリアの建築というと、多くの人はまずシドニーのオペラハウスを思い浮かべるであろう。そして次に、キャンベラの国会議事堂であろうか。しかしながら、その後に具体的な建築名を思い起こせる人は極めて少ない。ましてや、オーストラリアの歴史的建築物となると、多くの人は、オーストラリアのように歴史の浅い国に、果たして見る価値のある歴史的建築物などが存在するのだろうか、といったような感想を抱くであろう。西洋建築の歴史にかなり詳しい人であっても、オーストラリアにどのような建築が建てられてきたのかという点について正確な知識をもつ人は少ないのであるから、そうした感想も無理のないことではある。

しかしながら、近年オーストラリアが観光の名所として大きな注目を浴びている事を考えれば、その建築文化に対する理解が、偏見と無知の域にとどまっているという事態は極めて残念なことであり、かつ奇妙なことであると言わねばならない。とはいうものの、思い返してみれば、アメリカの建築文化に対しても、約20年前の日本では、このような偏見と無知がつきまとっていたのである。つまり、アメリカの現代建築から学ぶことは多いが、その歴史は浅く、見るべき伝統的建築は少ないという偏見であった。その後、様々な紹介と研究がなされ、今ではアメリカの建築は短い歴史の中で、アメリカ特有の発展を遂げたことがよく知られており、その過去の建築遺産に対する関心も大いに高まってきている。むしろ、歴史の浅さの故に、様々な興味深い建築的現象が生じたと考えられるようになったとすら言えよう。

先述したように、本特集は、このように日本ではほとんど知られていないオーストラリアの建築及びその発展の歴史を対象として、特に見どころと判断される局面を紹介してい

く。完全な通史というわけではないが、少なくとも著者達が調べ、実際に見聞した範囲において、オーストラリア建築の魅力と考えられる局面、あるいはオーストラリア建築の独自性を示していると判断される局面について、重点的な紹介を行なったつもりである。それらの局面の詳細に入る前に、まず、オーストラリアの建築の大きな特質と魅力、及びそれらを生み出した要因について整理しておきたい。

第一に、建築様式の変質という現象がある。言うまでもなく、オーストラリアは、イギリス経由で西洋文明が極めて短期間に移植された場所である。アボリジニという先住民族が存在してはいたが、その移植のされ方は、ほとんど白紙に近い状況の中に西洋文明を持ち込むというやり方であった。最初の入植は1788年であるから、アメリカへの入植より150年も遅いことになる。西洋文明が白紙状態で移植された場所の中で、オーストラリアは疑いなく最も新しい。文明の伝播を樹木に例えるなら、オーストラリアは幹から最後に別れたひとつの枝であり、ひとつの末端、到達点を形成しているのである。言い換えれば、オーストラリアは、ひとつの巨大な島国文化を形成したと言うこともできよう。

入植後のオーストラリアの建築は、基本的にはイギリスの建築を範としながら成長していくことになるのだが、成長の過程で、建築家の知識の水準、職人技術のレベル、地元産の素材に応じて、イギリスの諸建築様式は然るべき変形を受けた。その変形は、素朴な単純化である場合もあるし、また歴史の流れの中で形成された確固たる統辞の歪みや変質である場合もある。後続の各論が、こうした変形の具体的な諸相を示すことになるが、ここで確認しておきたいことは、入植後のオーストラリアは、こうした様式の変形が極めて生じ易い状況にあったということである。オーストラリアは本国イギリスと遠く離れているため、建築家が本国あるいは他の西洋諸国の建築物を実際に見て廻るという、通常の建築修業をし難い状況にあった。そのため建築家

は、パターン・ブックなどの出版物を頼りに設計の学習を行わなければならなかったのである。そもそも建築家が不足しており、正規の建築修業もなしに建築家になるような場合も多かったほどである。

こうした状況は、イギリスやフランスの建築家がローマの古建築を学習する事によって自らの素養とし、あるいはアメリカの建築家がヨーロッパの同時代の建築を直接見て廻ることで修業するといった状況とは大きく異なっていた。オーストラリアの建築家は、出版物を頼りに学習するという、いわば実際の西洋の建築物の世界とは距離を置いた中で成長したのである。別の言い方をすれば、純粋培養されたのであり、このことが様式のオーストラリア的変形を生じることに役立ったと考えることができる。

特色の第2点は、オーストラリアの自然、気候風土への対応から生じた独自性ということである。入植初期の邸館にはジョージアン・スタイルが多く用いられたが、イギリスで発達したこのスタイルは、夏が蒸し暑いオーストラリアには決して最適ではなく、気候への対応として、ペランダが著しく発達した。結果的にペランダ付のジョージアン・スタイルのようなものが現れたのである。また、都市化が進んで、多くのテラス・ハウスが建設されるようになると、各階バルコニー付のテラス・ハウスが普及することになる。そして、このバルコニーを飾るために、アイアン・レースと呼ばれる鉄製のグリルが取り付けられた。オーストラリアの街並みの最大の特徴である、アイアン・レースのテラス・ハウス群は、気候風土との対応から生じたものであるが、一方で、街自体が19世紀半ばという鉄の時代に発達したが故に生まれたという事実にも十分注目すべきであろう。換言するならば、これらの街並みがより古い時代に形成されたのであれば、バルコニーは発達したであろうが、そのバルコニーを飾るのはアイアン・レースではなかったはずである。

広大な自然への対応・調和という意識は、

ランドスケープ・アーキテクチャの発達を促した。首都キャンベラの計画は、ランドスケープを尊重する意識を典型的に示している。ロマルド・ジョゴラがコンペで獲得した国会議事堂が、大規模なランドスケープ・アーキテクチャであった事も、必然的な成り行きであったといえるだろう。

こうした自然環境への対応という意識は、オーストラリアの建築全体に対して、おおらかな有機性、現実的な健全さを与えている。オーストラリア建築を展開させた原動力は、知的な難渋さではなく、こうした平明な有機性に対する信頼感なのであった。

特色の第3点は、建築家の職能に関してである。入植後に必要とされた建築家は、思想家、芸術家としての建築家ではなく、むしろ現実的な建設者としての建築家であった。先述したように、人手不足の中にあっても建築家としての素養や修業なしに、パターン・ブックのような出版物を頼りに建築家としての仕事を覚えていかねばならない場合もしばしばであった。ここには、建築家という職能を巡って、西洋社会とは大きく異なるひとつの歴史が形成されているのである。

建築家として建設に携わるということは、ひとつの文化を建設するということでもあると断言することは簡単であるが、これを実践することは、入植後のオーストラリアにおいては極めて困難な作業なのであった。そもそも、オーストラリアは流刑地として入植が始まり、建設作業も囚人達を職人として働かせることで遂行されたのである。アメリカの場合、メイフラワー号での入植は、宗教的情勢を伴い、自由の地を求めるという理想主義の下になされた。両者の入植の動機は大きく異なり、当然ながら、その差異は後世に尾を引いた。オーストラリアでは、入植当初は、理想主義や文化的自立を掲げる余裕も必然性もなく、建築家は様々な現実の克服と格闘しつつ、建築家としての仕事を全うせねばならなかったのである。オーストラリアの建築の歴史を理解するためには、こうした事情も十分

念頭に入れておく必要がある。

以上、各論に先立って、オーストラリアの建築の特色を生み出している主要な点を概観した。オーストラリアの建築の展開は、一般に想像されているような、イギリスに生じた諸建築様式を安易に単純化して応用したという類のものでは決してない。本国イギリスの建築様式を出発点としつつも、新しい環境に合うスタイルを模索するという、建築家達の様々な積極的意志を見ることができるのである。しかも、極めて厳しい現実、文化的状況の中においてであった。その結果、アメリカや他の植民地とはまた異なった独自の建築的發展が生じたのである。

思い返せば、私達がオーストラリアの建築を調べ始めたのは1990年のことである。ここに、独特の建築的發展を見出せるのではないかという漠然とした期待はあったものの、当初国内で収集し得る文献資料は極めて少なく、まずはオーストラリアでの現地調査および資料収集を行わなければならなかった。現地調査は、同年10月から11月にかけて約1ヶ月間、私および当時研究室の大学院生であった佐々

木龍郎、中澤健、岡本美樹、安藤貴昭の計5名で行い、ブリスベン、シドニー、メルボルン、ホバート、アデレード、パースといったオーストラリアの主要都市のかんりの部分を対象に、約400件の建築物を見、かつそれらを写真に記録した。また、集めた文献資料は、書物にして約100点、パンフレット類で約300点に及んだ。この現地調査に際しては、住宅総合研究財団の研究助成を頂いた。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

本特集は、この時の現地調査およびその後引き続き行なった文献による研究に基づいてまとめられている。執筆は、現地調査参加者で分担した。序を小林、オーストラリア建築1.から6.を岡本、オーストラリア建築7.を安藤、8.を佐々木が、それぞれ担当し、小林が全体の統括を行なった。今回の特集によって、オーストラリア建築研究はひとつの段階を経たが、今後更に精緻な個別研究が必要であることは言うまでもない。引き続き、蓄積を行っていききたい。

●こばやし・かつひろ／建築家、東京都立大学助教授

Australia



オーストラリア建築1.

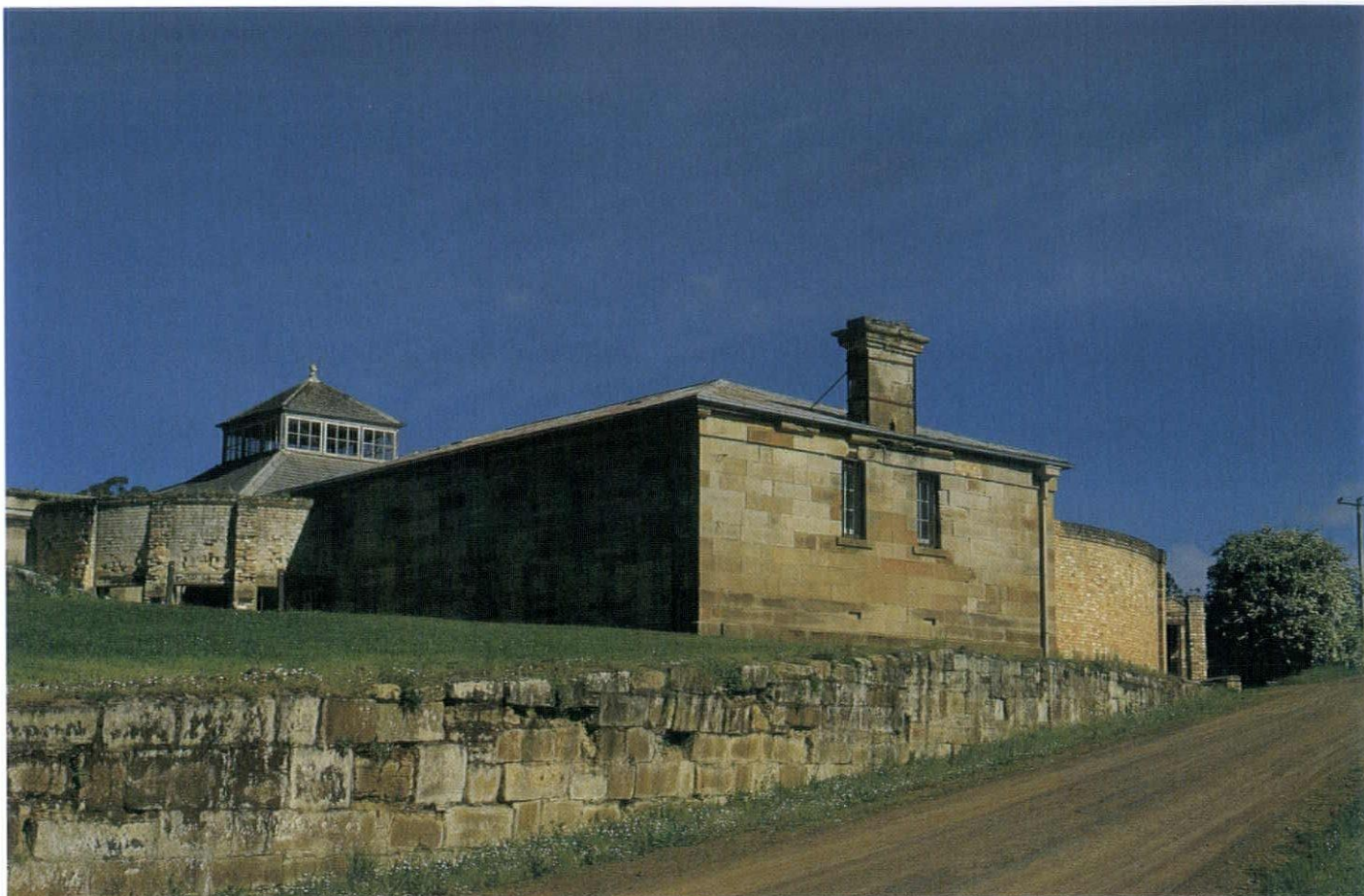
オーストラリア植民の始まり

原住民アボリジニと流刑地の建設

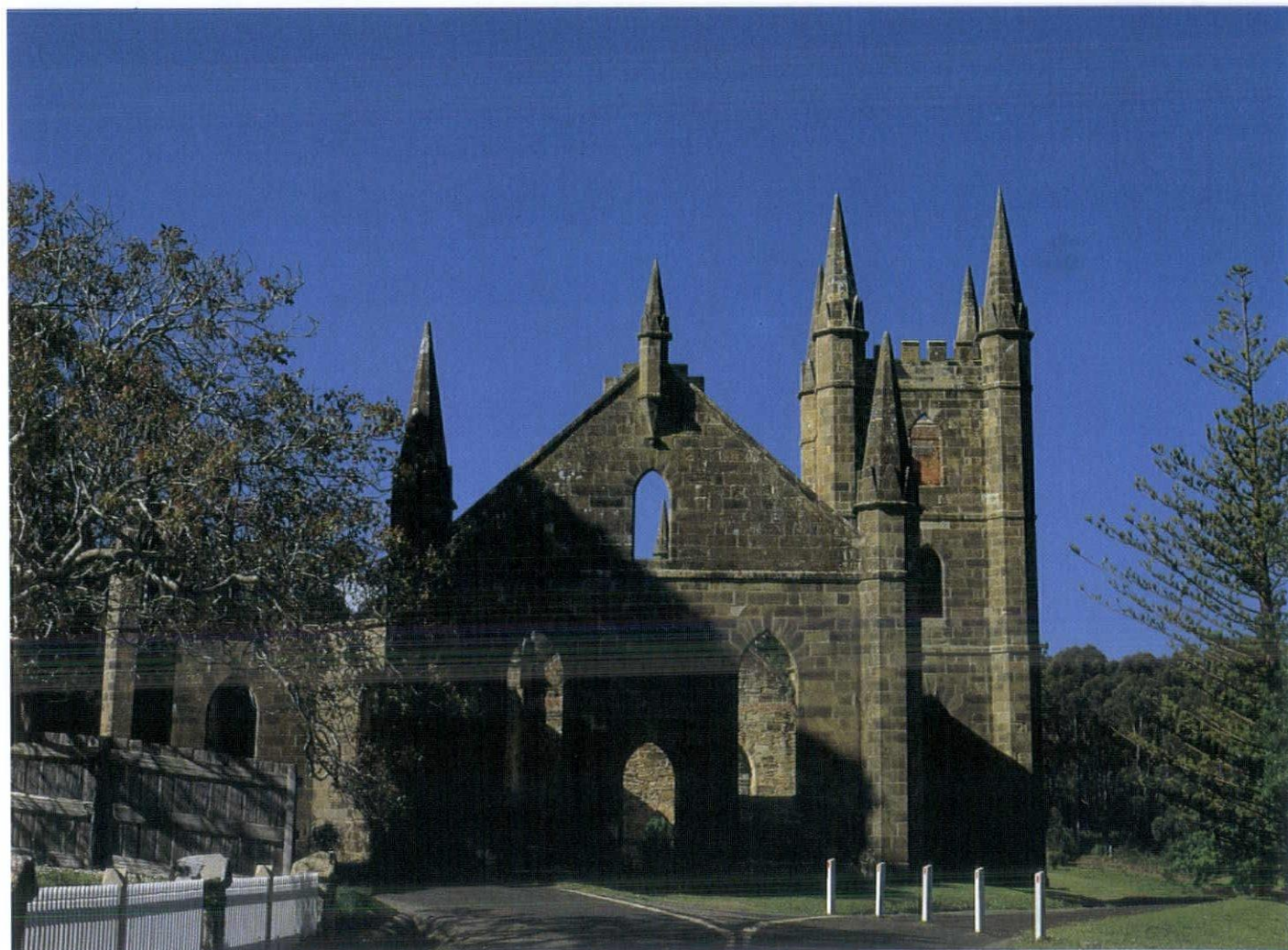


オールド・ゴール、1864、メルボルン

SD9604



ポート・アーサー・ゴール、1832、タスマニア



ポート・アーサー・ゴールの教会、タスマニア

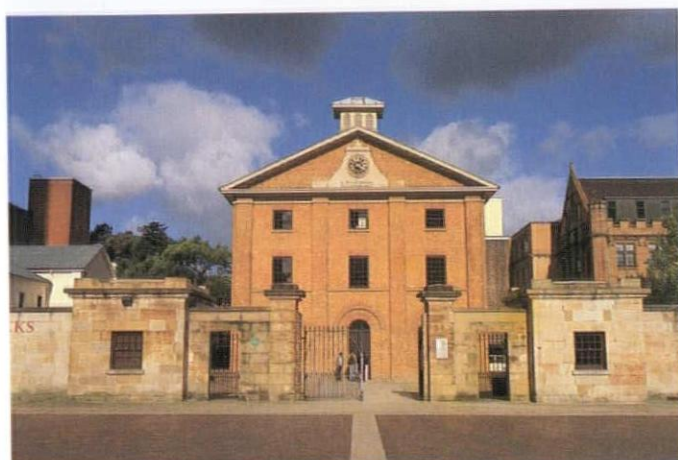
オーストラリア建築2.

シドニーのコロニアル建築

マクワリー総督とF.H.グリーンウェイのシドニー



ハイド・パーク・バラック：F.H.グリーンウェイ、1819、シドニー



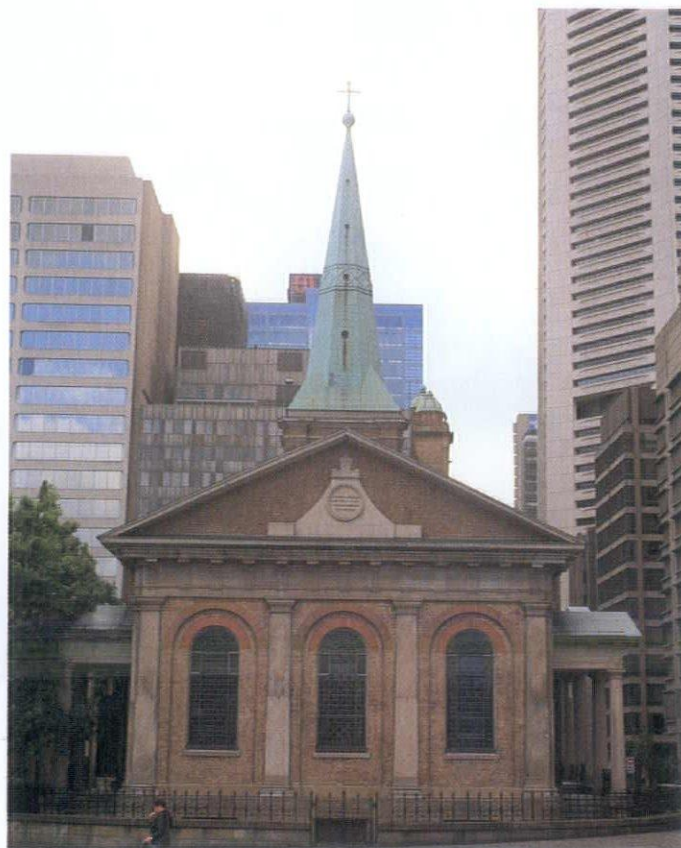
ハイド・パーク・バラック：F.H.グリーンウェイ、1819、シドニー



オールド・ガヴァメント・ハウス：F.H.グリーンウェイ、1819、パラマッタ



オールド・ガヴァメント・ハウス内浴室、1823、パラマッタ



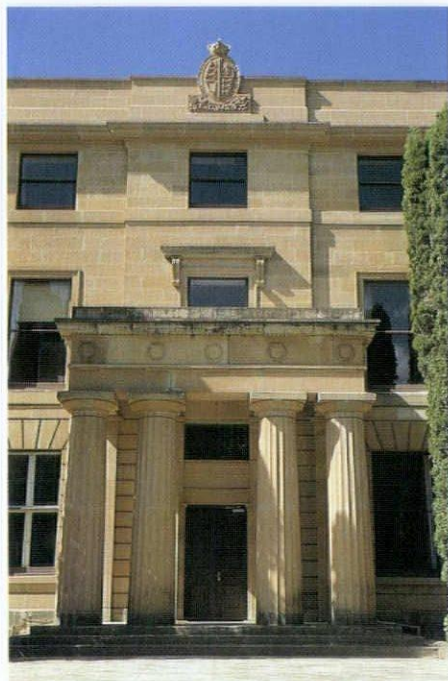
セント・ジェームス教会：F.H.グリーンウェイ、1820、シドニー

タスマニアの教会建築

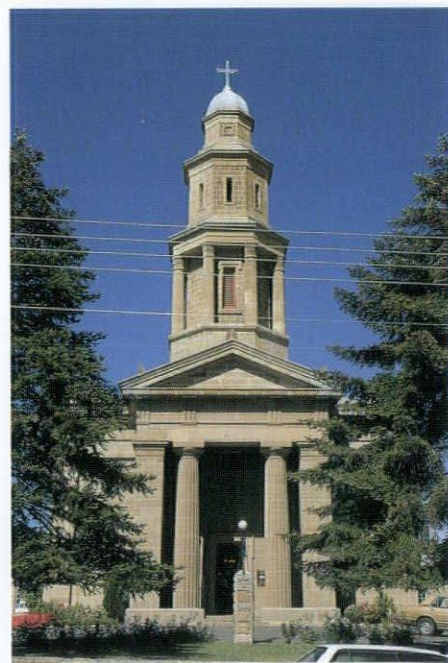
J.L.アーチャーとJ.ブラックバーンの建築



セント・ルークス・アングリカン教会：J.L.アーチャー、1836、タスマニア



トレジュリービル：J.L.アーチャー、1837、タスマニア



セント・ジョージ教会：J.L.アーチャー、1836、タスマニア



セント・マークス教会：J.ブラックバーン、1841、タスマニア



セント・ルーカス・スクール：J.ブラックバーン、1841、タスマニア



グランジ、J.ブラックバーン、1848、タスマニア

オーストラリアン・ハウス

ジョージアのペランダ・ハウス



エリザベス・ファーム：ジョン・マッカーサー、1793、バラマッタ



エリザベス・ファーム：ジョン・マッカーサー、1793、バラマッタ



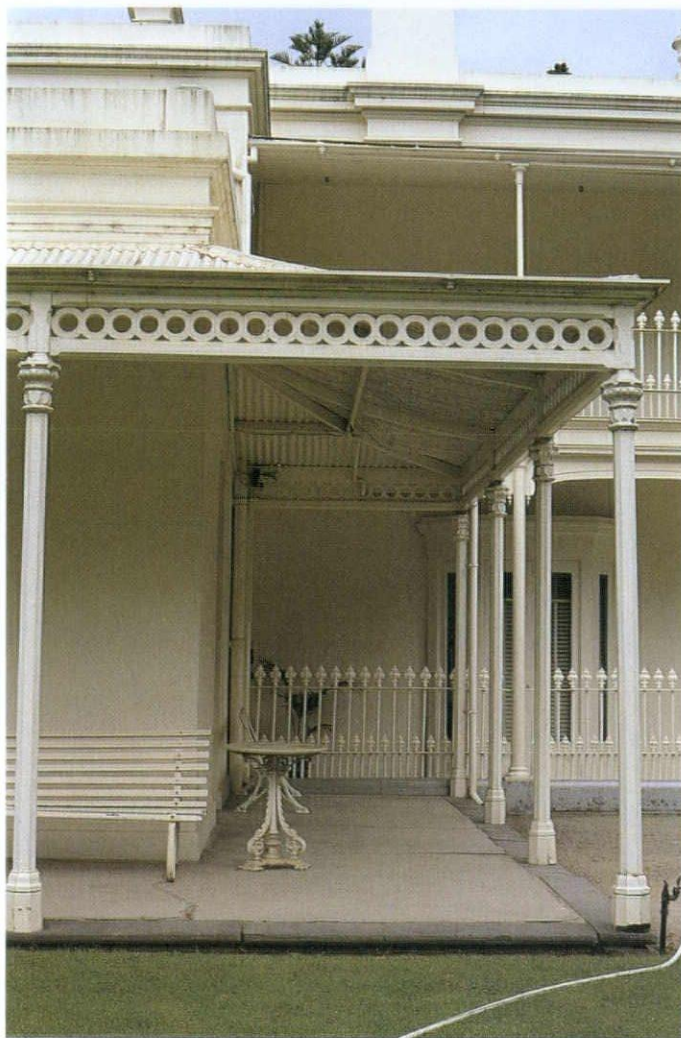
ボークルーズ・ハウス：L.ウェントワース、1827、ボークルーズ(N.S.W)



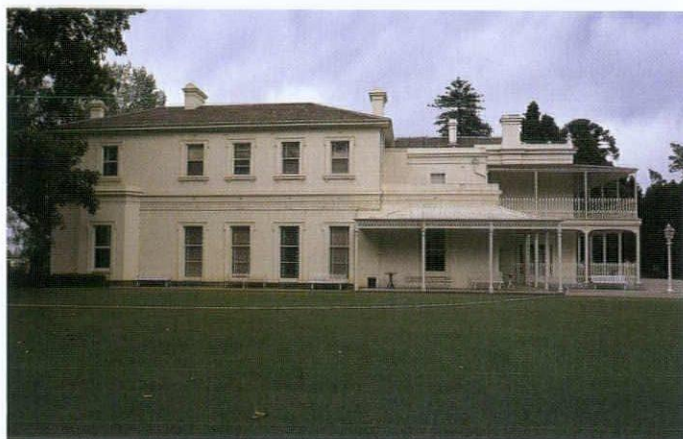
クラレンドン、1838、エバンデール(タスマニア)



コモ・ハウス、1837、サウス・ヤラ(メルボルン)



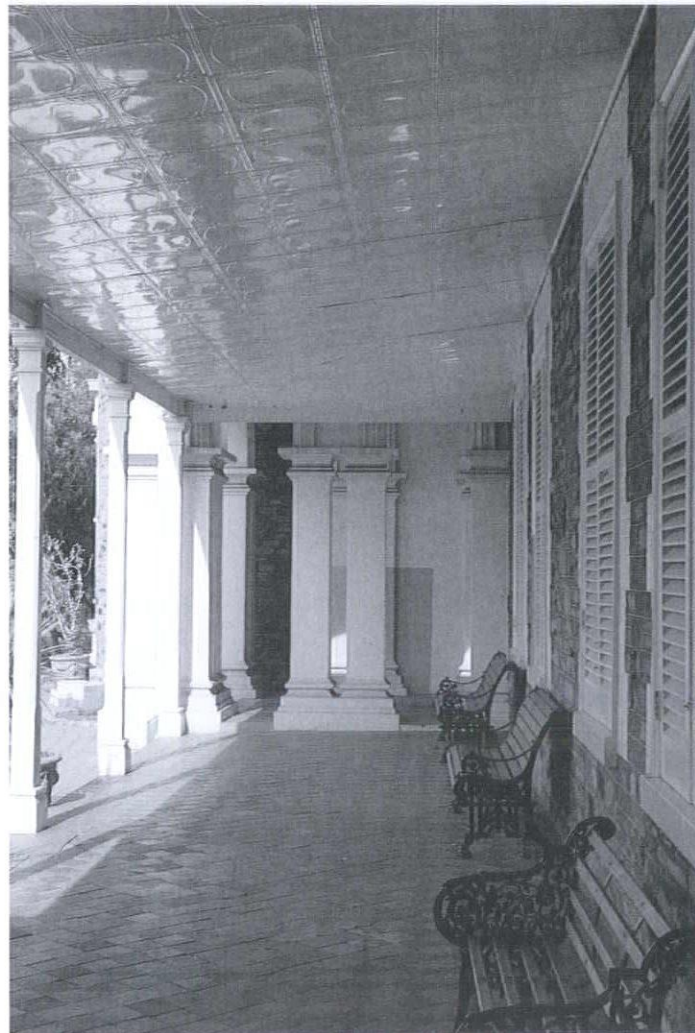
コモ・ハウス、1837、サウス・ヤラ(メルボルン)



コモ・ハウス、1837、サウス・ヤラ(メルボルン)



エアーズ・ハウス：J.S.キングストン、1858、ノース・テラス(アデレード)



エアーズ・ハウス：J.S.キングストン、1858、ノース・テラス(アデレード)

オーストラリア建築1.

オーストラリア植民の始まり

原住民アボリジニと流刑地の建設

オーストラリア大陸には、アボリジニと呼ばれる原住民の文化と白人文化が両立している。アボリジニは、約3万年前にユーラシア大陸南部より、ニューギニアを経て渡って来たと言われているが、現在、アボリジニの言語形式の研究によって、ユーラシア大陸の中でも南インド地域から来たという説が有力となっている。オーストラリアの原住民は、アジア諸国の大半が未開の状態から脱して、文明化していった間も、原始的な石器文化を脱しなかった。長い年月に渡って文化的変化が生じなかった原因は、オーストラリアの土地が、農耕に適さず、定住して住まう習慣を生み出さなかったからである。また18世紀後期まで、他民族の進入を受けなかったのは、ヨーロッパ諸国との距離的隔たりと共に、一見して肥沃な土地や植生が無く、ほとんど不毛の土地の見えるのが原因であった。実際には、紀元前2000年頃には、マレー民族のインドネシア群島への進出が始まっているが、オーストラリア大陸へは達しなかった。また、1788年の入植以前にも、黄金航海時代、1606年にオランダ船ドイフケン号がヨーク半島西岸のキラウエア岬に達するが、「良いことの役には何も立たない土地」と報告され、殆ど気にもとめられなかった。またその後、1640年代に東インド会社の航海船が航海士アベル・タスマンに率いられて再度大陸の各所に達するが、荒涼たる土地と原住民の姿を見て「野蛮人の他には何も無い」と報告し、オランダのオーストラリア大陸進出は遂に実現を見なかった。更に40年後の1688年にイギリスの探検家ウィリアム・ダンビアがオーストラリア大陸東端のシャークス湾に達した折にも、アボリジニのことを「世界で最も惨めな人々」と記している。オーストラリア大陸へ白人が植民地を形成する背景となったのは、1776年からのアメリカ独立戦争の開始によって、英国政府がこれまでアメリカへ輸送していた流刑囚を輸送する場所を失い、やむをえず新たな流刑地を探す必要性に迫られたことである。1768年に英国海軍のキャプテン・ジェームズ・クックが現在のシドニー付近であるニュー・ホルランドを航海して調査した後、1776年の合衆国独立宣言によって決定的に流刑地を無くした英国は、オーストラリアへの植民を決意した。

4年から終身刑の750人の流刑囚が、法務官1人、将校6人と共に、初代総督アーサー・フィリップに従えられて6隻の船でシドニーのボタニー湾へ入港したのは、1788年のことである。

入植当時は、現地の木材の架構に、泥壁を塗り、木の皮をかぶせた堀立て小屋や、煉瓦、キャンパス、鉄材など英国から運んできたわずかな材料と道具を用いて、囚人の労働力によって政府関係の施設が建てられた。その後周囲の環境を徐々に把握し、現地で産出される石材を組み上げたり、煉瓦や石灰を焼いて建築材料として建物を造った。植民地開拓のための労働のほとんどは、流刑囚に課せられていたため、流刑囚への対応は本国よりもはるかに寛容であった。フィリップ総督は、模範囚に対して30エーカーの土地を与え、結婚すれば更に20エーカー、子供が産まると一人につき10エーカーの土地を与えて開拓させた。服役中の囚人は、農地の開拓の他に、公共建築物の建設、道路や水路の土木作業の労働に従事した。囚人達はバラックと呼ばれる簡易宿泊施設に寝泊まりして昼間は外で働いた。それらの囚人収容施設は、通常細長い矩形の平面で、中廊下式に細かく縦割りに部屋が区切られているが(図1)、中規模なものになると、中庭に面して男囚室、女囚室、倉庫などが配される形式となっていた(写真P.8)。大規模な、本来の監獄としての機能を持つものになると、都市郊外の広大な敷地に隔離して建設され、敷地の中に教会や託児所も備わっている。一例として、現在もその外観が保存されているタスマニア、フリーマントルのポート・アーサーは、海岸に面した景色の良い監獄都市であった(写真P.9上下)。囚人達はこれらの収容施設で寝泊まりするが、昼間は堀の外で働き、街を自由に歩くこともできたし、労働者には一定の賃金が支払われていたため、酒やたばこを買うこともできたのだ。政府の役人がそれらの囚人達を規律正しく監督するのはおよそ不可能なことであり、荒涼とした未開の地へ運ばれて、ただでさえ自暴自棄となっている囚人達は、殆どの賃金をラム酒や賭事に使い、泥酔状態の囚人が町中をうろつく光景も珍しくはなかった。本国から派遣された政府の役人達には想像を絶す

るほどの忍耐力が課せられたが、そんな状況の中、初代総督のフィリップは、胃を壊して志半ばで1792年に本国へ引き上げた。2代目の総督フランシス・グロウズの治世には、物資の流通もやや盛んになるが、この総督によって労働賃金をラム酒で支払うことが許可されたために植民地の風紀はますます乱れた。

その一方で原住民アボリジニは、領域を守る攻撃力も、土地を譲り渡して取引する意識も持たなかったため、土地を奪われるままに辺境へ追いやられた。1788年以降のアボリジニの伝統的な生活の崩壊経緯はオーストラリア南部と沿岸地域で特に顕著である。そこには自営のための安全な生活が保障される白人文化が存在している。白人入植当時30万人いたとされる原住民人口は激減し、そのなかでもタスマニア人は1869年に男性が、1888年には女性が死滅した。辺境、不毛の地とされる内陸のブッシュ(図2)には、今現在でも自然と融合してアボリジニが生活している。彼らは定住地を持たず、季節ごとに変化する多様な植物を採取し、動物や爬虫類を捕らえて食する。大陸各地に点在するアボリジニは220から260種の異なる言語体系を持ち、彼らの間には地域ごとに明確に異なる物質文化、儀式的行為そして宇宙観が存在している。外部から見れば、オーストラリア大陸は茫漠とした悠久の大地であり、その規模の大きさと地理的条件から、気候と地理学上の驚くべき多様性を持っているが、しかし、原住民にとっては、住み慣れた土地であり、風土や植生については熟知、精通しているのである。レヴィ・ストロースは、著書「野生の思考」の中で、オーストラリアのアボリジニを取り上げ、自然界から狩猟採取する彼らの精神的信仰と儀式的行為のなかに見られる共通点を調査し、それらが単なる原始社会に存在するものではなく、知的かつ精神的レベルの高い社会に存在するものであると言及している。また、絵画、音楽などのアボリジニの芸術文化は、今日世界的にも注目されている。彼らが絵画を描く手法は、顔料を小さな棒の先に付けて描く点描画で、彼らの夢に出てきた光景であったり、夢の中で経験される世界の配置図を意味する内容を表現している(図3)。彼らが用いる楽器は、木の棒をくり抜いた単なる円管

のようなもので、野生動物の鳴き声をまねて相手を油断させて狩猟する目的で使用されたが、ボーッという濁音や、弦を弾いたような振動音を同時に発し、非常に幻想的な音色である。彼らは自然風景や自然が生んだドリーム・タイム（創世期）に纏わる力強い感覚、精神世界を絵画に表現し、野生動物との共生、自然との融合意識を音楽に表現している（図4）。

これらの、全く文化を異にする2つの民族の両立と、中国、マレー半島、インドネシア等アジア諸国から移民した他民族によって、オーストラリア社会は多層かつ独特な社会構造を持つ。経済面でこの国を支えてきたのは、牧業と豊富な鉱物であった。最初に経済を支えたのは羊毛業で、ウール・ラッシュによって富を築き、1840年からの経済不況の後、1851年にシドニーとメルボルン近郊で起こったゴールド・ラッシュによって、一大富国となったのである。更に1890年からの金融恐慌のまっただ中に、パース近郊で金が発見される。この様な経緯から、「オーストラリア＝ラッキー・カンントリー」としばしば称されるのである。

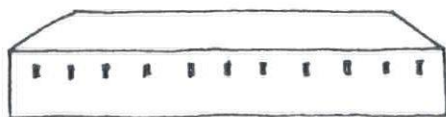
オーストラリア入植当時の歴史の文脈の中で、少なくとも5つの大きな対立関係が浮上する。第1に、先述した原住民と白人の対立、第2に放牧民（スクオター）と商人（セレクトー）による、用地取得や文化的隔離による対立、第3に宗教的対立、第4に「エマンシピスト」と一般入植者の対立、第5に州相互の地域的対立である。第2の対立に現れる「スクオター」とは、シドニーの都心から離れて荒野を開拓し、牧業を始めた人々の呼称である。

スクオターは荒れたブッシュを開拓して、過酷な自然と孤独に闘って生活してゆくうちに、都市の華やかさや賑わいから隔離し、孤立意識を強めていった。それに対して、海岸部の都市で商業や貿易業によって富を成したブルジョア階級を「セレクトー」と呼んだが、バラマッタのスクオターとシドニーのセレクトーは、土地取得問題に関して、後に激しく対立した。スクオター達は、ただ同然で広大な土地を手に入れ、孤独な生活にさいなまれながら開拓するが、富を得た都市居住のセレクトー達が後にそれらの土地を得ようとすると、なかなか権利を譲らず、法外に地価が上がったりする。そこでスクオター達の間には、強い仲間意識が生まれ、ますます都市の世論から孤立した偏屈な組合をつくった。第3の対立は、宗教対立に象徴される、入植民族間の対立である。植民地で初めての宗教伝道者は、1788年に第一陣と共に入植した教戒師のリチャード・ジョンソン牧師なる、福音主義のプロテスタント伝道師である。オーストラリア初期の入植民の殆どはプロテスタントであったが、アイルランドからの入植民は、カソリックの戒律を保守し、双方の考え方の違いは、その後オーストラリア内の様々な世論や生活様式の対立の源となった。植民地の世論を動かす機関は、教会と新聞と公開討論であったが、これは英国教会とカトリック教会は、政治活動への参加を制限されていたためである。結局、宗教上の対立よりもむしろ、根本的に考え方の全く異なる、本国人とアイルランド系移民の意識の対立が激しかった。第4の対立に挙げた、社会的立場上の対立に現れる「エ

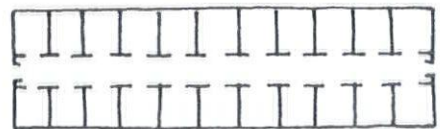
マンシピスト」とは、囚人として服役を終えるか、あるいは模範囚として放免された人の呼称である。囚人によって築かれた植民地ではなおさら、エマンシピストが世論に加担する力を持ち得たのも当然のことであろう。エマンシピスト派は活発な動きを見せ、世論を集め、優勢な立場を獲得していた。ちなみに、英国で生まれた一般入植者を「スターリング」、両親が入植してからオーストラリアで生まれた2世を「カレンシイ・ラッド」と呼んだ。

第5の対立は、ニューサウスウェールズ州とヴィクトリア州との間の地域的対立関係であった。両者はオーストラリアで最大の都市となることを競って、お互いにライバル意識を持っていた。特に各州の中心都市が、砂漠や海を隔てて存在し、情報源が新聞などに限られていた時代には、各州にとって英国との縦の繋がりはあっても、横の繋がりは希薄であった。両州は、富を築くことに始まり、公共建築物や鉄道の建設、オーストラリア大陸の探検に至るまで、少しでも早く、多くの功績を得ようと競い合ったのである。

この様に白人同士の間にも様々な対立関係が形成される中で、オーストラリア人が1つのナショナリティを共有するのは、およそ実現不可能で困難なことであった。そうであっても入植民達の心の奥底には既に、潜在的な本国（大英帝国）への忠誠心と憧れと劣等感があったのである。（岡本美樹）



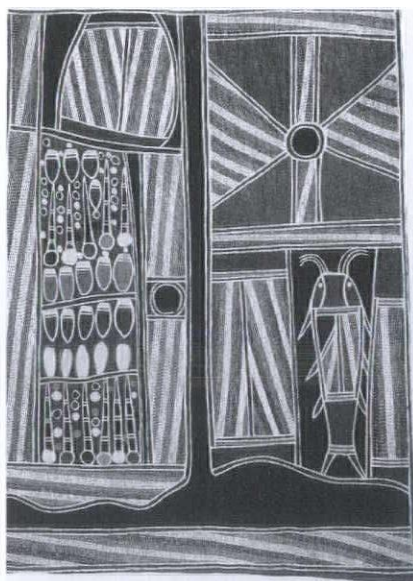
1. シドニー・ゴール、1797



2. アボリジニの住居「ウルジャ」



3. 現代アボリジニの絵画：ティム・ラウラ・ジャバルジャーリィ、1980



4. 現代アボリジニの絵画：デイビッド・マランギ、1982

シドニーのコロニアル建築

マクワリー総督とF.H.グリーンウェイのシドニー

流刑植民地では、男囚は国営農場開拓や、道路建設の労働力として優先的に使われ、女囚は主に煉瓦づくりや石灰焼き等の労働力として使われたが、行動が模範的であったり、あらかじめ何らかの技能を備えている者は、刑期短縮や赦免によって釈放され、公務員として政府の任務に就く可能性があった。専門知識が極端に不足していた当時の植民地の状況から考えると、流刑囚の労働力を、少しでも効率的に使用しながら都市を形成して行くために、技術と能力を求めたのである。

1810年にニューサウスウェールズ植民地の総督となったラクリン・マクワリー(図1)は、歴代の総督の中でも際立ってそれらの点に着目し、能力ある囚人を、エマンシピストとして社会復帰させることに尽力を尽くした人物である。マクワリーは任命後シドニーに入港してまず、植民地の都市計画の程度の低さと建築の貧弱さに嘆き、病院、教会、学校、囚人収容施設などの標準的な公共建築物すらも、満足に建設されていないのに感嘆した。マクワリー夫人もまた、建築についての素養を持ち、英国から多くのパターン・ブックを携えてきた。総督着任式を終え、マクワリー総督は、オーストラリアの現状を見て、威厳ある植民都市を築こうという大志を抱くのである。

そんな状況の中で、彼の目を惹いたのが、フランシス・ハワード・グリーンウェイ(図2)であった。グリーンウェイは、植民地で初めて本格的な公共建築物を設計し、建築家、都市計画家の地位を確立してオーストラリアに建築の意識を吹き込んだ人物で、マクワリーの治世の5年足らずの間に22の公共建築に携

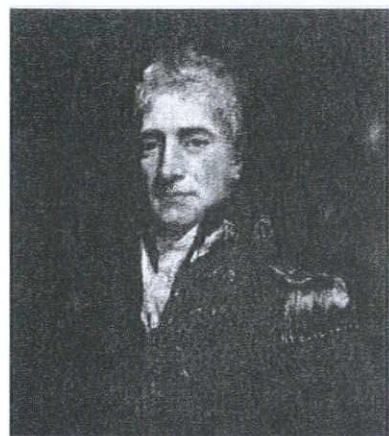
わっている。グリーンウェイは1777年に英国西部マンゴッツフィールドの石工でもある建築家の家系に生まれた。1805年までに、兄弟のオリブと共に建築、造園家として英国西部のブリストルで仕事を始めた。また一時期はジョン・ナッシュのアトリエで働いていたこともあると記録されている。彼の英国での作品(クリフトン・クラブ)は、控えめなピクチャレスクな新古典主義建築にまとめられており、彼は英国での活動で、クラシックの建築様式をほぼ修得していたと考えられる(図3)。しかし、彼は事務所の経営能力には恵まれず、グリーンウェイ兄弟の事務所は経営不振で1809年に倒産した。彼はその倒産を隠すために偽造文書を作成し、1813年に14年間の流刑を宣告された。グリーンウェイは、石頭で威張り好きで自意識過剰で喧嘩っ早いという性格上の欠点を持ち、経営に関して無能であったが、仕事面に関しては飛び抜けた知識、独創性、判断力と統率力を備える建築家だったとされている。1814年にシドニーへ降り立った時、彼は前代総督ハンターの「利益をもたらす建築家」と書かれた推薦状を携えており、それが幸じてスムーズにマクワリーに目を掛けられ、1816年には公共事業に携わる建築技師として赦免された。彼の給料は日当3シリングと確定し、かくしてオーストラリアで初めての本格的建築遺産を残すべく、マクワリーとの共同作業が始まるのである。

グリーンウェイは、マクワリーの期待に十分答える才能を持っていた。彼は報告書、口頭、文書によって他の植民地建築家を徹底的に非難、排除した。公共事業に他の建築家が

携わると、デザインを批判し、たびたび計画自体を覆して仕事を奪うことさえあった。自分の仕事に関しては異常なまでの執着を持ち、囚人や職人達に対しても残虐なまでに厳しく接した。材料が乏しく、技術も未熟な囚人達に、職人意識をたたき込むのは並々ならぬ事ではあったため、グリーンウェイは、労働力と賃金の標準を定めて成果に応じて賃金を上乘せする策等をとって、囚人を効率よく働かせようと考えた。しかし、この様なワンマンな行動が彼を周囲から孤立させ、多くの敵を作る結果ともなった。

彼の本来の建築デザイン様式は、ブリストル時代に獲得したピクチャレスクな新古典主義であったが、費用、材料と技術が極端に不足している植民地の状況下では、そのままの引用は殆ど実現不可能であった。植民地の公共事業には、費用の削減と合理化が第一に要求された。グリーンウェイにとって、建築要素の一つ一つを解体し、合理化、単純化し、幾何学的な比例を与えることによって、更に合理的で均整の取れた形へと再構築する事が、良質の建築を創り出すための唯一の選択だったのである。ブリストル時代の彼の作品であるクリフトン・クラブと、オーストラリアでの彼の作品を比較してみても、グリーンウェイが、オーストラリアの社会状況との葛藤の末に編み出した策だったことが伺える。

ここから、グリーンウェイの主要建築作品を見て行くこととする。彼が植民地で初めて携わった公共建築は、シドニー南端にあるマクワリー灯台である。1816年に基礎が築かれ、石造部分は1818年に完成した。砂岩は構造的



1. L. マクワリー、1810～1821就任



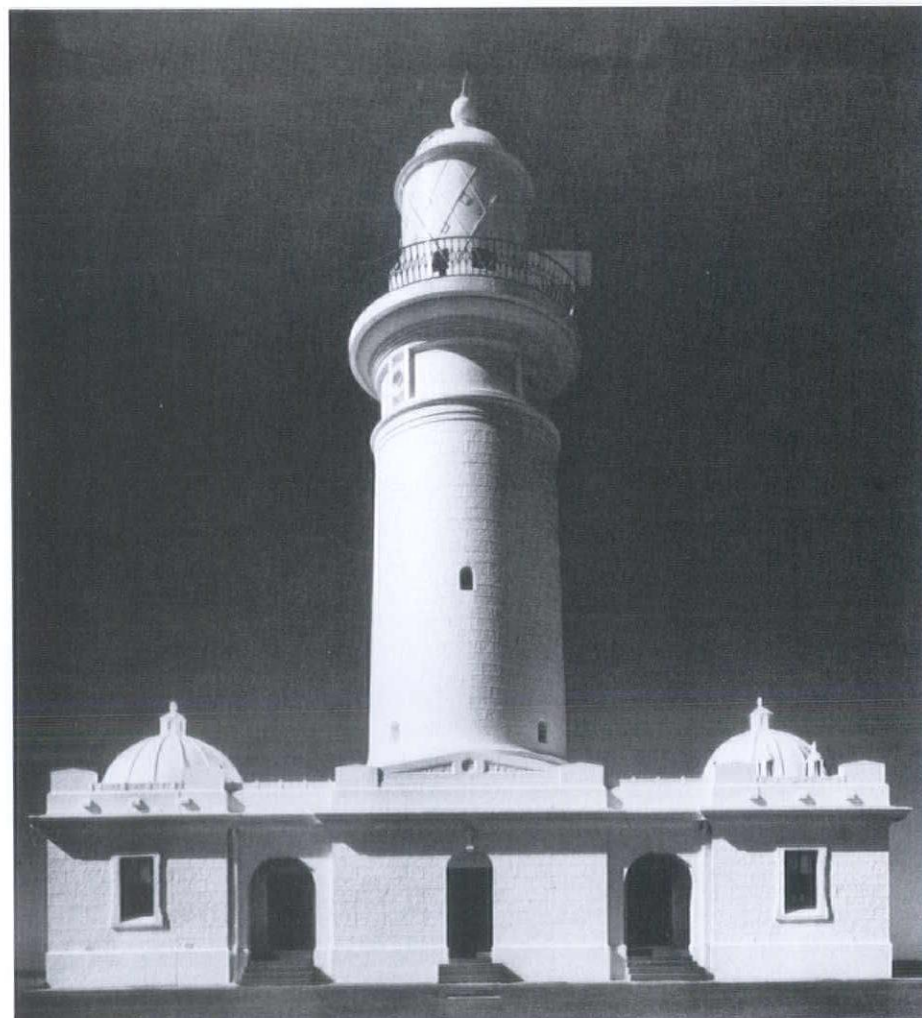
2. F. H. グリーンウェイ、1777～1837



5. ミント：F. H. グリーンウェイ、1816、シドニー



3. ブリストル・クリフトン・クラブ、F. H. グリーンウェイ、1810、クリフトン、イングランド



4. シドニー灯台：ジェームズ・バーネットによるレプリカ、1880

に軟弱なため、基壇部に使用するのに特に注意が払われ、流刑囚の労働訓練に役立ったとされている。現在の建物は1880年に後の建築家ジェームス・バーネットによって建設されたレプリカである。グリーンウェイは流刑植民地の建築建設の石工技術、建築技術の訓練事業としてこの建築に従事した。オリジナルのデザインは、当時の政府建築家ジョン・ギルのものであるが、グリーンウェイのものであるか定かではないが、おおよそその判断では、平面形式とドリス式コラムがそそり立つイメージはグリーンウェイのものであるとされている(図4)。ハイド・パーク付近に建つミント(図5)、或いはラム病院と呼ばれている建物は、マクワリー自らが、マクワリー夫人がデザインしたとされるが、現場監督としてグリーンウェイが携わっており、多くの苦難を背負った。現存しているのはその中の両翼部であるが、本体が存在していた当時は200メートルの長さに連なり、シドニーでも最も巨大なスケールを持った建造物であった。竣工当時は、病院の規模が大きすぎて使いこなせなかったとも言われている。ラム病院とは、マクワリーが建設業者に4500ガロンのラム酒の専売特許を、施工費用の肩代わりとして払って建造させたために付けられた呼称であるが、建設業者が故意に安価な材料を使ったために様々な問題が生じ、グリーンウェイの作品としては珍しく評判の悪い建築物となってしまった。

シドニー近郊のウインザーにあるセント・マテウス教会(図6)は、ホークスベリ峡谷を望む高台に位置している。元は彼の宿敵で

あったヘンリー・キッチンが設計しており、彼のデザインは、2層造で1817年に既に基礎が積まれていた。しかしグリーンウェイは着工後の土壇場になって、その貧弱なデザインと素材に抗議し、より大きな規模で良質な材料を用いる新たなデザインを提出したためにキッチンの案による建造が中断され、グリーンウェイ設計の建築が再開し、1820年に完成した。この建築は煉瓦造で、基本的にはジョージアンスタイルをとっており、側壁の長さは高さの4倍で7つの付け柱によって分割されている。北面の塔の高さは幅の2倍となり、単純な正方形の構成の中に、シンプルなモジュールが組み込まれて調和を成している。この様に単純な幾何学図形によって立面を形作ることは、グリーンウェイがよく用いる古典的手法である。内装はプロテスタント教会らしく簡素で、天井部は白と黒のストライプの矩形で区画されている。内部の幅は天井高の1.5倍となっている。

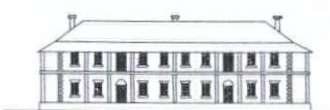
セント・ルークス教会(図7)は、リバプールの町の玄関部に位置している。2:5の比率によって、塔の高さは幅の2.5倍、身廊壁の長さも高さの同じく2.5倍となっている。この建築の施工を担当した建築技師のナザニアル・ルークスはラム病院も担当しており、グリーンウェイとは建設に関して口論が絶えなかった人物であると記されている。南面のポーチは1923年に付加されたもので、グリーンウェイの作品ではない。

元は四人の礼拝のために創られたセントジェームズ教会(写真P.11下右、図8)は、側面にハイド・パークに面する入り口を持ってい

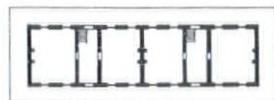
る。マクワリーは当初、この敷地に法廷を築く考えで、既に基礎が築かれていたが、後述する英国から派遣された政府調査官ジョン・トマス・ビギーの指摘によって、新たに設計し直され、教会が建設された。1819年に教会の基礎が築かれ、1824年に完成した。マテウス教会と同様の側面アーケードと塔のファサードには、グリーンウェイの洗練された設計手法が見られる。多少複雑なオーダーを持つ両側面のポーチと東後面の聖具室は後の建築家ジョン・バージによって1834年に付加され、囚人用教会から市民用教会へと変貌を遂げたが、基本的な考え方は、グリーンウェイへの共鳴から生み出されている。

マクワリー・プレイスに建つオペリスク(図9)は、卓越したエマンシピストの石工のなせる技であると、1816年に英国に報告された。全体のボリュームはエジプシアン・スタイルで、おそらく、ナッシュのバースでの作品を念頭に置いていたとされている。このオペリスクは、120ポンドの費用を掛けて建築され、調査官ビギーには法外な費用を掛けたと指摘された。記念碑上には、当時シドニー郊外の地に広がっていた人口が記されている。

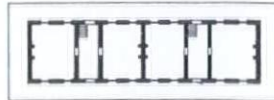
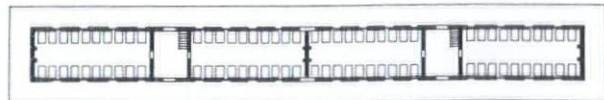
マクワリーは1812年から、パラマツクの総督官邸の改修に着手した。1799年にフィリップ総督によって建てられたプラスター塗りのコテージ(図10)は、ハンター総督によって2層のブリック造に拡張された(図11)が、建物が余りに貧弱で、マクワリーにとっては潔しとするところではなかった。1815年にジョン・ワットの設計によって1層の両翼部を付加する大規模な改修、増築が成された。ジョン・ワ



5. ミント、立面図

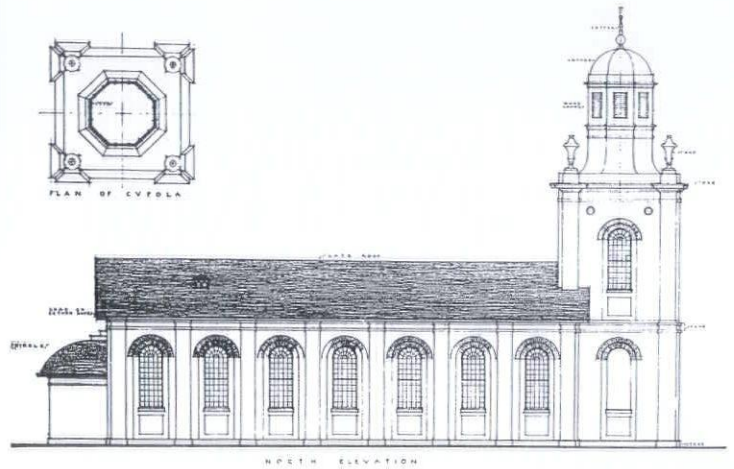


5. ミント、平面図

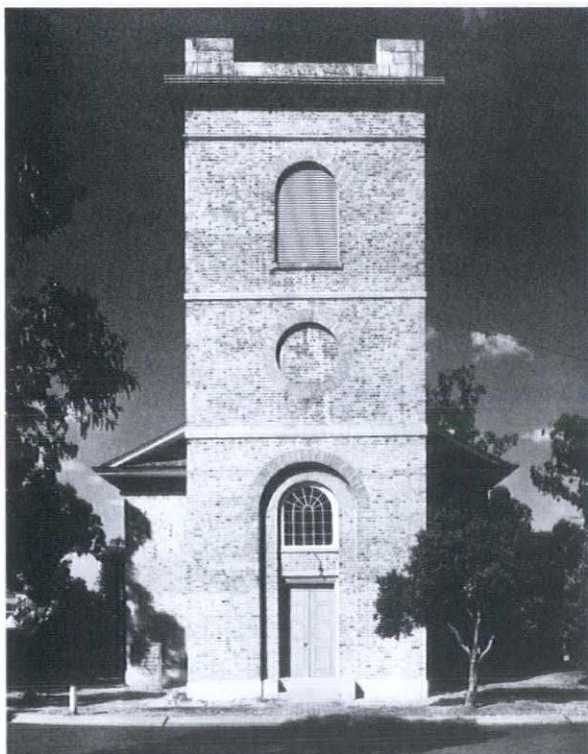
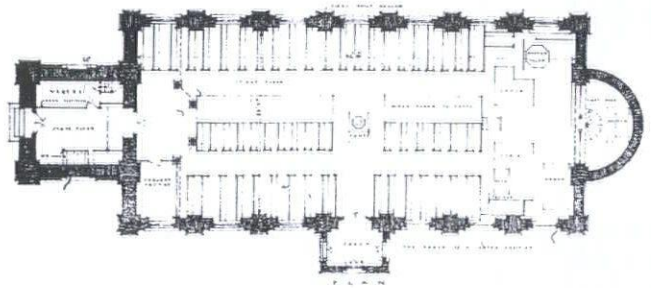




6. セント・マテウス教会 : F. H. グリーンウェイ、1817、ウィンザー



6. セント・マテウス教会、立面図、平面図



7. セント・ルークス教会 : F. H. グリーンウェイ、1817、リバプール



9. マクワリー・プレイス・オベリスク : F. H. グリーンウェイ、1818、シドニー

ットは、英国ダブリンでの建築教育経験を持つ政府建築家で、グリーンウェイにとって彼もまた宿敵の一人であった。1816年にグリーンウェイがパラマツタの自邸に訪れた際に、「できるだけ早くこの建築にポーチを付けるべきである」と、メッセージを残したのがきっかけで、グリーンウェイのデザインによるポーチが付加された(写真P.11上、下左、図12)。何とか少しでも設計に関わろうという執念と、マクワリーがグリーンウェイを気に入っていることが伺えるエピソードである。1816年のこのポーチの付加によって、マクワリーはパラマツタの総督官邸の完成に満足した。1858年に当総督官邸を主体とするパラマツタ・パークは、公共施設として保護され、1967年からナショナル・トラスト・オーストラリアの管理下に入り、現在はオールド・ガバメント・ハウスと呼ばれて一般公開されている。

城郭建築のような威厳を備える総督官邸を建築したい、というマクワリーの要望に応じて設計されたのが新総督官邸である(図13)。当時の状況から、シドニーにこれ程、規模を逸脱した建造物を建築することは不可能だったはずだが、実現に踏み切ったのはマクワリーの執念の賜であるといえる。オリジナル・デザインはグリーンウェイが作成し、1821年までに設計はほぼ完成されていたが、予算面から着工には至らず、マクワリーは夢を実現することなくシドニーを去ったのであった。後にブルク総督の代になって、英国の建築家、エドワード・ブローアに委ねられた。結局、ブルク総督の管理下で24,000ポンドをつぎ込んで1843年に完成された。

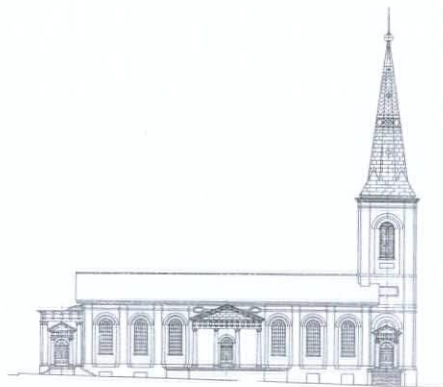
リバプール病院(図14)は、1810年にマクワリーが指示して計画が始まった建物である。1821年にグリーンウェイはデザインを完成させて着工したが、完成したのは彼が役人を解雇された後の1830年のことであった。門両側のデザインと、全体的なボリュームのバランスに、グリーンウェイのデザインセンスが感じられる建築となっている。

当時ナポレオン戦争による国内の混乱で犯罪が増発し、送られてくる囚人の数が急増したため、流刑地に囚人の収容施設を増やす必要性に迫られて新築計画されたのがハイドパーク・バラックである(写真P.10上下、図15)。

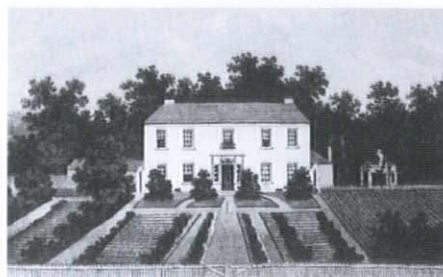
グリーンウェイのデザインは、ここで最高潮に達する。均整の採れたプロポーションと付け柱、窓、煙突、ドア等のエレメントの繊細な統合、無駄な装飾の排除、適確な素材の選択とコントロールによって、一部を強調することなく互いに緊張感をもたらしめている。1819年にこの建築が完成したときのマクワリー総督の喜びようは相当なもので、彼はこの建築がグリーンウェイの最高傑作であると賞賛したと記録されている。このバラックには12部屋に630人の囚人が収容された。正面立面は正方形に内包され、側面の長さは幅の2.5倍、付け柱の高さは付け柱の間隔の3倍、すなわち高さの3倍となっている。外壁面ピラスターの柱頭は単純化され、胴蛇腹で簡潔にまとめられている。開口部のまぐさ石や、半円アーチのアーケードも正方形に基づいて構成されている。

このような状況の中で、1819年6月に英国からジョン・トマス・ビギー調査官が派遣されてきた。ビギーの役目は、植民地の状態の調査と、マクワリー総督の植民地管理体制の調査であった。当時57才の志を高く抱く意欲的なマクワリー総督に対して、ビギーは若年39才の保守的な検査官で調査に余念がなく、両者の意見はしばしば対立した。また彼の来豪によって、マクワリーの独裁的政治とグリーンウェイの独占的活動への周囲の人々のフラストレーションを発覚させることになる。ビギーは、グリーンウェイの才能と偉業は認めながらも、流刑植民地に相応しからぬ様々な公共事業と建築物建設が行われようとしており、多大な費用がそれらにつぎ込まれていることを重視、それを受けた英国政府によって、マクワリーは総督の地位を追われて帰国することとなる。次代総督となったトマス・ブリスベンに対して、グリーンウェイは気嫌を取るところか、以前に設計した建築に対して正当なる設計料が支払われていないとしてそれを請求している。当然の事ながら、グリーンウェイの請求は却下され、グリーンウェイは1822年に解雇される。グリーンウェイは、居住地を変えてからは中流階級の邸宅をいくつか手がけただけで、収入のほとんどを妻のわずかな収入に頼って生活したとされている。彼は1837年に没する時は、殆ど名の知れぬ人

物になっていた。グリーンウェイがオーストラリアの10ドル札を飾り、マクワリーが「オーストラリア建国の父」と呼ばれていることは、当時両者が予想だにできなかったことであろう。(岡本美樹)



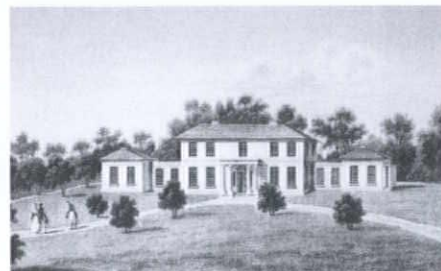
8. セント・ジェームス教会：F. H. グリーンウェイ、1820、立面図



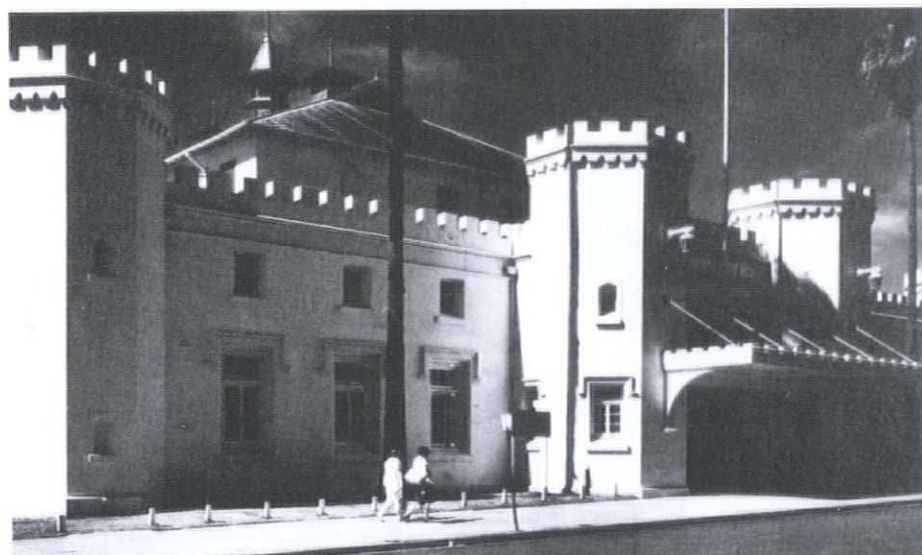
11. ハンター総督官邸、パラマツタ



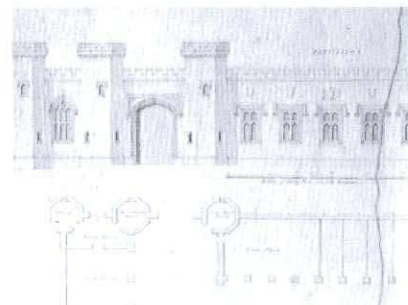
10. フィリップ総督官邸、1799



12. マクワリー総督官邸：ジョン・ワット、1815、バラマッタ



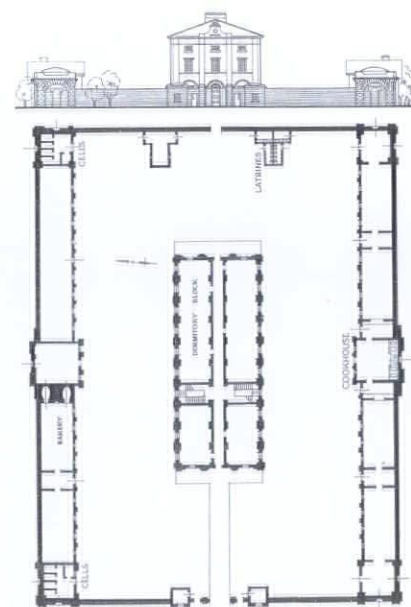
13. シドニー新総督官邸：F. H. グリーンウェイ、1843



13. シドニー新総督官邸、立面図



14. リバプール病院：F. H. グリーンウェイ、1821、リバプール



15. ハイド・パーク・バラック：F. H. グリーンウェイ、1819、立面図、平面図

タスマニアの教会建築

J.L.アーチャーとJ.ブラックバーンの建築

タスマニアは1803年に流刑植民地として入植された、オーストラリア大陸南東部に浮かぶ島である。島の東部海岸沿いのポート・アーサーにある囚人収容所には、1852年までに、延べ1000~2000人の囚人が収容されている。タスマニア植民地に最初に建設された総督官邸は、「Wattle and daub(網代に泥壁)」と描写される通りの、木造堀立小屋だったが(図1)、1820年頃からこの地方では、シドニーと同様に褐色の砂岩(サザン・ストーン)が採掘され、早くから煉瓦も生産されたため、徐々にそれらの材料を用いて建築物が建設された。砂岩の一種であるサザン・ストーンは、砂が堆積してできた岩石であり、ちょうど日本の大谷石のように、値段が安く施工性はよいが脆く崩れやすいので、耐久性に乏しい素材である。サザン・ストーン造の教会建築が、風化によって壁が削られている様子をたびたび目にする。テクスチャーが柔らかく、優しい色合いなので、タスマニアの自然を背景として小高い丘の上に褐色の教会が建っている光景は、ほのほのとした雰囲気を出している。

いる。タスマニアのコロニアル建築家で特に著名な人物は、対照的な経歴を持つジョン・リー・アーチャーとジェームズ・ブラックバーンである。彼らは多くの教会建築と住宅を、タスマニアの建築遺産として残した。

オーストラリアのコロニアル時代(1788年~1840年)の建築家は、それぞれの建築教育、実務経験の有無と、入植の仕方によって4通りのタイプに分けることができる。

1. 建築家としての経験を持つ一般入植者
2. 建築教育の経験を持たない一般入植者
3. 経験を持つエマシビスト
4. 経験を持たないエマシビスト

上記の4タイプの中で、「オーストラリア建築2」で紹介したグリーンウェイは第3のタイプ、今回「オーストラリア建築3」で紹介するアーチャーは第1のタイプ、ブラックバーンは第4のタイプ、更に後に「オーストラリア建築5」で紹介するジョセフ・リードは第1のタイプである。人材の不足していた植民地では、全く建築経験の無いエマシビストさえも、建築家として活躍する機会に恵まれたのである。

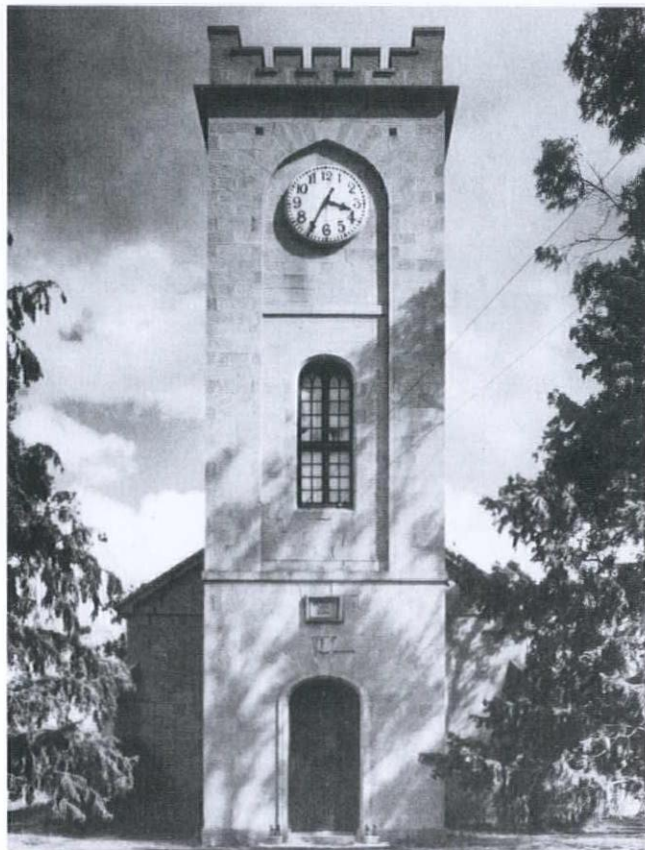
ジョン・リー・アーチャー(1791~1852)はアイルランド生まれで建築家の父を持ち、3年間英国ロンドンで建築を学んだ後、ウォーターロー橋の設計で名高いロンドンの建築家ジョン・レニーの事務所に5年間勤務している。彼はおそらく、この期間にロンドンのジョージアン様式を修得して1827年に植民地タスマニアへ入植した。タスマニアでは時のアーサー総督が学識経験者である彼を待ち構えており、早々に植民地政府建築家として任命された。彼は植民地での建築デザインに、持ち前の学識を遺憾なく発揮している。タスマニアでの彼の作品には、主としてグreek・リバイバルのモチーフが引用されており、ドリス式オーダー等の力強い形式が盛んに用いられている。彼の代表作であるトレジュリー・ビル(1837年)(写真P.12右上)では、単純化されたリージェンシー・スタイルの本体に、力強いドリック・オーダーのポーチを付加し、安定した外観を与えている。教会建築では、セント・ジョーンズ教会と管理棟(1835年)やセント・ルークス教会(1836年)に見られるこ



3. トリニティ教会牧師館、1842、キンペルトワン



1. 植民初期の住居



2. リッチモンド・セント・ルークス教会: J. L. アーチャー、1836、リッチモンド

とくにゴシックやロマネスク様式を用いている(図2)。また、アーチャーはホバート港近くのサラマンカ・プレイスでの都市計画にも関与し、付近の景観づくりに貢献した人物としても知られている。

もう一人のジェームス・ブラックバーンは、1803年に英国に生まれ、英国で水道管理員として働いていたが、1833年に文書偽造罪で植民地ホバートへ流刑された。服役中は給水、橋、道路、港等整備の公共事業に携わっていたが、1841年に赦免される前後に、独学で建築を学び、建築設計の仕事に着手した。彼の建築学の教科書となったのは、当時英国で発行されていた数々のパターン・ブックであるが、特に彼が参照していたのは、1833年に英国で発行された、ルードンの“Encyclopedia of Cottage, Farm and Villa Architecture”だとされている。彼の1842年の作品であるキャンベルタウンの日曜学校等には特に、ルードンの著書のデザインが基となったパターンが如実に見られる(図3)。

バッテリーポイントにあるセント・ジョー

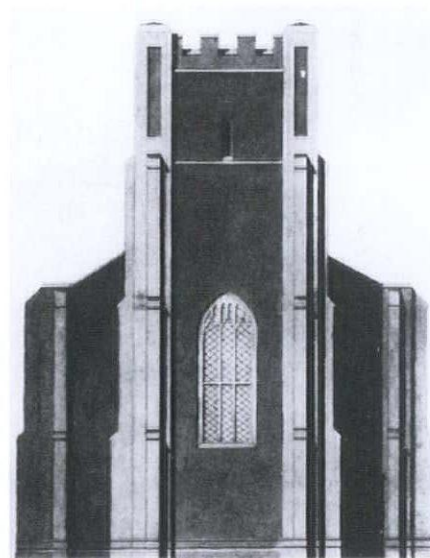
ジ教会(写真P.12右下)は、アーチャーとブラックバーンの共作である。1836年にアーチャーが身廊部分を設計し、1847年に塔とドリス式オーダーを持つポーチをブラックバーンが完成した。ブラックバーンの建築デザインには、似たような建築ヴォキャブラリーを用いながらも違った印象を与えるという不思議な魅力がある。彼は建築様式を問わず、クラシック、ジョージアン、ゴシック、ロマネスク、イタリアネート、チューダー等の様式の引用を試みるが、それらを巧妙に組み合わせて独創的なデザインをつくっている。建築の教育を受けていない建築家が、様式的な規則や学識の束縛に捕らわれずに、かえってオリジナリティ溢れる作品を創りだすケースは、オーストラリアにしばしば見られる。また、当時の植民地の建築家たちは、非対称形の教会建築をデザインするのを割に躊躇したが、ブラックバーンは、非対称形のデザインを積極的に用いている。

ブラックバーンの建築の中でも、そのオリジナリティが際立っているのは教会建築で

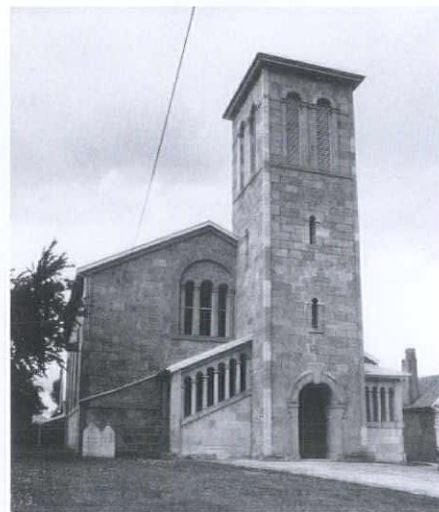
ある。1841年に着工したホリィ・トリニティ教会(図4)は、ブラックバーンがデザインした最大規模の教会建築で、ゴシックとロマネスクモチーフの合成としては、最も成功している例であろう。ポントビルにあるセント・マークス教会(1841年)(写真P.13上)では、マッシブなボリュームに、2つの塔を繋ぐようにロマネスク・アーチが斜めに切り取られており、正面ファサードを一見すると、アーチの裏側に階段があるかのように見える。これは限られたヴォリュームの中に、空間の広がりを感じさせるための彼独特の策であろう。セント・マテウス教会(1842年)(図5)、ユナイティング教会(図6)では、ファサードに開口の形をした溝を彫り込んだり、外部からは階段のように見えるアーケードを付けるなどの、表現上の工夫をこらしている。これら3つの教会建築の設計に共通しているのは、アングロ・ノルマン系のロマネスク建築に繊細なディテールを施して効果的に扱っていることである。学識に捕らわれない独創的な手法により、マッシブで力強い建築をつくって



4. ホリィ・トリニティ教会：J. ブラックバーン、1841、ノースホバート



5. セント・マテウス教会：J. ブラックバーン、1839、ロックバリー



6. ユナイティング教会：J. ブラックバーン、1842、ニュータウン(タスマニア)

いるという印象を受ける。

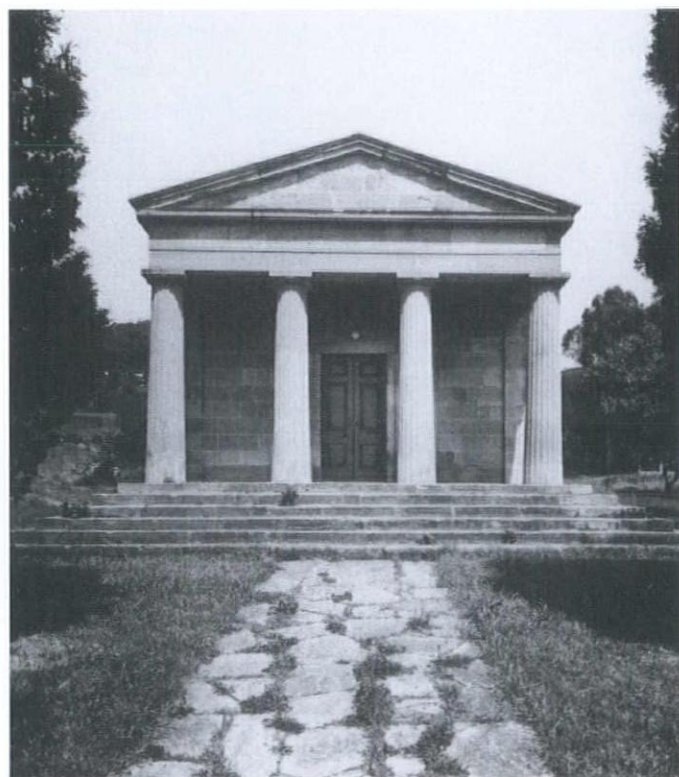
ホバートの総督官邸の改築計画には、アーチャーとブラックバーンによるいくつもの計画が残されている。1824年に提出されたアーチャーによる案は、ドリス式コラムにペディメントが載った2層分のポーチを持つ、シンメトリーなグreek・リバイバルにまとめられ、第2案では正面にペイを持つリージェンシー・スタイルのエlegantなデザインとしたが、(図7)総督の心を掴むことができないまま、その後何年間か計画は中断し、設計はブラックバーンに引き継がれた。ブラックバーンは第1案(図8)で、レディー・フランクリン・ミュージアム(図9)でみせたグreek・リバイバルのモチーフを用いるが、第2案で(図10)は、背部に塔を加え、ファサードを非対称形とし、彫刻的で荘厳な案を提示している。さらに第3案(図11)では、一変してイタリアネート様式のチャームingな案が提示されている。この案が実現していたら、タスマニアにまたひとつオーストラリアのコロニアル建築を代表する建築遺産を残すことが

できたろう。結局ゴシック様式の最終案(図12)が採用されることとなったが、計画はスムーズに進行せず、1850年代になってから、多くの修正を加えてようやく完成した。

ブラックバーンが持つ、ロマネスク、イタリアネート、ゴシック様式を独特の手法でとりまとめるデザイン能力は、住宅作品にも発揮されており、1842年のニュータウンのタワー付き住宅(図13)、1842年の牧師館(写真P.13下左)にも現れてくる。住宅作品の中でもブラックバーンのデザイン能力の成熟度を最も如実に示しているのは、グランジ(1848年)であり、この住宅作品は、19世紀のオーストラリア建築で最もビクチャレスクな住宅作品と言われている(写真P.13下右)。

ブラックバーンは1849年にホバートを去り、8人の子供達と共にメルボルンへ移住した。メルボルンでは再び水道整備管理官の仕事に従事し、メルボルン市内の下水道事業に広く貢献するが、この期間に彼は住宅作品1件(1853年、ビショップ・コート)(図14)以外、顕著な建物を特に残していない。彼は1863年

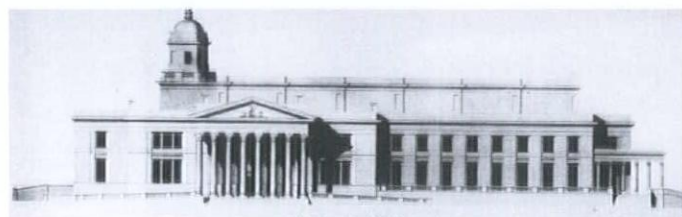
60才の時、汚染された水が原因で、腸チフスに倒れる。ブラックバーンはタスマニアで設計活動をしたたった9年間足らずの間に建築を修得し、多くの建築遺産を残したが、彼個人について、細かい資料や伝記的記録が特に残されておらず、彼の人間性や人生経緯に関して詳しいことは解っていない。しかし彼の作品から、彼は建築教育こそ受けていないものの、ルードンの建築理念である合理性、均整の意味を捉えて設計に実現させた建築家であったことが読みとれる。そして、わずか9年間の建築設計活動の期間に彼の建築様式は、グreek、ゴシック、ジョージアン、ロマネスク、イタリアネート、チューダーという様々な展開を見せ、印象、用途、美しさの面でも多様な可能性を編み出した。(岡本美樹)



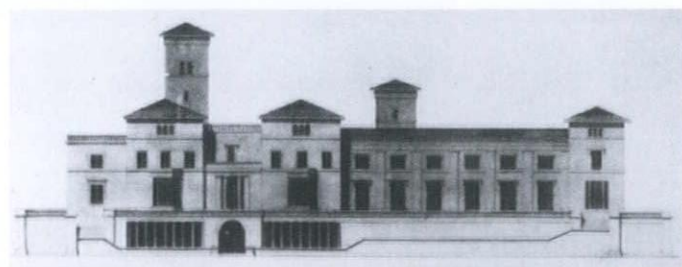
9. レディー・フランクリン・ミュージアム：J. ブラックバーン、1842、ホバート



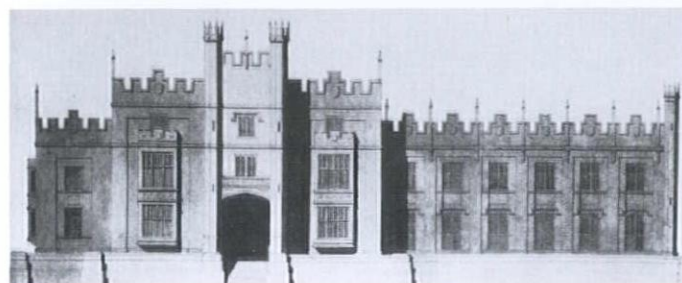
8. ホバート総督官邸第1案：J. ブラックバーン、1840



10. ホバート総督官邸第2案：J. ブラックバーン、1840



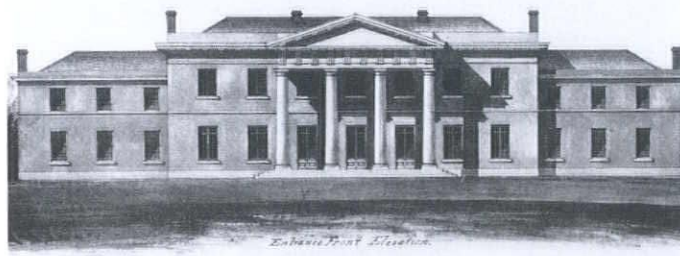
11. ホバート総督官邸第3案：J. ブラックバーン、1840



12. ホバート総督官邸最終案：J. ブラックバーン、1840



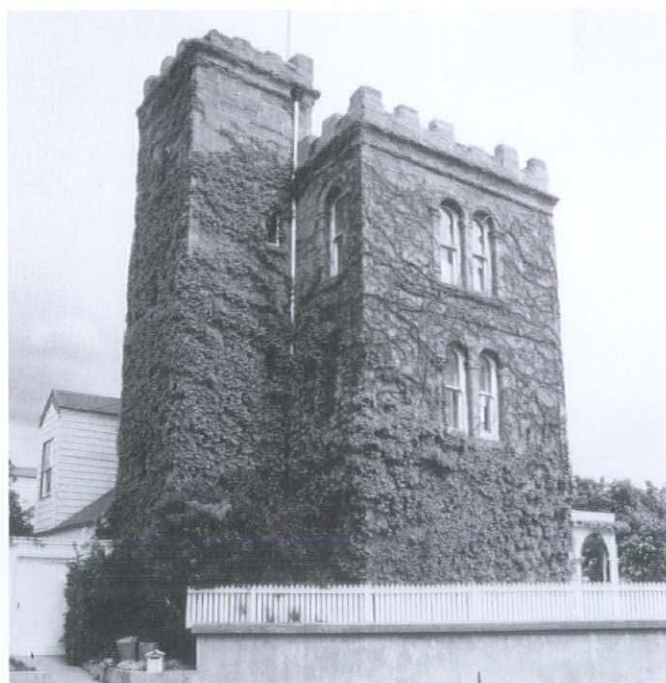
14. ビショップス・コート、J. ブラックバーン+ニューソン、1853、メルボルン



7. ホバート総督官邸第1案：J. L. アーチャー、1827



7. ホバート総督官邸第2案：J. L. アーチャー、1827



13. タワー付き住居：J. ブラックバーン、1842、ニュータウン(タスマニア)

オーストラリアン・ハウス

ジョージアのペランダ・ハウス

オーストラリアの植民初期の住宅は、幼児がよく描写する「家」の絵そのものであるとし、しばしば表現される(図1)。それらは英国の様々なバックグラウンド、オーストラリアの気候、風土と英国の伝統へのノスタルジックな気持ちの中から生まれる住居形式である。英国で一般的に語られる「ジョージアン」とは、1714年から1830年のジョージ4世までの治世の時代名称であるが、オーストラリアでは、1788年から1840年までの植民当時の社会状況、すなわち植民地という状況を表す「コロニアル」と重複してしばしば用いられる。

合理性、経済性を第一に重視する植民都市の住宅建築に、当時英国で流行していたゴシックやルネサンス、パラディアンの様式に複雑な構成を持つ様式や、グreek・リバイバルの様式に彫刻的なスタイルは受け入れ難く、より単純な全体構成に、簡単な装飾要素としてオーダーやコーニスを取り付ける形式の方が、植民当時の状況にも環境にも適合していた。オーストラリアの状況と風土を加味した、これらの住宅作品は、オーストラリアの植民当時の状況の中から生み出され、ヴィクトリアン以前の建築様式の中で最も興味深い建築形式である。

オーストラリアで初めて建設された住宅は、1788年にフィリップ総督が入港してから20日間で完成した総督官邸である。オーストラリア植民地設立に備えて英国海軍が、1786年に130ポンドで購入し、船で運んできたプレファ

ブ住居である(図2)。2代目ハンター総督が総督官邸にペランダを付加した(図3)、続いて3代キング総督が東側にドローイング・ルームを付加し、ペランダを拡張してからは、シンプルなものにもエレガントな表情を見せるようになった(図4)。

2カ所目のフィリップ総督の官邸は、1790年にパラマツタに建築されるが、2層のシンメトリーなボックスの上に寄せ棟のシングル葺き屋根が乗っている、やはり小規模で簡素な建築であった。この住宅は英国から運んだ5000個の煉瓦と400枚のガラスを使用し、英国から運んだライム、スタッコで足りない分は、部分的に囚人が貝殻を焼いて作ったライムで賄った。1階の窓は1:2の長方形で、12に分けられた2階は9個に分割され、まぐさとストリング・コースが取り付けられている。外観的には典型的なジョージアン・スタイルの建物である。2代目のハンター総督が拡張計画を実行するが、未完成のままに終わる。

一方、初期の一般庶民の住居は、1階に土間があり、屋根裏にベッドスペースがあるような、堀っ立て小屋だったが、それでも家族の生活が守られる最低限の空間が保証されていた。しばしばこれらの住居に対して言われる「Wattle-and-daub」という呼称は、網細工に泥を塗った壁に、木の皮等で屋根を葺いた家を意味するが、当時の住宅を表現するには妥当な表現である。オーストラリア南部の沿岸地域は、気候が温暖で、日差しが強いた

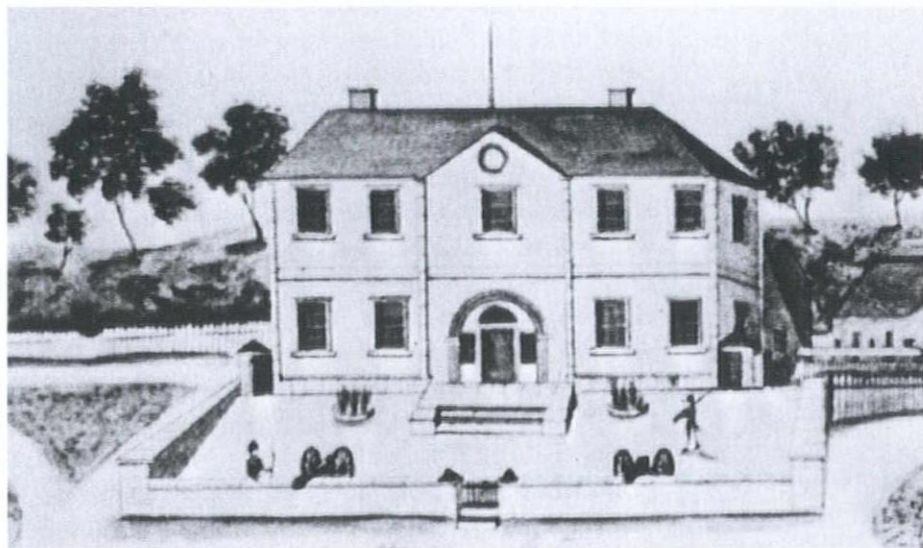
めに、住居には日除けのためのペランダが必要であった。ペランダは、住宅の居間部分の前面に取り付けられて夕涼みや団欒の場として使用され、そこが住空間(居間)の一部となっていたので、住空間を拡張する役目を果たしていた。当時英国がインドと軍事的関係を持っていたことから、インドの植民地政府に着任した経験を持つ英国政府官によって、ペランダが伝えられたと言う説もあるが、この様な住居形式がオーストラリアに普及したのは決して不思議なことではない。実際に、1810年に着任したマクワリー総督も、インドで着任した経験を持っている。

一般的に住居本体は、ふたつから4つの部屋が矩形平面内に配置され、庭や玄関に面して、庇のあるペランダが配されている。また、集中的な豪雨から守るために、屋根は寄せ棟のシングル葺きとなっており、ペランダに面する開口部は吐き出し窓、サッシュ窓にフランス落としと錠戸が付いている。全体的に見ると、「鰐の広い帽子」を被った箱の様相をしているのが、オーストラリアのコロニアル住宅の外観の特徴である。住居内部は、英国のジョージアン様式にまとめられているのが一般的である。これらの住宅で、コロニアル中期までに建設されたものは、岩石を積み上げた壁にスタッコが塗られるか、あるいはブリック積みの壁でつくられている。

シドニー近郊のパラマツタは、シドニーに次いで開拓された地域で、現在でも数多くの



1. 幼児が描く家
SD9604
30



2. シドニー・フィリップ総督官邸。ジェームズ・ブロードワース、1789、シドニー

歴史的建造物が保護されている。パラマッタの開拓者ジョン・マッカーサーは、1790年22歳の時に英国軍大佐としてオーストラリアへ入植し、シドニー近郊のパラマッタに10エーカーの土地を購入して農場を開いた。彼の留守中も農場を守り続けた妻の名をとって、農場を「エリザベス・ファーム」と名付けた。1796年にはさらに開拓地を1100エーカーに拡張し、スペイン産メリノ種の羊を8頭購入して、40人の囚人を雇って羊牧を開始し、オーストラリアで初めて羊毛産業を花開かせた。さらに、政治的にも様々な活動に関与し、特にエマシビスト政策や囚人労働力の活用を推奨した上、オーストラリアに一大プランテーションを築こうと尽力した人物である。彼は、今でも「オーストラリア羊毛業の父」と賞賛されている。マッカーサーの住居は1793年に建築され、オーストラリアに現存する最古の住宅建築として残されている(写真P.14上下、図5)。当初4部屋と台所のみだったこの建物に、1806年に最初の拡張が成され、1826年にはジョン・バージの手によって再び拡張され、西側のベランダが付加された。後にベランダの柱が木製柱から、透かし模様の鋳鉄柱に取り替えられたと記録されている。

シドニーのエリザベス・ベイ・ハウス(図6)は、アレキサンダー・マックレイの邸宅としてつくられた住宅作品である。マックレイは、英国から数多くの文献を運んでおり、1832年に「グreek・スタイルの邸宅と

庭園をデザインする」ように建築家に要請した。依頼を受けたのはジョン・バージ(1782-1861)で、バージは1837年に作品を完成させた。当時、英国ではすでに時代遅れとされていたパラディアン平面図をアレンジしたこの住宅作品は、バージの最高傑作と言われている。初期案では、コロネードが張り巡らされる計画だったが、実現した物には矩形平面の2面にドリスで、イオニア式のオーダーを持つポーチが1893年に付けられている。内装はジョージアン様式で統一され、建具の細部に至るまでバージの力量が発揮されている。特にサロンに沿ってキャンティレバーで飛び出している螺旋階段と、サロン上部のドーム状の天窓が、エントランスに続く劇的な空間をつくっている(図7)。楕円形平面の階段踊り場に面して、2階の部屋が配置され、部屋の入口には曲面扉が取り付けられている。ジョン・バージは、当時シドニーで最もファッショナブルな建築家とされていた、経験を持つ一般入植者で、1782年英国ハンプシャーの石積み職人の息子として生まれ、1820年までにロンドンで建築を学んだが、英国での建築活動は特に顕著ではない。1826年に農業を営む志を持ってオーストラリアへ入植したが、建築家不足の植民地が経験者を見遇せずもなく、1830年にはシドニーへ移住して住宅設計を手掛けるようになった。その後、多くのクライアントに恵まれ、建築家としてエレガントな邸宅や、田園住居、教会を設計した。

彼はピーター・ニコルソンとルードンのパターンブックを引用したと言われている。第2章で挙げたセント・ジェームス教会のポーチの改修もまた、彼の最も卓越した作品のひとつである。

シドニー近郊にあるボークルーズ・ハウス(写真P.15上)は、1827年に館主ウィリアム・チャールズ自らによって建てられた住宅作品である。ウィリアム・チャールズは、英国ケンブリッジで学び、探検仲間達と共にブルーマウンテン縦断の探検旅行に出掛け、後に『オーストラリアン』紙を発行した、意欲的な権力者である。本体は城郭建築の様なゴシック様式だが、ベランダが取り付け事によって、オーストラリアン・ハウスらしい優しい外観となっている。オーストラリアの住宅作品でゴシック様式が用いられることは希であるが、シドニー、ホバートの総督官邸と同様、城郭建築の様な邸宅を建てるのが、権力者の威厳を示すための手段とされたのであろう。

オーストラリア南東部に位置するタスマニア島は、気候がオーストラリアで最もイギリスに似た地域である。熱帯性の気候ではないので、ベランダはそれ程必要とされず、オーストラリアの典型的なジョージアン・スタイルの住宅作品を見ることができる。

エバンデールにあるクラレンドン(写真P.15下)は、1838年に総工費6万ドルという裕福なスコターの邸宅である。邸主のジェームズ・コックスとその息子は、この周辺に1万2000



3. シドニー・ハンター総督官邸、シドニー



4. シドニー・キング総督官邸、1802、シドニー

haの牧場を開拓した人物である。この住宅作品はオーストラリアの住宅としては珍しく、ネオ・クラシズム・スタイルを取っている。正面の2層分のイオニア式オーダーを持つポーチ、直方体の全体ヴォリュームと、地下層が半層上がって形作られる基壇部分が全体の印象を形作っている。内部空間は特に装飾された部屋はないが、一辺が4.5mの直方体の内部空間を持つエントランスホールは、スケールのみでも、オーストラリア邸宅のデザイン感覚の中で傑出している。この住宅の設計者は不明であるが、現存する図面から、ロンドンあるいはパリから送られて来たものであるといわれている。この作品は、1962年にナショナル・トラストの管理下に入り、一般公開されている。

メルボルンのサウス・ヤラにあるコモ(写真P.16、写真8)もまた、裕福な家庭の田園住居の代表作である。1854年、ゴールドラッシュの真只中に、スコットランドから移民してきた建築家のジョン・ブラウンがこの地区の土地を購入し、彼自らの設計で完成された住宅である。建物の主要部分は白スタックで仕上げられ、周囲のベランダには当時流行のスコットランド産のアイアン・ワークが取り付けられている。コモは、後の邸主であるアーサー・エデン・ジョンソンなる人物によって拡張、改修計画が成された後、1959年にナショナル・トラストの管理下に入った。

サウスオーストラリア州アデレードのノー

ス・テラスにあるエアーズ・ハウス(写真P.17上下、図9)は、1855年から1876年に掛けて3度の増築によって完成された作品である。設計者のジョージ・キングストン(1807-1880)は、1836年にサウスオーストラリアの政府調査官としてアデレードへ入植した。彼は英国で建築の基本的な教育を受けてはいるが、建築家としての主な経験は入植後である。邸主のヘンリー・エアーズは1841年に英国ハンプシャーより入植し、アデレードの立法機関に勤めた後にサウスオーストラリアの首相を務めた人物である。1855年に30エーカーの土地を買取り、当時建っていた9部屋のブリックの住居のほとんどの部分を改修し、45部屋のブルー・ストンの邸宅とした。彼はこの自宅で、年に何度か演奏会を催し、家族や友人達と夜の晩餐会を行なうのを楽しみとしていた。1階の北側と西側に、居間とダイニング・ルームに繋がるベランダが配され、テラコッタ敷きのベランダの両端のポーチは大ホールへと繋がっている。北側立面は、1874年まで東側に半円形の翼部を持つ非対称形であったが、1874年からの増築によって東側にも半円形の翼部が追加され、対称形となった。

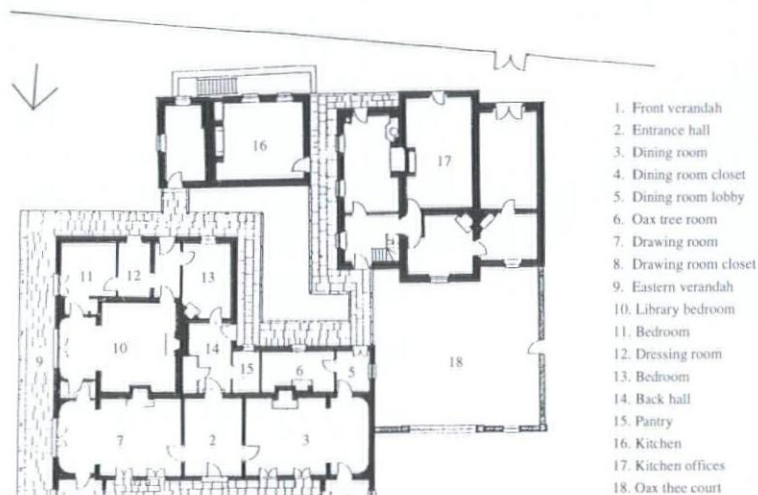
ニューサウスウェールズのボークルーズにあるボークルーズ・ハウスは、1803年にヘンリー・ブラウンによって建てられた住居を、ウィリアム・チャールズ・ウェントワース(1790-1872)が買い取り、1827年から増築が成された邸宅である。ウェントワースは、ノーフォ

ーク島に流刑になった女囚と、貴族の血を引く外科医の間に生まれ、ブルー・マウンテンを初めて縦断した探検家でありながら、小説家、弁護士、地主、政治家で、著作においてエマシビスト派の発言をし、様々な論議を巻き起こした人物である。住宅本体が、典型的ヴィクトリアン・ゴシックとなっている事は、ウェントワースのロマンを感じさせる。また、ベランダが追加されることによって、不思議な釣り合いとピクチャレスクな景観を与えている。

最後に参考として、オーストラリアでコロニアル時代の住宅建築に引用されたとされている著名なパターン・ブックを挙げておく。

- Laing, David, *Hints for Dwellings*, 1800
 Gifford, Edward, *Designs for Elegant Cottages and Small Villas*, 1806
 Loudon, J.C., *Encyclopaedia of Architecture*, 1833
 Knight, Richard Pain, *Analytical Enquiry into the Principles of Taste*, 1805
 Nicholson, Peter, *The Builder's and Workman's New Director*, 1836
 Papworth, J.B., *Designs for Rural Residences*, 1818
 Rumford, Count, *Chimney Fireplaces with Proposals for Improving them*, 1795

(岡本美樹)



5. エリザベス・ファーム平面図：ジョン・マッカーサー、1793

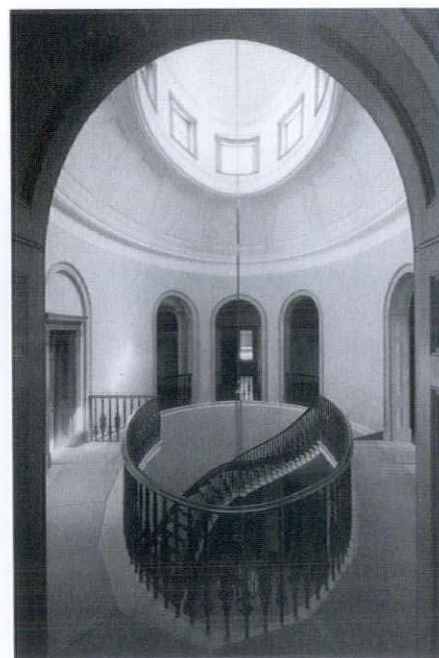
SD9604



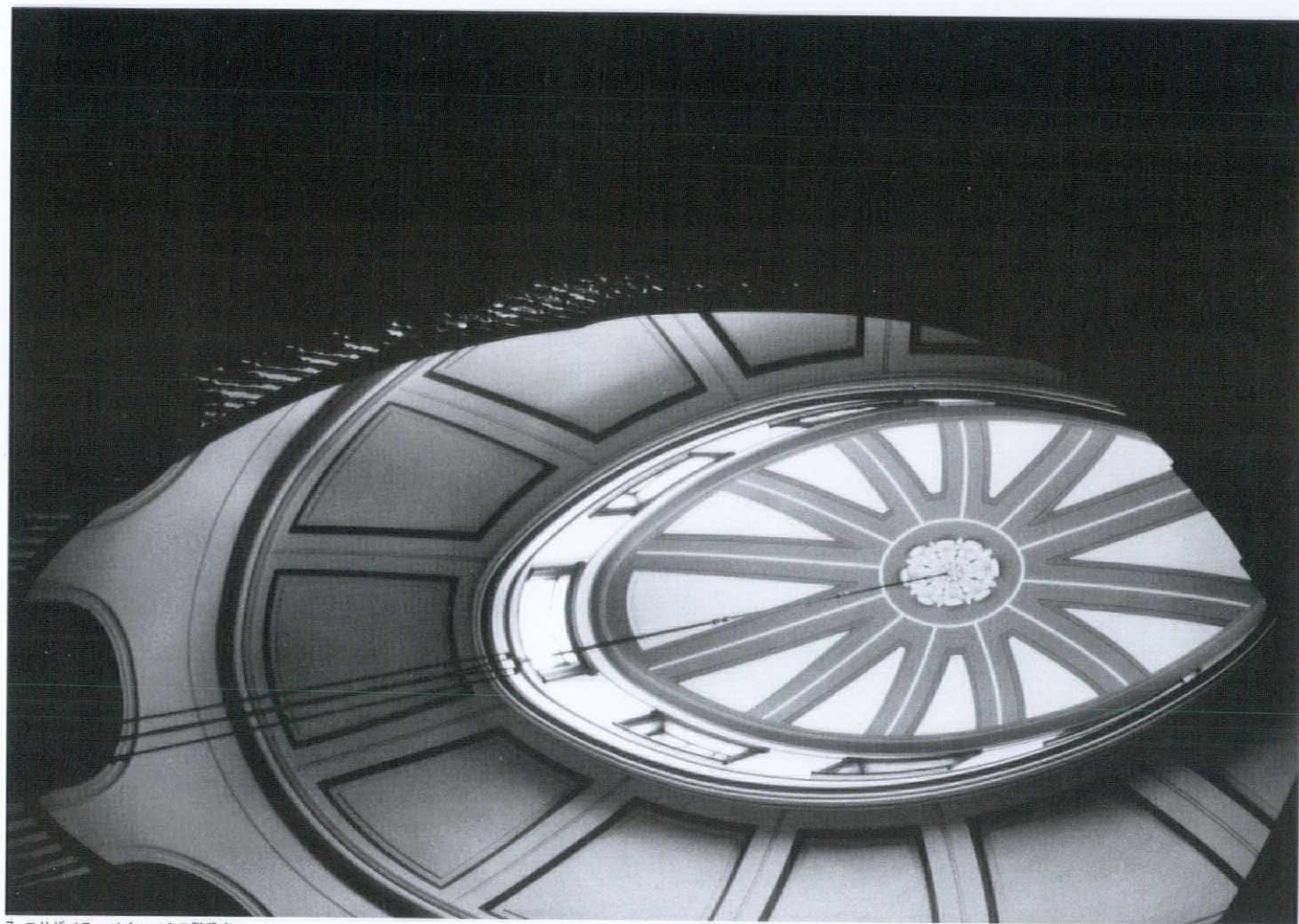
5. エリザベス・ファーム：ジョン・マッカーサー、1793



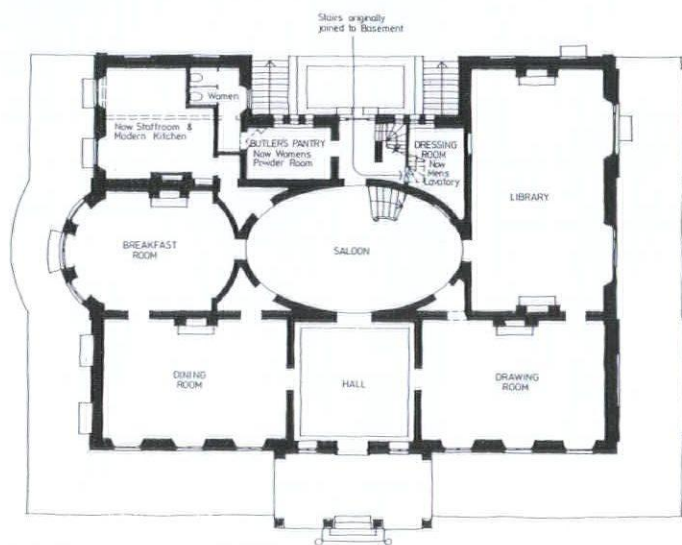
6. エリザベス・ベイ・ハウス：J. バージ、1838、エリザベス・ベイ



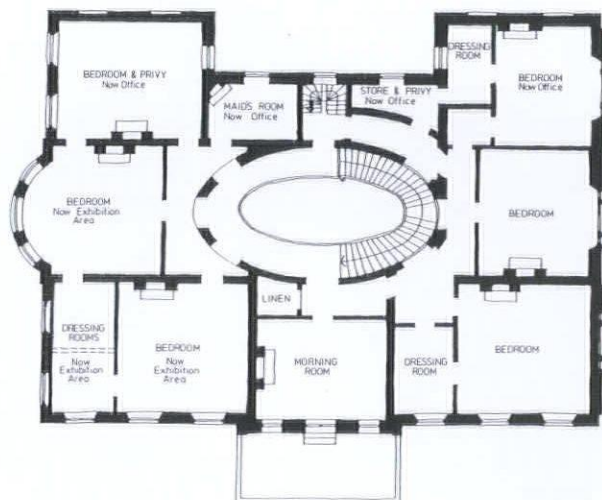
6. エリザベス・ベイ・ハウス階段室



7. エリザベス・ベイ・ハウス階段室



6. エリザベス・ベイ・ハウス1階平面図



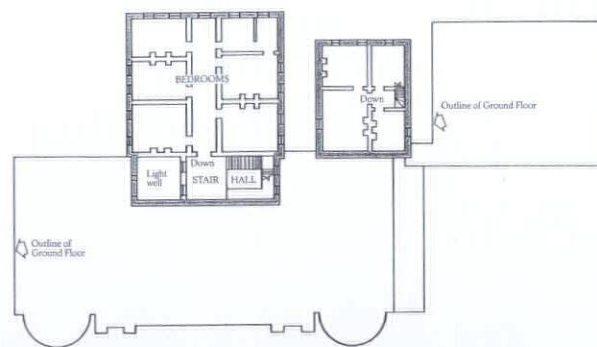
2階平面図



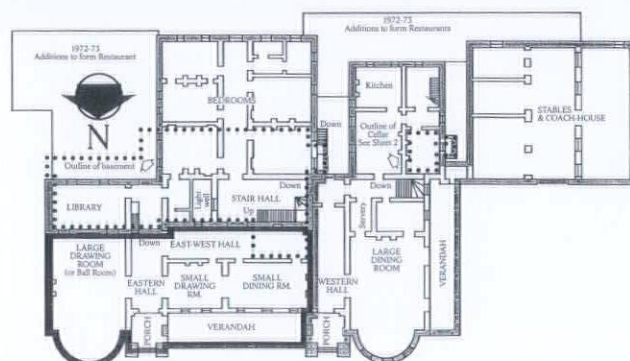
9. エアーズ・ハウス：J. S. キングストン、1858、アデレード



8. コモ・ハウス：ジョン・ブラウン、1855、サウス・セラ(メルボルン)



2 階平面図



9. エアーズ・ハウス 1 階平面図

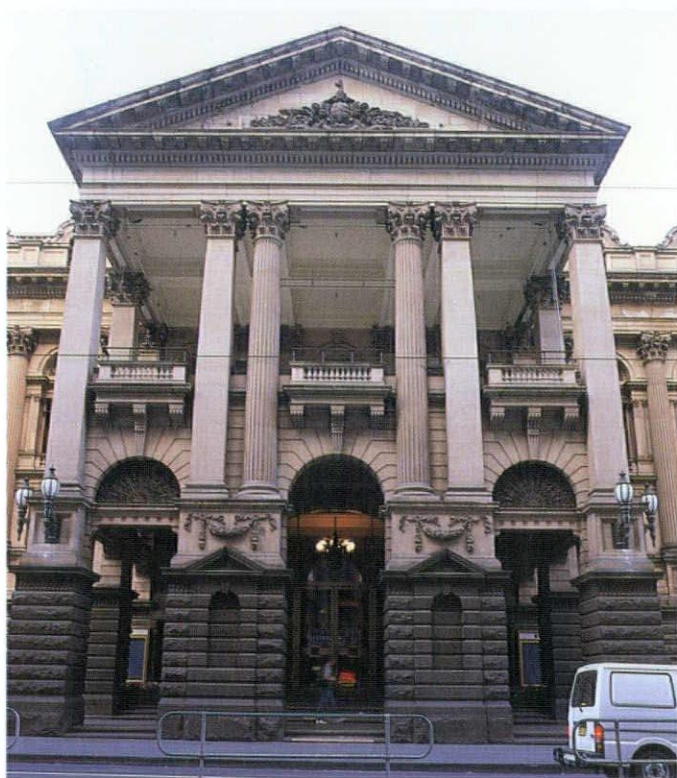
オーストラリア建築5.

メルボルンのヴィクトリアン建築

ゴールドラッシュが生んだ華やかな建築群



州会議事堂：J.J.ナイト+P.キール、1856、メルボルン



タウン・ホール：J. リード+バーンズ、1868、メルボルン

SD9604



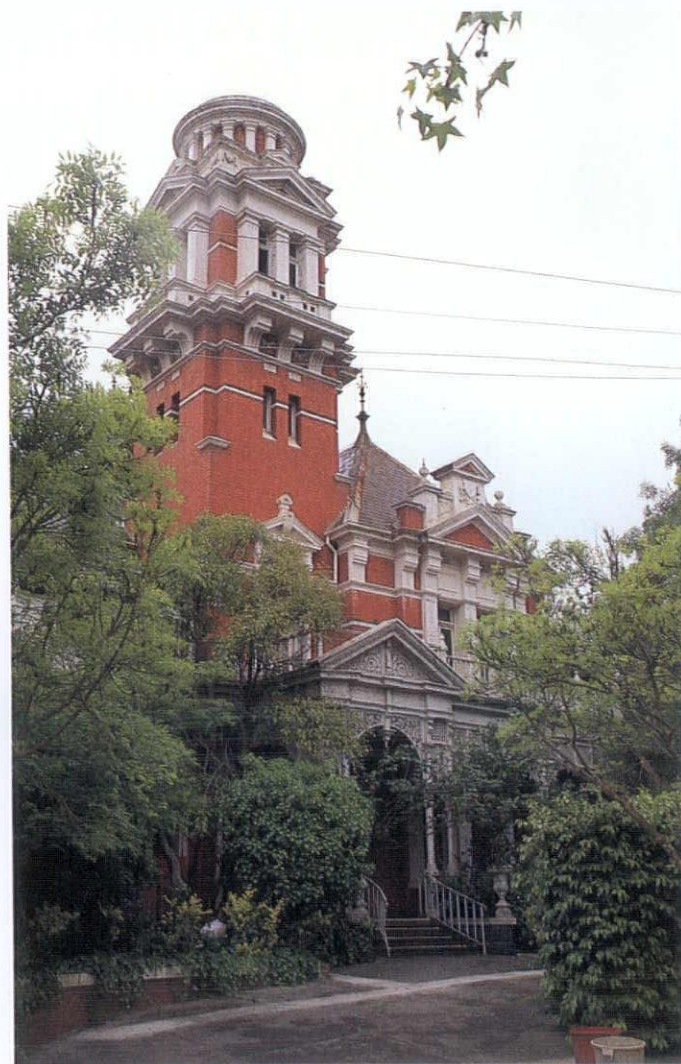
ラバッサ：J. A. B. コーチ、1890、ツーク（メルボルン）



リップンリー：J. リード、1868、メルボルン



リップンリー：J. リード、1868、メルボルン



イラワラ：J. バート・ウィスル、1889、ソーラック(メルボルン)

都市住居テラスハウス

アイアン・レースの町並み



タスマ・テラス：C. ウェブ、1862、イーストメルボルン
SD9604
38



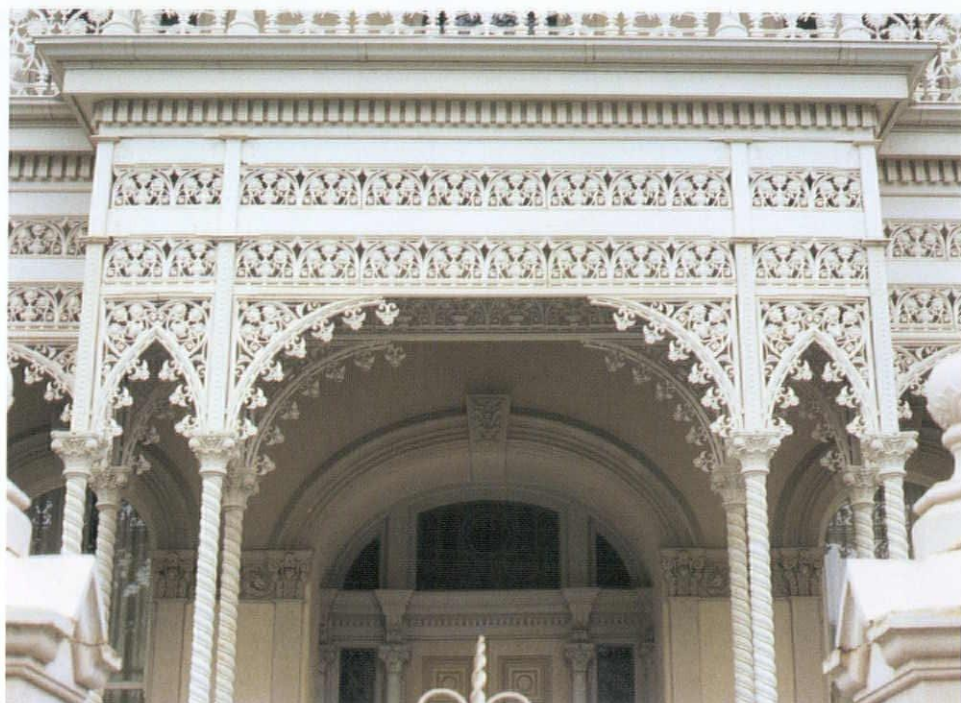
イーストボーン・ハウス：スミス+オッグ、1901、イーストメルボルン



イーストボーン・ハウス：スミス+オッグ、1901、イーストメルボルン



ウッドランズ、1887、イーストメルボルン



ウッドランズ、1887、イーストメルボルン



カサ・デ・マリア：W.ビット、1883、イーストメルボルン



キルバーン：デビット・ブライアー、1878、イーストメルボルン



ハンプルトン・ハウス：C. ウェブ、1862、メルボルン

オーストラリア建築8.

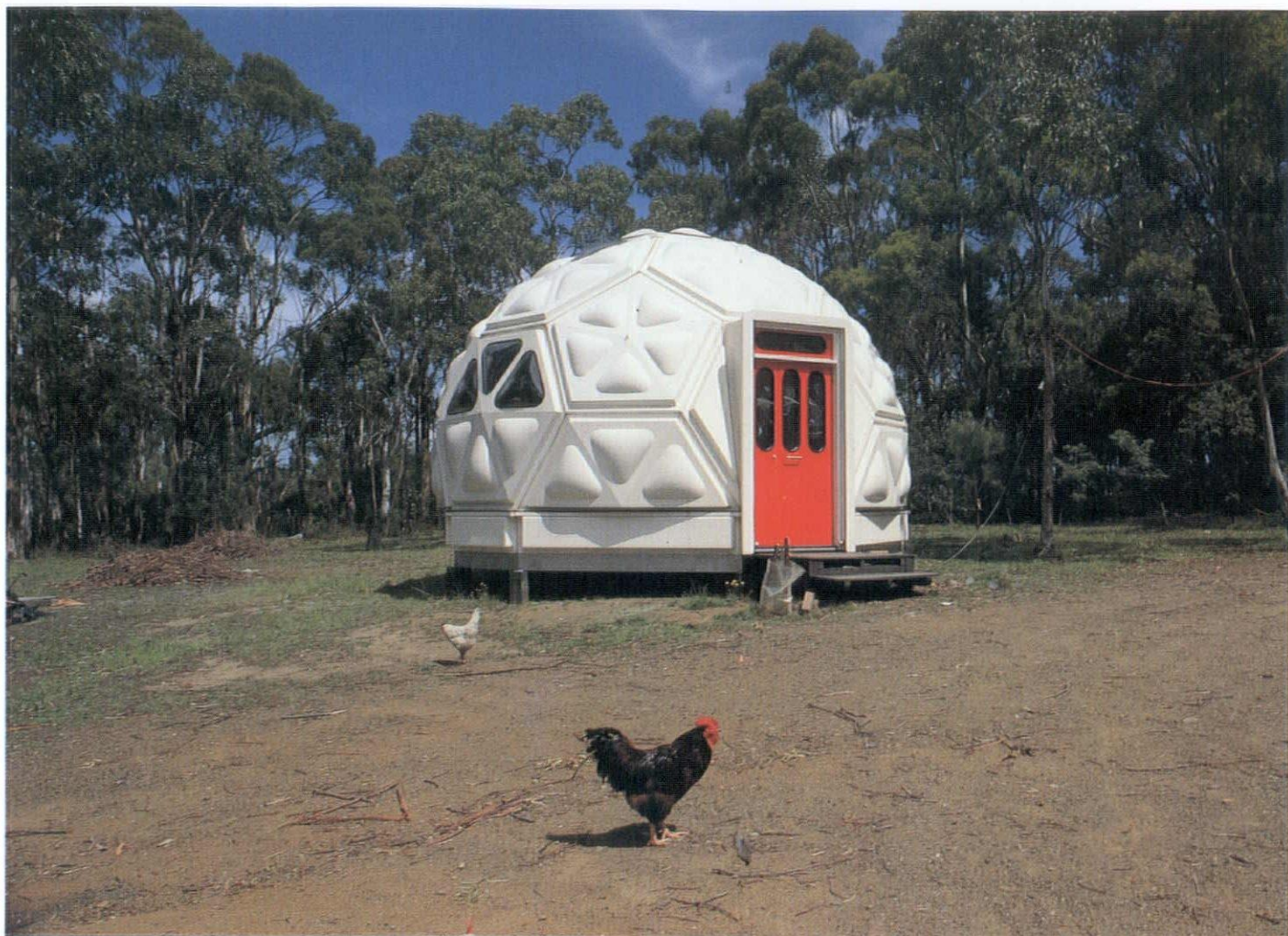
現代建築の可能性

世界的標準化と地域的固有化との振幅の中に



シドニーオペラハウス：ヨルン・ウオッツオン、1973、シドニー

SD9604



スミス邸、ホバート



シドニーオペラハウス



オーストラリア国会議事堂：ミッチェル・ジョゴラ、1988、キャンベラ



テラスハウス改築、メルボルン

メルボルンのヴィクトリアン建築

ゴールドラッシュが生んだ華やかな建築群

ヴィクトリア州メルボルンは、1837年から入植が始まった都市で、都市としての歴史はシドニーやホバートよりも浅い。しかしながら、オーストラリア国内で、メルボルンがもっとも英国色の濃い都市だと言われるのは、そこが流刑地として開拓された植民都市ではなく、一般入植者である商人、農耕民によって開拓された都市だからである。白人の入植が開始されてからわずか15年後の1851年には、メルボルン近郊で金鉱が発見され、ゴールド・ラッシュが始まり、それを皮切りにして短期間に一大都市となったのである。ゴールド・ラッシュの期間に移入民は爆発的に増え、1851年に7万6000人だった人口が10年間で50万0000人に達している。人口増加に伴って建設も盛んになり、一時期はメルボルン市内だけで1ヵ月に200件もの建物が建設された程である。建築様式において、時期的、社会状況的に見てもメルボルンは、シドニーやホバートのようなコロニアル・ジョージアン様式を取っていない。19世紀末に西洋で、あらゆる建築様式が反乱する中、メルボルンの建築家もまた様式競争に明け暮れたが、コロニアル・ジョージアンの簡素なデザインは、人々の間

から軍国政府建築の記憶が拭い去れず、受け入れられなかったと考えることもできる。それよりも優雅で豊かな雰囲気イタリアネート・ゴシックやセカンド・アンピール様式が絶大なる支持を得たのだった。

メルボルン地区には、シドニーに入植が開始された後に、幾度か英国政府によって調査が行なわれている。1804年には、調査官がポート・フィリップへ達するが、入植に適した土地を見つけることはできなかった。しかし、当時の調査官のひとりであったジョン・バットマンはこの地域の可能性を読み取り、1825年にシドニーのラルフ・ダーリング総督に入植許可を願い出るが、自分の権限では許可できないと断られた。それでもバットマンは諦めきれずに、10年後の1835年3月29日、アボリジニの通訳を従えてヤラ川のほとりに上陸し、現地の通りすがりのアボリジニから、ナイフ、毛布、鏡、衣類、鉄、小麦粉、トマホーク等と引き替えに、60万エーカーの土地を購入した。この時より、メルボルンの白人による入植が開始される。同年の7月には、一足遅れて実業家のフォークナーがタスマニアのローセストンから、フォークナー商会の数

人の社員と家族を連れて同地に上陸する。1835年11月の時点で、この地域の人口は男性142人、女性35人であり、57件の住宅が建設されていた。ニューサウスウェールズ州植民地政府は、バットマンによる領地拡張を見逃さず、1836年に政府による介入が始まった。1837年に、時の英国首相メルボルンの名に因んでこの地をメルボルンと命名し、初代総督にシドニーからリチャード・ビュークを、行政官としてウィリアム・ランスデールを任命した。かくして、植民政府による植民都市計画が開始された。街区の計画は、1837年に建築家ロバート・ラッセルの案に基づいて、ビューク直属の調査官ロバート・ホドルが行い、10エーカーの敷地を99フィート毎の通りで区画、販売した。ロバート・ホドルは自らふたつの街区を当時54ポンドで購入するが、彼が亡くなった年の1881年には、同じ土地は25万ポンドになっていたという(図1)。

英国で万国博が開催された1851年の8月に、ルイス・ミッシェルなる人物がバララット近郊のアンダーソンズ・クリークで金鉱を発見し、その後わずか2ヶ月でヴィクトリアにゴールドラッシュの波が押し寄せる。ピーク時

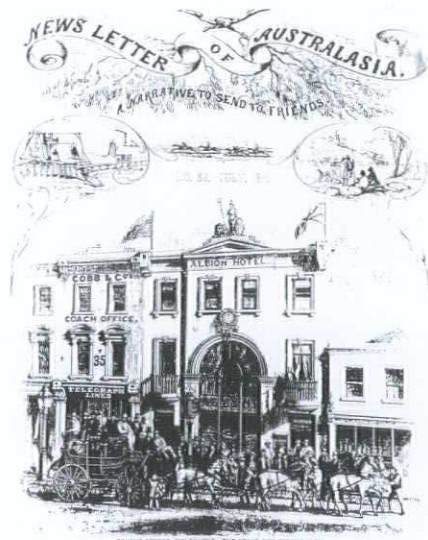
THE FIRST LAND SALE IN MELBOURNE.
AN INTERESTING HISTORICAL EVENT

ALLOTMENTS SOLD BY PUBLIC AUCTION WITH THE NAMES OF THE PURCHASERS AND OF THE PRICES, JUNE 1, 1837.

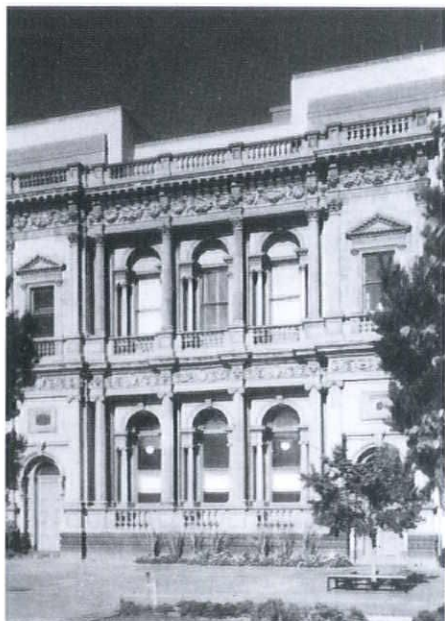
THE FIRST YEAR OF THE SALE OF THE LANDS IN MELBOURNE. THE FIRST YEAR OF THE SALE OF THE LANDS IN MELBOURNE. THE FIRST YEAR OF THE SALE OF THE LANDS IN MELBOURNE.

BOURKE STREET.		COLLINS STREET.		FLINDERS STREET.	
LOT 1	LOT 2	LOT 1	LOT 2	LOT 1	LOT 2
LOT 3	LOT 4	LOT 3	LOT 4	LOT 3	LOT 4
LOT 5	LOT 6	LOT 5	LOT 6	LOT 5	LOT 6
LOT 7	LOT 8	LOT 7	LOT 8	LOT 7	LOT 8
LOT 9	LOT 10	LOT 9	LOT 10	LOT 9	LOT 10
LOT 11	LOT 12	LOT 11	LOT 12	LOT 11	LOT 12
LOT 13	LOT 14	LOT 13	LOT 14	LOT 13	LOT 14
LOT 15	LOT 16	LOT 15	LOT 16	LOT 15	LOT 16
LOT 17	LOT 18	LOT 17	LOT 18	LOT 17	LOT 18
LOT 19	LOT 20	LOT 19	LOT 20	LOT 19	LOT 20
LOT 21	LOT 22	LOT 21	LOT 22	LOT 21	LOT 22
LOT 23	LOT 24	LOT 23	LOT 24	LOT 23	LOT 24
LOT 25	LOT 26	LOT 25	LOT 26	LOT 25	LOT 26
LOT 27	LOT 28	LOT 27	LOT 28	LOT 27	LOT 28
LOT 29	LOT 30	LOT 29	LOT 30	LOT 29	LOT 30
LOT 31	LOT 32	LOT 31	LOT 32	LOT 31	LOT 32
LOT 33	LOT 34	LOT 33	LOT 34	LOT 33	LOT 34
LOT 35	LOT 36	LOT 35	LOT 36	LOT 35	LOT 36
LOT 37	LOT 38	LOT 37	LOT 38	LOT 37	LOT 38
LOT 39	LOT 40	LOT 39	LOT 40	LOT 39	LOT 40
LOT 41	LOT 42	LOT 41	LOT 42	LOT 41	LOT 42
LOT 43	LOT 44	LOT 43	LOT 44	LOT 43	LOT 44
LOT 45	LOT 46	LOT 45	LOT 46	LOT 45	LOT 46
LOT 47	LOT 48	LOT 47	LOT 48	LOT 47	LOT 48
LOT 49	LOT 50	LOT 49	LOT 50	LOT 49	LOT 50
LOT 51	LOT 52	LOT 51	LOT 52	LOT 51	LOT 52
LOT 53	LOT 54	LOT 53	LOT 54	LOT 53	LOT 54
LOT 55	LOT 56	LOT 55	LOT 56	LOT 55	LOT 56
LOT 57	LOT 58	LOT 57	LOT 58	LOT 57	LOT 58
LOT 59	LOT 60	LOT 59	LOT 60	LOT 59	LOT 60
LOT 61	LOT 62	LOT 61	LOT 62	LOT 61	LOT 62
LOT 63	LOT 64	LOT 63	LOT 64	LOT 63	LOT 64
LOT 65	LOT 66	LOT 65	LOT 66	LOT 65	LOT 66
LOT 67	LOT 68	LOT 67	LOT 68	LOT 67	LOT 68
LOT 69	LOT 70	LOT 69	LOT 70	LOT 69	LOT 70
LOT 71	LOT 72	LOT 71	LOT 72	LOT 71	LOT 72
LOT 73	LOT 74	LOT 73	LOT 74	LOT 73	LOT 74
LOT 75	LOT 76	LOT 75	LOT 76	LOT 75	LOT 76
LOT 77	LOT 78	LOT 77	LOT 78	LOT 77	LOT 78
LOT 79	LOT 80	LOT 79	LOT 80	LOT 79	LOT 80
LOT 81	LOT 82	LOT 81	LOT 82	LOT 81	LOT 82
LOT 83	LOT 84	LOT 83	LOT 84	LOT 83	LOT 84
LOT 85	LOT 86	LOT 85	LOT 86	LOT 85	LOT 86
LOT 87	LOT 88	LOT 87	LOT 88	LOT 87	LOT 88
LOT 89	LOT 90	LOT 89	LOT 90	LOT 89	LOT 90
LOT 91	LOT 92	LOT 91	LOT 92	LOT 91	LOT 92
LOT 93	LOT 94	LOT 93	LOT 94	LOT 93	LOT 94
LOT 95	LOT 96	LOT 95	LOT 96	LOT 95	LOT 96
LOT 97	LOT 98	LOT 97	LOT 98	LOT 97	LOT 98
LOT 99	LOT 100	LOT 99	LOT 100	LOT 99	LOT 100

1.メルボルン街区計画：ロバート・ホドル、1837



2.メルボルン・ビューク通り、1853



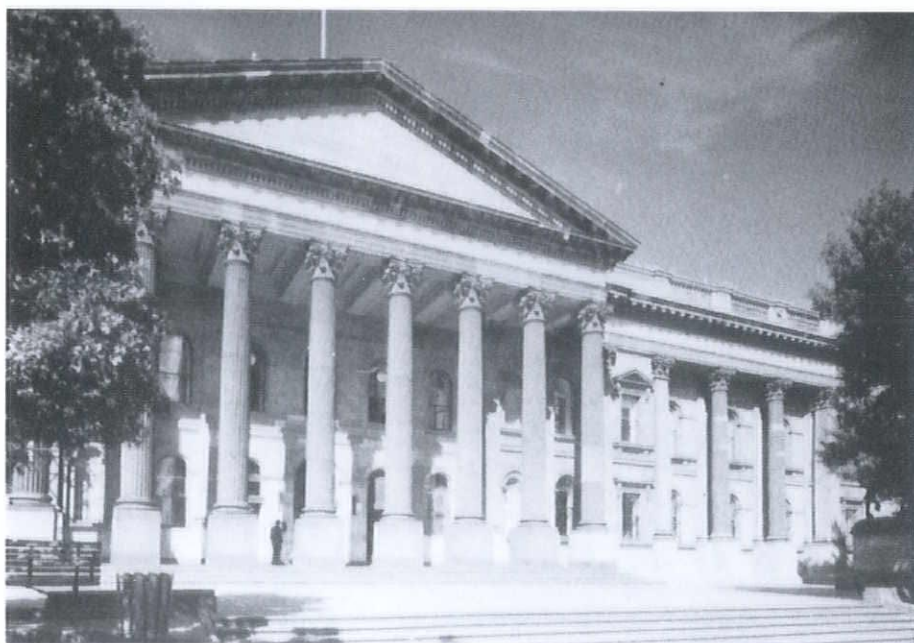
5. ニューサウスウェールズ銀行：J. リード、1856



5. ニュージーランド銀行：J. リード+バーンズ、1878



3. J. リード、1822～1890



4. メルボルン公共図書館：J. リード、1854

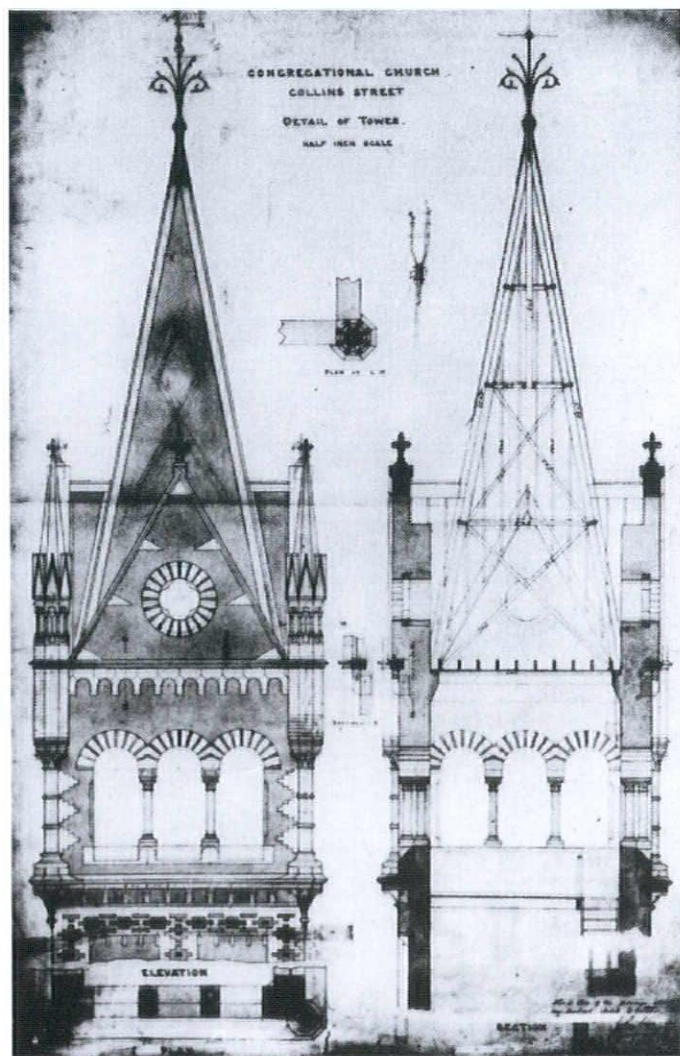
には週に1万人がメルボルンへ入港した。メルボルンでは、男達が職場も家庭も置き去りにして金鉱掘りに出掛けたため、町は閑散とし、牧場主も商店も従業員不足で途方に暮れたという。1851年から1854年の期間に、町の人口は4倍に膨れ上がった。ヴィクトリア植民地政府は金鉱管理局を早々に設置し、金の鑑札料として1ヵ月1ポンド10セントの採掘料と、金28グラムにつき、3ポンドを徴収した。こうして1850年代に、ヴィクトリア州には金によって7500万ポンドの富がもたらされた。コリンズ通りやビューク通りには、着飾った紳士淑女が買い物を楽しみ、気取って歩く光景が見られた(図2)。メルボルンは楽天的な雰囲気包まれ、短期間で莫大な富を得た人々は、実質の伴わぬ虚栄と放漫に満ちた生活を

送り、恥も外聞もない虚飾の建築群が次々に出現する。入植当時から潜在的に植民地の人々を支配していた、英国に対する忠誠心と裏腹な、劣等感によるフラストレーションと欲望を爆発させたのがこの時代だった。

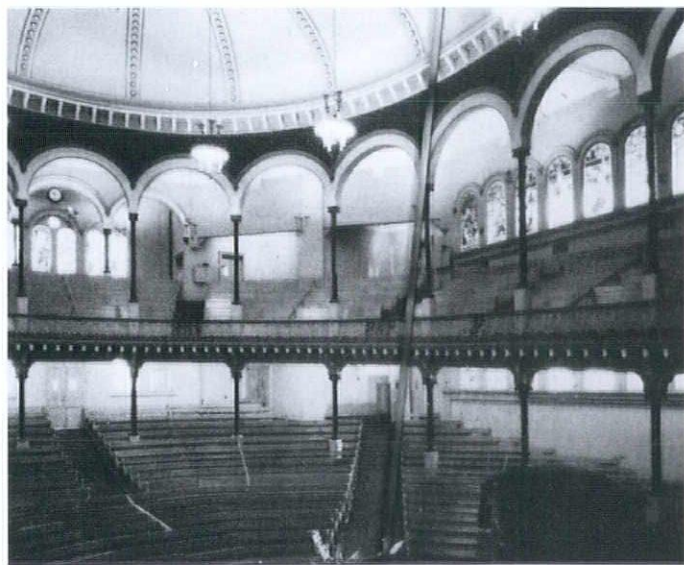
ヴィクトリア州メルボルンとニューサウスウェールズ州シドニーは、オーストラリア第一の都市となることを、あらゆる面で競い合ったが、オーストラリア大陸探検もそのひとつだった。1860年にヴィクトリア政府の設立資金で、ロバート・オハラ・パークとウィリアム・ジョン・ウィルズがオーストラリア縦断探検に出発、彼らは白人で初めてオーストラリア大陸を縦断して、オーストラリア大陸北端へ達した。実に、この時初めてオーストラリア大陸北端のダーウィンと南端とが地続

きである事が証明され、オーストラリア大陸が広大なひとつの島であることが判明したのである。オーストラリア内陸部の実体は、それまでほとんど知られていなかった。入植民達は南側の沿岸地域に張り付き、安全な環境を確保して、辺境の地を見ようとしていなかったのである。

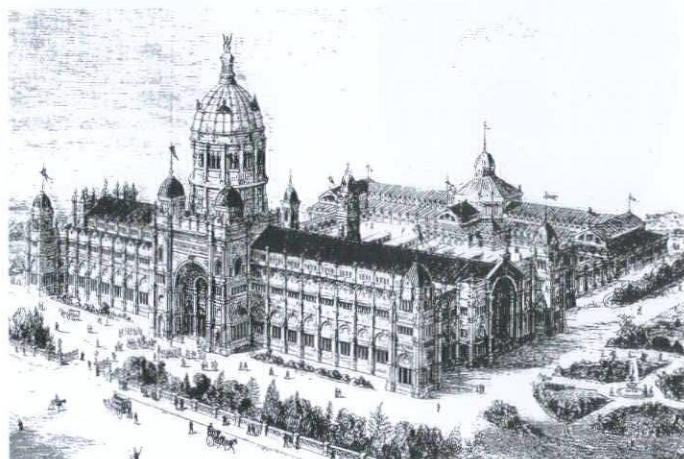
1850年以降、メルボルンのヴィクトリアン建築の基礎を築いた建築家は、ジョセフ・リードである。リード(図3)は1822年英国に生まれ、英国で建築を学び、1852年にゴールド・ラッシュたけなわのメルボルンへ入植した。入植してからたった2ヶ月後に、メルボルン公共図書館の設計競技でグリーク・リバイバルのデザインで1位を勝ち取り、建築家としての華々しいスタートを切る(図4)。設計競技



6. インディペンデント教会：J. リード+バーズ、1857



6. インディペンデント教会



11. エグゼクション・ビル初期案ドローイング：J.J. ナイト+P. キール、1879

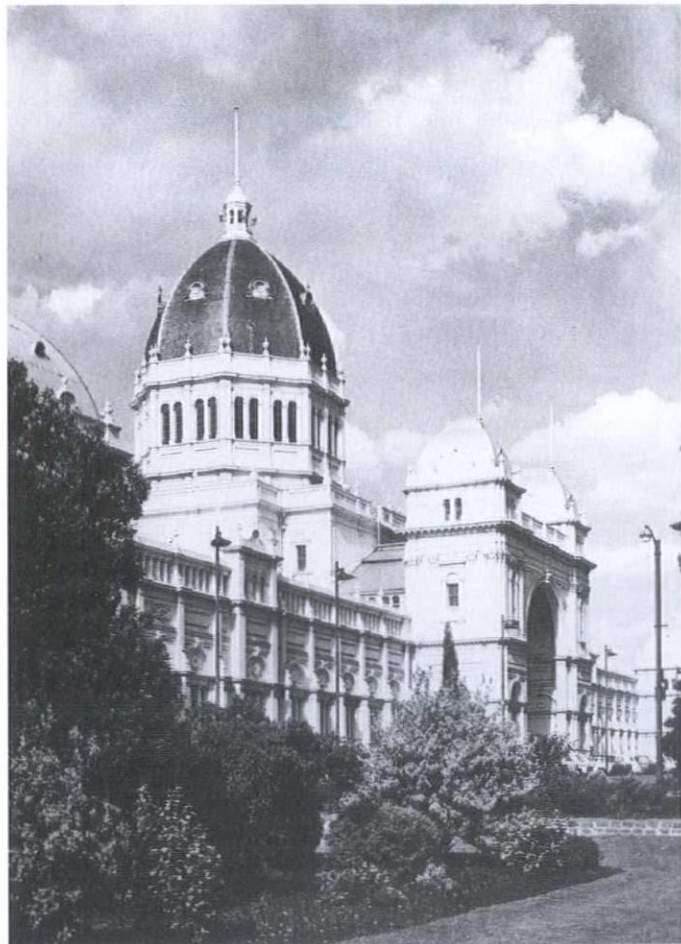
ではその他にも、1855年にジーロング・タウンホール、同年1855年エグゼクション・ビルでも1位に輝いている。パートナーのフレデリック・バーンズとは、1863年から1883年まで共同で活動し、1883年からはアンケットル・ヘンダーソンと共に活動している。リードは一生を建築と事業に捧げ、メルボルンのヴィクトリアン建築に多大な影響を及ぼし、メルボルンをオーストラリア建築の指導的都市として成長させた。メルボルンはリードのつくった町、とさえ言われている程に、彼の業績は華々しい。1890年に68歳で没するまでの40年間、メルボルン建築界の第一線で活躍し、メルボルン内の20の教会建築、メルボルン大学内の12の校舎、10の銀行を設計した。リードの成功はビルディング・タイプによる的確

な様式を選択によって建築家としてデザイナーでの立場を巧妙に変え、ヴィクトリア（メルボルン）の欲望に応えた事にある。植民地の稚拙な建築デザイン技術に対して、リードのデザイン力とプレゼンテーション力は、設計競技を勝ち取る技能を十分に携えていた。メルボルン大学のウィルソンホールは、オーストラリアのゴシック建築の中でも最も優れたものであるしN.S.W.銀行（1856）、ニュージーランド銀行（1878）（図5）ではヴェネチアン装飾を採用している。

メルボルン・タウンホール（写真P.36下左）は、ジョセフ・リード&バーンズによる1868年完成の作品であり、ブルー・ストーン造のセカンド・アンピール様式の作品である。彼は1864年のヨーロッパ遊学によってさらに建築

様式の学を深め、インディペンデント教会の設計に着手する（図6）。インディペンデント教会は1857年度より10年間かけて、1866年に完成した。イタリアネートの煉瓦装飾を外装に施し、内部には劇場のような壇状の観客席を配し、4角塔は火の見櫓としても機能していた。

住宅作品では、彼は大規模な住宅に徹しており、メルボルンの中心部から10kmほど南にあるリップンリー（1868年、写真P.37上、下左）もそのひとつである。リップンリーでも、インディペンデント教会と同様のイタリアネートの煉瓦装飾を駆使した設計をしている。この大邸宅の邸主、豪商フレデリック・トマス・サーグッドは17.4haの敷地を得、彼の母の名（エマ・リップン）をとって名を付けた。敷地



11. エグゼクション・ビル：J. J. ナイト＋P. キール、1880、メルボルン



7. セント・パトリック教会：W. ワーデル、設計1858



9. トレジャリー・ビル：J.J.クラーク、1862、メルボルン



10. プリンセス・シアター：W. ピット、1887、メルボルン

内には温室や、人工池、演奏室なども建築されている。ゴールド・ラッシュの波に乗った幾つかの家族は、オーストラリアでは未だかつて見たこともないような邸宅を建てたが、この邸宅は1500万ドルで遺言検認されていたにもかかわらず、1903年に不況の波にさらわれ、わずか4万ドルで売却され、1972年にナショナル・トラストの管理下に入った。

都市の不況は1890年に始まるが、ジョセフ・リードが、まさにその年に没していることから、メルボルンの栄光に咲き、虚構と散った彼の人生が伺える。彼は正しく、メルボルンの虚栄と楽天主義の欲望を満たした。またリードは、他の建築家を激しくライバル視した。当時の彼のライバルのひとりとして、1850年から英国でR.I.B.A.の会員を務めたウィリアム・ワーデルが挙げられる。ワーデルは1858年に療養のため、家族と共にメルボルンへ入植し、1859年に政府直属の建築技師として採用されている。彼もリードと同様に、1870年からイタリア遊学し、イタリアネート、パラディアン、ヴェネチアン様式を身に付けている。ワーデルはリードの死後、1897年の作品であるセント・パトリック教会において卓越した技を見せる事となる(図7)。

メルボルン市内の中心部を通るビューク通りの突き当たりに建つ州会議事堂は、メルボルンで最も著名な建築である(写真P.36上)。1851年の政府議会により、総経費25万ポンドの州会議事堂の建設計画を議決、計画案は1855年の設計競技によるものと決定された。この設計競技で、ジョン・ジョージ・ナイトとピーター・キールが1等を勝ち取り、1856年に建設が始まった。ピーター・キールは、英国でチャールズ・バリーの元で働いた経験を持っており、またジョン・ナイトは、1856年に設立された「ヴィクトリア建築家協会」の初代理事を務めた人物である。しかし、様々な要因で初起案はそのまま建設されず、いくつもの段階を経て変貌を重ねながら1880年に完成した。建設は4期に分けて行われ、さらに西側ファサードは1892年にジョン・ピゴンによって付加された。現存する建物は、41段、幅140フィートの階段と9本のローマン・ドリック柱が壮大なファサードをつくり、44フィート四方のエントランスホールにはタイルが

敷かれ、壮大な景観を成している。

ゴールド・ラッシュによるヴィクトリア政府の繁栄を示すもうひとつの建築として、トレジュリー・ビル(大蔵省)が上げられる(図9)。1858年より設計を担当したのは、当時18歳という若さのジョン・ジェームズ・クラークだった。若年のクラークは、メルボルンで最もエレガントなイタリアン・バロックの建築をつくり上げた。砂岩の1種であるブルーストンの基壇を伴い、3層構成のファサードを持ち、2層目は5つのアーケードが連なり、イオニア式のカップルド・コラムとタベルナクルが付けられているこの建築は、5年の歳月を掛けて完成した。完成直後は、大ヴォールトに栄華と繁栄を示すごとくに金塊をぶら下げていたという。

イラワラ(1889-1891年)は、ジェームス・パートウィスルの設計による25室の大邸宅である。ブーム期のヴィクトリアン様式邸宅の代表作であり、アイアン・ワークをふんだんに使用している(写真P.37下右)。

ラバッサは、J.A.B.コーチ(写真P.36下右)による、1890年度の作品で、ルネッサンス様式の住宅作品の中でも、好景気末期の成熟したデザインである。住宅地の小高い丘の上であり、街路から建物の外観が一望できるので、住宅というよりは、ギャラリーかゲストハウスの様な景観を醸し出している。

プリンセス・シアターは、1887年ウィリアム・ビットによる作品である(図10)。当時唯一の国際的娯楽であった映画を、行事として楽しんだ庶民の、華やかさへの欲望を繁栄した建物としての外観を残している。

エグゼクション・ビル(図11)は、来るメルボルン万国博覧会のために、1879年に着工された。オリジナルデザインはJ.リード&バーンズが手がけたが、経済不況の兆候により、初起案からドーム等の装飾が削除されている。ドームは初起案ではローマのサン・ピエトロ寺院のドームをモチーフとしデザインされ、規模縮小の後にはフィレンツェ大聖堂のドームに似たデザインとなった。実物を見て、メルボルン市民は、「屋根の上に乗ったしわくちのタマネギのような物」を恥ずかしいと思ったと記録されている。また、正面エントランス部分はバリの凱旋門のモチーフを、両翼

部はセカンド・アンピールを用いた不思議な博覧会建築となっている。建設には14ヶ月を要し、1880年8月1日にメルボルン万国博覧会が開幕した。万博は7ヶ月間続き、100万人以上の入場者を記録した。

1871年に、英国の旅行小説家アンソニー・ソロロフがメルボルンを訪れ、酷く感銘を受けている。「メルボルンでの囚人刑は英国で受けるよりも早く終了する。……世界中にこの様に一般労働者が裕福な生活をしている都市があろうか。文字通りの壮麗なる都市である」と言及している。この都市の発達と楽天主義精神は、爆発的な建築ブームを巻き起こす。ヴィクトリア政府の公的負債は10年間で2千万ポンドから4千万ポンドに跳ね上がり、英国政府は5千万ポンドをヴィクトリアの都市開発事業につき込んだのであった。

(岡本美樹)

A black and white photograph of the Hotel Carlton, a grand multi-story building. The facade is highly ornate, featuring multiple levels of balconies with intricate metalwork railings. The ground floor has a series of large, arched windows. A prominent sign on the side of the building reads "HOTEL CARLTON" in large, bold letters. The building is situated in an urban environment, with other structures visible in the background.

1. カールトンホテル、ブリスベン

FOR SALE.

JUST LANDED, ex "WILLIAM,"
BALCONY RAILING, in panels,
of different patterns
Area or Park Railings
Two pair of Cast Iron Gates
Iron Spouting, in lengths of six feet
Iron Wall Pipes, with heads and shoes complete,
from two and a half to four inches in diameter
Cast Iron Sash Weights, from four to eight lbs.
Hinges, Locks, Bolts, Latches, Screws, Manger
Rings, Curtain Bands and Pins, Sash Fasten-
ings, &c. &c.
Tinned Iron Saucepans and Stewpans, with
covers
Saddles and Bridles
Muskets, Gun, and Pistol Flints
Parker and Wyatt's, best Roman Cement

GEORGE SALT TUCKER.

*James' Buildings, George-street, }
7th November, 1835. }*

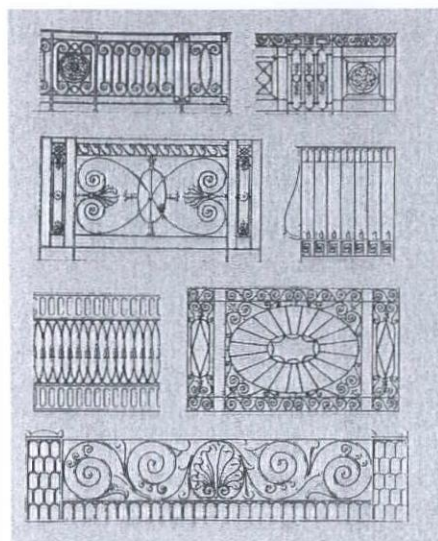
4 シドニー・ヘラルドの記事 1835

[illegible]

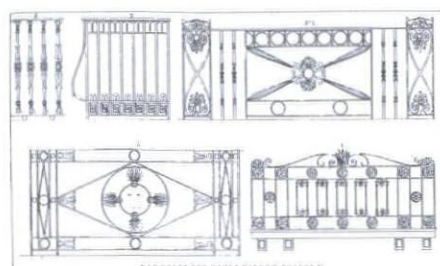
5. ロバート・ラッセル鋳鉄工場のカタログ



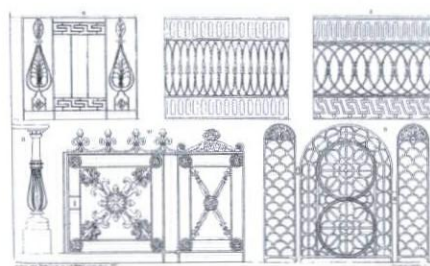
1. ローズ・テラスの改修, 1859



2. スミス社のカタログ: ロバート・アダムデザインとされるアイアンワークのモチーフ



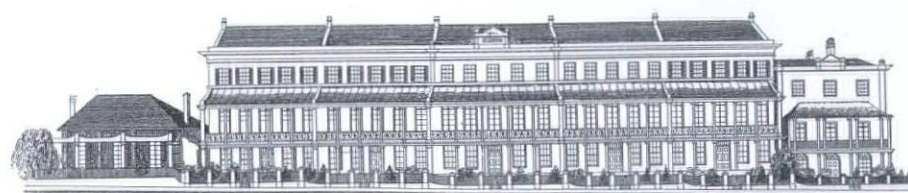
3. スミス社カタログ, 1824



6. ハビィ・テラス立面図, 1840



6. ハビィ・テラス立面図, 1840



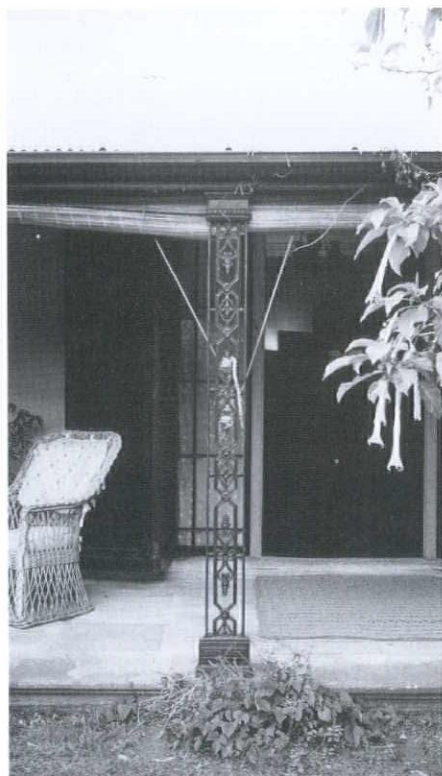
7. ライオンズ・テラス立面図, 1840(設計1837J. バージ)

て、手軽に楽しめる装飾だったために歴史の浅い植民地にも爆発的に流行した。

鉄の装飾には本来、鍛鉄と鋳鉄があり、鋳鉄は中世ヨーロッパの教会の門やフェンス等に数多く使用されていた。1713年、英国のアブラハム・ダービーが、石炭で鉄を容易に溶かすことのできる熱量を得る技術を改良し、鋳鉄の製作法が発明された。その後鋳鉄は、燃料となる石炭の産出地であるスコットランドのグラスゴーで目覚ましく発達し、18世紀のロンドンでは、鋳鉄製のフェンスや手摺子が頻繁に使用されている。ロバート・アダムのデザインとされるデザイン・パターンは、18世紀のロンドンでよく見られるが、シドニーで初期に普及したデザイン・パターンとも類似している(図2)。さらなる高度な技術によって多様な鋳鉄製品を開発し、新しい装飾を生み出していったのは、英国のスミス鋳鉄工場だとされている。スミス社は、1815年にプレファブ建築に使用する鉄板を開発し、製品のパンフレットを制作して既製品の大量生産を試みた会社でもあり、1823年には最も反響を呼んだ鋳鉄装飾のカタログを発行した(図3)。カタログに関しては、英国グラスゴーのマクファーレン社も著名である。

そもそも鋳鉄製品がオーストラリアへ移入されたのは、英国からの貨物船の底の重量を上げるために、重石として鉄が敷かれたのがきっかけであるとされている。1835年9月12日のシドニー・ヘラルドの「ウィリアムから着いたばかりのバルコニーレールの販売」という広告から、鋳鉄装飾が商品としてシドニーに輸入された様子が読み取れる(図4)。当時の値段で、76ヤードの手摺子、44本の鉄柱とブラケット、螺旋階段の一式で250ポンドと決して安くはなかったが、一種のファッションとして庶民の憧れのようなものであった。輸入先のほとんどは英国であったが、一部フランスからも輸入された。

オーストラリア国内での生産は、1840年頃から地方の工場で盛んになり、国内の鋳鉄工場もそれぞれの製品カタログを発行して商品をアピールしたため、デザイン競争さながらの状態になった(図5)。1例として、ホバートのロバート・ラッセル鋳鉄工場の例を取り上げる。創設者のロバート・ラッセルは、1830



8. エリザベス・ファームの鉄柱、1793



10. ギリシャの壁に描かれた椰子の模様をモチーフとしたアイアン・レース



11. バラベット+煙突のレリーフ、メルボルン

年にスコットランドの不況から逃れてホバートへ移住し、すぐに鋳鉄工場と製品販売会社を開いた人物である。彼の息子のピーター・ニコル・ラッセルはシドニーへ渡って子会社を設立し、ヴィクトリア・バラックやダーリンゴースト監獄のアイアン・ワークを手掛けた。彼の会社は1870年に閉社し、財産を処分した金の一部である5万ポンドを、1895年にシドニー大学の工学科設立資金に寄贈したため、工学科棟には彼の名が付けられている。

ジョセフ・フォールス著の『シドニー1848年』は、当時のシドニーの建築物の立面を、通りごとに描写したスケッチ集であるが、本書より当時の建築物の2階のベランダの随所に鋳鉄装飾が使われていた様子を知ることができる。中でもマクワリー・ストリートのハビィ・テラス(1835年、図6)は、おそらく初期に輸入された手摺子を使用しているが、今現在も当時の面影を保っている。また、シドニー初の大規模テラスは、リバプール通りのライオンズ・テラスである。ライオンズ・テラスは、1841年にサミュエル・ライオンによって500ポンドで建てられたものである(図7)。

1850年頃になると、国内生産品が輸入品を上回り、鋳鉄製品が日常的に使用されると同時に、新しく建築される建物だけでなく、建物の改修にも広く使用されるようになる。ベランダの木製の柱が鉄柱に換えられ、ブラケットが取り付けられて、住宅改修のひとつのスタイルともなったのである。1860年には、最古の住宅建築であるエリザベス・ファームに、ヴィクトリア・ファンドリー社製のオープンコラムが取り付けられている(図8)。鋳鉄の柱の中でもオープンコラム(透かし柱)は、アイアン・ワークの透かし模様を柱にまで施した製品であるが、シドニーで多く使用され、メルボルンでは余り使用されていない(図9)。

テラスハウスの建設は、ゴールドラッシュで経済状況が良くなると共に盛んになり、移民の数が爆発的に増加した1850年から1860年にかけて、住宅需要の増加から都市部や都市近郊に非常に多く建設された。現在、オーストラリアの都市住居の景観をつくっているのは、主にこの時代につくられたテラスである。1870年を過ぎると、テラスにはさらに他の装

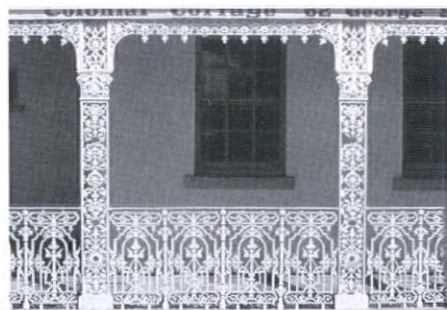
飾要素が付加された。パラペットに冠型のスタッコ装飾が付けられ、内部にひまわりや花束やライオンの顔、貝殻等のモチーフのレリーフが施され、煙突は豪華な壺の形に象られた。これらのモチーフは、ヴィクトリア時代に発行されたギリシアやローマの古典モチーフのパターン・ブックから容易に見つけだすことができる(図10)。ブリックや石像の壁は石灰で白く塗られ、コーニスの境界壁部分は人の顔のレリーフが付けられて、鑄鉄の手摺子とブラケットのパターンはあからさまに人目を引くものとなった。同じ模様のアイアン・ワークでも、色が塗り替えられて、1棟の住宅が1件ごとに色とりどりの外観を呈することもしばしばある。この様に、住居前面に1枚のレースの覆いを被った様な、行き過ぎた

装飾が成されたが、当時にしてみれば、それらは「ハイ・ファッション」だった。それまで質素な生活を強いられてきた庶民の欲望が爆発したかのように、猫も杓子もアイアン・ワーク一色だったのである。しかしながら、虚栄ともいえるほどの装飾が、表面的に豪勢に施されている反面、テラスハウスの室内はというと、ベランダ側と裏側にしか開口部がなく、しかもベランダ側は深い庇が取り付けられているため、暗く、換気も良好ではないのが現状である。

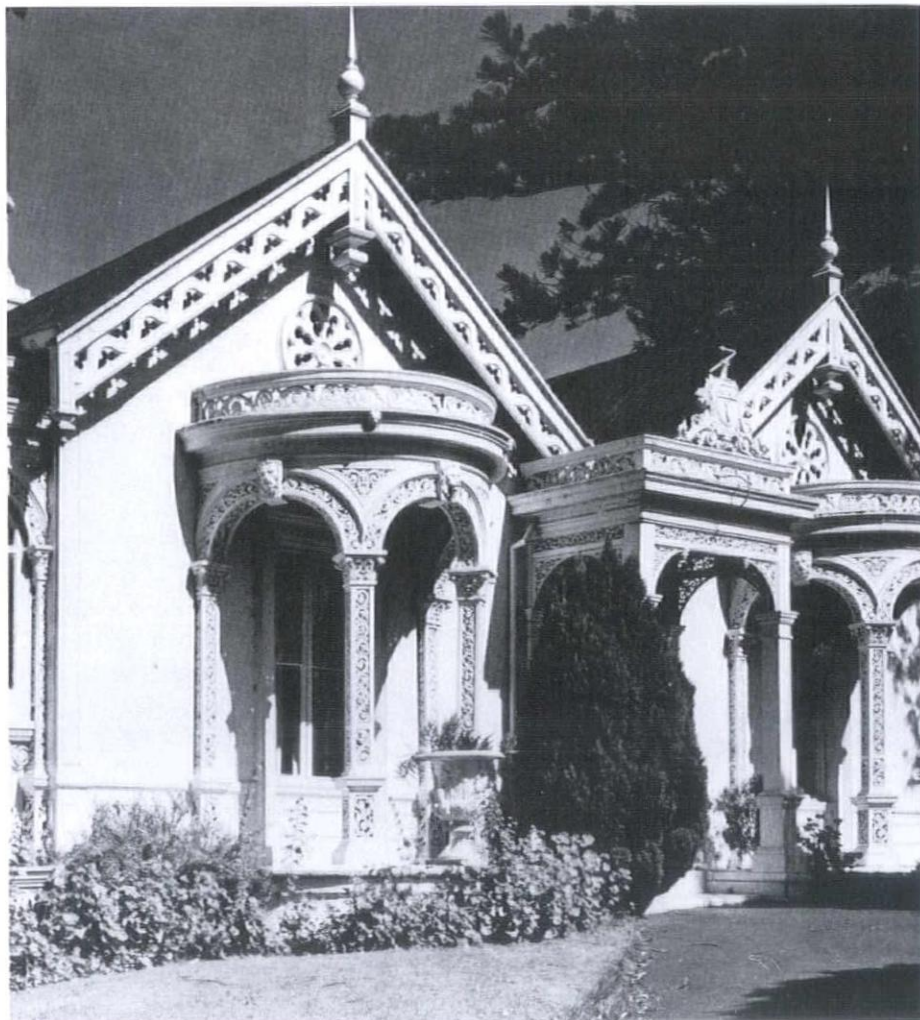
メルボルンには、この時代のアイアン・レースの建築が多く残されており、当時の状況を偲ぶことができる。サウス・ヤラにあるイラワラは、ヤールズ、ジェームスの住居として1890年に建築された邸宅であるが、熱狂的

な、華麗なアイアン・ワークの茂みを見ることができ(図11)。ジーロングのコロオ・ピラ(図12)は、輸入のプレファブ鉄製品によってつくられた住宅である。1855年に建材用鉄板が輸入され、アルフレッド・ダグラスなる人物が購入して建てられた。アイアンの柱では珍しい、矩形断面の透け柱で、デリケートな装飾が成されている。壁は13mm鉄板の接ぎ合わせ窓のサッシュで、ドア、パージボード、ポルチコの全てが鉄製品である。後の調べにより、この建築物はエジンバラの鑄鉄工場の製品であることが判明している。

この様に、鉄板と鉄柱によるプレファブの教会や住宅もしばしば建築されたが、オーストラリアではアメリカのニューヨークのようには受容されていない。鉄はプレファブの建



9. ドクターズ・ハウスのオープン・コラム



12. コロオ・ピラ、1961、ジーロング

築材料としては軽く、施工しやすく防水性もあるが、蒸し暑いオーストラリアの気候では、夏に室内が温室状態になるのに加えて、鉄板の堅いイメージがオーストラリアの雰囲気とそぐわず、成功しなかった。サウスメルボルン、コンベントリー通りのアイアン・ハウスは、輸入プレファブ住居で1854年に建てられた住居である(図13)。

1880年代の建築ブーム期間に、メルボルンの装飾的鋳鉄制作の技術とデザイン力は、オーストラリア内でも最も高い水準に達した。1883年にオーストラリアを鋭い観察眼で見ていたR.E.N. トゥーベニなる人物が、「この都市の景観はオーストラリアの国民性を色濃く反映しており、金を有効に使うのが難しい時期もあるのだということを示している」と語っている。さらに、「メルボルンのヒステリーはシドニーにまで及び、初期の頃の土地の略奪とラム酒の取引が再び行われるような未来を感じさせる」とも言及している。

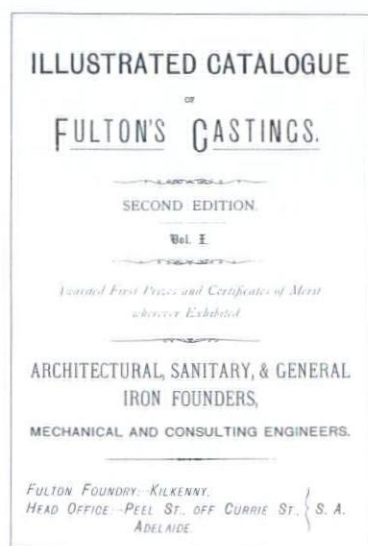
サウスオーストラリア州アデレードの鋳鉄製品は、輸入品のモチーフに大きく影響を受けており、シドニーやメルボルン内にも多く普及している。アデレードで生産されるアイアン・レースは、メルボルンの製品よりも若干、柔らかく軽快なタッチがある。鋳鉄製品のカタログ制作も盛んで、1887年フルトンズ・カタログと(図14)、1897年のC. スチュワート & A.C. ハーレイのサン・ファンドリーのカタログが著名である(図15)。

クイーンズランド州のブリスベンは、流刑植民地として1825年に入植が始まった都市である。ブリスベンは気候が温暖で、他の都市より熱帯的な気候であるため、幅広の住宅が鏝の広い木製の屋根を掛けている姿が顕著である。ベランダは、熱帯性気候のブリスベンでは必要不可欠であり、入植初期の住宅は、多くが四方をベランダに取り囲まれている(図16)。この都市では1882年頃から、鋳鉄製品の生産と使用がようやく盛んになり、その後数年で広くいき渡った。さらに州内で、1885年からアイアン・ワークのデザイン・パターンが政府機関へ登録される様になり、1907年には登録が連邦国家承認のものとなった。現在は、オーストラリア国中の77の会社が350のデザインが登録されており、首都キャンベラの科学技術庁の管理下にある(図17)。

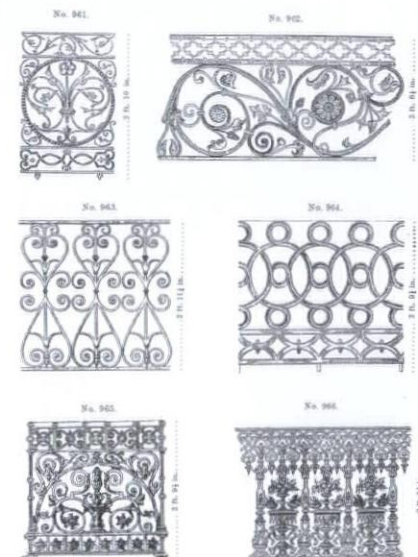
ウエストオーストラリア州のパースは、1892年のゴールドラッシュによって一大発展を遂げた都市である。1890年からのオーストラリア国内は大恐慌の真っ只中で、そのタイミングの良さから、パースは一気に当時オーストラリアで最も金回りの良い都市となった。建築ブームは1890年頃から始まり、東部の都市とは時を異にして、ブラスター仕上げのモジュールとアイアン・ワーク(図18)の装飾を施したハイ・ヴィクトリアンスタイルの町並みが軒を重ねるようになった(写真P.38)。

1890年代に入ると、オーストラリアの熱狂的な建築ブームは徐々に幕を閉じ、不況の時

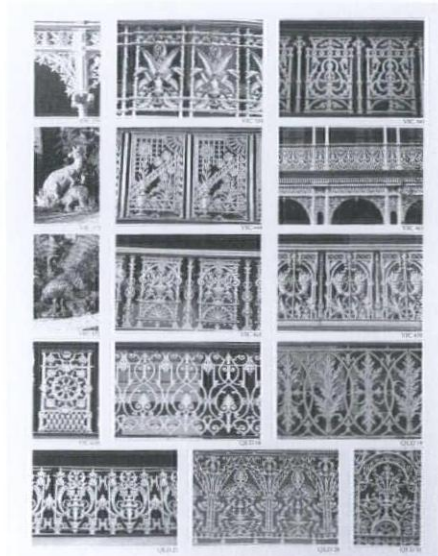
代を迎える。人々は一時の楽天主義から目覚めて、表面的な派手さのまやかしに気付き、徐々に装飾の抑々しさを、恥ずかしいと感じる意識が生まれた。長い不況が去った後しばらく、これらのテラスは取り壊されたり、修復されずに放置されていた。1950年に羊毛の値段が跳ね上がり、ウール・ブームが訪れると、オーストラリアは再び経済の活気を取り戻し、古いテラスを買い求めて修復、再生する例が多くなった。1960年頃からホワイト・カラー層の出現で生活形式に変化が見られるようになると、テラスハウスの再生利用はますます盛んになったのである。(岡本美樹)



14. フルトンズ・カタログ、1887
SD9604
54



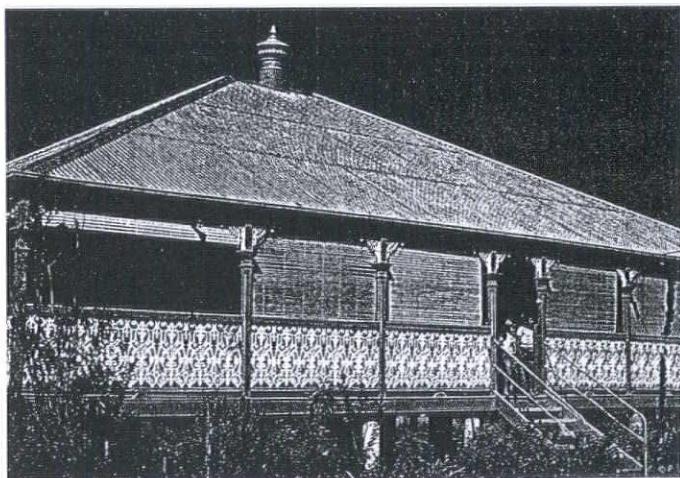
15. サン・ファンドリーのカタログ、1897、アデレード



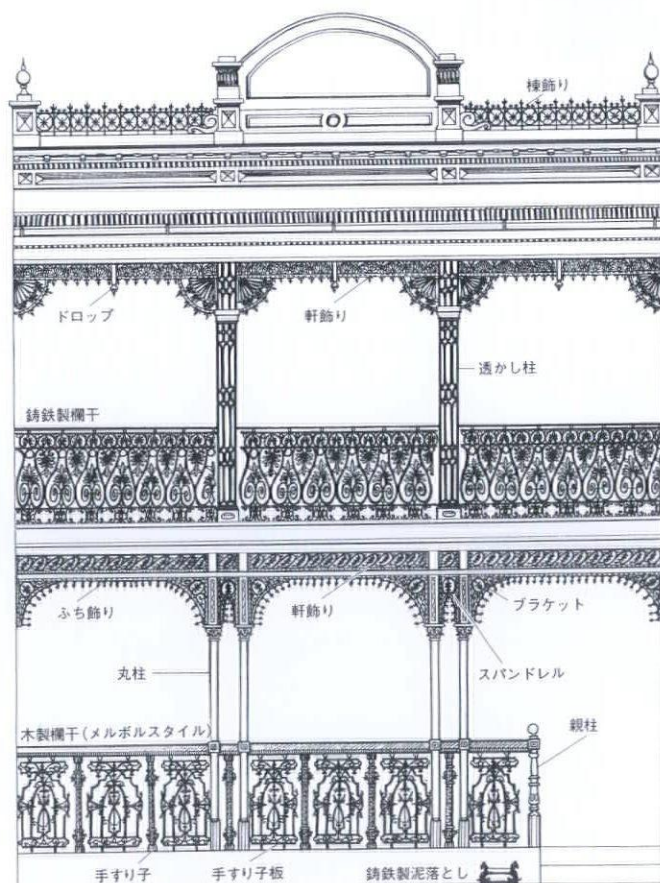
17. キャンベラの科学技術庁に登録されているデザインパターン、VIC336~OLD31



13. アイアン・ハウス、1852、サウスメルボルン



16. ブリスベンのアイアンワーク



18. アイアンワーク用語解説

キャンベラの新首都計画

アメリカ人建築家W.B.グリフィンの活躍

19世紀末、オーストラリアでは6つの植民地がそれぞれ分離独立し、行政権や司法権を有していたが、経済の発展と共に互いの協力が必要となり、1901年にオーストラリア連邦が結成された。しかし、連邦樹立後もシドニーとメルボルンとの間で激しい首都争いが続いたため、1909年に両者の間に新首都を建設することになった。敷地には、両都市からほぼ同じ距離に位置しニューサウスウェールズ州に属する、アボリジニによってキャンベラと呼ばれる場所が選ばれた。すなわち計画都市キャンベラは政治的妥協から生まれてきたのである。

新首都の都市計画を定めるべく、1911年に国際設計競技が行われた。等高線の入った地形図などを含む要項が応募者に送られると共に、敷地の模型がロンドンと、ベルリン、ケープタウン、シカゴ、ニューヨーク、オタワ、パリ、プレトリア、ワシントン、ウェリントンの各大使館、領事館で展示された。審査に際して最終決定権が政治家にあることに対し、RIBA(英国王立建築家協会)が抗議し、会員にボイコットを呼び掛けるなど問題点もあったが、最終的に137の応募作品が寄せられた。但し、内11作品については作家の名前が記されていたために失格となった。審査結果は、1912年5月23日に発表された。主席にシカゴの建築家ウォルター・バーリー・グリフィン(1876年-1937年)、次席にはヘルシンキのエリエル・サーリネン、3席にはパリのD.アルフレッド・アガシュが入選した。

グリフィンは、当時36歳の新進建築家であった。シカゴ近郊に生まれた彼は、フランク・ロイド・ライトの下で働いた後、プレーリー・ハウスの影響を強く受けた住宅を残している。その一方で、1893年に開かれたコロンビア博覧会に代表されるシティ・ビューティフル運動など、いわゆる古典的建築思想の影響も受けていた。

グリフィンの案(図1)は、その古典的建築思想と田園都市の思想とを結合させたものである。その特徴は都市機能の分割配置と、敷地の特性を生かした都市軸の設定、バロック的街路パターンにある。グリフィンはまず第1に新首都の都市機能を細分化し、これらをモロングロ川をせき止めてつくった湖を中心

に、ふたつの都市軸に沿って配置した。国会議事堂とエインズリー山を結ぶ「ランドアクシス」上には、湖を挟んで南側に連邦政府機関が、北側にはカジノを中心としたレクリエーション施設が配置された。湖とブラックマウンテンを結ぶ「ウォーターアクシス」上の西の終点、ブラックマウンテンの麓には大学が配置された。ふたつの都市軸は、道路を基準設けられたものではなく、自然の地形を生かしたヴィスタの中に都市機能を配置し、それらを視覚的に把握できるようにするためのものであった。

街路計画は、放射状の道路パターンとグリッドパターンの組み合わせからなっている。国会議事堂からエインズリー山を結ぶ都市軸を中心に左右に2本の直線道路が設けられ、一方は市の行政機関となるシビックセンターに、もう一方は教会や鉄道駅を含む市民生活の中心となるマーケットセンターに続いていた。そして、さらにシビックセンターとマーケットセンターも直線道路で結ばれ、国会議事堂を中心とする大きな3角形が形成された。このように主要な施設を結びつけ3角形を形成する手法は、ラッチェンスのニューデリー計画(1911年)から直接の影響を受けているものと思われる。グリフィンは、このようにしてつくったセンターから放射状に伸びた都市軸上に居住や農業、工業を担ういくつかの郊外を配置している。このように、いくつかの郊外を都市軸で結ぶ手法は、E.ハワードの田園都市のアイデアを応用したものである。

サーリネンの案(図2)もまた直交するふたつの都市軸を用いた案となっている。グリフィンの案よりも、形式的な軸線に沿って配置された池とマッシブな建築群、都市軸に沿ったグリッドパターンと曲線を組み合わせた街路計画が特徴となっている。

主席決定後、主に財政上の理由からグリフィンの案の様々な問題点が指摘され、首都建設委員会から他の案との折衷案が実施案として提出された。その後政権の交代などで、グリフィンは連邦首都設計建設局長に任命され、彼の下での首都建設が始まるが、第一次世界大戦(1914年-1918年)の影響からオーストラリア国内の経済状況も悪化し、計画は大幅に遅れてしまうことになる。結局、グリフィン

の案は変更を余儀なくされたが、それでも新首都建設の理念を実施に移したことは大きな意義がある。完全な計画都市は、当時のヨーロッパでは実現不可能なことであり、誕生間もないオーストラリアでこそ実現可能な壮大な「実験」であった。

グリフィンは、キャンベラの計画以外にも様々な建築作品をオーストラリアに残している。オーストラリア時代の住宅作品は、アメリカ時代のプレーリーハウスのようなデザインは影を潜め、より単純化された矩形の平面が特徴となっている。1917年、グリフィンは「ニットロック(Knitlock)」と呼ばれる、プレキャストコンクリートを用いた構造システムを開発し特許を得る。「ニットロック」は、12インチ四方の片面に突起のあるコンクリートブロックを噛み合わせ、間に鉄筋を挟み、コンクリートを流して構造体をつくる工法である。コンクリートブロックを用いることで、建築費を抑えただけでなく、輸送を容易にし、技術力の不足を補うことがそのねらいであった。ほぼ同時期にフランク・ロイド・ライトは、「テキスタイル・ブロック・ハウス」と呼ばれる一連の住宅を手掛けている。ふたりは互いにそれぞれのシステムを知っていた可能性があり、どちらが先かについては様々な議論がある。しかしながらそのことよりも、デザイン上の大きな差異に注目すべきであろう。ライトの「テキスタイル・ブロック」が装飾的性格が強かったのに対して、グリフィンの「ニットロック」は、構造体としてむき出しのまま残され、そのなめらかな表面は乱積み

の荒い石の壁面と強いコントラストを形成していた。

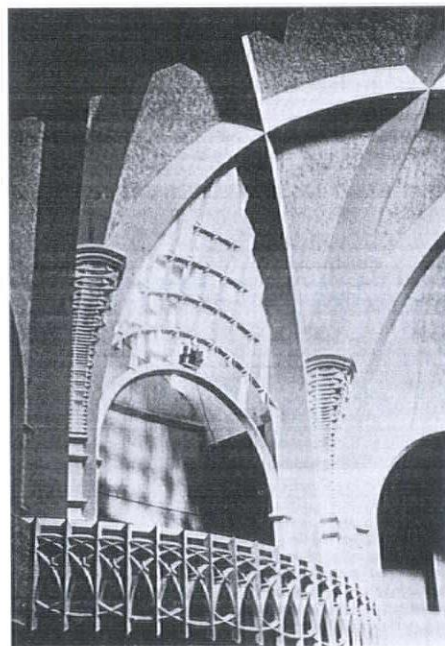
キャッスルクラッグ・コミュニティ(1921年-1935年)はシドニーの北、ミドル・ハーバーに面した崖地につくられた。グリフィンはここで街全体の計画を担うだけでなく、彼自身も友人たちと共に住んで、住民参加によるコミュニティ形成の実験を行なった。配置計画において、キャンベラで用いられた明確な軸線は設けられず、地形に沿った道路配置や、眺望を生かした各住宅の配置、土地固有の植生を生かした造園計画などが特徴となっている。建築はランドスケープを生かすための脇役でしかなく、住宅はすべてコテージ程度の

小さなものであった。乱積みの砂岩とニットロックの組み合わせからなる外壁と、ベランダや中庭などの外部空間を取り入れたプランが特徴となっている。

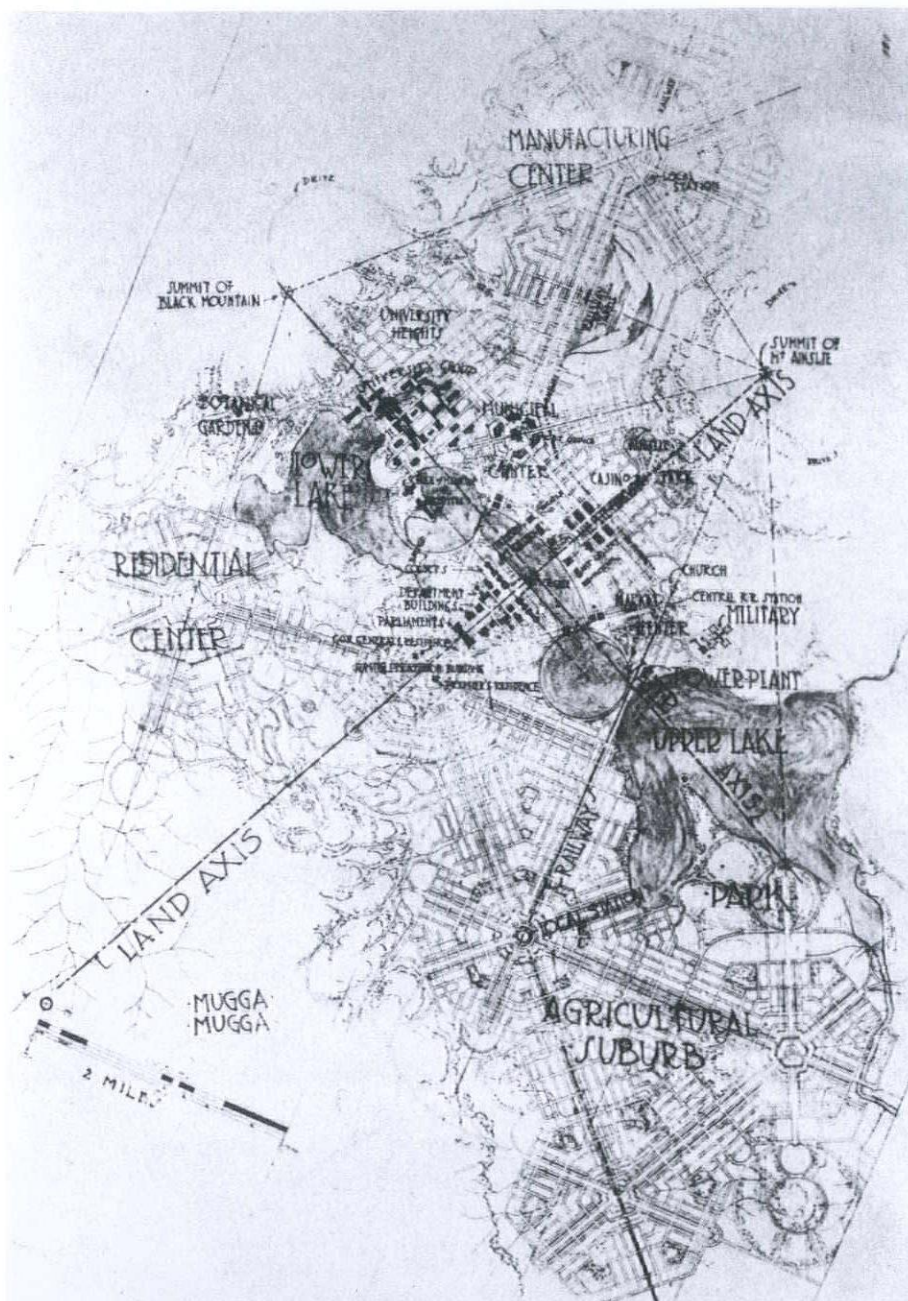
グリフィン住宅以外に様々な公共建築も手掛けている。メルボルン大学のニューマンカレッジ(1915年-1917年)(図3)は、礼拝堂、寄宿舎、図書館、食堂などからなる複合建築である。グリフィンは、この建築で食堂のリップドームを鉄筋コンクリートで作り、当時のオーストラリア建築界に鉄筋コンクリートの新しい可能性を示した。メルボルンのキャピタル・シアター(1921年-1924年)は、ロビーやオーデトリウム内部(図4)に施された過剰なまでの装飾に特徴がある。象牙、砂岩、ブロンズ、漆喰などの材料を用いて、色彩豊かな空間を作り上げている。ロビーにおいてはルイス・サリヴァンを思わせる曲線的な装飾が施される一方で、オーデトリウムでは表現主義を思わせる直線的な幾何学を用いた装飾が施されている。

1935年インドに渡ったグリフィンは、その2年後60歳で亡くなる。グリフィンは、キャンベラの計画をきっかけに、様々な建築思想や新しい建築技術をもたらし、オーストラリア建築の近代化に大きく貢献した。

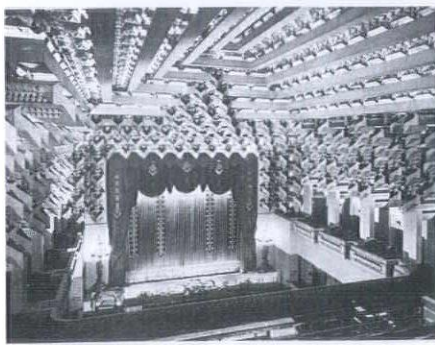
(安藤貴昭)



3.メルボルン大学ニューマンカレッジ食堂内部：W.B.グリフィン、1915-17年



1.キャンベラ新首都計画：W.B.グリフィン設計競技案、1912年



4.キャピタルシアターオーデトリウム：W.B.グリフィン、1921-24年、メルボルン



2.キャンベラ新首都計画：E.サーリネン設計競技案、1912年

現代建築の可能性

世界的標準化と地域的固有化との振幅の中に



シドニータワーからオペラハウスをのぞむ



1. シドニーオペラハウス：ヨルン・ウッツオン、1973、シドニー

国を代表する現代建築——例えばシドニーのオペラハウスやキャンベラの国会議事堂等が、外国人建築家の手により計画されたことは移民の国オーストラリアらしい出来事ではある。しかし、近年の大学カリキュラムの整備等により、オーストラリア国内で生まれ育った建築家の台頭も目覚ましいものとなっている。また短い歴史にもかかわらず、それぞれの場所に根差して着実な発展を遂げてきたといわれているこの国にも、急激な都市化の波が押し寄せており、首都キャンベラとタスマニア島のホバートを例外として、調査を行なった州都と呼ばれる都市は、その中心に超高層オフィスビルを軸とした大規模開発を内包し、オーストラリア固有のものとは言い難い世界的に均質な新興都市の風景を呈しつつある。個々の建築に目を向けても、百花繚乱さまざまなデザインが溢れかえっている状況は、やはり急速な発展の歪みに違いない。ここでは、そのような混乱した状況の中から、今後の展開の可能性を整理していきたい。

シドニー・オペラハウス(写真P.42、図1)は、都市を印象付けるモニュメントとして現在でも十分に魅力的である。フィンランド人の審査委員サーリネンとデンマーク人の設計者ウッツオン、つまり北欧の人々によってもたらされたこの独自の形態は、コンペの審査、長期にわたる設計、具体的な建設から実際に使用され今日に至るまでの経緯において、多大な困難に直面したことは周知の事実であるが、それがオーストラリアの建築デザインにいかなる影響を与えたのかというと、その評価は現在もはっきりしていない。オーストラリアの諸都市では、オペラハウスのようにその外観が面として表現されている建物(しかし内部はリブ=線材の集合として見るができる)に比較して、線材により構成されている建物が多く見受けられる。気候等の環境への対応をその理由のひとつとして挙げることができる。ここで興味深いのは、線材による構成がさまざまなスケールにおいて展開されていることである。建物の主要構造体としてはもちろんのこと、オーストラリア建築6.に紹介したアイアンレースのような装飾にいたるまで、そして、低層集合住宅、オフィスビル、公共施設、超高層、とさまざまな種類・規模

の建物においてその構成を目にすることができ、そして、その形状は直線的なものから、近年では集合して豊かな曲線および曲面をつくる方向をも提示し始めており、シドニーの建築家フィリップ・コックスの一連のスポーツ施設等(図2)をその例として挙げることができる。これらの線材の重奏により、魅力的な都市景観が整備される可能性は十分にあると考えられるが、現実的にはフレームのデザインに比べてフレームにより、囲まれた面のデザイン(十分な検討がなされてるとは言いがたい雑多な印象を受ける)が目立ち、線の力を弱め、デザイン全体を凡庸なものにとどませている印象を受ける。今後、線材の構成およびデザインのさらなる深化および面材の洗練が待たれる。

アメリカ人ミッチェル・ジョゴラによるキャンベラの国会議事堂(写真P.42左下、図3)は、同じアメリカ人ウォルター・バーリー・グリフィンによって準備された雄大な環境に最大限配慮したということで賞賛を得ている。ランドスケープアーキテクチャを、周囲の自然環境に適合させた建築とするならば、豊かな自然と調和するという目的が第一に挙げられるのは然るべきであり、アメリカ人達によるこのキャンベラはその好例である。しかし、キャンベラのその雄大な環境は、確かに規模的にはオーストラリアのイメージを喚起するにふさわしいものであるが、環境の捉え方という視点から見れば、人間の手によって計画的に整備された箱庭、つまり飼い慣らされた自然という枠を一步も出ていない。現地調査の際にシドニーからキャンベラを経てメルボルンへ至る丸2日のレンタカーでの移動にお

いて、その果てしなく続く草原で感じたのは、ツーリスト固有の感覚に過ぎないかもしれないが、広大な自然に対する親しみの気持ちではなく、野生の自然に対する恐怖感であった。オーストラリア出身の建築家グレン・マーカットの作品(図4)が興味を引くのは、自然を人間に対しての脅威の存在として認識した上で、その脅威に対して最小限の要素で立ち向かう姿勢を、言い換えれば生きていくことの根本的な厳しさへの挑戦を、そこに感じとれるからに他ならない。この視点において、ランドスケープアーキテクチャを、一般的に感じられる楽天的な意味合いとは対照的に、野生の自然に拮抗する建築として意味付けていくことも可能であろう。

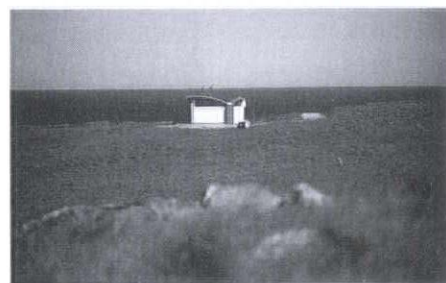
メルボルンとホバートの2つの住宅——ひとつは都市部のテラスハウス、ひとつは山間部のドームハウス——は共にセルフビルドであった。メルボルン中心部のテラスハウス(写真P.43下右、図5)は建築家とデザイナーの夫婦の手による増改築である。間口が狭く奥行きが深い都市的な敷地に対して、長手方向を3分割し、その真ん中を中庭および廊下として開放し、採光・通風を確保している。この中庭は、過密化する都市部におけるプライベートな外部空間の獲得という点において他の国でも成果を挙げている形式であるが、ここでも実際魅力的な場所をつくり出していた。道路側の棟は上部にロフト的なスペースを持っているが、正面の縦長の連続窓はロフトとその下の主階と双方にまたがるかたちで設置されており、つまり1階のハイサイドライトと2階の通風の役割を果たしている。内装にアーティストである婦人によりポップなペイン

ティングが施されているこの住宅は、建築家とデザイナーの組み合わせならではの特殊なケースではあるが、伝統的な住居スタイルを過密化する都市に適合させていこうとする姿勢は、移入された文化の変形が、急速に都市化の訪れている現代においても継続されていることを提示している。一方、タスマニア島ホバートの山間部で見つけたドームハウス群(写真P.43上、図6)では、4つあったドームがすべて三角形パネルにより構成されている。いずれのドームもパネルはすべて手製のファイバーパネルであり、ドーム毎に異なる表情が与えられている。このような世界的に標準のシステムの採用に際して、性能と表情との関係を個人の視点で丁寧に吟味している姿勢は、移入された普遍的なシステムを住居という建築を通じて自分の中に文化として位置付けていくことを可能性を示唆している。

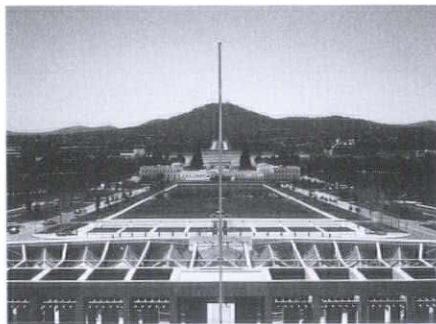
情報化社会が進みデザインの同時代性、同時進行性が助長される中で、建築はその具体化へのプロセスにおいて場所の固有性を表現していく可能性を持っている。都市風景への分析的眼差し、都市間に現存する野生の自然への意識、オーストラリア文化の継続的な変化への参照等、オーストラリア固有の契機が海外建築家、国内建築家、そして建築家ではない人々の手により具体化されていくことが望まれる。(佐々木龍郎)



2.シドニーフットボールスタジアム フィリップコックス、シドニー



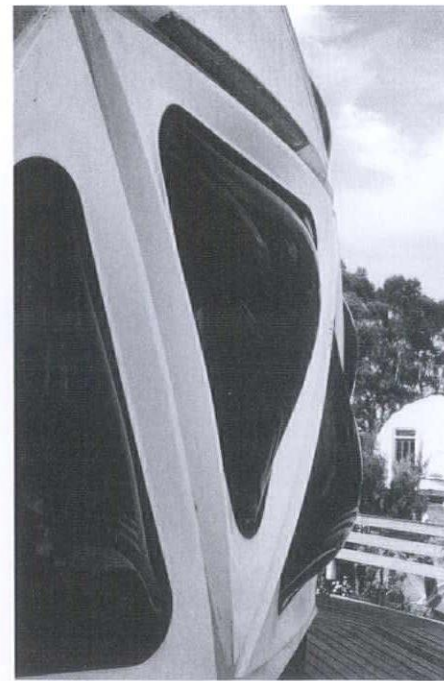
4.海のそばの家：グレン・マーカット、1985



3.オーストラリア国会議事堂：ミッチェル・ジョゴラ、1988、キャンベラ



5.テラスハウス改築、メルボルン



6.スミス邸、ホバート

オーストラリア建築と植民の痕跡

ジェニファー・テイラー／訳＝岡本美樹

植民という、一時的に行使された空間的、政治的状況は、二項対立的諸概念を形成し、今なおポスト・コロニアル社会の建築にとって継続的な遺産であり続けるような、様々な事態を引き起こしている。18世紀末、西洋文化圏と交流し得る見込みの無い程対極的な位置にある、オーストラリア大陸上のニューサウスウェールズが、英国の流刑植民地として選択された事により、今日でも執拗に取りざたされる中心的論議が解決不能の平行状態となる事態をもたらした。従って、過去の植民地時代の社会状況を把握する事により、オーストラリアの現代建築を概観することができる

のである。またこの様な視点から、18世紀末の英国で下された、南方の地の植民地化という決意の結果生じた不調和音の中に、オーストラリアの独自性と遺産を読みとることができる。

ポスト・コロニアル時代のオーストラリア建築は、内的独自性と外観的特徴を探究し続けている。オーストラリアの国と文化的基盤は、そういった二元論が最大のエッセンスとなっている。オーストラリア建築は、北緯に位置し、寒く、じめじめとした、教養ある大勢の人々が住む緑色の小島＝英国からの文化と、南緯に位置し、暖かく、乾燥した、人口

がまばらで相対的に見れば処女地である土色の大陸＝オーストラリアへの要請との葛藤の末に出現した。従って、オーストラリアへ移入された文化の起源は、事実上この地とは対照的な社会状況の中にあった。すなわち、オーストラリア独自の建築環境は植民地形成の社会状況から生まれ、「植民地統治者と入植者」、「建築と大陸」、「オセアニアと西洋文化」双方の相違から生じたものである。

植民地統治者と入植者

流刑植民地オーストラリアは、日常生活から引き離され、本国を望郷して止まない大半の

Australian Architecture and the Imprint of Colonization

Jennifer Taylor

The temporal, spatial, and political circumstances of colonization present dichotomies and engender attitudes that remain as ever-present heritage for the architecture of post-colonial nations. The situation resulting from the choice of New South Wales as a late eighteenth century British penal settlement, with the resulting unlikely wedding of the polarities of European culture and Australian place, produced uncommon juxtapositions, some of which persist as central issues today. Consequently, it is revealing to view contemporary Australian architecture by seeing the present in the light of the circumstances of the founding of the colony. From this perspective, originality and an intrinsic richness can be seen in the clash of

differences generated by the decision made in England at the end of the eighteenth century to colonise the southern land.

Australian architecture is that of a post-colonial nation seeking internal identity and external recognition. Dualisms form the very essence of the country, and its cultural landscape. Since the beginning of European settlement Australian architecture has grown out of the conflicting dictates of a culture inherited from a small, northern, cold, wet, green, and highly cultivated and populated island, Britain, and a large, southern, hot, dry, brown, sparsely populated and relatively virgin land, Australia. So the genesis of the imported culture lay in the



1. 小枝を束ねた軽量の屋根が掛かった、アボリジニ家族の砂漠住居



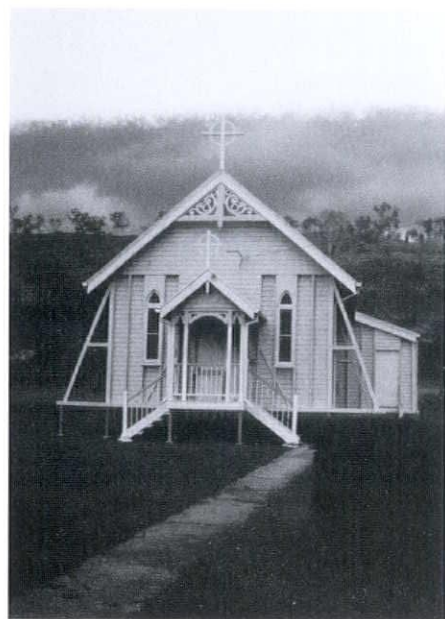
2. 19世紀入植者の小住宅には、西洋様式の形態に地域の材料を用いた工夫が見られる

conditions of a country virtually the antithesis of the Australian continent. The special circumstances for architecture arising from the colonization in Australia can be considered as deriving from the differences between: the 'Coloniser and the Colonized', the 'Architecture and the Land', and the 'Asian-Oceanic Location and the European Culture'.

The Coloniser and the Colonized

Australia's foundation as a penal settlement meant that the majority of arrivals had been wrenched from the life they knew and to which they longed to return, hence, there was the desire to recreate the familiar world of Britain on the alien shore. Architectural

流刑民達によって成立したので、この異国の沿岸に本国の親しみ深い都市と同じ都市を再形成したいという願望が自ずと生じてきた。オーストラリアの建築技術はまず、環境に触発されて発展したが、当初意識的に建設された「英国的建築」は特有の趣を持って各都市に伝わり、その一部は現存している。しかし、知識と技術の欠如、材料の違いと建設費不足によって、地域的差異もまた生じがちであった。この様な植民地形成の結果として、オーストラリア建築は、無知、単刀直入、ある意味で仮設的で移動可能であるという刻印を押されている事は否めない。だが、これには、

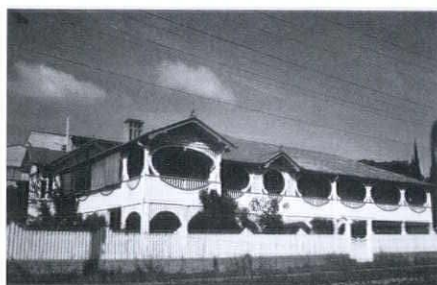


3. ヴィクトリア州モーニングトン半島の木造教会
英国の田舎村に建つ教会のミニチュア版の様相を見せている

innovation primarily appeared when forced by circumstance. The intentional 'Britishness' of Australia's first architecture imparted a particular flavour to the cities that in part still survives. Yet, because of lack of knowledge, lack of skills, differing materials, and often less available funds, colonial architecture springing from the same parental stock tends to develop regional differences. The notion of 'off-spring' arising from colonial transplantation has left hallmarks on Australian architecture in that it often has an innocence, a directness, and a certain sense of impermanence, even uprootedness. The Aborigines teach that Australia is hard but it is also fragile. Perhaps the European arrivals instinctively sensed this as, outside

アボリジニが入植者達に「オーストラリアは厳しいが、また同時にもろい大陸でもある」という教訓を与えているという背景がある。おそらく入植した白人達は直感的に、都市から離れた地にあるアボリジニの住居を、落ち着けそうになく、棒切れを組み上げた仮設建築のようで、実際の機能を兼ね備えている様には見えないと感じたであろうが。

少数の原住民が民族を形成して住んでいるこの大陸に英国人達が到着した当初、アボリジニの大半は単純な構造の仮設住居に住み、大陸を自由に移動しながら暮らしていた。建築技術を全くと言っていい程持っていなかった



4. 20世紀初頭のブリスベンのビルダー・ハウス
アールヌーヴォーとクイーンズランドの伝統的木造建築の結合としてユニークな建築である



5. グリーンズランドの典型的な田舎町の町並みは、通常の建築の前面にベランダが付加され、特有の景観を作っている

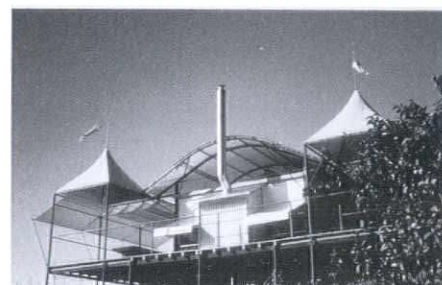
the cities, early vanacular architecture had a restless, temporary, stick-like, unsubstantial quality.

The British arrived in a continent where few indigenous tribes lived in settled communities. Most roamed freely over their lands, sheltering in temporary basic structures. Apart from some constructional techniques for rudimentary building, the new arrivals derived little knowledge regarding appropriate building practices or the planning of settlements from the Aborigines' experience of living in the country. However, the lore of the Aborigines contains a storehouse of knowledge, and belatedly, this is beginning to be appreciated. Bridging the chasm

た入植者達は、この地に住まうのに適した建築の方法とプランニングに関する知恵を、アボリジニからはほとんど引き出していない。しかし最近になってようやく、アボリジニが多大な知識を持っていることが認識され始め、アボリジニ文化を理解し、白人文化との橋渡しをする事に大きな関心が寄せられている。

建築と大地

植民地設立1788年は、白人によりジョージアンという建築様式がこの地にもたらされた年として名高い。ジョージアン様式は古典の簡潔な構成と均整を兼ね備えているため、植民



6. クイーンズランド州ユーマンディのテント・ハウス ガブリエル・ブル設計1991年
開拓時代の建築の軽快さが現代建築にも継承されている

between the differences of cultures to find enlightenment for both poses an exciting challenge for today.

Architecture and the Land

The date of establishment of the colony, 1788, was significant in that the settlers brought with them the prevailing style of Georgian architecture. The classical simplicity and balance of this style formed the standard for Australia's colonial architecture for buildings ranging from public monuments to rural cottages. But the need to modify the Georgian form, for climatic reasons, quickly became evident, resulting in the central core house wrapped in verandahs. Climate remains a major determinant

地建築に相応しく、公共的モニュメントから地方の小住宅に及ぶオーストラリアのコロニアル建築の標準的様式となった。更に気候の違いによる若干の修正が必要となり、間もなく中央部分がベランダに取り囲まれる形式となった。温暖で雨の多い気候に対応して屋根は平たく、全体を包み込むような形状となり、オーストラリア建築特有の表情を生み出した。

オーストラリア大陸は、実質的に茫漠な大地である。入植者達は、荒涼とした陸に隔てられた、海岸部の幾つかの地点に今も尚留まり続けている。未開で不毛なオーストラリアの奥地と、果てしなく続く地平線は、建築や

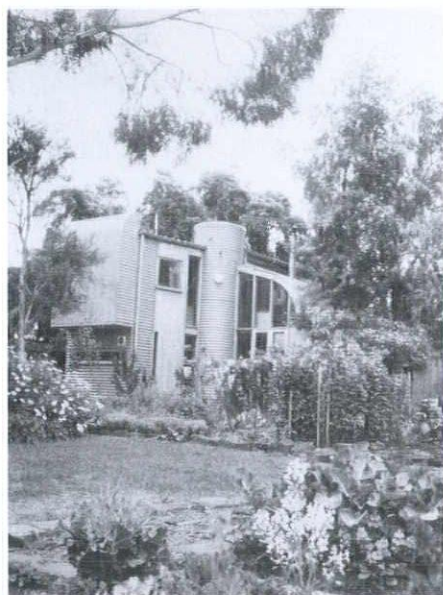
都市計画にも影響を与えたため、四方への広がりというイメージがそこにも表れている。これは非常にオーストラリア的と言っているだろう。また、広大な土地にまばらに建つ建築は、必然的に様々な面での自己完結性が必要とされ、それによって建築設備もまた建築の顕著な特徴となっている。

一方、オーストラリアは、世界的にも珍しいほど多くの動・植物相を持っている。それらの自然の力がオーストラリア人の精神に寡黙ながらも永久に影響を与え続け、また建築にも何らかの影響を与え続けている。白人入植者達は、残酷で極端なコントラストを持つ

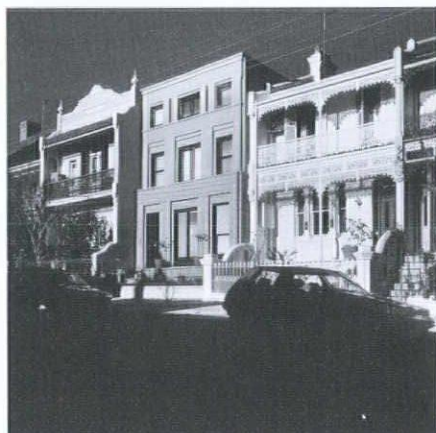
大陸を、恐怖と脅迫の念を持って見たし、また灼熱の太陽と、大地、海、空の明瞭な色に驚嘆した。今日でも、これらの自然環境は畏敬と忠誠を持って認識されており、建築に影響を与える重要なイメージとなっている。この様な自然に対する認識の一致が、未来の建築と大地を美的にそしてエコロジカルに編成するための原動力を維持している。

オセアニアと西洋文化

植民地の社会状況を形成する上では、英国権力のみならず西洋文化圏からも遠く離れているという地理的条件が決定的要因であった。



7.メルボルンのアクターズ・ハウス スザンヌ・ダンス設計1976年
オーストラリアの伝統的素材からはかけ離れたコルゲート・ステールを用いた現代建築



8.パディントン・ハウスのヘンウッド・ハウス アレックス・チザン設計
(改修)1998年
19世紀に建てられた英国古典様式の都市住居の復興計画



9.ユーゴラのファームハウス ジョン・アンドリュース設計1980年
ジョージアン・ハウスの趣を持つコルゲート網の建築

of architectural expression, notably in the roof form and vertical enclosures, giving responsive Australian buildings an identifiable language.

Australia is a vast land and Australia is virtually empty. The colonies were perched on the seaboard; between their sites and beyond was open space; and still is. The great arid flat spaces of the Australian outback and the endless ocean horizons have given rise to a sprawling horizontality in building and town planning that seems distinctly Australian in its spirit. Vast distance also means that buildings, to various degrees, must be self-reliant, hence, survival amenities form distinctive features in the

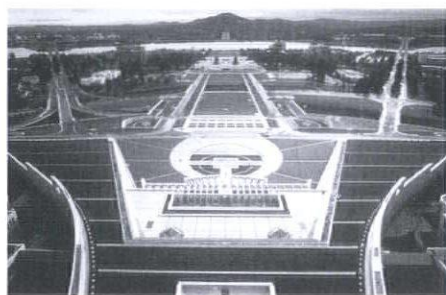
architecture.

The uniqueness of Australia, with its strange flora and fauna, timelessness and silence, affects the Australian mind and directly and indirectly affects architecture. The newly arrived Europeans generally found the land frightening and intimidating with its cruelty and its extreme contrasts. Also startling to European eyes would have been the extraordinary clarity of the quality of the light, and the distinct colouring of the land, the sea, and the sky. Today the land and its characteristics generate both awe and loyalty and remain dominant images influencing architecture. This spiritual union holds an exciting potential for the future aesthetic and

ecological orchestration of architecture and land.

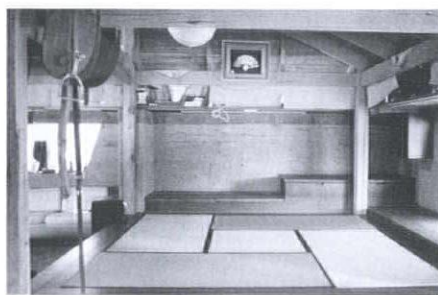
Asian Oceanic Place and European Culture Distance, from not only the colonising power but also the centres of western civilization, was a further major determining factor in the conditions of settlement. To the British in 1788 Australia was at the 'other end' of the world. Non-indigenous Australians have always been edge people in the literal sense of living on the rim of the continent, and in an emotional sense of always reaching out to distant ties beyond the seas. The edge condition, the edge of the continent, the edge of the world, breeds a particular restless, exploratory, mentality

1788年当時の英国にとって、オーストラリアは「世界の終地点」と見なされていたのである。入植民は異端者として、文字通り大陸の縁に住みながら海の向こうにある本国との絆を切望していた。大陸の果て、いや世界の果てであるという状況から生まれたオーストラリア建築は、常に安住せず、冒険的精神に溢れているという印象を与えている。アジア・太平洋地域に位置しているにも関わらず、オーストラリア文化はアングロ・アメリカ系文化の影響下にあるが、建築に関しては、異文化との接触によって新たな展開を見せる内在的力を十分に備えている。



10. キャンベラのオーストラリア国会議事堂 ミッシェル・ジョゴラ & ソープ設計1988年
広大な空間に、芝生の平地を遡うような景観を創り出している建築作品

200年という歴史は、オーストラリアの国民性を開花させるに十分な時間とはいえない。しかしオーストラリア建築は、その歴史の浅さが結果的に今日のオーストラリア建築に表情を与える要因となった。植民当時から今日までのオーストラリア建築を彩ったのは、アボリジニの持つ独自の自然概念と建築習慣、1788年の入植に始まる西洋文化、そしてオーストラリア大陸という事実上、未開の地を対象とした相対する特殊な状況であった。また、その展開に特に大きく影響を与えたのは、アジア大陸の南側に位置するという地理的条件と、英国権力からの距離であった。それに加



11. ウォング・クラジー・ハウス リチャード・ル・プラストリエ設計1976年
アジアと西洋の様式の融合を見せる内部空間



12. セントラル・シドニー、ワルシュ湾岸の波止場
19世紀、埠頭の波止場小屋は、海洋への窓口として、シドニーのウォーターフロントに印象的な景観を作りだした

which has always had its impact on Australian architecture.

Australia's geographical position on the globe is one of its most distinctive attributes yet despite location on the Asian and Oceanic axes, Australia's culture has been dominated by Anglo-American influences. There is, however, enormous potential to develop a relevant architecture out of the interface of the diverse cultures of the region.

Two hundred years is not a long time for the development of a civilization, and the resulting youth of Australian architecture is a factor conditioning its current expression.

The distinctive ingredients of the various dichotomies that have coloured Australian architecture since colonization include the special nature and building practices of the indigenous people, the culture of the European settlers, the historically recent arrival date of 1788, and the virtually untouched continent. Significantly influencing development was the geographical location 'down under' on the Asian-Oceanic axes, and the great distance of the colony from the colonizing power. In addition, the climate, the strangeness of the place with its distinctive textures and colours, the unique flora and fauna, the aged land worn flat, and the vast open distances played their part in shaping the architecture through history to today.

えて、オーストラリアの気候、不慣れな土地の素材と色彩、珍しい動植物相、何十万年もの間培われた茫漠たる荒野が、今日までの建築歴史発展の過程で徐々に取り込まれていったのである。オーストラリアの現代建築に関して言うならば、それは植民地時代の事情と入植民達の寓話から派生する文化によって展開された遺産であるといえる。それらは意識的であるにせよ無意識であるにせよ、常にオーストラリアン・デザインの内側に潜んでいるのである。

●ジェニファー・テイラー／シドニー大学助教授



15. トロップ・アーキテクツによるダーウィンの熱帯性モンスーン気候に対処した革新的住宅作品1986年



14. パラダイス・ビーチのケン・イスラエル・ハウス ビーター・スタッチバリー設計1992年
ミニマルな建築デザイン

Underlying current Australian architecture is the heritage of such conditions of settlement and the development of culture out of the fables and fictions derived from them. These are always lurking, either consciously or unconsciously, in Australian design.

●Associate Professor of Architecture, University of Sydney

建築のくメタモルフォーシス

オーストラリアン・バンガローの系譜

片木篤

オーストラリア建築の歴史、特にオーストラリアン・バンガローと呼ばれる住宅建築の歴史は、建築における「原型 (archtype)」のめまぐるしき「変形 (metamorphosis)」の過程を物語っている。かたや、インド・ベンガル地方の民家を原型とするものが、イギリス・インド間の建築文化の相互交流によってアングロ・インディアン・バンガローに結実し、それが「東回り」でオーストラリアにもたらされる。かたや、アメリカ南部におけるフランス人入植者住宅を一つの原型として、東部にスティック・スタイル、西部にカリフォルニア・バンガローが生まれ、それらが「西回り」でオーストラリアに辿り着く。こうした原型や一次変形が、オーストラリアの自然、社会、文化、経済的背景という新たなルツボの中で融解されて、独自のバンガローが生み出されたと考えられるからである。ここでは、オーストラリアン・バンガローの系譜を辿ることによって、建築における「メタモルフォーシス」のダイナミズムを素描することにしたい。



図1 インド・ベンガル地方の民家、1860年代

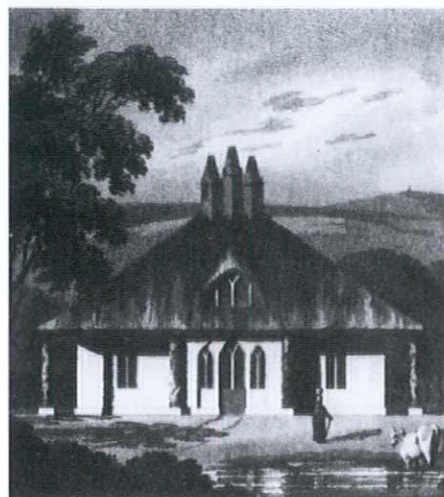


図2 ジョン・プロウ、『カントリーハウス、別荘、田園住宅のスケッチ集』、1800年

1. アングロ・インディアン・バンガロー：「東回り」の系譜

バンガロー (bungalow) とは、元来インド・ヒンディー語で「ベンガルの」と言う意味を表わす 'bangala' に由来する語である。17世紀に、'bangala' はインド建築を総称する語として用いられるが、18世紀後半には、'bungalow' は、3つの意味——即ち、ベンガル地方の民家、その民家に基づいてインドに建てられたイギリス人住宅、インドに建てられたヨーロッパ人小住宅全般——で用いられるようになる。この時点で既に、フランシス・ブキャナンが「ベンガル地方固有の私邸様式であり、円弧状の棟をなす2枚の傾斜面からなる差し掛け屋根をもっており、それ故、ひっくり返した舟に似ている」と記した原型(図1)が、素材を木や竹から干煉瓦やタイルに置換することで、西洋化されてきていることがうかがえる。

イギリス本国において、バンガローは「ピクチュアレスク」という異化された事物を求める審美眼によって、コテージ建築の一種として取り上げられることとなる。ピクチュアレ

スク・コテージの「パターン・ブック」の一冊、ジョン・プロウ著『カントリーハウス、別荘、田園住宅のスケッチ集』(1800年)に「インド・バンガロー (bungalow) 様式のヴィランダ (viranda) をもつ」コテージ・デザイン(図2)が収録された事実が、その証拠となろう。しかしながら当時のイギリスでは、「耐え難い寒さに対する用心として医者が二重扉と二重窓を推奨する国において、最近ヴェランダが流行している」ことが冷笑される程で、ようやく1830年代になってバンガロー・ファーム (bungalow farm) という語が流布し始め、1850年代以降、林立する海浜リゾート地の別荘としてバンガローが建てられるようになる(図3)。バンガローは健康・衛生観念に根ざしたものの、更にはアーツ&クラフツの「素朴であるが芸術的な生活」の思想を体现するものと見做されるようになる。

インドを振り返ると、軍宿営地内にまず税吏や判事用のバンガローが、続いて一般官吏用のバンガローが建てられていくのだが、1854年の公共工事局設立に伴って、古典主義 (classical) バンガロー (図4) が急増していく。

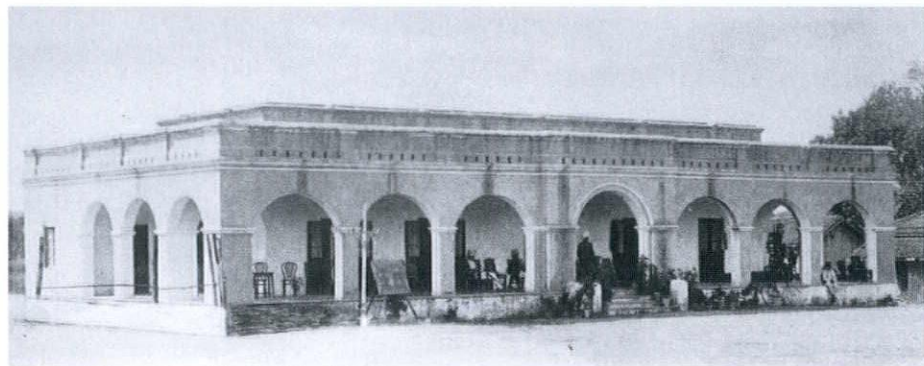


図4 古典主義バンガロー、公共工事局設計、1860年代



図3 「ロゼッティ・バンガロー」、『プリティッシュ・アーキテクト』1882年5月12日号

それは煉瓦造プラスター仕上げのアーケードやコロネードによって陸屋根のヴェランダを支えるもので、別名ブッカ(pukka—仕上げられたの意)バンガローと呼ばれ、以前の傾斜屋根をもつクッチャ(kutchā—生のままの意)バンガローと区別された。そして前者の延長上に、ラッチェンスやベイカーがニュー・デリーに建てたバンガローが位置しているのである。

2. アメリカン・バンガロー：「西回り」の系譜

18世紀後半のアメリカでは、ミシシッピ河流域にフランス人が入植し、ボンネット(bonnet)屋根と呼ばれる折り返し屋根を頂き、四周にギャラリー(galerie)を巡らせた木造住宅を建てていた。ポルトガル人やスペイン人、後にはフランス人が西インド諸島に建てた住宅にも同様の形式のものがあって、それを源泉とする説もある。確かに言えることは、18世紀を通じてアメリカではピアッツァ(piazza)—イニゴ・ジョーンズ設計コヴェント・ガーデンでの誤用が流布したもの——という語が一般的であり、1819年になるまでヴェランダ

という語は使われていなかったということである。以後、ミシシッピ河流域の住宅では、上記原型がグreek・リヴァイヴァルによって変形されたり(図5)、スペイン起源の練鉄製透かし植物模様——建築史家ハムリンはスペインもしくはメキシコから輸入されたとする——で装飾されていくことになる。

19世紀後半におけるスティック・スタイル(stick style)の成立については、名付け親たるスカーリーの著作を見るに如くはないが、要約すると、スティック・スタイルとはダウニングの著作を通じて紹介されたイギリスのピクチュアレスク・コテージの理論とデザインが、バルーン・フレームという新構法と結びついた地平に成立したものであって、ピクチュアレスクの視野を拡大していくと、1886年刊行のモース著『日本の住宅とその庭園』、1893年シカゴ世界博覧会における鳳凰殿の多大な影響につながり(図6)、ダウニングにおいて既に言明されていたゴシック・リヴァイヴァルの倫理観を延長していくと、バルーン・フレームの「正直な」露出や、後年のグスタフ・スティックレイを中心としたアメリカ版アー

ツ&クラフツ運動へとつながっていくことになる。

このスティック・スタイルの一種としてのバンガロー(図7)は、ニューポートを典型とする東部海浜リゾート地の別荘として発達していくのだが、ここで注目すべきは、香山壽夫の言う「荒野」への回帰に裏打ちされて、ヴェランダが「アメリカ固有の要素」と見做された点である。そしてそのバンガローが西海岸にもたらされた時、それはもはや閑階級の別荘としてではなく、中流階級用の「素朴であるが芸術的な住宅」としてとらえられ、ステックレイとグリーン&グリーンが目指したクラフツマンシップに代わってプレファブ化が進められることとなる(図8)。これがいわゆる「カリフォルニア・バンガロー」であって、イギリスや日本に再び送り返されると共に、新興国オーストラリアを席卷することになるのである。

3. オーストラリアン・バンガロー：独自の発展
ボイドはその著『オーストラリアの住宅』(1952年)の中で、オーストラリアの住宅平面型を



図5 ビトー邸、ニューオリンズ、ルイジアナ州、c. 1799年



図7 バンガロー、モニュメント・ビーチ、マサチューセッツ州、W. G. プレストン設計、『アメリカン・アーキテクト&ビルディング・ニュース』1880年3月27日号

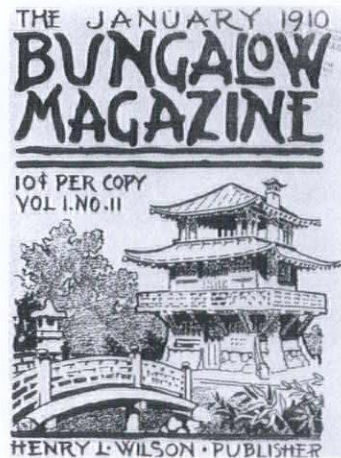


図6 ブランシュ・スローン邸、ロングアイランド、ニューヨーク州、『バンガロー・マガジン』1910年1月号

「プリミティヴ・ハット」「バンガロー」「アシンメトリカルな正面」「L字」「三分割正面」の5つに分類しそれらの進化を論じているが(図9)、その内「バンガロー」について次のように定義している。「18世紀イギリスのコテージ平面に基づき、中央に廊下、両側に2〜3室が配されたものであるが、オーストラリア人はイギリスでの2階を取り去って、住宅を地上面で広げ、全周にヴェランダを取り付けた。この平面型は、1840年以降1世紀もの間、地方に生き続けた。」その嚆矢と言ふべきがバラマッタのエリザベス・ファーム(1793年)であり、フリーランドはそれを「ニューサウスウェールズにおけるオーストラリア住宅の原型」と位置付けている。このようなイギリスの直接的な影響力やオーストラリアにおける内発性を重視する見方に疑義を差し挟む向きもあり、例えば、1805年という早い時期に『シドニー・ガゼット』にヴァランド(varando)という語がお目見えしていることからして、ヴェランダはインドや西インド諸島駐留経験のある軍人・官吏によってもたらされただろ

うと推定されているからである。

ヴェランダが名実ともに持ち込まれ、いまだバンガローの名が知られざる頃の例として、1860年代初頭からクィーンズランドに多数建てられた住宅が挙げられる(図10)。それは、ボイドのいう「バンガロー」型、即ち中央に廊下を通した正方形ないしは長方形の平面型をもつが、周囲に巡らされたヴェランダが木製の棧や格子、あるいは鉄製の透かし植物模様で飾られている点、トタン板でフィニッシュの屋根が葺かれている点、玄関ポーチの破風に北米のカーペンターズ・ゴシックを思わせるような繊細な彫刻が施されている点等々の特徴が見出される。

バンガローの名が冠された最初の住宅は、1876年、ホルバリー・ハントによって設計された「パディントン・バンガロー」(図11)であるが、そこには19世紀後半の英米リゾート地に建てられたバンガローが、本や雑誌という出版物を通じて間接的な影響を及ぼしたと考えることができる。この住宅を含む建設ラッシュは1888年にピークを迎え、再びオース

トラリアの諸都市で建設ラッシュが始まるのは、1904年のことである。それに対して、出版物ばかりでなく実際に建設業者や建築家が押しかけて来ては、全盛を誇るカリフォルニア・バンガローが持ち込まれ、ついには1918年ブリスベンで都市計画会議が開催された時、カリフォルニア・バンガローがオーストラリアの理想住宅として推奨されることとなる(図12)。

このように折衷主義、復興主義という様式の尺度で測ることのできない、おおらかで自由闊達な変形にこそ、遅れてきた国の独自性を認めるべきであり、そうした視点でもってアジアを含む植民地建築を語るべきであろう。そしてそれは、とりもおさず建築の変幻自在な「メタモルフォーシス」の迷路へ通じる扉を開けることに他ならないのである。

●かたぎ・あつし/建築家、名古屋大学助教授

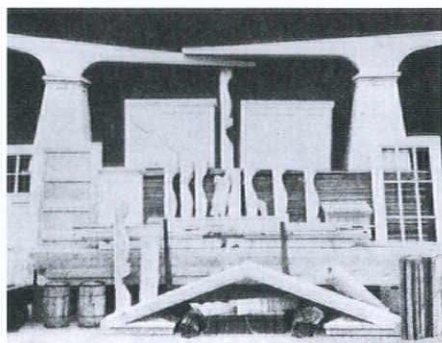


図8 「ザ・ヴァジェロ」、ルイス製作所製、1925年

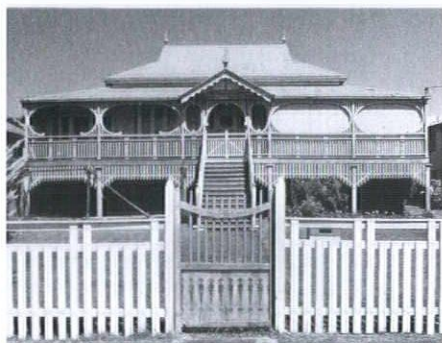


図10 バンガロー、メアリーバラ、クィーンズランド州

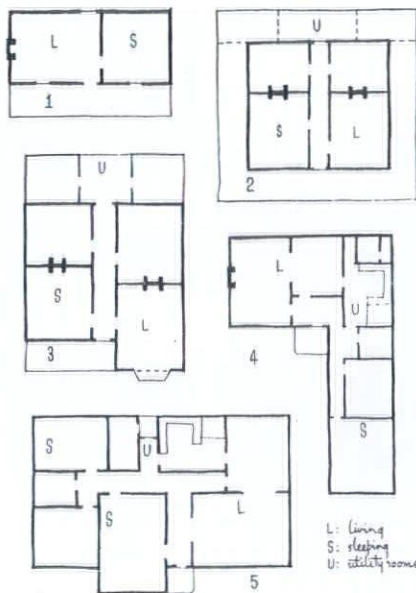


図9 「オーストラリア住宅の5つ平面型」、ロビン・ボイド、「オーストラリアの住宅」1952年

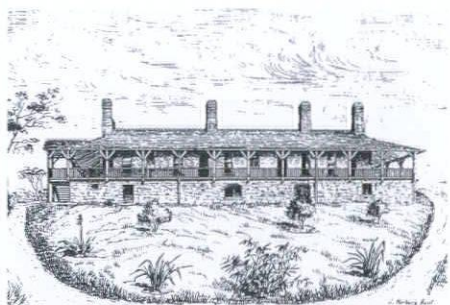


図11 パディントン・バンガロー、マウント・ヴィクトリア、ニューサウスウェールズ州、ホルバリー・ハント設計、1876年、『ザ・ビルディング&エンジニアリング・ジャーナル』1890年12月13日号

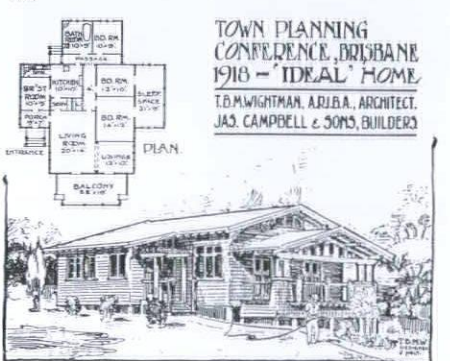


図12 ブリスベン都市計画会議における理想住宅展覧会のカタログ、1918年

ピーター・ウィルソン／訳＝小林克弘

オーストラリアの建築を語るためには、まず、その文化的・地形学的コンテキストを概観する必要がある。建築は、そうしたコンテキストから生まれ、かつその中に投げ入れられるのであるから。

この大陸の想像を絶する広大なスケール、驚異的な空虚さと無限の感覚は、ヨーロッパの飼い慣らされた自然風景や日本の濃厚な密度とは全く異なっている。シドニーから西に向うに従って、景色は次第に乾いていき、草木の緑は序々にまばらになり、最終的には大地が、地表の西洋文明のかき傷をすべて包み込んでしまう。大陸の中心は、実際に横断することもできない生命不毛の地であり続けている。南に海を越えると、そこは南極であり、また北には無情のジャングルがある。こうしたスケールの自然は、我々の攻撃的なテクノロジーを、無用の玩具へと変えてしまう。

グレン・マーカットの一連の住宅は、あた

かも宇宙から野生の環境の中へ落ちてきたかのようにして、こうした規模の自然に対する建築的尺度を与えている。洗練されつつも偽りのない素材、丹念な細部、巧みなミースの平面、そしてとりわけ亜鉛銅板の屋根（これは、ヴァナキュラーな農園小屋の美学的表現である）によって、これらの住宅は独特の表現を獲得した。これらは、開拓者のための原型的な小屋であり、洗練された20世紀的抽象であり、言うなれば、原始の楽園すなわち未開の純粋な自然の中を漂う西洋文明そのものである。

これらの住宅が、極めて高い国際的評価を得ていることは、決して驚く事ではない。安藤忠雄の住宅が日本的であるように、これらはオーストラリア的なものである。二人の立場は似てはいるものの、その形態は全く正反対の所に位置している。マーカットは、空疎な原野の中に、環境に対応したオブジェクトを

外に向けて彫り上げ、安藤は日本の都市の密度と複雑さに対して、狙い澄ました空間を、内側に向けて彫り込むのである。

マーカットの素材の用い方は、他の建築家によって継承されているが、彼の作品は必ずしもオーストラリア独自の地域的スタイルの基礎となるには至っていない。しかしながら、原始の小屋を再解釈するというテーマは、ノング・カツアリディスの力強い木造ビーチハウスやバリー・マーシャルのフィリップ島での埋められた中庭型住宅といった、近年の興味深い作品群を生み出した。

皮肉な事ではあるが、5つの主要都市の100kmの範囲に広がる都市的な、あるいは少なくとも郊外的な凝塊のような極端な低密度を導いたのも、自然の開拓者の小屋という、まさしくこの神話なのである。アメリカ同様、これらは自動車都市、周辺都市である。オーストラリアの建築家の主たる設計の仕事が個

Some Reflections on Landscape and Architecture

Peter Wilson

To write about architecture in Australia requires first an overview of the cultural and geomorphic context from which and into which this architecture is projected.

The vast, unimaginable dimensions of this continent, its terrifying emptiness and endlessness, distinguishes it from the domesticated Eurolandscape or the intimate density of Japan. Due westwards from Sydney the landscape becomes increasingly dry, trees and blades of grass increasingly further apart until eventually the landscape swallows up the surface scratches of Western civilisation - the red center, practically uncrossable, is life threatening, without end. To the south beyond the sea is the Antarctic, to the north impassible jungle. A landscape of such dimensions reduces the artifacts of our aggressive technologies to insignificant toys.

The houses of Glen Murcott, dropped as if from a space ship into their wilderness settings give an architectural measure to the dimensions of this landscape. Through their refined but unpretentious materials, careful detailing, sophisticated Miesian plans and above all through their enclosing galvanised iron roofs (an aesthetisation of vernacular farm buildings) these houses have achieved a unique status. They are archetypal, pioneer houses, sophisticated 20th century abstraction, Western culture itself floating in a primeval arcadia, the bush, pure nature.

It is not surprising that these houses have received so much international acclaim. They are Australian as Ando's houses are Japanese. Such a comparison of status does not imply a similarity of form, infact a house by Glen Murcott is as spatial paradigm almost the exact opposite to one by Ando.

Murcott casts outwardly oriented objects in an empty field, Ando carves inwardly focused voids out of the density and complexity of the Japanese city.

Although the material language of Murcott has been taken up by other architects his work has not evolved into a basis for a regional style. Reinterpretations of the primitive Hut theme nevertheless inform some of the interesting recent projects such as a rough wood beech house by Nonda Katsalidis or Barry Marshalls' buried courtyard house on Philip Island.

Ironically it is the same myth, the pioneer house freestanding in nature that has led to the extremely low density and very widespread urban, or at least sub-urban, conglomerations that sprawl up to 100 kilometers around the five main cities. Like

人の住宅となるのも当然である。結果として、アーバニズムというヨーロッパの伝統は、オーストラリアにおいては、稀に成功を修めるにとどまった。メルボルン、シドニー、アデレードは、すべてニューヨーク的な格子状街区の都心にのみ関心を払った。初期植民地の残りの部分は、アデレードにおけるライト大尉のような軍人によって、あたかも新世界におけるローマ軍キャンプのように規律正しく計画されたり、あるいは、メルボルンにおけるジョン・バットマンのように、疑う事知らない先住民から、僅かのビーズ飾りと引き換えに土地を購入した移住者によって計画されたのである。

アメリカの場合同様、これらの都市は高層オフィス・ビル群をもつ。それらは、否応なくI.M.ペイ的だったり、S.O.M.的だったり、あるいはローカルなD.C.M.的だったりである。これらの高層建築の森の周辺には、必ずとい

って良い程、今や上流階級じみた、19世紀の高密度のテラスハウス群——典型的なイギリスからの輸入品——の輪がある。テラスハウスの煉鉄製バルコニー（これは、初期のイギリス産業主義の産物である）は、オーストラリアの羊毛をイギリスの工場へと運ぶ船が、帰りに運び込んできたものであった。

そうした輸出入の流れは、オーストラリアの建築にとってのひとつのパターンを作り出している。それは、現在では、西洋文化の丸ごと輸入と、真にオーストラリアの産物であるグレン・マーカットの近年の輸出との中間に位置していると言えるだろう。

オーストラリアの輸入品のリストは、大変長いものになる。その中には、シカゴ派の建築家ウォルター・バーリー・グリフィンと、彼の妻で、フランク・ロイド・ライトの美しい日本調の図面を描いたマリオン・マホーニも含まれる。グリフィンは、新首都キャン

ベラのコンペにおける1等案を通じて、オーストラリアにアメリカ化された田園都市計画の考えをもたらしたのであった。彼の建築作品もまた、新たなタイプの郊外住宅を生み出した。それは、ライト的な突出した庇（これはオーストラリアの気候に適していた）および堅固な石壁——建て替えの生じる郊外においては、いささか時代錯誤的な恒久性ではあったが——を備えていた。

ル・コルビュジエのアトリエで6年間働いて帰国した坂倉準三のような建築家が日本に存在したのと同様、オーストラリアにおいても第二次世界大戦後にモダニズムの精神が一挙に輸入された。アメリカのジョセフ・アルバースの下で勉強し、ブラジルのニーマイヤーの事務所働いた後に帰国したオーストラリア人建築家ハリー・ザイドラーの初期の住宅群は、カリフォルニアにおけるノイトラの住宅と比肩できるような、機能的な話題作で

America these are automobile cities, edge cities. Not surprisingly the principal commission for Australian architects is the private house. Consequently the European tradition of urbanism has had only sporadic success. Melbourne, Sydney or Adelaide all focus on a New York like gridded downtown. The residue of initial settlements logically laid out by soldiers, (Colonel Light in Adelaide) roman camps in the New World, or settlers who bought the land for a few beads from unsuspecting natives (John Batman in Melbourne).

Like their American counterparts these cities have the usual crop of office towers, an obligatory I.M. Pei, a S.O.M., a local D.C.M. Around these tower forests is always a ring of now gentrified dense nineteenth century terrace housing - an English typological export. The wrought iron balconies of these (products of early English industrialism)

arrived in Australia as balast in sailing ships which carried in the other direction Australian wool for the hungry English mills.

Such import-export flows set a pattern for architecture in Australia which could subsequently be located somewhere between the original wholesale import of European culture and the recently exported images of Glen Murcotts truly Australian products.

A list of Australian imports is a long one, it includes the Chicago school architect Walter Burleigh Griffin and his wife Marion Mahony (Who drew many of Frank Lloyd Wrights beautiful Japanese style renderings). Griffin with his winning competition design for the national capital Canberra introduced the Americanised version of garden city planning to Australia. His individual buildings also engendered a new

typology of Surban Villa - Wright like overhanging eaves (appropriate to the Australian climate) and solid stone walls, a degree of permanence almost anachronistic in the demountable suburbs.

As in Japan with architects like Junzo Sakakura returning from six years in the Corbusier office the ethos of modernism was imported wholesale to Australia in the Postwar Years. Early houses by Harry Seidler, an Austrian who studied under Joseph Albers in America before moving to Australia via Niemeyers office in Brazil, are polemic functional essays comparable with those of Neutra in California. Seidler put the suburbs on legs, freed it from the weight of colonial tradition.

In the twilight of functionalism Seidler in conjunction with Pier Luigi Nervi

あった。ザイドラーは郊外を一人立ちさせ、植民地の伝統の重さから解放したのであった。

機能主義の黎明期に、ザイドラーはビエール・ルイジ・ネルヴィと協働して、シドニーの初期の高層オフィス・タワーの幾つかにおいて、洗練されたプレキャスト・コンクリートの建物を開拓した。港を見渡す彼の豪華な事務所を撮った、1960年代の白黒写真は、私達の世代の建築学生を、皆ハワード・ロークス（アン・ランズの小説「ファウンテンヘッド」の主人公）のような建築家になれるのだという希望へと導いたのである。ザイドラーは今でも確立された機能主義を実践し続けている。彼は、日本における丹下建三と同様、大御所という立場にある。

ザイドラーの同時代人であるメルボルンの建築家ロビン・ボイドは、オーストラリアの感性の出現にとって重要な人物である。1950年代および60年代におけるモダニズムの強力

かつ知的な主導者である彼は、輸入品リストよりは輸出品リストに名を連ねられるべきであろう。例えば、1960年にタイムズ&ハドソン社から出版された日本現代建築に関する彼の本は、メタボリズムに国際的注目をもたらしたのであった。彼の主要な作品は、予想されるように、革新的であり、しかし極めて住み心地の良い多くの住宅である。私自身も少年時代に、こうした抽象的空間をしばしば訪れたことを記憶している。それは、建築的道標のようなものであった。

ボイドの理論的著作も、同じく重要である。郊外文化の美学的再評価を巡って、彼が一般紙に述べた主張は、鋭くかつ知的であった。長年グロピウスと交信を続けたことからわかるように、彼は国際的なモダニストの議論に加わっていた。当時の写真の中には、グロピウスがメルボルンで、ボイドの円形の住宅を眺めているものがある（グロピウスは、恐

らく、桂離宮が近代主義的な建物であることを宣言するために日本に向う途中だったのである）。『オーストラリアの醜さ』の中で、ボイドはポピュラー文化に関する鋭い「ヴェンチュリに先立つ」分析を行って、郊外への挑戦を開始した。この問題は、今日では「複合性と対立性」という理論化がなされているが、当時の若いメルボルンの建築家の仕事の基礎を築き上げたのである。とはいえ、普通のものに対するアイロニカルな考え方、言語学に基礎を置く修辞論的建築は必ずしも実践されたわけではない。何故なら、それは本来的には、オーストラリアの都市や郊外の発展の方向を再検討させるための批評行為だったのであるから。

オーストラリアからの輸出品の中には、フォスターズ・ラガー・ビールや国際的なメディア界の大物ラバート・マードック、そしてこの原稿の筆者すらも含まれる。ボレス・

developed elegant precast concrete structures for some of Sydney's first office towers. A 1960's high contrast black and white photograph of this architect's luxurious private office soaring above the harbour led students of my generation to believe that we would all grow up to be Howard Roakes (architect hero of Anne Rand's novel "The Fountainhead"). Seidler is still building his systematised functionalism, he occupies in Australia a position similar to that of Kenzo Tange in Japan, the old garde.

A contemporary of Seidler's, the Melbourne architect Robin Boyd is a crucial figure for the emergence of an Australian sensibility. A tireless and witty campaigner for the cause of modernism in the 1950's and 60's, he fits more to the list of exports than imports. For example his 1960 Thames+Hudson book on new Japanese architecture brought the

metabolists to international attention. His principle commissions were not unexpectedly a large number of radical but extremely livable houses. My own childhood was punctuated by occasional visits to some of these abstract spaces, architectural signposts. Equally important was Boyd's theoretical writings, these manifestos in the popular press for a consequential aesthetic reassessment of suburban culture were intellectually astute and informed. His longstanding correspondence with Gropius evidences his participation in the international modernist debate. A contemporary photograph shows Gropius in Melbourne viewing a circular house by Boyd. (Gropius probably on his way to Japan to declare Katsura a Modernist building.) In his book "The Australian Ugliness" Boyd took up the challenge of the suburbs with an astute "Pre-Venturi" analysis of popular culture. This theme

today, legitimated by the theory of "complexity and contradiction", has formed the basis for the work of a younger generation of Melbourne architects. Such ironical reactions of the ordinary, a linguistic based syntactical architecture is not capable, because it is in essence commentary, of redirecting the evolution of the Australian city or suburb.

To our list of Australian exports also belong Foster's Lager, the international media baron Rupert Murdoch and even the author of this article. The magazine "Architecture in Australia" in a recent report of the Bolles-Wilson Suzuki houses in Tokyo speculated that such "encompassing planes with small viewing slots prove that to live in Australia is to be of the East and not of the West."

Jorn Utzen with his emblematic Opera

ウィルソンが東京に設計した鈴木邸を最近紹介した『オーストラリアの建築誌』は、「小さな覗き穴を伴った包み込むような壁は、オーストラリアでの居住が、西洋的なものではなく、東洋的なものになるであろうことを示している」と述べている。

ヨルン・ウッツオンおよび彼の象徴的なオペラハウスは、顕著な輸入例である。国際的なスターの訪問のようなものだ。チャールズ・ジェンクスによる1980年代初頭の旋風のような訪問旅行は、ポストモダニズムの教義をオーストラリアにもたらした。彼の影響で、オーストラリアの郊外には、ボール紙細工のような歴史主義建築が増えた。同様に、1980年代末には、より若い世代の建築家によってレム・コールハースの言語が拾い上げられた。今日のメルボルンには、初期のO.M.A.を思わせるような、キャンティレヴァーで街路上に突出した屋上プールをもつホテルやミニ超高

層のようなものが登場している。

最近の輸入品の中には、ブリスベン、パース、メルボルンなどで活躍している教師陣がいる。皆、1970年代および80年代のアルヴィン・ボヤンスキーのA.A.スクールが生み出した。この輸入品の下で、オーストラリアの建築家の新しい世代が生まれつつある。彼らは、自覚的であり、かつ発想も豊かである。レオン・ファン・シャイク教授が指導する王立メルボルン工科大学は、こうした活動の中心であり、そこではオーストラリア建築のための前提を確立するという探究もなされている。学校自体もそうした活動に熱心であり、キャンパス内の施設を建てるために、メルボルンの最も興味深い3人の建築家を指名した。

メディアの発達と情報の飽和が生じた今日、輸入／輸出というアナロジーは、仮想という様相を帯び始めている。最近行われたヴィクトリア美術館のコンペでは、多くの意義深い

応募案が生み出された（もっとも「襲」というアメリカの理論に支えられてではあるが）。これらの案は、オーストラリアの自然景観を概念化しようとしているのである。このコンペの場合、結果的には通行可能な屋根のような案が多かったが、オーストラリア大陸の物理的空虚さと現代の電子的風景というサイバー・ツンドラとのアナロジーを行ったものなどは前途有望であろう。ここには、将来のオーストラリアの輸出の可能性を、場の理論を、地形学とデジタル的なものを再融合させるであろう空間知覚の出現を、垣間見ることができる。

●ピーター・ウィルソン／建築家、ベルリン造形大学教授

House is a prominent import, as are regular visits by international stars. A whirlwind tour by Charles Jencks in the early eighties brought the doctrine of post modernism downunder. In his wake the Australian suburb was assailed with a deluge of historicist cardboard. Similarly the word of Rem Koolhaas was taken up by another generation of architects in the late eighties. Melbourne has now a designer hotel, a mini-skyscraper with an early O.M.A. like rooftop pool cantilevering dizzily out over the street.

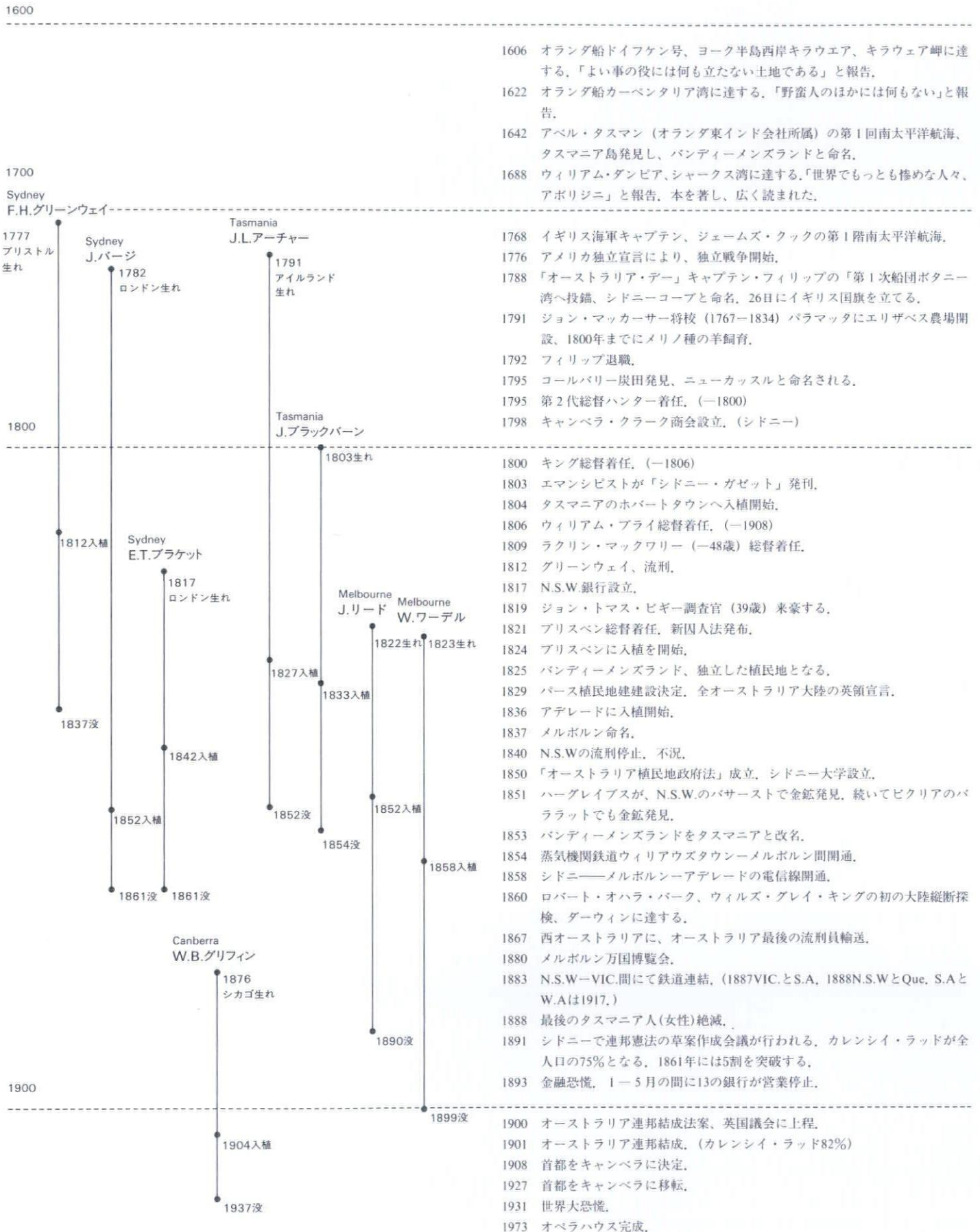
Recent imports include a generation of teachers now active in Brisbane, Perth and Melbourne, all products of Alvin Boyarsky's A.A. of the 1970's and 80's. Although somewhat resisted by more xenophobic locals there is now emerging from this input a new generation of Australian architects, both

aware and inspired. The Royal Melbourne Institute of Technology under the direction of Professor Leon van Schaik is the focus of this activity, which to its credit also seeks to define a premise for an Australian architecture. The school itself also acts as promoter, commissioning to date three of Melbourne's most interesting architects to build campus buildings.

In today's world of ubiquitous media and information saturation the import/export analogy begins to take on a virtual dimension. The recent competition for the Museum of Victoria produced a number of significant entries (proped up by a heavy dose of American theory - folding again). These sought to conceptualise the Australian landscape. Although in this case the result was a series of rather ill-defined traversable roofs, the analogy between the physical

emptiness of the Australian continent and the Cyber-Tundras of our new electronic landscape is a promising one. One glimpses here a possible future Australian export, a field theory, an emerging spatial perception that could reunite the geographic and the digital.

●Architect, Professor of Architecture of Hochschule Für Gestaltung Berlin-Weissensee



【風土・歴史】

1. アボリジニ

ジョージ・フレイニー著、越智道雄ほか訳「アボリジナル」サイマル出版会、1983
Peter Sutton, *Dreamings-The Art of Aboriginal Australia*, Penguin Book Australia, 1977
クロード・レヴィ・ストロース、大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房、1976
K・マドック、松本博之訳「オーストラリアの原住民」勁草書房、1986

2. オーストラリア史一般

マニング・クラーク、竹下美保子訳「オーストラリアの歴史」サイマル出版会、1978
C.M.H.Clark, *Select Document' in Australian history 1788-1850*, Angus & Robertson, 1950
Braian Fletcher, *Colonial Australia before 1850*, Thoas Nelson, 1976
Geoffrey Blainey, *A Shorter History of Australia*, William Heineman, 1994
Discovering Australian History-Boom and Dipression, The Jacarand Press, 1970
Manning Clark, *A Short History of Australia*, Penguin Book, 1986
Discovering Australian History-Gold, The Jacarand Press, 1970
John Archer, *Building a Nation - A History of The Australian House*, William Collins Pty., 1987
Discovering Australian History-Rural Life 1860-1890, The Jacarand Press, 1971
Discovering Australian History-Sqatters and Immigrants, The Jacarand Press, 1970
Manning Clark, *A History of Australia*, Penguin Book, 1963
Andrew Garran ed., *Australia the first hundred years*, Paul Hamlyn Pty., 1978
Willson Granvill, *Building a city*, Oxford Univ.Press, 1981
Philip Cox & Wesley Stacey, *Historic Towns of Australia*, Lansdowne Press, 1973
Manning Clark, *The Puzzle of Childfood*, Penguin Book, 1989
Oscar Gimsey, *Built from Nothing - A History of the Building Industry in Australia*, Building areas Resouse center of Australia, 1992
J.E.Tate, *Discovering Australian History-Convicts*, The Jacarand Press, 1977
Anthony DKing, *The Bungalow*, Routledge&Kegan Paul, 1984
中野不二男他著「もっと知りたいオーストラリア」弘文堂、1990
E.E.Morris, *Australia's first century*, Fine Arts Press, 1978

【建築】

3. オーストラリア建築一般

Morton Herman, *Early Colonial Architecture*, Longmans Green and Co Ltd., 1963
J.M.Freeland, *The Austrlin Pub*, Melbourne Univ Press, 1966
Morton Harman, *Georgian Architecture in Australia*, Ure Smith, 1973
J.M.Freeland, *Architecture in Australia - A History*, Penguin Books Australia, 1968
Jams Sempke Kerr, *Designs for Convicts*, Library of Australian History, 1984
B.Arch. *Conservation and Restoration of Buildings*, Australian Council of N.T., 1979
A Pictorial Guide to Identifying Austrarian Architecture, Angus&Anderson, 1989
Architects of Australia, Images Australia Lim., 1988
David Wilkinson etc., *Leslie Wilkinson*, Valadon, 1982
Trevor Howells&Michael Nicholoh, *Towards the Dawn*, Hale&Iremonger, 1989
T.T.Reed, *Historic Charchs of Australia*, The Macmillan
Braian Turner, ed., *Australia's Iron Lace*, Allen & Unwin, 1985
Comoany of Austrlia Pty. Ltd., 1978
Cliv Lucas, *Conservation and Restoration of Buildings*, Australian Council of N.T., 1979
Historic Places, Australian Council of N.T., 1978
Australian Council of N.T., *Historic houses of Australia*, Cassell Australia Lim., 1974
Australian Council of N.T., *Historic Homestead of Australia*, Cassell Australian Lim., 1969
Howard Tanner, *Architects of Australia*, Cox,Tanner Pty. Ltd.,

1981

Morton Harman, *The Early Australian Architects and Their Works*, Angus&Robertson, 1954
Donald Leslie Johnson, *Australian Architecture 1901-1951 Source of Modernism*, Syd.Univ.Press, 1980
J.M.Freeland, *Old Colonial Buildings of Australia*, Methuen Australia, 1980
David Latta, *Lost Glories*, Angus&Robertson, 1986
Architects of Australia, Images Australia, 1988

4. オーストラリア住宅建築

Ian Evans, *The Federation House*, The Flannel Flower Press, 1986
Ian Stapleton, *The old Aussie House*, The Fairfax Library, 1983
Ian Evans, *Getting The Details Right*, The Flannel Flower Press, 1989
Clive Lucas&Ray Joyce, *Australian Country Houses*, Lansdowne Press, 1987
Ian Evans, *Australian Old House Catalogue*, The Flannel Flower Press, 1990
Ian Evans, *Restoring old Houses*, The Macmillan Comoany of Australia, 1989
H.Fraser, R.Joyce, *The Federation House, Australian style*, Lansdowne Press, 1986
Rob Hiller, *Let's buy a Terraced House*, Ure Smith, 1968
Ian Evans etc., *Colour Schemes for Old Australian Houses*, The Flannel Flower Press, 1984
Donglass Baglin&Peter Moffit, *The Australian Verandar*, Ure Smith, 1976
Balwamt Sain, *The Australian House*, Lansdowne Press, 1982
Peter Cuffley, *Australian Houses of the 20s&30s*, The Five Mile Press, 1989
W.Mcdowall, *Recording Old Houses*, Council for British Archaeology, 1980
Howard Tanner&Phillip Cox, *Restoring Old Australian Homes&Buildings*, The Macmillan Comoany of Austrlia Pty. Ltd., 1975
George Tibbits, *Cottage, House and Garden Artist*, Det.of Architecture, Univ.of Melbourne, 1984
Robin Boid, *Australia's Home*, Penguin Books Australia, 1968
Robert Moore, Shebidan Burles, etc., *Australian Cottages*, Hamlyn Australia, 1989

5. ニューサウスウェールズ州

Philip Gieves, *Philip Gieve's Sydney*, Angus & Robertson, 1981
Olaf Ruhen, *Historic Bulidgs of Sketchbook*, Rigby Lim., 1972
M.H.Ellis, *John Macathur*, Angus & Robertson, 1955
Max Dupain, *Francis Greenway*, Cassell Australia, 1980
Eric Russel, *Victorian and Edwardian Sydney from old Photographs*, John Fevgson, 1975
M.H.Ellis, *Lachlan Macquarie*, Angus & Robertson, 1947
John Stockdale, *Arther Philip The Voyage to Botany Bay*, Hutchinson Pty., 1982
M.Barnard Eldershow, *Philip of Austrlia*, Angus & Robertson, 1972
James Murray, *Sydney an Illustrated History*, Lansdowne Press, 1974
M.H.Ellis, *Francis Greenway*, Penrith, The Discovery Press.
Suzan Evans, *Historic Sydneyas seen by Early Artists*, Doubleday Australia, 1983
Joan Kerr, *Edmund Blacket-Architect Sydney*, The N.T.of Australia, N.S.W., 1983
Morjobie Barnard, *Australia's First Architect -Francis Greenway*, Longman, 1961
Peter Bridges&Don Mcdonard, *James Barnet Coloneal Architect*, Hale&Iremonger, 1988
Hellen Baker, *Historic Buildings-Windser and Richmond*, The State planning Authority of N.S.W., 1967
Bill Richards, *The National Trust in N.S.W.*, Rigby Publishers, 1982
Alan Fitzgerald, *Canberra in two centuries*, Clareville Press, 1987
Frank&Judith Leary, *Colonial Heritage Historic Buildings of N.S.W.*, Angus&Robertson, 1972
Joseph Fowles, *Sydney in 1848*, Ure Smith, 1962
James Broadbent, etc., *The Golden Decade of Australian Architecture The Work of John Verge*, The David Ell Press, 1978
Errol Lea-Scarlett&Tim Robinson, *First Light on The Limestone Plains*, Hale&Iremonger, 1986
Mr.John Verge, Elizabeth Bay House, 1978

6. クィーンズランド州

More Historic Home of Brisbane, The N.T. of Queensland, 1982
Janet Hogan, *Hitric Homes of Brisbane*, The N.T. of Queensland, 1979
Janet Hogan, *Building Queenaland's Heritage*, The N.T. of Queensland, 1978
Janet Hogan, *More Historic Home of Brisbane*, The N.T. of Queensland, 1979
Graham de Gruchy, *Architecture in Brisbane*, Boolarong Publications, 1988
Roy Summer, *More Historic Homes of Brisbane*, The N.T. of

Queensland, 1982

7. タスマニア州

Tasmanian Historical Association, *John Lee Archer-Architect-Engineer*, Dept.of Education and Arts, 1971
E.Grame Robertson, *Early Building of Southern Tasmania Vol. 2*, Georgian House, 1970
J.N.Dharrison, *The National Trust in Tasmania*, Rigby Limited, 1977

8. ヴィクトリア州

Celeatina Sagazio, *A walk throught Italian Carlton*, N.T.of Australia (Vic)
モーリン・マクロリン『リッボン・リー』国家信託統治、1990
W.H.Newnham, *Melbourne -The Biography of a city*, F.W. Cheshire, 1956
Como, N.T. of Australia Vic, 1987
Walking Tour of St.James Park, Hawthorn, N.T. of Australia (Vic)
L.Oscar Slater, *Walking Tour of South Yarra West*, Prendergat Publishers, 1987
Miles Lewis, *The Melbourne Fringe*, Fitzroy Historic Society, *Tasma Terrase*, N.T.Australia Victoria, 1979
Maie Casay etc., *Early Melbourne Architecture-1840to1888*, Oxford Univ.Press, 1953
Alan Smith, *Como*, N.T. of Australia Vic, 1984
James Grant&Geoffrey Serle, *The Melbourne Scene 1803-1956*, Hale&Iremonger, 1957

9. サウスオーストラリア州

Creg Drew, *Discovering Historic Kadina*, Dept.of Mines and Energy, 1990
Colin Thiele, *Adelaid Story*, Peacock Publiions, 1982
E.J.R.Organ&S. H. Gilbert, *Early Adelaide Architecture - 1836to1886*, Oxford Univ.Press, 1969
Creg Drew, *Discovering Historic Burra*, Dept.of Mines and Energy, 1989
Tom Austen, *The Street of old Perth*, St George Books, 1988
Jeusen Elfrida, *Colonial Architecture in South Australia*, Rigby Ltd, 1980
Malcolm Challen etc., *Herotage of The City of Adelaid*, Corporation of the city of Adelaid, 1990
Government House Adelade, *The House and Grounds*, N.T. of S. A., 1988
E.Graeme Robertson, *Adelaid Lace*, Rigby Ltd, 1973
The Ayres House Story, The N.T. of S.A., 1984

10. ウェストオーストラリア州

Ray and John Oldham, *Western Heritage*, Lam Publications Pty. Ltd, 1961
The Heritage of W.A., The Macmillan Comoany of Australia, 1989
Tom Austen, *The Street of old Perth*, St George Books, 1988
Jack kent etc., *The Moores Buildings Fremantle*, City of Fremantle, 1988
Penny Watson etc., *Old Police Station*, York, The N.T. of W. A., 1984
Marie Cownie, *Perth and Suburbs*, Gallery Publications, 1979
Australian Heritage Commisson, *The Heritage of Western Australia*, The Macmillan Comoany of Australia, 1989

11. オーストラリア近代・現代建築

James Birrel, *Walter Burley Griffin*, University of Queensland Press, 1964
Donald Johnson Leslie, *The Architecture of Walter Burley Griffin*, MacMillan, 1977
Alan Fitzgerald, *Canberra in Two Centuries*, Clareville press, 1987
三宅理一「都市と建築コンペティション」講談社、1991
Philip Cox, Richardson, Taylor & Partners, *Australian Architects*, Royal Australian Institute of Architects Education Division, 1984
SD8902「オーストラリアの都市と建築」鹿島出版会、1989
Denton Corker etc., *Australian Architects 3*, Royal Australian Institute of Architecture, 1987
Ken Woolley etc., *Australian Architects 2*, Royal Australian Institute of Architecture, 1985
Donald Leslie Johnson, *Walter Burley Griffin*, The Macmillan Company of Australia, 1977
Jennifer Taylor, *Australian Atchitecture since 1960*, The Royal Australian Institute of Architecture, 1990

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それを取りまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つめ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



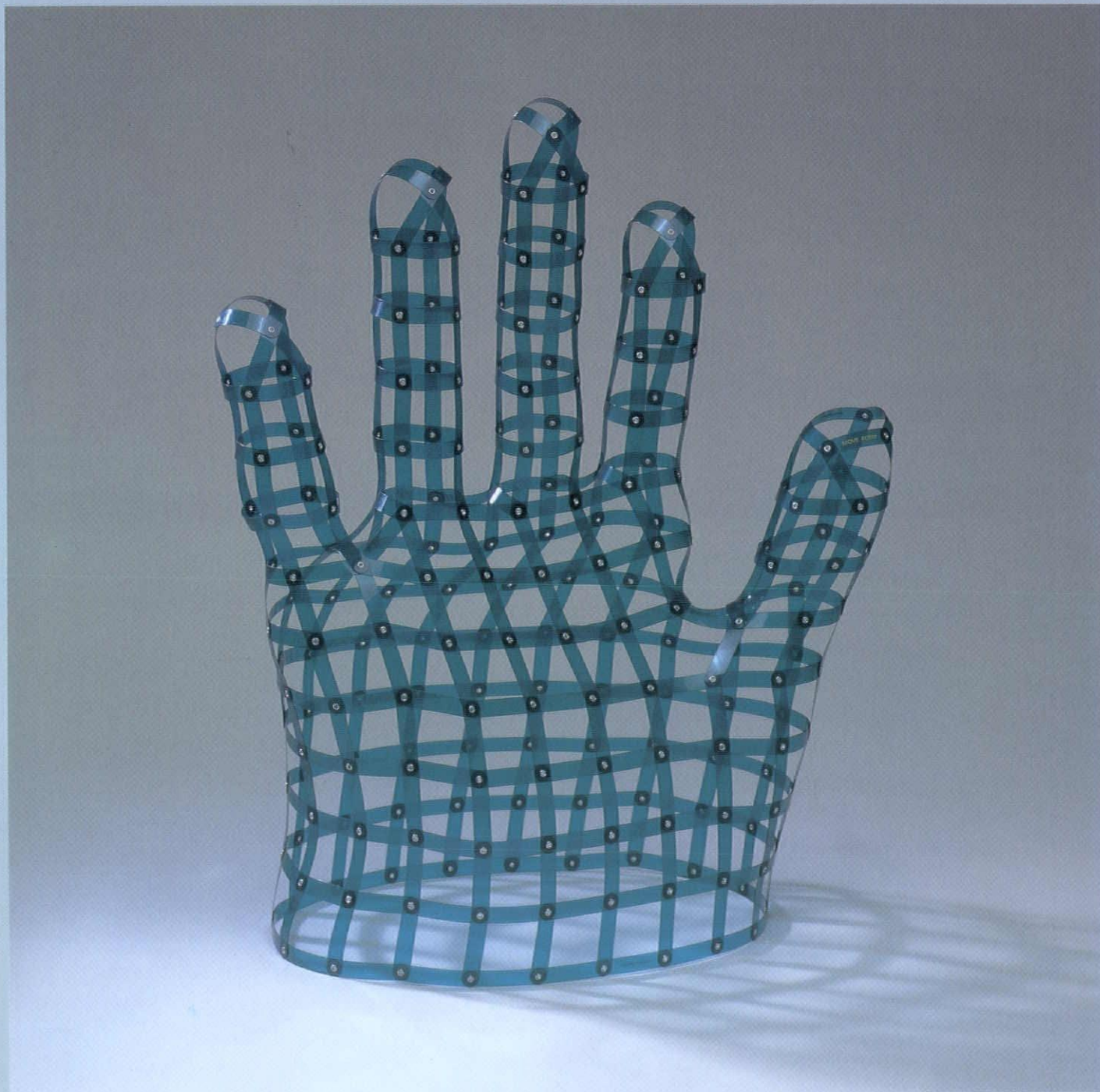
三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州



戸村 浩

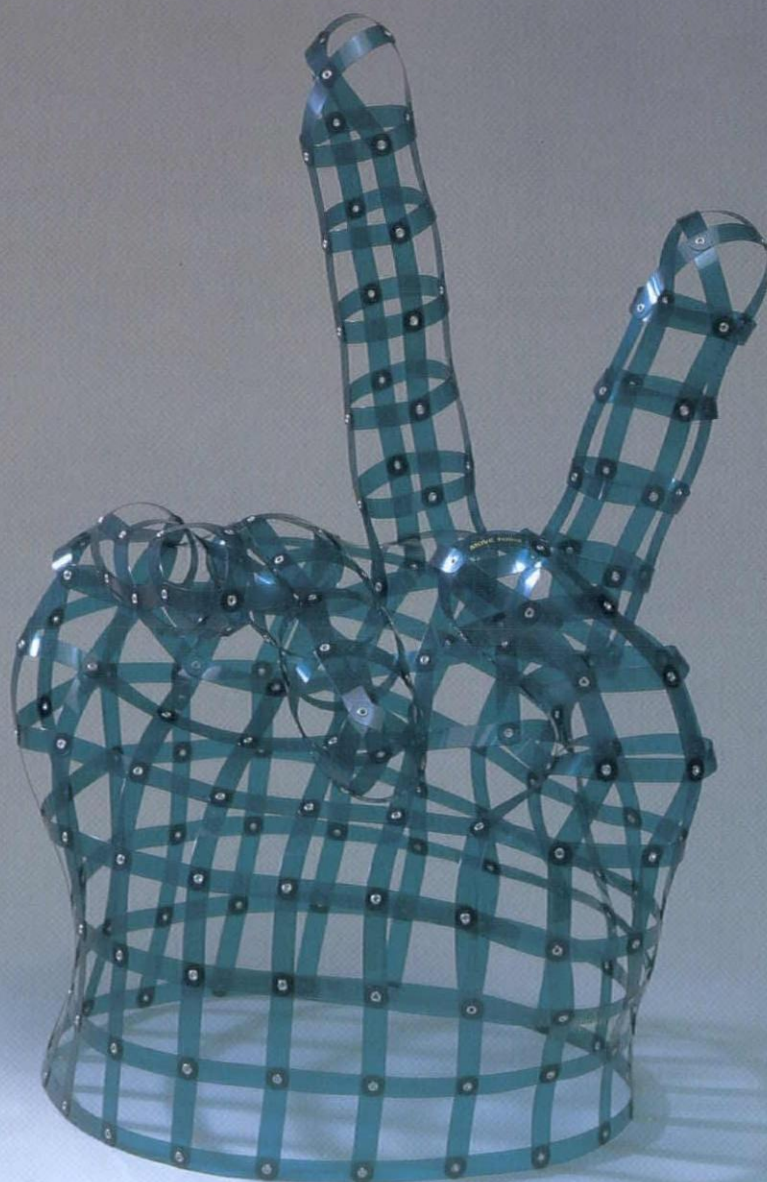
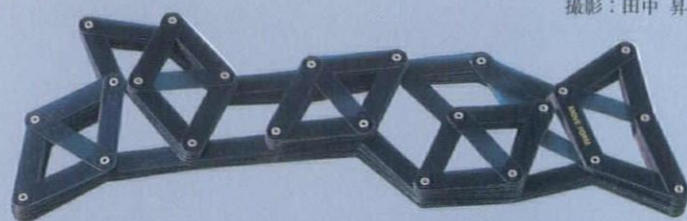
MOVE FORM——HAND 461:不易流行



もはや、そうではないのかも知れないが、日本の自然環境は穏やかで、領土もこじんまりとし、あらゆるものが小さく端正にまとめられている。そして、如何なるものも飾りっぱなし、出しっぱなしにすることはなく、必ず折りたたみ、小さく纏めて収納することが考えられてきた。丁寧にたたみ込んでいく折り紙も、その伝統的な精神を深く受け継いでいるもののひとつであろう。

しかし、その折りたたみの日本文化を、「縮みの構造」と簡単に言い切ることは出来ない。その仕草はまめで繊細であり、ダイナミックさ

に欠けているかも知れない。けれども、たたむからには、また広げられるのだ。それが故に、器用にコンパクト化された日本製品が、世界を制覇し、折り紙も広く海外に普及したのである。ともかく、今も残るささやかな営み、季節ごとに小さく仕舞い込み、時の到来と共にうやうやしく取り出す。それは、ものが空間の秩序に従いながらも、大きなスケールの時間という無限の流れに、身を任せているということでもある。小さくたたまれ、大いなる時の流れに乗るのは、形あるものだけではない。俳諧連歌の発句からなる、五・七・五の17文字の



短い詩、俳句もその例にもれないのである。

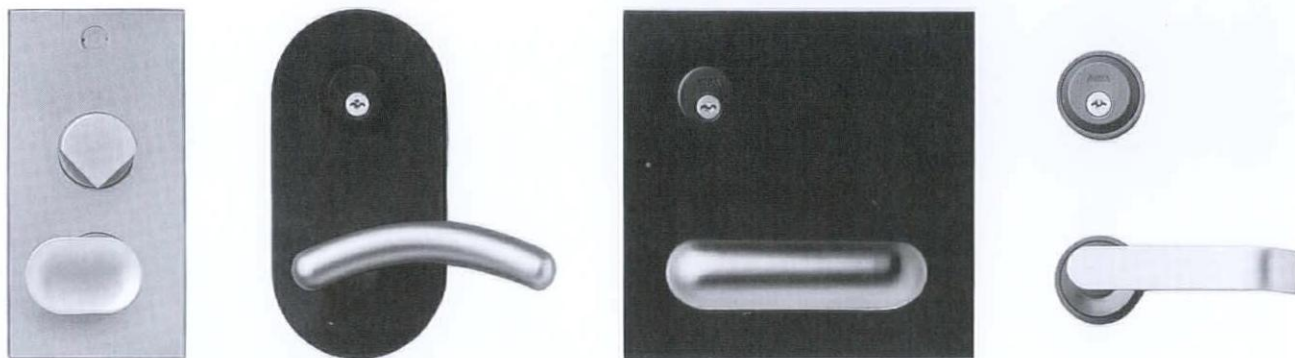
芭蕉が奥の細道に踏み入り徘徊したことにより、俳句は、時をも越えて大きく流動し、不易なる生命を得た。流転変化することこそ、この宇宙の恒常的な不変の原理であるとする「不易流行」は、芭蕉の俳諧の基本理念の一つである。「不易」は永久不変の芸術の姿であり、「流行」は「不易」を求めて進展し流動する芸術の側面を示している。そして、移り行く現実に応じた、とどこおらない軽やかさを把握しようとする「軽み」も、蕉風俳諧で重んじた作風の、もうひとつの大切な

理念であった。

HAND461の MOVE FORM は、軽みを重んじ、たたむからこそ大きく広がる、蕉風の不易・流行・軽みの概念を、その根底に秘めている。つまり、折りたたみ、ねじり、広げ、どう動かそうと、その本質は不変であるという、トポロジカルな構造を備えているのだ。また、手は、ものを動かし変化させるが、ものを安定させ、保持する重要な役目もすることを想起させるであろう。

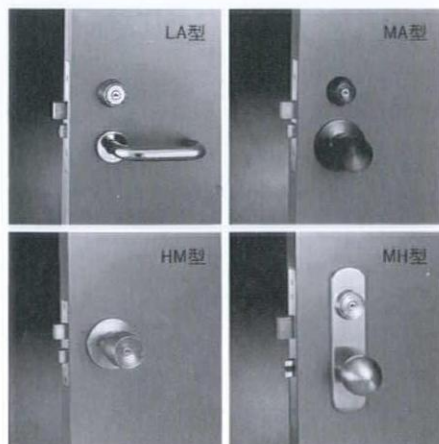
●とむら・ひろし／造形美術家

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用いただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システマチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

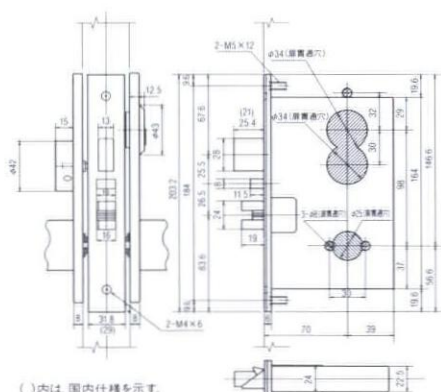
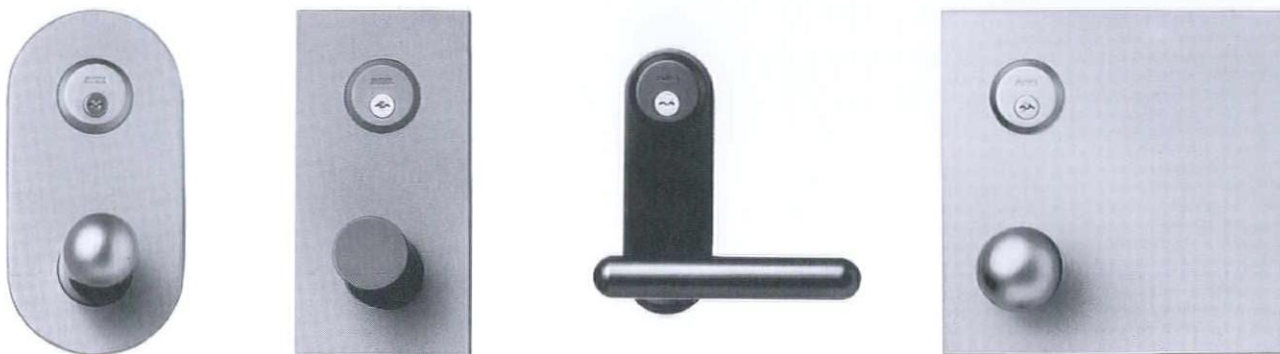
●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

生まれたのか。



●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少もありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。

U9



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

カチオンは自由な組合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることに、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side  室内側 Interior side 	常時、内外のハンドルでラ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 を操作すると、外
F21	一般居家用		ラッチボルトは内外のハンド ターンの操作で施錠され、内 からはサムターンで開
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンド ターンの操作で施錠され、内 からはサムターンで開

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

アーユーワイアード?—近代化と夜景

前回に行われた、探偵団連続実践講座第一回「ようこそ照明探偵団へ」は、総論的な旗揚げ興業であったが、1月からは本格的な探偵団の各論が始まった。今回のテーマ「夜景に見る都市計画」は、私たちには都市の夜景をデザインできるか、と言う大上段に構えたものであったが、内容は終身身近な夜景についての観察と分析が主体となっていた。

夜景という言葉はかなり広範な意味を持って使われている。夜景を観察する視点としては、①高所から俯瞰する街並み、②少し離れて眺める街のエレベーション、③路上に立つパースペクティブな視点、の3種類が考えられるが、講座の中でもたくさんの視点に立ったスライドによる実例が示された。コーディネーターの面出からは、「都市の夜景がどのように作られてきたか・夜景から何を学習するか・これからの都市に夜景がデザインされるか」と言う課題が提出された。

今回の探偵レポーター・稲葉は、6台のスライドプロジェクターを駆使しながら、世界の夜景を比較論の中で紹介した。特に圧巻だったのは東京とシカゴの360度パノラマ写真の比較だ。一目瞭然と理解できることは、東京の夜景は白いこと、夜景の中に意図された都市の構造がみえてこないことである。

東京を覆い尽くしている真っ白の光は言うまでもなく、蛍光灯、水銀灯によるもので、

住宅、オフィスの照明としてのみならず、至るところに群をなす自動販売機やコンビニエンス・ストアなどの白い光の洪水にも、戦後の日本の蛍光灯文化がうかがわれる。日本の白い夜とは対称的に、欧米各都市の夜景は、高圧ナトリウム灯や白熱灯のオレンジ色の暖かい光に包まれている。夜も日中の太陽のような真っ白で強い光を浴びながら生活を営むよりは、はるかに自然のリズムに沿った安堵を感じさせる。

ゲストの深谷氏からは、産業革命以降の欧米に見られる近代照明史の流れの中から、現代の都市機能と公共設備がどのように発展・形成されていったかを読みとろう、という試みがなされた。70分あまりのスライドを交えたプレゼンテーションの要旨は次のようである。

人類が火を使い始めた原始の時代から、長い時間を経て、ある程度本格的に照度をコントロールできるようになってから、私たちはたった200年あまりの中に生きている。

13世紀頃に始まる産業革命の中で、段々と都市が出来、産業体系が固まり、科学の進歩と発展が近代をもたらす過程で、公共性、公共照明という概念が成立していった。民間の窓からこぼれる光は、不十分ではあるが立派な公共照明の役割を担っていたに違いない。後に光の都と呼ばれるようになったパリは、

キリスト教社会の啓蒙主義における近代化をまさに具現化していった都市の代表であろう。17世紀に入ると明確な形態を持った公共照明が考案された。1667年パリにおいて、公共の街路照明としてのアルコールランプ式のものが出現したのが始まりだ。18世紀には徐々に明るくなり、近代都市の消費欲は高まってゆく。後半のラヴォワジェの燃焼理論の発見、アルガン式ガスランプの発明がそれに拍車をかける。19世紀はいよいよ電力が出現し、新時代を迎える。1889年の万国博覧会、エッフェル塔の対抗案として名高いブルデの「トゥール・ソレイユ(太陽の塔)」は19世紀末の人々が光に寄せた幻想の記念碑であった。都市全体に照明が行き届くよう強力なアーク灯を装備するこの照明灯は、街路照明から都市照明に変えようというものであった。

そしてアメリカ。エジソンの天才が19世紀末にロンドンやニューヨークで電力供給事業をも一手に開始し始め、ニューヨークの郊外にあるコニーアイランドは、電化による第二の太陽を獲得することで、夜も海水浴ができる眠らないリゾートと化し、そのトレンドがやがてマンハッタンの不夜城、メトロポリタンライフをつくりあげていく。コニーアイランドには次々とテーマパークなる娯楽施設ができるが、その中の「光の塔が林立する」概念は、20世紀のマンハッタン計画を中心とし



オレンジ色のシカゴの夜景



赤い航空障害灯が印象的な東京の夜景



マンハッタン計画のイメージとなったコニーアイランドのルナパーク

た、アメリカの近代を実現していくためのイメージとファンタジーとなっていく。マンハッタンが煌々と輝く都市として豊かさの象徴となっていくのと共に、ブロードウェイに出現した数ブロック続く電光広告の設備・グレート・ホワイト・ウェイが出現した。これはGE社の宣伝も効いて公共照明用の街灯パッケージ商品としてアメリカ中の街に大流行した。

また、大恐慌をまたいだ20～30年代のアメリカでは「電化されていること＝ワイアード」ということが経済の復興に重要な要因だと考えられていたが、これは、情報社会が花開く90年代のアメリカで使われ始めた「アーユーワイアード？ 情報ネットワークしてますか」とまさに類似したもので、工業化から情報化へ移行する現代、21世紀にむかうこれからの社会を予見するに意味深いものである。意図されない都市計画や照明計画が自然発生的にぶつかりあいカオスを呈する東京の夜景、これが計画されたパリやニューヨークにはない独特の風景を作り上げ、近代的な要素とアジア的な混沌の面白さであることに間違いはないにせよ、混沌としているということ自体が果たして我々にとって快適なのだろうか。また、アーユーワイアードの21世紀の都市の在り方が、例えば中国に代表されるように、電化されるということよりも情報化されることの方が加速するかもしれず、そうすると夜の

景色の作り方も違ってくる。隅々まで明るく照らす、ということとは別の都市の概念が生まれたり、モニターの中で夜景を認識したりすることに価値が与えられるかもしれない。

東京の夜景に関して言えば、個人の創意と責任がそのまま社会環境になってしまうということをもっと自覚して、生活者レベルでどんな夜景を自分たちのホームグラウンドとして誇っていくのかを考えてもいい時期にあるだろう。

さて、今回の講座のテーマには探偵団のフィールドワークを講座の参加者にも体験してもらおうと、東京夜景ウォッチングツアーが付随企画され、照明探偵団員と受講者を中心とする計65名が、極寒にふるえながらも、日没前の午後4時に田町駅前に集合、高層ビルのヘリポート、臨海副都心、羽田空港付近を通って横浜へバスで5時間ほど回るツアーを体験した。

田町にある竣工前的高層ビルのヘリポートに上がって東京一円の夜景を、照度計や輝度計といった7つ道具を使いながら調査観察した。明るさを測る、まぶしい光を測る、色温度を比較する、ブラックホールを探す、動く光を探す、という夜景を観察するための5つのポイントが面出から解説された。真っ白な光、無数に点滅する航空障害灯、異様な輝度

を放つゴルフ練習場、暗がりにも埋もれる皇居……。たくさんの光の英雄や犯罪者が透き通るような青い残照の下に浮かび上がって来た。

都市のエレベーションを観察するために行った臨海副都心からは、東京タワーとレインボーブリッジ、現在の東京の2大シンボルとも言うべきスポットが重なり合ってフレームに収まる絶景が望め、新しい東京を予感させる風景がそこにあった。また、高所から眺めて色温度の違いがはっきりわかるこの地域の照明計画の実際を観察。LPAがデザイン協力したシンボルプロムナードでは、高温色型の高圧ナトリウムによる暖かい光の街づくりを基本として、定位置のストリートウォッシャーの光、ヒューマンスケールの低輝度の行灯風の街路灯、路面に埋め込まれたアーティスティックな光のライン照明などが演出が訪れる人々をもてなしていた。そこでは照明が単に安全性や機能性を、或いは商業主義を満たすだけのためのものから、快適性を追求した、新しい都市を象徴するための感覚光としてデザインされていることがはっきりと理解できるものだった。

私たち一人一人が気持ちのよい光環境に出会い、夜のそぞろ歩きが楽しめる時、その全てを包み込む都市の絵はがきも美しいものが出来上がるに違いない。

●葛西玲子/LPA



20世紀初頭のマンハッタンイメージ画



臨海副都心よりレインボーブリッジと東京タワーを臨む



美しい薄暮の時間に極寒のヘリポートに立つ

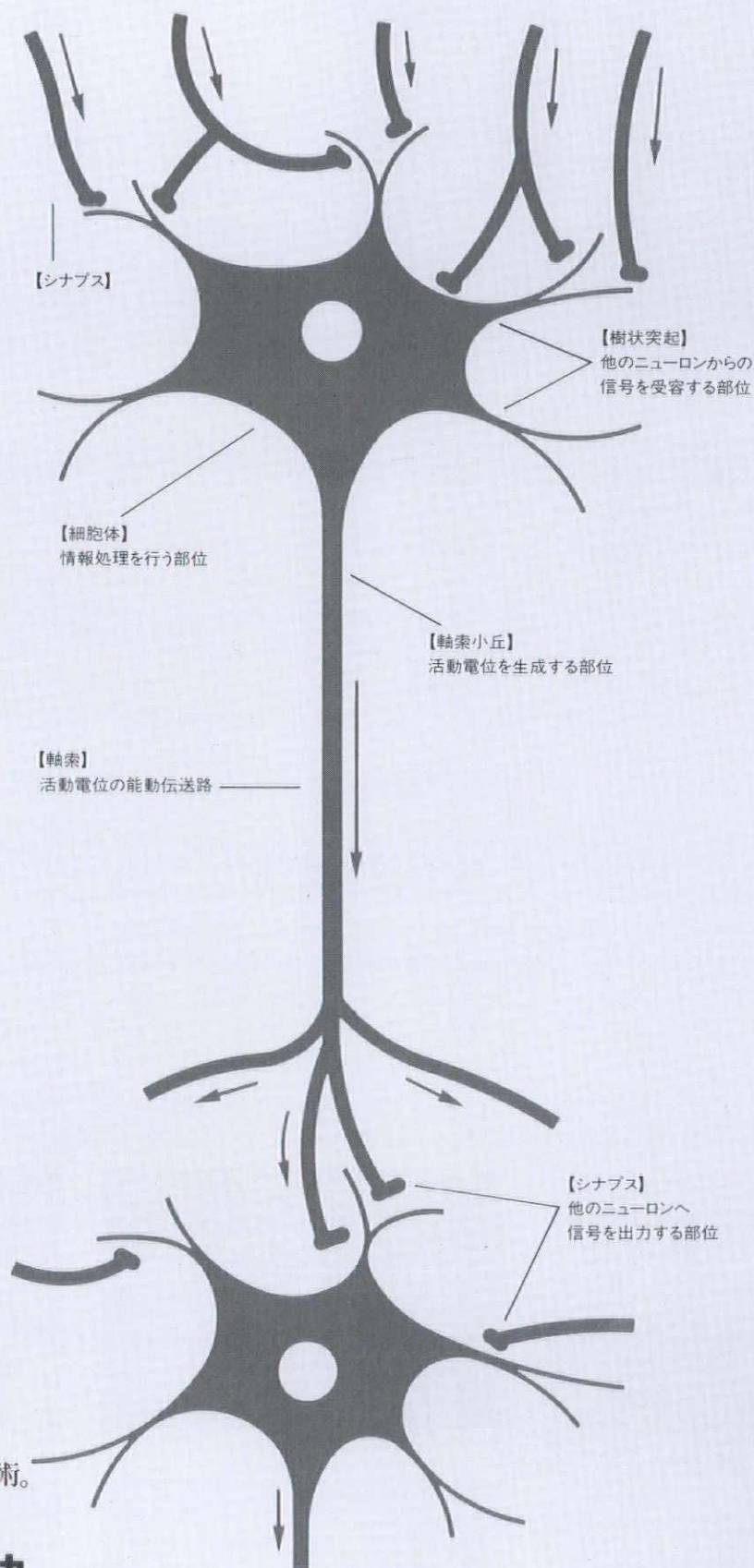


移動中のバスの中でも真剣に解説を聞く



臨海副都心・シンボルプロムナードに立つ

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もともと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-35562135

時代の呼吸に応える技術。



東 熱

ネクストジェネレーション in New York

スミス=ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダース



スミス=ミラー+ホーキンソン

Smith-Miller + Hawkinson

コーニング・グラス・コンプレックス

Corning Glass Center Complex

L.A. アーツ・パーク

L.A. Arts Park

マスター・プラン、「未完のユートピア、新世界のための公園」

Master Plan "Imperfect Utopia: A Park for the New World"

アトリウムと屋外劇場

Entry Atrium and Amphitheater

マクスミン・ハウス

Maxmin House



ジョエル・サンダース

Joel Sanders

「視覚限定性（サイト・スピーシフィック）」

"Sight Specific"

ペダーセン邸

Pedersen Residence

Next Generation in New York

Smith-Miller+Hawkinson and Joel Sanders

コーニング・グラス・コンプレックス

Corning Glass Center Complex : Glass Museum Science Center and Retail Facility

Corning, United States, Phase 1: 1993-1994, Phase 2: 1993-1998

Architect: Smith-Miller + Hawkinson

第1段階

ギャラリー1,2、グラス・センターのリノベーション

ビジター・センター、グラス・ミュージアム、科学・技術センター、それに小売り部門からなるコーニング社の大規模な計画の一環として、ウォレス・W.ハリソンによって1950年代に設計された地区施設、および展示部門の変更計画が、依頼された。

計画は導線を変更し、新たな動線や展示機能を定義、あるいは示し、またガラスの彫刻展示のデザインを含んでいた。新たな展示ケース、常設ガラスケース、メディア対応部分、それにガラスの壁は、将来に対応するとともに、展示物を保護するものでもある。

第2段階

新たなビジター・センター、科学センターのリノベーション

この段階は、既存のグラス・ミュージアム、科学センター、小売り部門、それに新たなビジター・センターの全体計画と設計、それに建設を含む。計画は3つの段階において、工事中、既存および新たな建物の導線と機能を変更するとともに、先進的な工事技術と工法の使用を予定している。

Phase 1

The Renovation of Galleries 1 and 2, Glass Exhibition

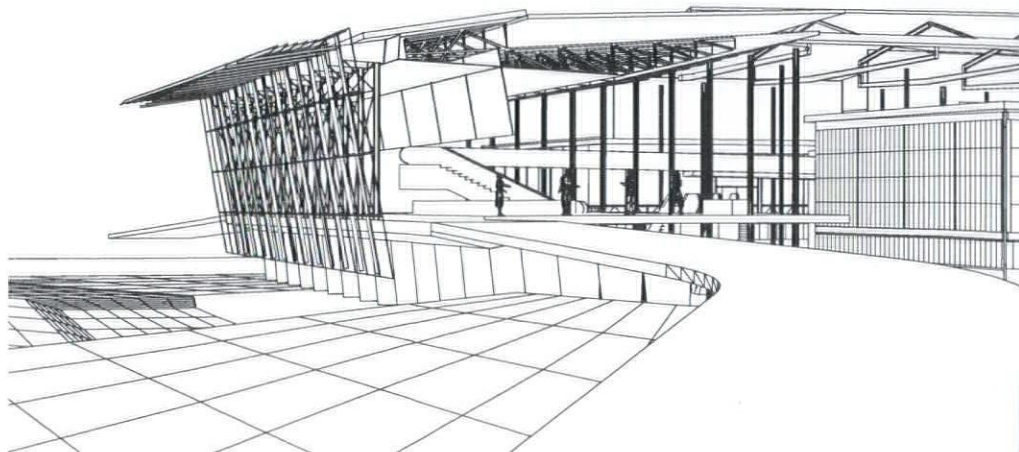
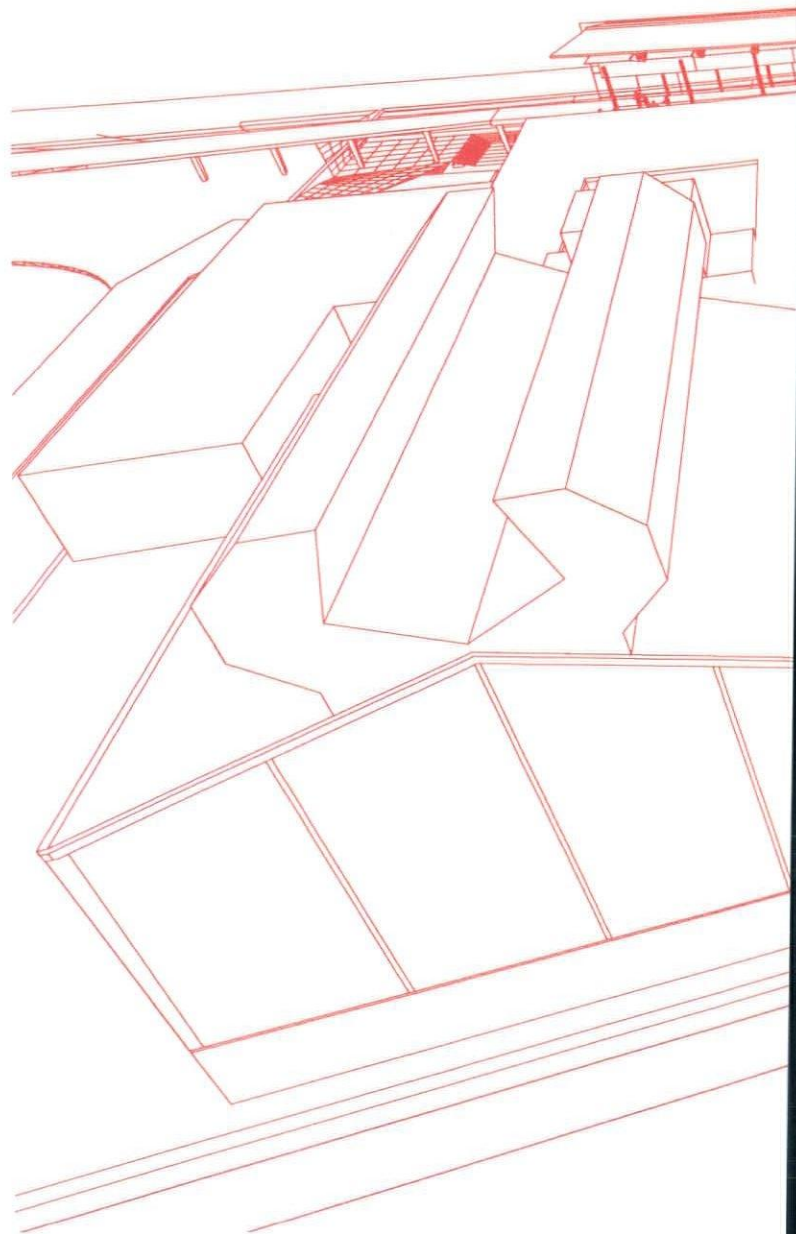
As part of a larger project for the Corning Visitors Center, the Glass Museum, the Science and Technology Center and the Corning Retail Division, we were commissioned to reconfigure a portion of a 1950's era community and exhibition center designed by Wallace K. Harrison.

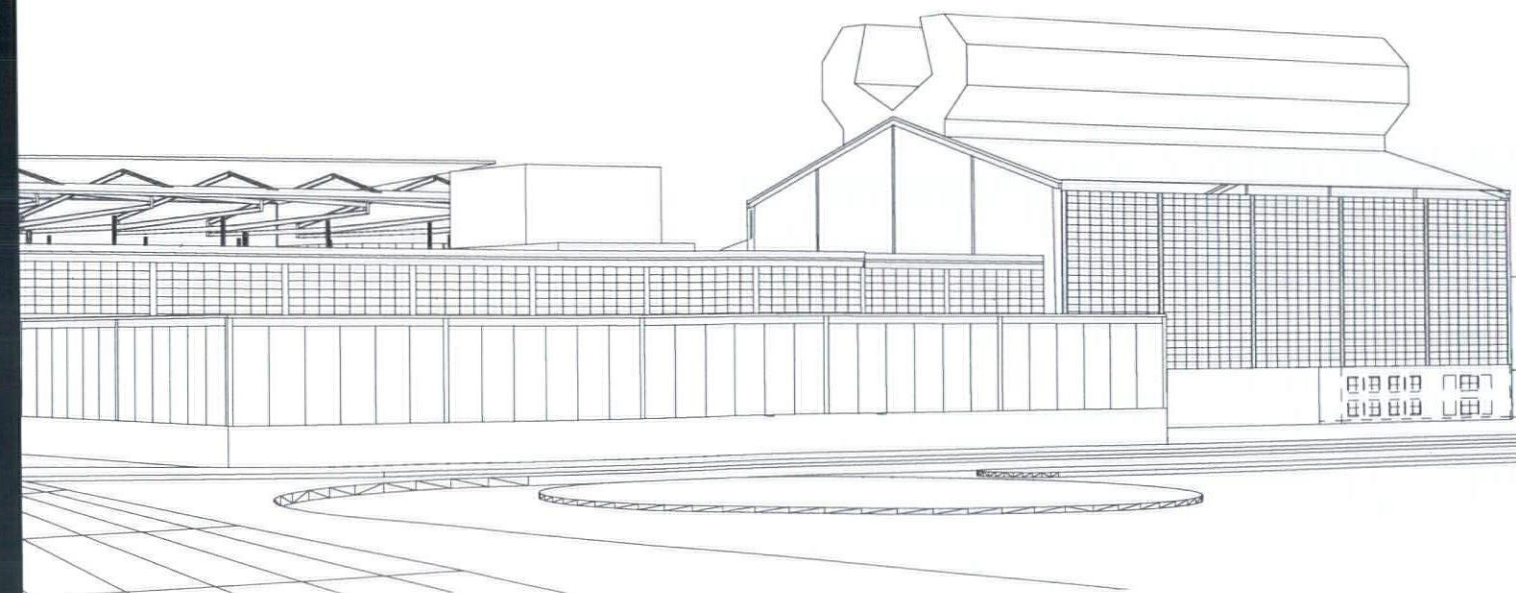
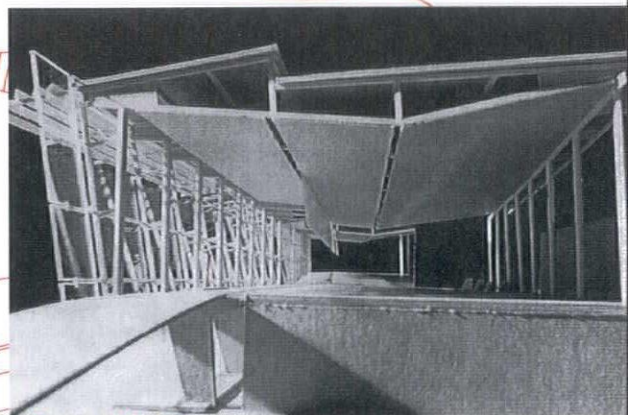
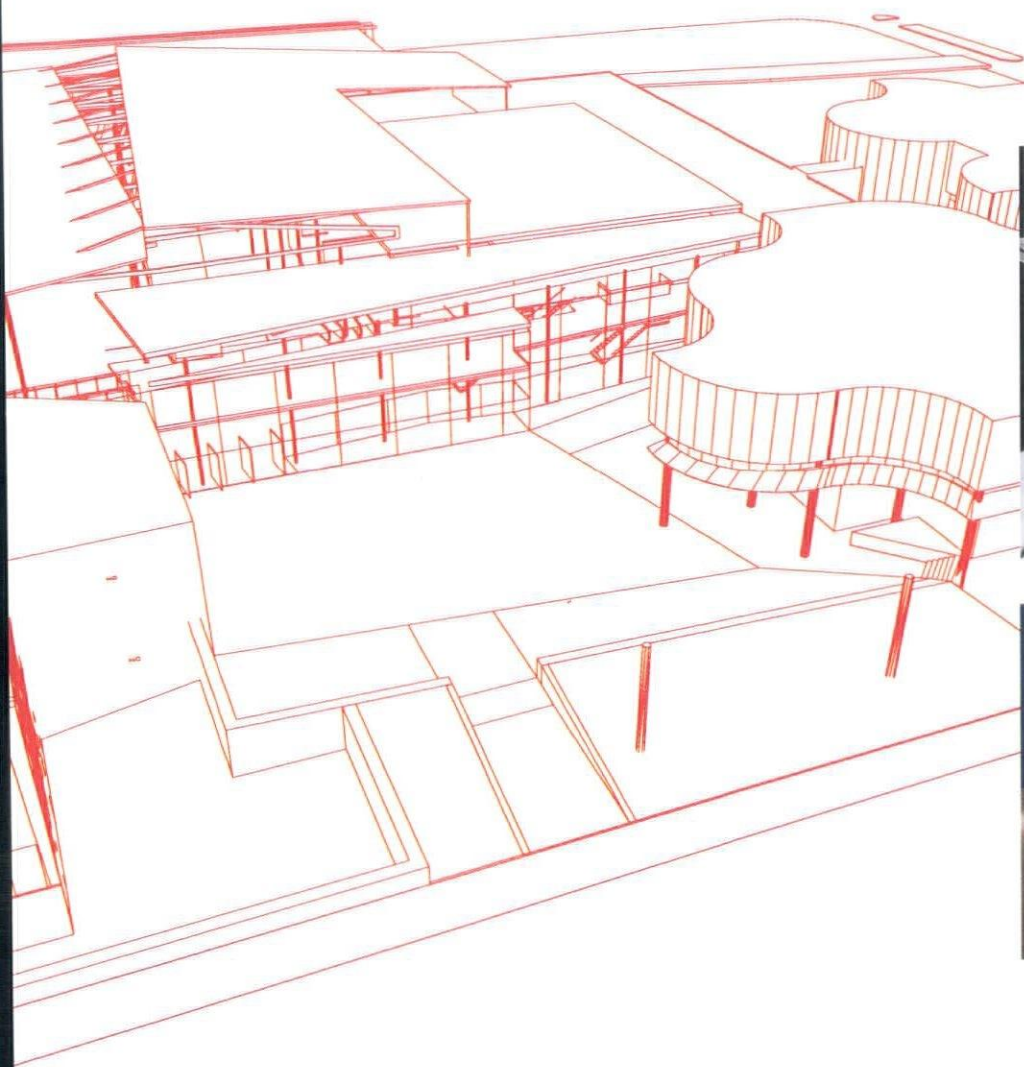
The project restructured the building access, defined and described new circulation and curatorial intentions, and included the design of an exhibition of glass sculpture. New exhibition cases, a permanent vitrine, a media area and glass walls provided an armature for the exhibition as well as future uses.

Phase 2

The New Visitors' Center, Science and Museum Renovations

This phase includes the master planning and design and construction for the existing Glass Museum, Science Center, Retail Division, and the new Visitors' Center. The project restructures in three phases the existing and new buildings access and uses during the construction process and envisions the use of advanced construction techniques and methods.





L.A.アーツ・パーク

L.A. Arts Park

Los Angeles, United States, 1989

Architect: Smith-Miller + Hawkinson

もしも都市が文明の密集した塊だと見なされ得るなら、ロサンゼルスはそうしたものが散漫となり、効果的なスペクタクルや、特殊効果のバロック的な融合、アメリカ文化を反映した混合となったものだ。事実においてもフィクションにおいても、LA郡とは、都市と呼ばれている概念を拡張してきた実験室となったのである。それは「マスター・プラン」という、崇められ、強化されていた言語を破壊してしまい、場所と非・場所のエアゾルにしてしまい、あるいは自然と人工物の空漠とした集合体に、土地、水、住宅、商業活動の雑多な領域に、変えてしまったのだ。LAはどちらかといえば引き算するより、足し算する町だ。スタイルやテイストの重要性に疑問を投げかけ、記号を作り、永遠の現在性を作り出し、そして見渡しても果てが見えない。

ロサンゼルスに恐るべきものにも、目を離せないものにもしているこれらのものは、単なる「面白い」風変わりなものではなく、21世紀のアメリカの都市の概念を決定づける条件でもあるのだ。つまり過酷な問題解決の組み合わせ、深刻だがウィットに富んだ再考。それに人種や経済の根深い問題をにらんだ、社会的に生産的な綱渡り、いかに彼らが建設するか、いかに我々は自分の生を生きるか、といったことである。だがそれらすべてによって、樂觀的には、LAはその場所と構築物への、その運動と休息への、一貫した特性を回復するだろう。我々は解釈的な都市について語っているのであり、ものを配列し、百万の声を一度に完全に明白にすること、強迫

的に装いを新たにすること、台本を束ねることをもくろんでいるのである。

我々のアーツ・パーク・センターは、ひとつ屋根の下に多くの活動を束ね、そうすることで望みならコミュニティを作り出す、多様な使用目的の場所となる。ドライブ・イン施設は、この地区のふたつのランドマーク、屋外映画場と駐車場を繋げたもので、非自然史博物館の屋根となり、イベントの集まりの屋根を提供する。地下の複合施設は、非自然、言い換えるなら文化の、壮麗で強力な展示場となるだろう。それは映画技術から自動車デザインにいたる、郊外住宅からフリーウェイにいたる、スーパーマーケットからテレビのホームドラマにいたる、アメリカの大衆文化に影響を与えたすべての南カリフォルニアの生産的なパワーを証言する、文化的発展の文字どおりの発掘となる。

モールはショールームとスーパーマーケット、子どもセンター、パフォーマンス・アート・センター、それにレストランを含んだ、吹きさらしでゆったりしたものとなる。その通俗的な従兄弟のように、我々のモールも、魅力的で包み込むような場所となり、遊歩者や鑑賞者、軽食者、学生、それに買い物客を招き入れるのだ。ショールームは寛大で広々とした空間で、アートやその表象について見たり考えたりする空間となるだろう。その柔軟性は、クロースアップからロングショットにいたる、さまざまな見方を可能にし、大画面を受け入れ、表象する現代美術の可能性を考慮しよう。芸術が展示されれば、

その力は倍増し、反響する。我々のショールームは、見せることの力を押し出し、視覚的快楽と批評的分析の双方を昂進させる。スーパーマーケットは、そのスーパー性を強調し、書籍やポスター、ビデオを販売し、それにアーツ・パークの場所や催事に関係したものが陳列され、ちょうど市場のようなものとなる。

これらを取り囲む周辺域が公園そのもので、ふたつの別々の部分に再構造化された、素晴らしい土地の広がりとつながっている。100年ごとに高水位に覆われる平地は、耕作地と茂みに分けられ、人間の変化と自然の転換の違いを示すものとなる。水位より上にある耕作地は、転作物の風景や、ガーデン・センター、樹木農場、水耕ガーデンとなる。水位下にある平面、茂みは、そこで自然の法則が再び始まり得る領域、あるいは垂直的な風景が形成される領域は見え、その基底は湿気た底地になっており、まだはっきりした水路が切られているわけではなく、また中間層も湿気た側面の傾斜地にあり、上面は、かつて沖積層だったと思われる乾いた層にある。これらの結果、この地域特有の規則に従った風景となり、南カリフォルニアの風景がどんなであり得るかのミクロコズムを提供するものとなる。灌漑は最小限に抑えられ、植生はそれが植えられる場所にあったものが選ばれ、水路はわずかながら変更される。(バーバラ・クルーガー)

If a city can be seen as a dense cluster of civilization, then Los Angeles is a dispersal of these symptoms into a spectacle of effects, a baroque conflation of special effects, a resonant mix of American cultures. In both fact and fiction, LA County has become a laboratory which has extended the notion of what can be called a city. It has shattered the exalted and empowered language of the "Master Plan" into an aerosol of places and non-places, into a rangy gathering of nature and culture, into a random terrain of land, water, dwellings, and commerce. LA brings in rather than leaves out, it questions the priorities of style and taste, it makes signs, it makes the permanent temporary and it has no end in sight.

These things that make Los Angeles both threatening and compelling are not merely "interesting" eccentricities, but the conditions which define a notion of the 21st century American city; a combo of rigorous problem solving, seriously witty rethinking and socially productive balancing acts which understand the profound powers of race and money and how they construct how we live our lives. But through it all, hopefully, LA will retain its insistent affection for both terrain and contrivance, for both movement and rest. We are talking about an expository city, intent on laying things out, on making itself perfectly clear in a million voices at once, in changing outfits compulsively, in being a bundle of scripts.

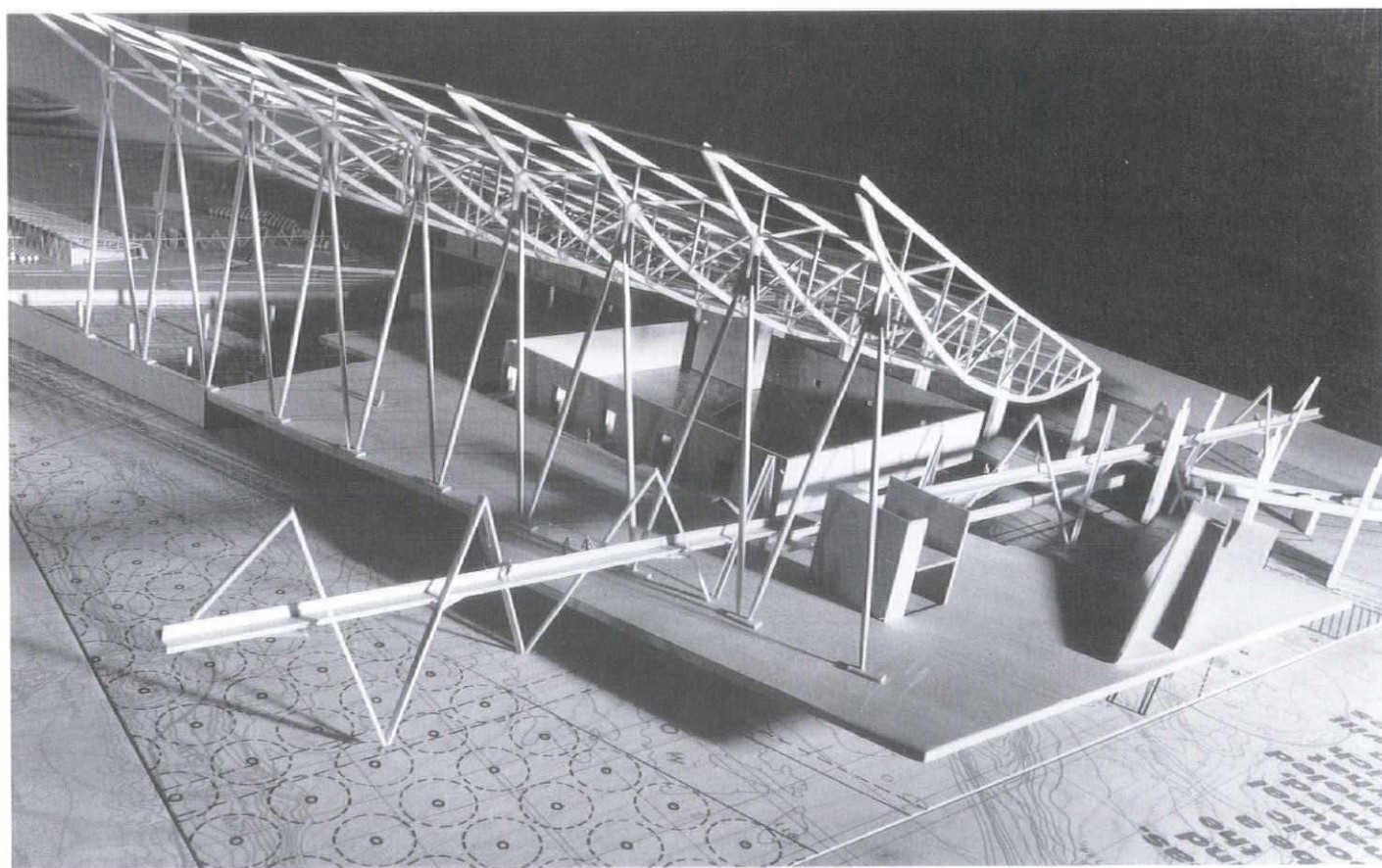
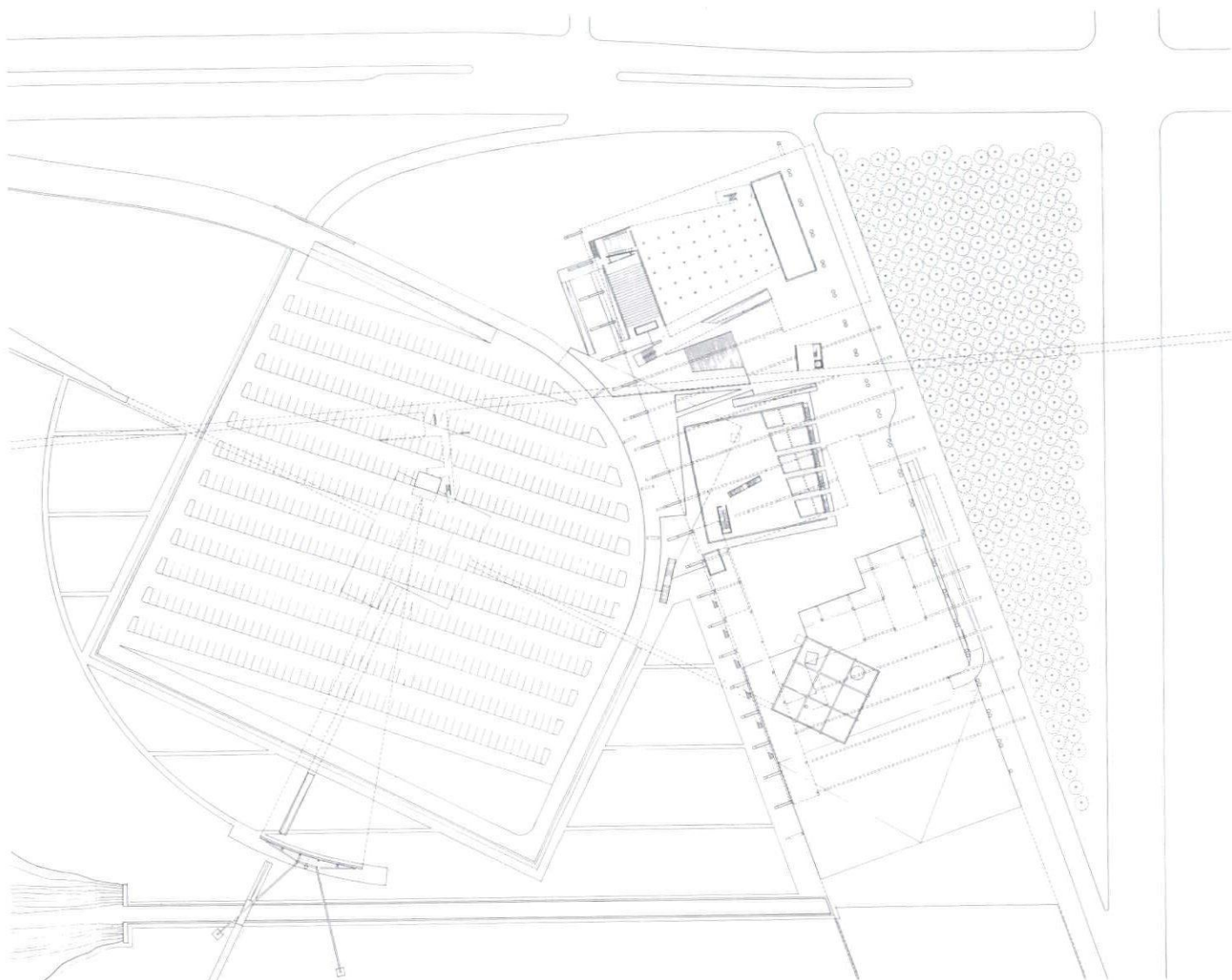
Our Arts Park Center will be a site of multiple uses which piles scads of activities under one roof to create a community of interests. The Drive-In combines two of the regions vernacular landmarks, the outdoor movie and the parking lot, both of which serve as the roof of our Museum of Un-Natural History and offer a place for community of events. This underground complex will be a grandly riveting exposition of the un-natural or, in other words, the cultural. It will be a literal excavation of cultural development from film technology to automobile design, from dream houses to freeways from supermarket structures to TV sitcoms which all attest to the productive powers of So-Cal inflected American popular culture.

The Mall will be an open and expansive structure containing The Showroom, The Supermarket, The Children's Center, The Performing Arts Pavilion, and restaurants. Like its vernacular cousins, our Mall will be a seductively inclusive place beckoning the stroller, the viewer, the snacker, the student, and the shopper. The Showroom will be a generously extensive space for looking and thinking about art and its representations. Its flexibility will allow for a bevy of viewings, from the close-up to the long shot and it will acknowledge contemporary art's ability to understand and represent the power of The Big Picture. When art is shown, its power accumulates and resonates. Our Showroom will foreground the power of showing and

work to promote both visual pleasures and critical analysis. The Supermarket will be just that, a marketplace which stresses the superlative and will offer books, posters, videos, and an array of objects which relate to the Arts Park's venues and activities.

Surrounding and encompassing these facilities is the park itself, and impressive expanse of land which will be restructured into two distinct areas. The 100-year flood plain will divide the cultivated area and the chaparral and will delineate the difference between the sector of human change and the area of natural alteration. The cultivated area above the flood plain will be a landscape of rotating crops, a garden center, a tree farm, and hydroponic gardens. The flood plain, the chaparral, is seen as a terrain where the natural order can begin to be restored, where a vertical landscape can be formed, having its foundations in the damp bottom of the still remarkably unchanneled creek, its midstory in the moist side slopes and its roof in the dry soil of what we assume was once the alluvial plane. The result will be a landscape which follows indigenous rules and provides a microcosm of what the Southern California landscape might be. Irrigation will be held to a minimum, plants will be chosen to adapt to the level in which they are placed and water courses will be modestly altered.

Text by Barbara Kruger

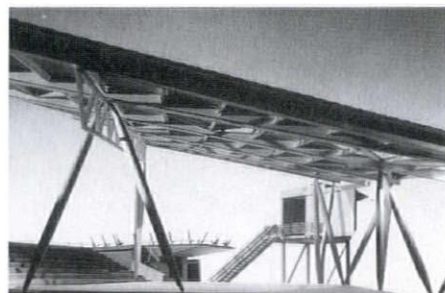


マスター・プラン、「未完のユートピア、新世界のための公園」

Master Plan "Imperfect Utopia: A Park for the New World"

North Carolina Museum of Art Raleigh, United States, 1988

Architect: Smith-Miller + Hawkinson



このノースカロライナ美術館の全体計画は、プログラムの実験であり、20世紀芸術と風景の現代的な条件、およびそれらがノースカロライナ州レイの167エーカーの敷地に対してもつ関係の、批評作業である。この計画には、単純な配置計画、土地の成形、伝統的な風景の形成といった以上に、なにがしかの解答が含まれている。「未完のユートピア、新世界のための公園」と名付けられ、理論とプログラム双方に強調が置かれよう。こうしたアプローチは、木立に囲まれた駐車場とか、屋外彫刻展示場とか、芸術家の小屋、教室や作業室のあるグリーンハウス、屋外劇場や屋外映画場、レクリエーション施設といった活動的な文化部分、それに既存の植生の「保存」や新たな植林からなっている。現在工事中の屋外劇場と屋外映画場は、同じチームによって前もって構想されている上位計画の、いくつかの考えについての

糸口を与えるとともに、計画の今後の段階についての方向性をも与えるだろう。「テキスト化された風景」と名付けられたこの第1段階は、彫刻的な要素や、プログラムの機能する空間や経験の、一連からなっているように見えるかもしれない。提案は、さまざまな規模の出来事に対応できるよう一連の空間からなっており、1人用の瞑想空間から、40人規模から2400人規模の観客を収容できる、映画やパフォーマンス空間までである。

テキスト化された風景は、スペクタクルのコンセプトや敷地、テキストを、屋外のプログラムにまで拡張された美術館の公共空間へと融合するものである。歴史や文化、地理学や位相空間といった考えに関わりながら、この公共空間は、風景における多様な経験の場所への接近を与える。

大屋根は、屋外での親密な集まりをひとつ屋根の

下で可能にしよう。その彫刻的な形は、アイデンティティを与えるとともに、風景の中の屋外劇場に焦点を与えるものでもある。美術館に取り付けられたアルミと鉄がなるスクリーンは、40×60フィートあり、傾斜をもった風景の方角を向いている。屋外映画場は、1200人収容でき、あふれた人のために、隣接した土地にさらに1200人収容できるようになっている。再自然化された風景は、再植林や、小森、それに一時的な植林として、マスタープランの中にいくつかの方針を編入するものだ。こうした植物は、レイの自然的、文化的歴史の側面を描き出している。丘の上では、もともとの花に加えて、綿やとうもろこし、あるいはタバコといった農業的穀物が植えられるだろう。

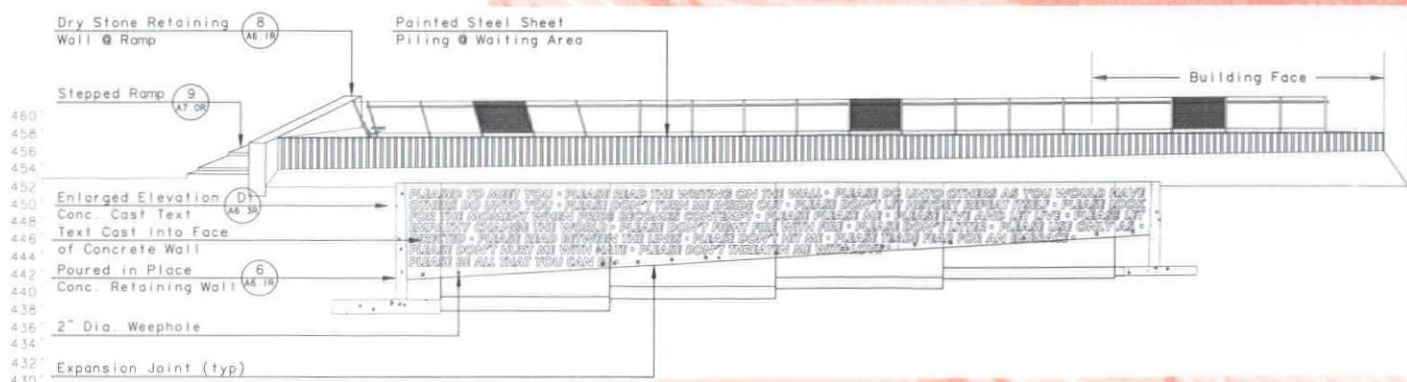
The master plan for the North Carolina Museum of Art involves a programmatic investigation and critique of contemporary conditions of twentieth-century art and landscape, and their relationship to a 167-acre site in Raleigh, North Carolina. The project entails the possibility of a solution beyond simple site work, earth moving, and the traditions of landscape. Entitled "Imperfect Utopia: A Park for the New World," equal emphasis is placed on the development of both theory and program. This approach to the museum entailed the design of grove parking areas, active cultural areas, such as an outdoor sculpture court, artist's cabins, and a greenhouse containing classrooms and workshops, an amphitheater and outdoor cinema, recreational facilities, as well as a "preserve" of existing vegetation and new plantings.

The site of the amphitheater and outdoor cinema currently under construction, provides the first opportunity to interpret some of the ideas of the larger plan previously developed by this team, while giving direction and structure to the phases and projects which follow.

This first phase, entitled The Textualized Landscape, may be seen as comprised of a series of sculptural elements, spaces and experiences that also function programmatically. The proposed plan is conceived of as a series of spaces for events of varying scale—from the singular contemplative space to the accommodation of film and performance audiences varying from 40 to 2,400.

The Textualized Landscape melds the concepts of spectacle, site and text into a public space which expands the museum's capacity for outdoor programs. Engaging ideas of history,

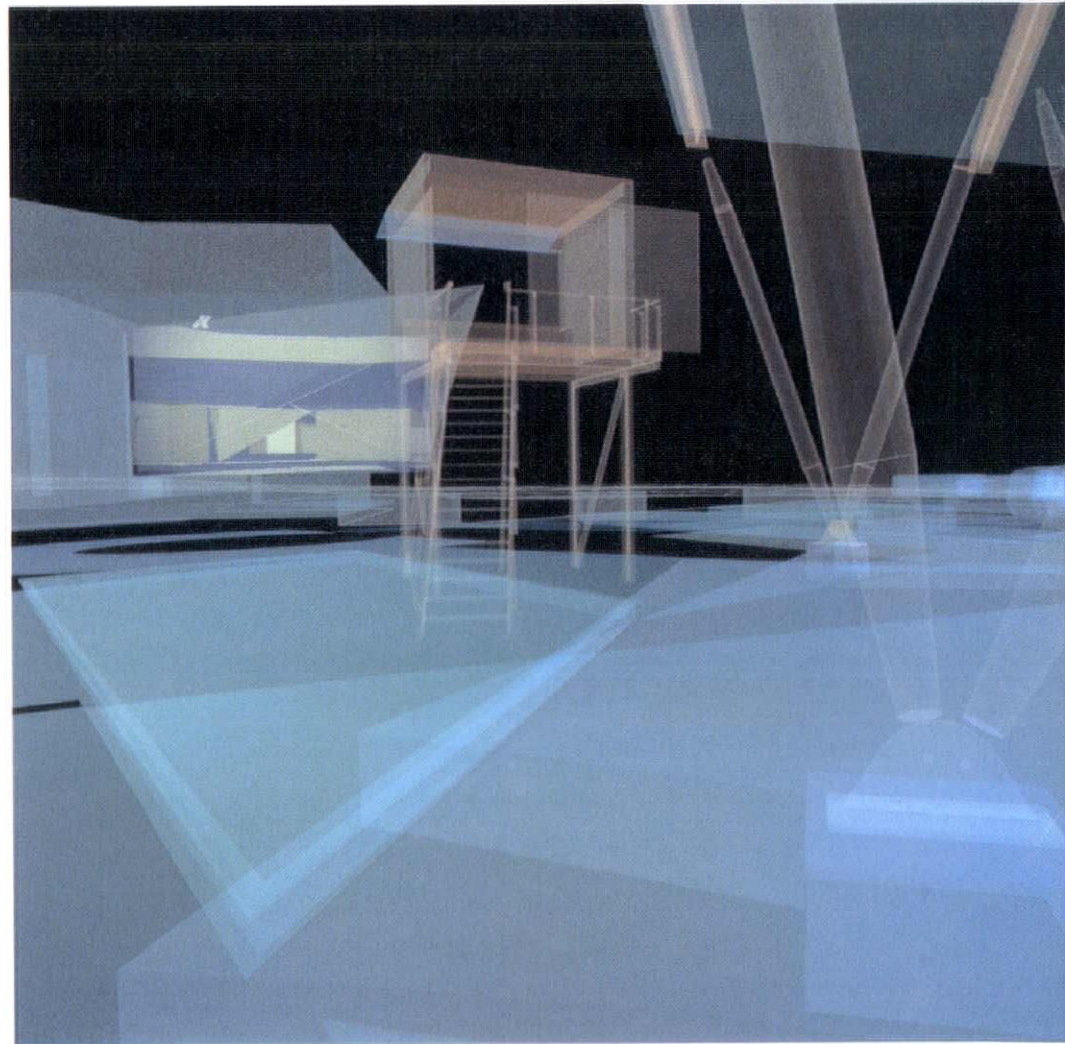
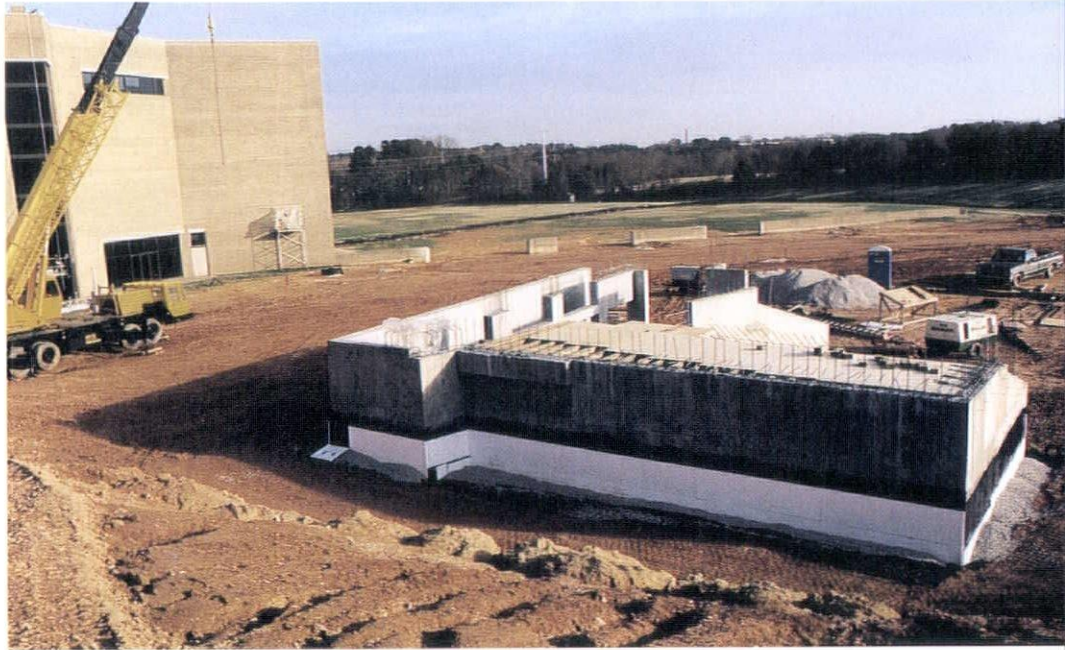
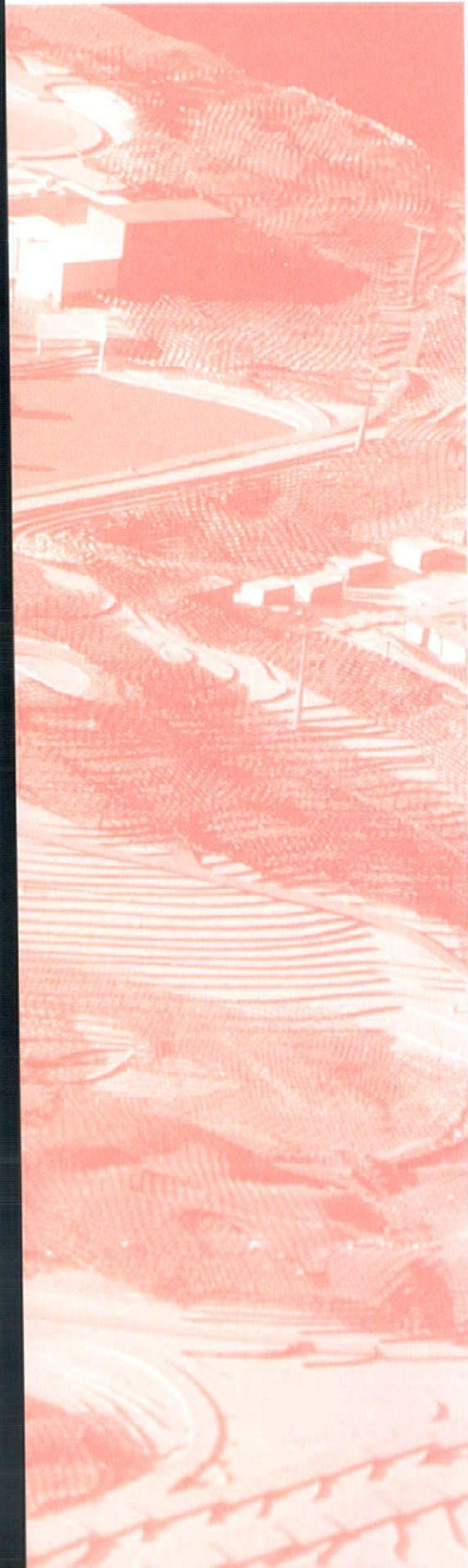
culture, geography, and topography, this public space provides an accessible place for a variety of experiences in the landscape. The big roof accommodates an intimate outdoor gathering under one roof. Its sculptural form provides an identity and focus for the amphitheater in the landscape. The aluminum and steel structure of the big screen attached to the museum is 40 by 60 feet, and angled for viewing from the sloped landscape. The cinema accommodates 1200 with an overflow area of an additional 1200 in adjacent areas. The renaturalized landscape incorporates principles in the Master Plan such as reforestation, grove and temporary plantings. These plantings illustrate aspects of Raleigh's natural and cultural history. In addition to the native wildflowers used on the hillside, agricultural crops such as cotton, corn, or tobacco will be planted.

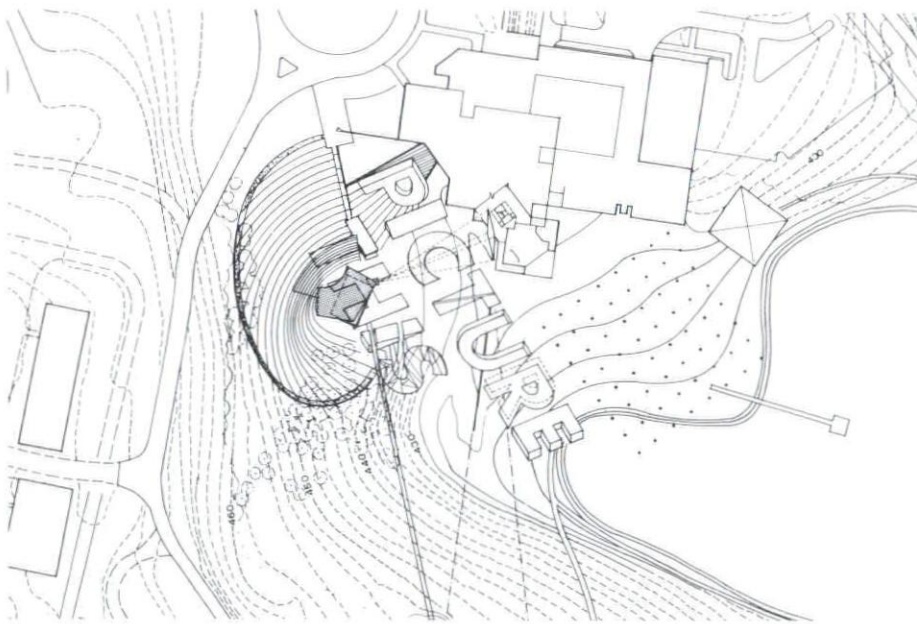


In collaboration with:
Barbara Kruger, Artist
Nicholas Quennell, Quennell Rothschild
Landscape Architects

左上 屋外劇場の屋根、模型写真
左下 文字「P」の南側控え壁、実施図
右上 建設中の「T」
右下 コンピュータ・アニメで見る屋外劇場の舞台

Opposite page, Top, Model view of amphitheater roof.
Opposite page, Below, Construction drawing showing letter
"P" south retaining wall.
Top, View of "T" under construction.
Below, Computer animation view showing amphitheater
stage.





In collaboration with:
Barbara Kruger, Artist
Nicholas Quennell, Quennell Rothschild
Landscape Architects

テキスト化された風景の材料

The materials of the TEXTUALIZED LANDSCAPE are:

- P** 堀込み
底面砂利敷き
控え壁は化粧コンクリート
壁面にテキストをサンドブラストで書き込み
壁面はウォッシャー・ライトで照明
- I** スクリーンにむけた着席用スロープ
コンクリート製
- C** スクリーンの着席部分
競技場用素材
平滑な芝生
コンクリートで縁取り
ビーム・ライトで照明
- T** 付帯施設/受付部分
アスファルト仕上げ
ペイント線引き、反射板
- U** 堀込み
芝生と芳香性植物による景観
埋め込み照明
- R** 表面は霧で覆う
表面は石、縁取りは川岩
池から汲み上げた水をスプリンクラーで霧状散布
- E** レンガ積み、高さ6フィート
部分的にテキスト書き込み
下部照明で縁取り
- T** 見晴らし台
礎石敷き、屋外劇場の着席部分
付帯施設/受付部分
下部は手洗い、倉庫、照明制御室
内部は現場打ちコンクリート、石状仕上げ
- H** 大屋根にはスカイライト
下部は舞台への荷解き部分
スカイライトは半透明並板
下部舞台は現場打ちコンクリート
荷解き部分は、杉板張デッキ
照明で縁取り
- I** 大スクリーンへの傾斜着席部分
コンクリート埋め込み
- S** 乾燥性植物、石、小石の混合

- P** An excavation
Ground is gravel
Retaining wall of landscaped concrete
Sand blasted text imprinted in wall face
Wall is washed with lighting
- I** Sloped for seating to the Screen
Imprinted concrete
- C** A seating area for the Screen
Playground surface material flush with grass,
Detailed with concrete edge
Pool lights throw beams of light
- T** A concession/reception area
Finished asphalt
Painted lines and reflectors
- U** An excavation
Landscaped with grasses and aromatic vegetation
Ground lighting
- R** A misted surface
Stone lined with river rock
Sprinklered with misting water from the pond.
- E** A constructed letter
Built up with brick, 6 feet high
Some areas inscribed with text
Perimeter lighting at the base
- T** An overlook
Paved in stone and forming the amphitheater seating
A Concession/Reception area
Lavatories, storage, lighting controls room underneath
Poured concrete with stone face at interior
- H** A Skylight at The Big Roof and loading dock below for stage
Skylight -corrugated Fiberglass translucent material
Stage below is poured concrete
Loading dock is cedar wood decking with edge lighting
- I** A sloped seating area for the Big Screen
Imprinted concrete
- S** A constructed letter
Rock out-croppings, stone boulders



Top, NCMA Plan view.
Bottom, View of "T" under construction.
Opposite page top, NJIT Plan.
Opposite page bottom left, Model of stair.
Opposite page bottom right, Computer generated drawing showing view from stair landing.

左上：NCMA平面図
左下：建設中の「T」
右上：NJIT平面図
右下左：階段模型
右下右：階段踊り場から見た風景

アトリウムと屋外劇場 (ニュージャージー工科大学建築学部棟)

Entry Atrium and Amphitheater
The School of Architecture at the New Jersey Institute of Technology
Newark, United States, 1993

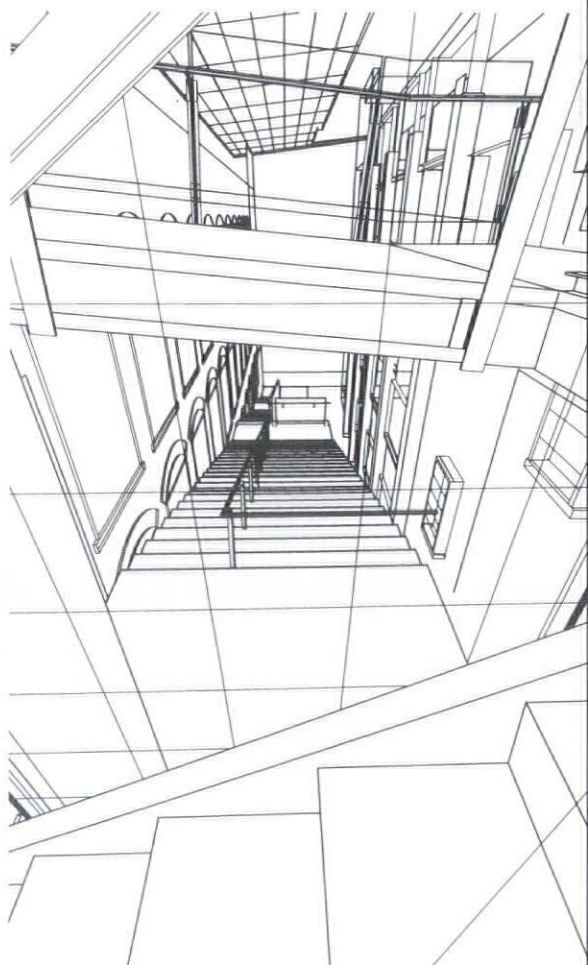
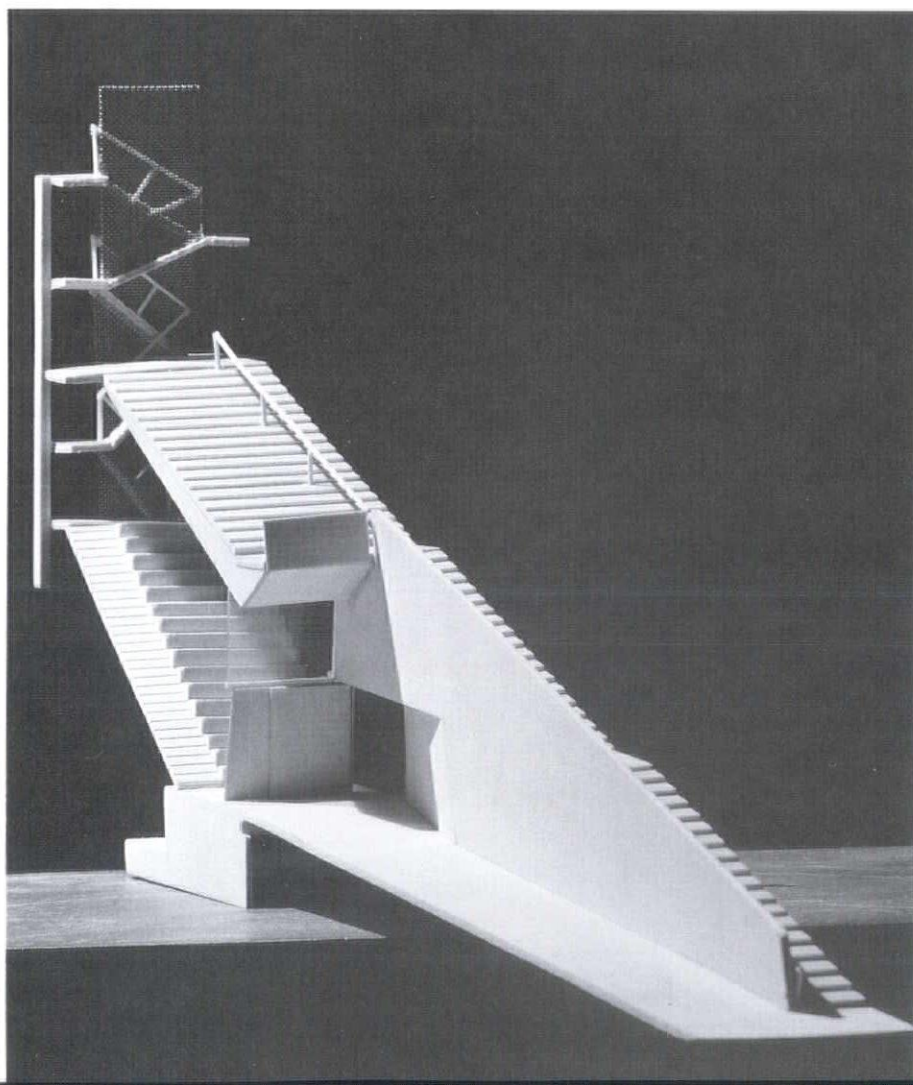
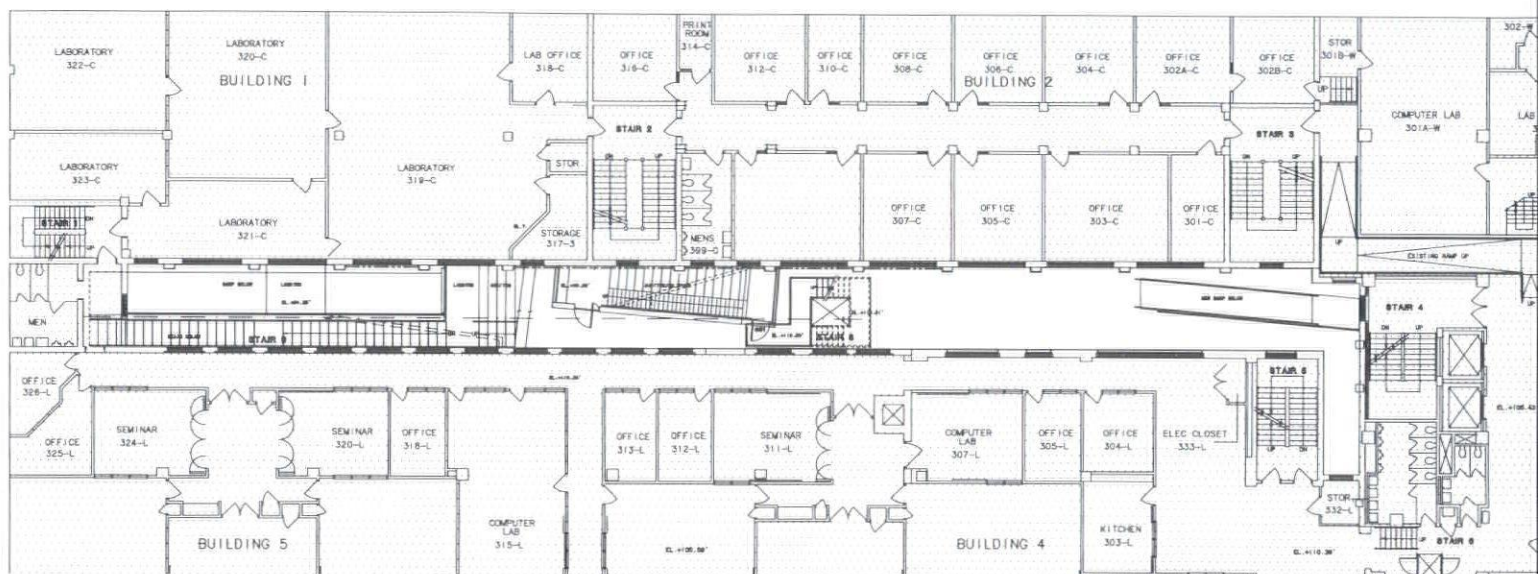
Architect: Smith-Miller + Hawkinson

この大学では3つの学部が、あまり計画的に建てられたようには見えないいくつかの建物や中庭を、雑然と占めている。こうした建物は、過去100年にわたって建て増しされてきた。新たな吹きさらしの入口は、ばらばらだった大学の建物を結び付け、垂直の「キャンパス」を形成するものだ。

階段と斜路の「あいだ」の空間は、小さな講義室にあてられる。上部で幅広になっている階段は、学生と教職員の出会いの場を提供している。階段と斜路はスチールとコンクリートで組み立てられていて、傾斜したスカイライトがかけられている。組み合わせや組立ての技術が「教育的」にも、目に見えるものとなっている。

Three departments occupy parts of several buildings at the Institute in a seemingly unplanned manner, and share a courtyard. These separate structures have been joined over the last 100 years. The new open air entry courtyard, stair and ramp unites the diverse components of the Institute and providing a vertical "Campus"

The space "between" stair and ramp is occupied by a small student lecture hall. The stair widens at an upper level to offer a stepped meeting place for students and faculty. The stair and ramp are fabricated of steel and concrete and are covered by a large inclined skylight. Assembly and fabrication techniques are "didactically" exposed to view.



マクスミン・ハウス

Maxmin House

Pennsylvania, United States, 1993

Architect: Smith-Miller + Hawkinson

芸術家、建築家／建築史家、技術家、それに建築家からなる協働は、慣習的な設計過程を吟味するものだった。週末住宅の設計は一般的に、建築家／施主の関係によって進められる社会的課題を目的とした、ひとつの探求だが、芸術家、建築家／建築史家、技術家、それに建築家からなる集団的な建築家／施主の協働は、設計過程そのものの反省的な批評となった。

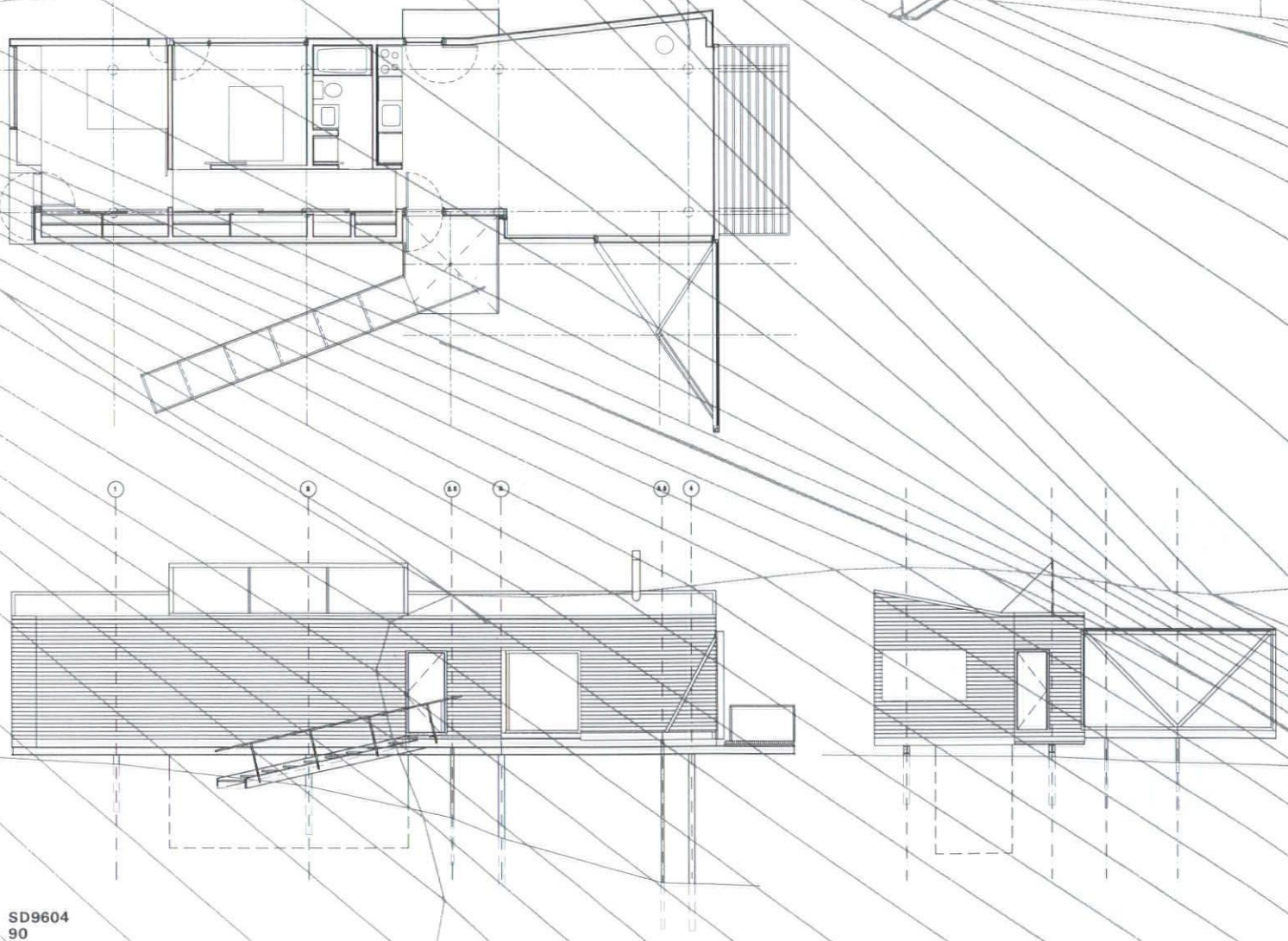
モダニスト住宅の先例と多様な設計手法が参照されるとともに、疑問に付され、都市生活者にふさわしい今日的な田園住宅の解に到達すべく、努力が重ねられた。

両親、子ども、歴史家、芸術家、技術家、建築家、それに施工者の交渉の結果は、合意（極小化／ミン）と過剰（極大化／マクス）を表すデザインとなった。

This collaboration between artist, architect/historian, engineer and architects, tests the conventions of the design process. While the design of the weekend house is generally an endeavor whose aim is a known social agenda, driven by the architect/client relationship, the collaboration of artist, architect/historian, engineer, and architects as collective architect/client results in a reflexive critique of the design process itself.

Modernist domestic antecedents and diverse design methodologies were both referred to and questioned in an effort to arrive at an idea of a contemporary rural house suited to urban dwellers.

The negotiated relationships of parent, child, historian, artist, engineer, architect and builder result in a design representing both consensus (minimization), and excess (maximization).



PROJECT CREDITS:

Partners in Charge, Laurie Hawkinson, Henry Smith-Miller
 Corning Glass Exhibition and Visitors Center Complex
 Phase 1:Project Architect:Eric Cobb, Project Team:Peter Cornell, Lawrence Ko, Virginia Navid, Brian Oster
 Phase 2:Project Architects:John Conaty, Paul Davis, Ingall Wahlroos, Project Team:Eric Cobb, Philip Coenen, Simon Eisinger, Michael Hirsch, Ferda Kolatan, Oliver Lang, Christian Lynch, Akira Okaji, Flavio Stigliano

Imperfect Utopia

Master Plan:Associate Architect:Frank Harmon, Project Architect:Annette Fierro, Project Team:Knut Hansen, Peter Morgan, Jennifer Stearns, Ruri Yampolsky, Kit Yan
 Phase 1:Project Architect:John Conaty, Project Team:Bennet Dunkley, Michael Hirsch, Virginia Navid, Brian Oster, Mauricio Villarreal

New Jersey Institute of Technology Stair and Atrium

Project Architect:Eugene Harris, Project Team:John Conaty, Bennet Dunkley, Michael Hirsch, Brian Oster

Maxmin

Project Architect:Eric Cobb, Eugene Harris, Project Team:Jan Greben, Lawrence Ko, Virginia Navid

LA Arts Park

Project Architect:Knut Hansen, Project Team:Jorge Aizenman, John Conaty, Annette Fierro, Alexis Kraft, Peter Morgan, Jennifer Stearns, Mauricio Villarreal, Ruri Yampolsky, Kit Yan

Photographs by Henry Smith-Miller and Paul Warchol Photography



In collaboration with:
 Kenneth Frampton,
 architect/architectural historian
 Silvia Kolbowski, artist

左上：床平面図

左下：南立面図

中：西立面図

下左：南西からの眺め

下右：模型

Opposite Page Top, Floor Plan.

Opposite Page Bottom, South Elevation.

Middle, West Elevation.

Bottom Left, View from Southwest

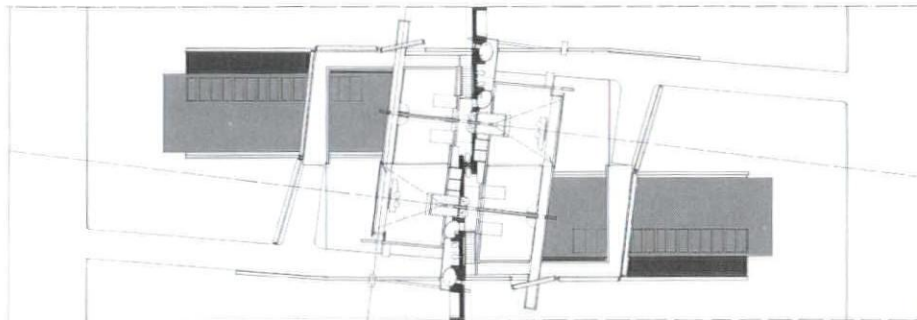
Bottom Right, View of Model from below.

「視覚限定性(サイト・スピーシフィック)」 住宅のルール展

"Sight Specific," House Rules Exhibition

Wexner Center for the Arts, United States, 1994

Architect: Joel Sanders

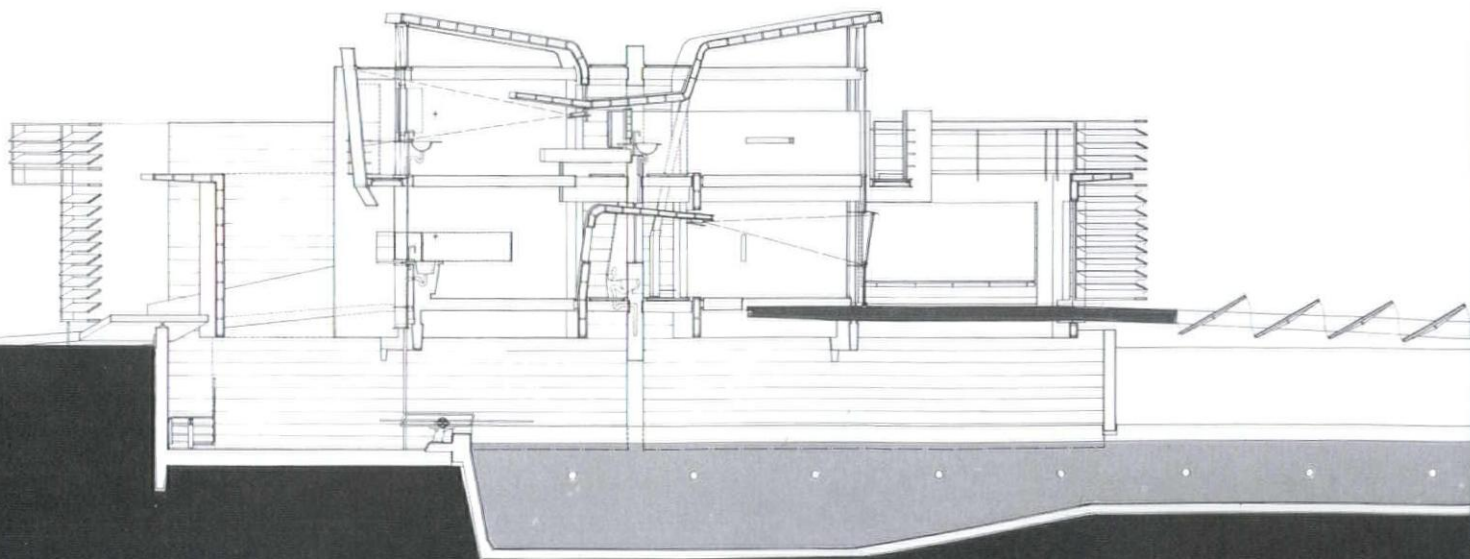
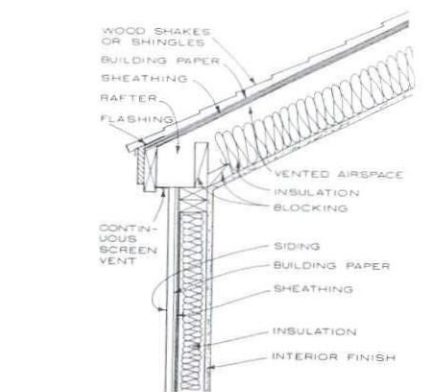


家の中の視線

建物や、あるいはそれを表象するために作られるドローイングや模型もそうだが、これらは鑑賞者と呼ばれる、それを見る者の視線にさらされる客体=物体だと、普通考えられている。われわれの計画ではさらに、建築はたんに見られる対象としてだけでなく、「いかに」われわれが見るか——ものであれ、風景であれ、人であれ——を制御する道具としても考えられている。ここに示すふたつの計画——ひとつはアイデア上のもので、もうひとつは実際に建てられたもの——は、家庭的な建築が、視覚的、身体的、社会的関係をいかに「フレーム」し、規定しているかを見極めながら、見ることと住まうことの問題を、あらためて問題にするものである。

Domestic Visuality

Buildings, as well as the representations that we make to describe them—drawings and models—are normally conceived of as objects presented to the gaze of a viewing subject, the spectator. Our work considers architecture not only as objects to be looked at but as instruments that regulate "how" we look at objects, landscapes, and people. The following two projects, one speculative, the other built, interrogates issues of visibility and the dwelling, exploring how domestic architecture "frames" and prescribes scopic, physical, and ultimately social relationships.



ウェクスナー・アート・センターで開催された「住宅のルール」展に招待出品することになったが、この展覧会は、典型的なディヴェロッパー・タイプの住宅を念頭に置きつつ、家の中の視線というテーマを追求するものだった。郊外住宅とは、それを見る主体の客体＝ものである——見せびらかしの場所だ——とともに、そこへの視線を統御するレンズでもある。住宅の前面——芝生や小路に駐車した自動車、それにファサードや、内部、つまり表向きの居間や食事室に向かう視線を注意深くフレームする「ピクチャ・ウィンドウ」からなっている——とは、見せびらかしの主要な場所だろう。

住宅はまた、そこからの視線を窃視的に統御し、われわれが「いかに」見るかを、決定しているものでもある。普通はシンクのうえに取り付けられ、裏庭を向いているキッチンの窓は、日中、昔ながらの主婦が雑務をこなしながら、外と中で何が起っているかを見渡せるものであり、そうすることで視線による統御の場所としてしつけられている。一見しただけでは、住宅の外皮は視線の侵入を妨げ、パブリックとプライベートのあいだの明白な境界をはっきりと強化しているように見える。だが実際には、それは不安定な視覚的境界なのだ。夜ともなれば、窓は、近隣や通り過ぎる人の窃視の視線を受け入れる覗き穴となろう——ヒッチコックの「裏窓」効果である。

住宅の中心と周縁の両方に介入しながら、われわれの計画は、郊外住宅の外皮にあらかじめ書き込まれている空間／視線の関係、それゆえパブリック／プライベートの関係に光をあて、最終的にこれら

の関係を再・配列することを試みている。

境界壁と前に出た裏庭

『ホーム・プランナー・マガジン』誌に描かれているような、典型的なディヴェロッパー型住宅の最近の傾向は、パブリックな前面とプライベートの背面の乖離を強化している。平面計画はふたつの平行な層からなっていて、前面の層は、表向きの居間と食事室で占められ、これらはもっぱら休日や非日常的な催事に使われている。いっぽう家族の生活は、車庫から入って、空間的に連続したキッチン／家族室にある。

我々は、ディヴェロッパー住宅のとって付けたような前面の層を、裏庭に置き直すことにした。標準的な郊外住宅地が、こうして共有の境界壁によって、ともに裏庭側から結合され、郊外＋都心的なハイブリッドな状態が生み出される。

ディスプレイとしてのファサード

前面ファサードは、裏庭と前庭芝生を分ける挑発的な皮膜として機能している。見せびらかしという昔からの役割はそのままに、それは車をフレームし、また道から見える、大きなメディア・プロジェクションともなっている。ベネシャン・ブラインドのように動くルーヴァーは、裏庭と芝生の前庭、パブリックとプライベート空間の視覚的／空間的連続の程度を、居住者に操作可能なものとしていよう。

境界に住まう

建物の外皮はふたつに分けられ、内層と外層のあいだに居住ゾーンが形成される。このゾーンはまた、さまざまな居住のプログラム——1階における車庫、入り口／階段室、化粧室、競泳プール、それに上階

における水まわりとトイレ、見晴らし台——を配している。この隣り合った結合部分は、視覚的、物理的な干渉を引き起こそう。透明／半透明の開口は、隣人と車の運転手とのあいだに、視覚的な交わりを引き起こし、室内の仕切の窺みは、隣家の寝室とトイレのあいだに、空間的な重なりを生み出すだろう。

視線の軸

直行するふたつの視線の軸は、1階と2階を貫いており、周辺の眺めをフレームしている。視覚的な統御の因習的な場所としてのシンクを強めることで、住宅の内部／外部の行動を360度監視できるだけでなく、隣家をも監視できる地点となろう。隣家のテレビの光は、境界壁にかけられた半透明の窓を通して、見ることができる。上下の配管が、キッチンのシンクと、上階の主寝室の化粧用シンクを繋いでいる。この位置からは、正面の窓を通して、通りの実際の風景とともに、そこに映し出されたメディアの映像をも見る事ができよう。寝室を分けている二重間仕切り壁は、隣家をつきつて向こう側の風景を見えるようにしている一方、夫婦のベッドを真っふたつにしているのだ。

「隣り合う」競泳プール

競泳プールは、外から入ることができる地下室にあり、境界壁を貫通し、隣家の下をくぐり、水泳者が隣家の居間空間に参加するようになっている。上部は「芝生」になっており、プールの蓋とともに、開閉可能なスカイライト・パネルになっている。

The invitation to participate in House Rules, an exhibition at the Wexner Center for the Arts, offered the opportunity to elaborate the theme of domestic visibility in terms of the typical developer home. The suburban house is simultaneously an *object* for the viewing subject to look at—a site of display—as well as a *lens* which controls the look. The front of the house is the principal site of display; it is composed of the lawn, the car parked in the driveway, the facade, and the “picture window” that carefully frames views into the interior—the formal living and dining room.

The house is also a frame which defines “how” we look, regulating a domestic gaze, both controlling and voyeuristic. During the day, the kitchen window, usually placed above the sink and oriented toward the backyard, marks a site of scopic control, traditionally allowing the mother to survey the internal and external activities of the house as she performs domestic chores. While at first glance the house’s enclosing surfaces resist scopic intrusion, ostensibly reinforcing the clear demarcation between public and private, they are in fact, unstable visual boundaries. At night, windows become apertures permitting the penetration of the voyeuristic gaze of neighbors and drivers—Hitchcock’s “Rear Window” effect. Intervening both at the center and the margins of the house, our project highlights and ultimately attempts to re-configure the spatial/scopic and consequently public/private rela-

tionships already inscribed within the enclosing surfaces of the suburban house.

The Party-wall and the Front Backyard

The recent evolution of the typical developer home, as illustrated in “Home Planner Magazine,” reinforces the split between public front and private rear; the plan is composed of two parallel layers—the formal living and dining room, mainly used on holidays and ritual occasions, occupy the front layer. The life of the house takes place in the spatially continuous kitchen/family room, entered from the garage, which occupies the back layer.

We removed the appendix-like front layer of the developer home and replaced it with the backyard. The standard suburban lot now accommodates two houses joined back-to-back by a shared party-wall, producing a hybrid suburban/urban condition.

The Facade as Display

The front facades serves as the contentious shared membrane between the yard and the lawn. Perpetuating its traditional role as display surface, it frames the car and sponsors media projections from a large projection screen visible from the road. Operable louvers work like Venetian blinds, allowing the occupant to regulate the degree of scopic and spatial continuity between yard and lawn, public and private space.

Inhabiting the Boundary

The building envelope is pulled apart, creating an inhabitable zone between its inner and outer layers, activated by a variety of domestic programs—the garage, entry/stair hall, powder room, lap pool on the first floor and circulation bathrooms, and surveillance porch above. This

shared interlocking zone promotes both scopic and physical interaction. Transparent and translucent apertures encourage scopic transactions between neighbors and drivers. Folds in the interior membrane penetrate the party-wall, producing spatial overlaps between neighbor’s bedrooms and bathrooms.

The Viewing Axis

Two viewing axis, crossing at right angles, cut through the first and second floor, to frame views of the surrounding site. Reinforcing the sink as the traditional site of scopic control, it becomes a 360 degree vantage point from which to monitor not only the internal/external activities of the house, but the neighbors as well. The glow of the neighbors television screen is visible through a translucent window cut in the party-wall. A vertical plumbing line links the kitchen sink with the vanity sink in the master bedroom above. From this location, the window of the front facade affords actual views of the street as well as televisual views created by projections on its surface. A double partition, dividing the bedrooms, intersects the matrimonial bed, offering uninterrupted views across adjoining properties.

The “Neighboring” Lap Pool

A lap pool, accessible from the outdoor “basement” of one house, intersects the party-wall and passes beneath the adjoining house, allowing swimmers to share the living space of their neighbors. Above, the “lawn” forms a pool cover, with operable skylight panels.

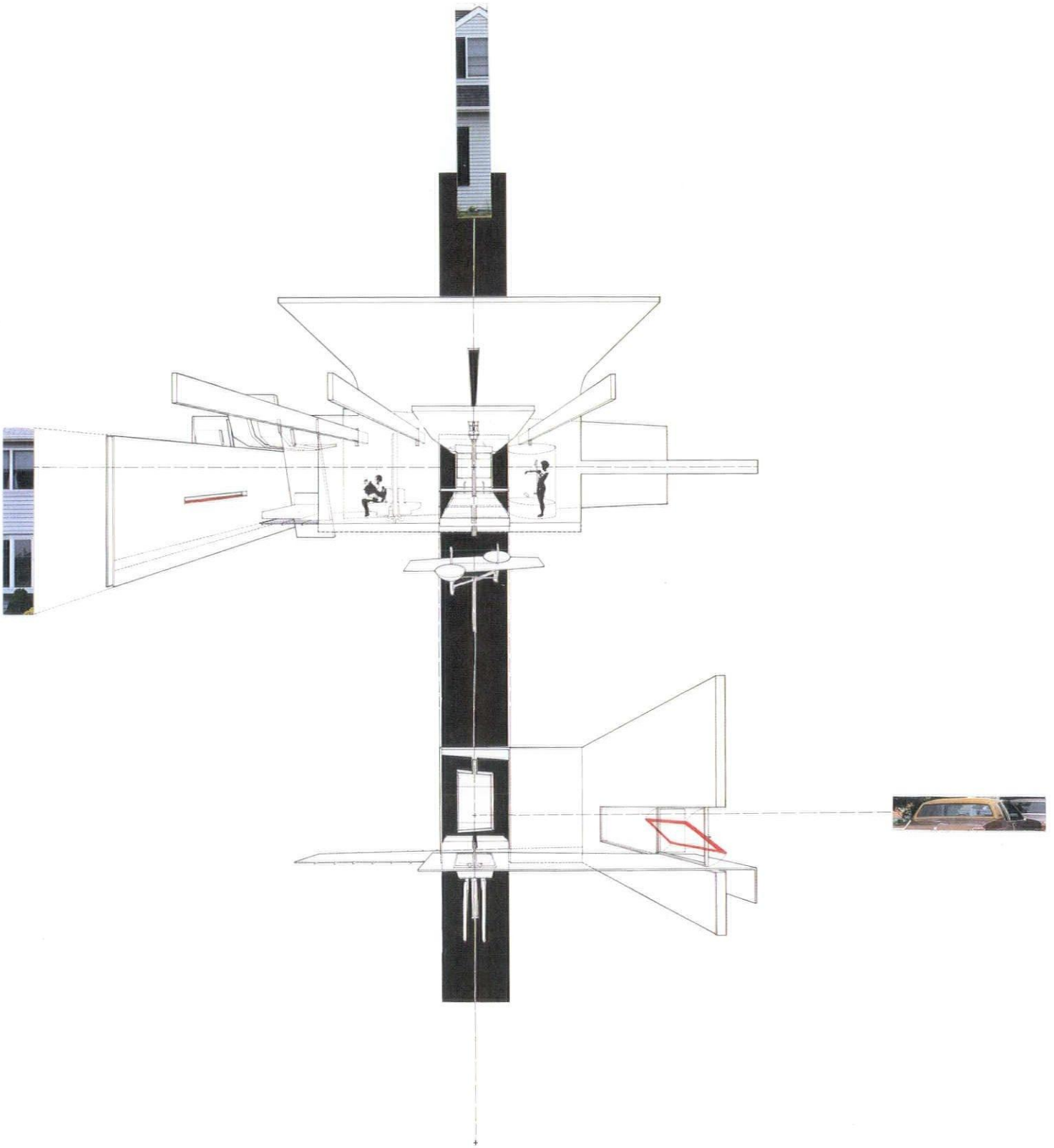
In Collaboration with:

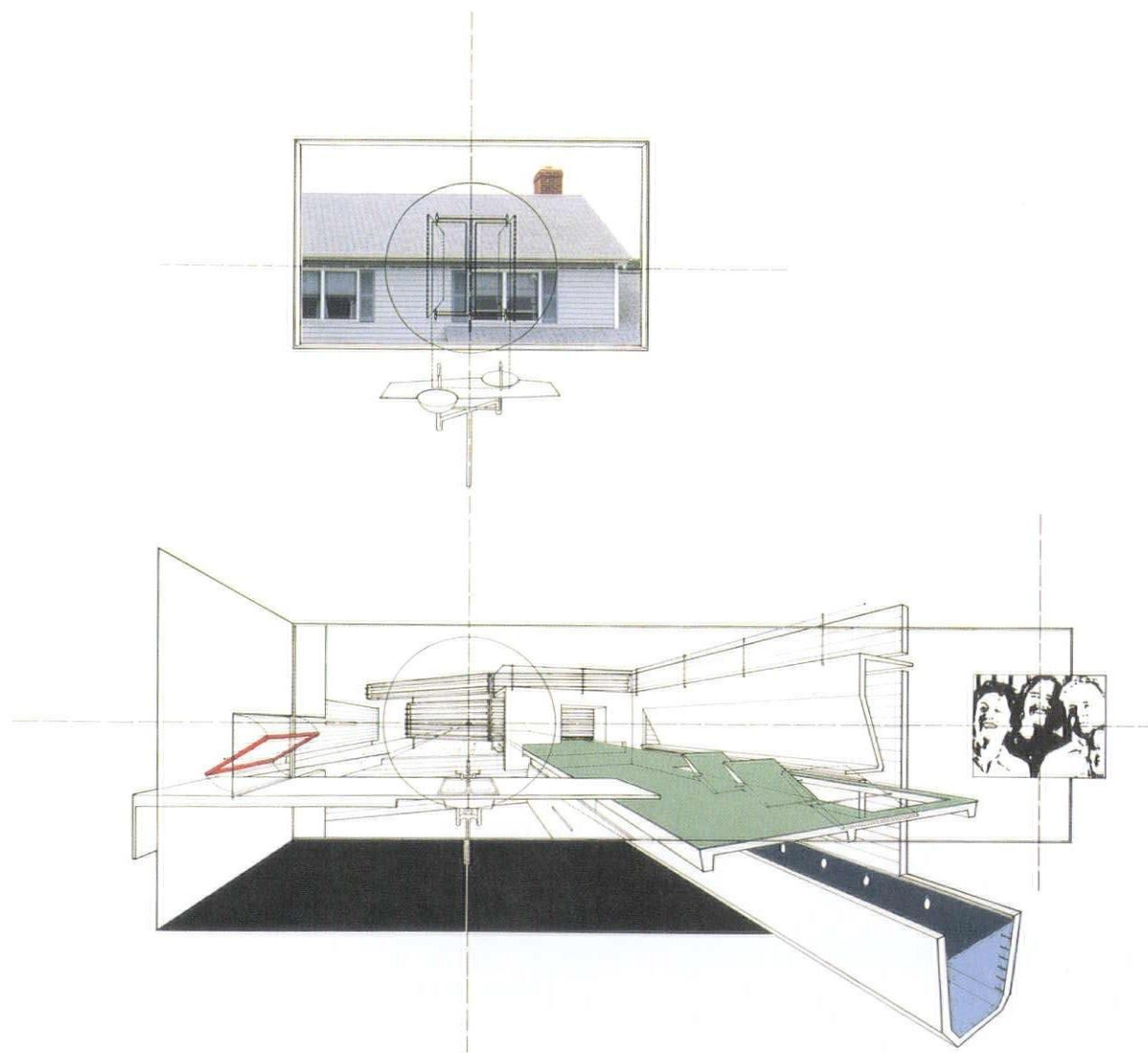
Marc Tsurumaki

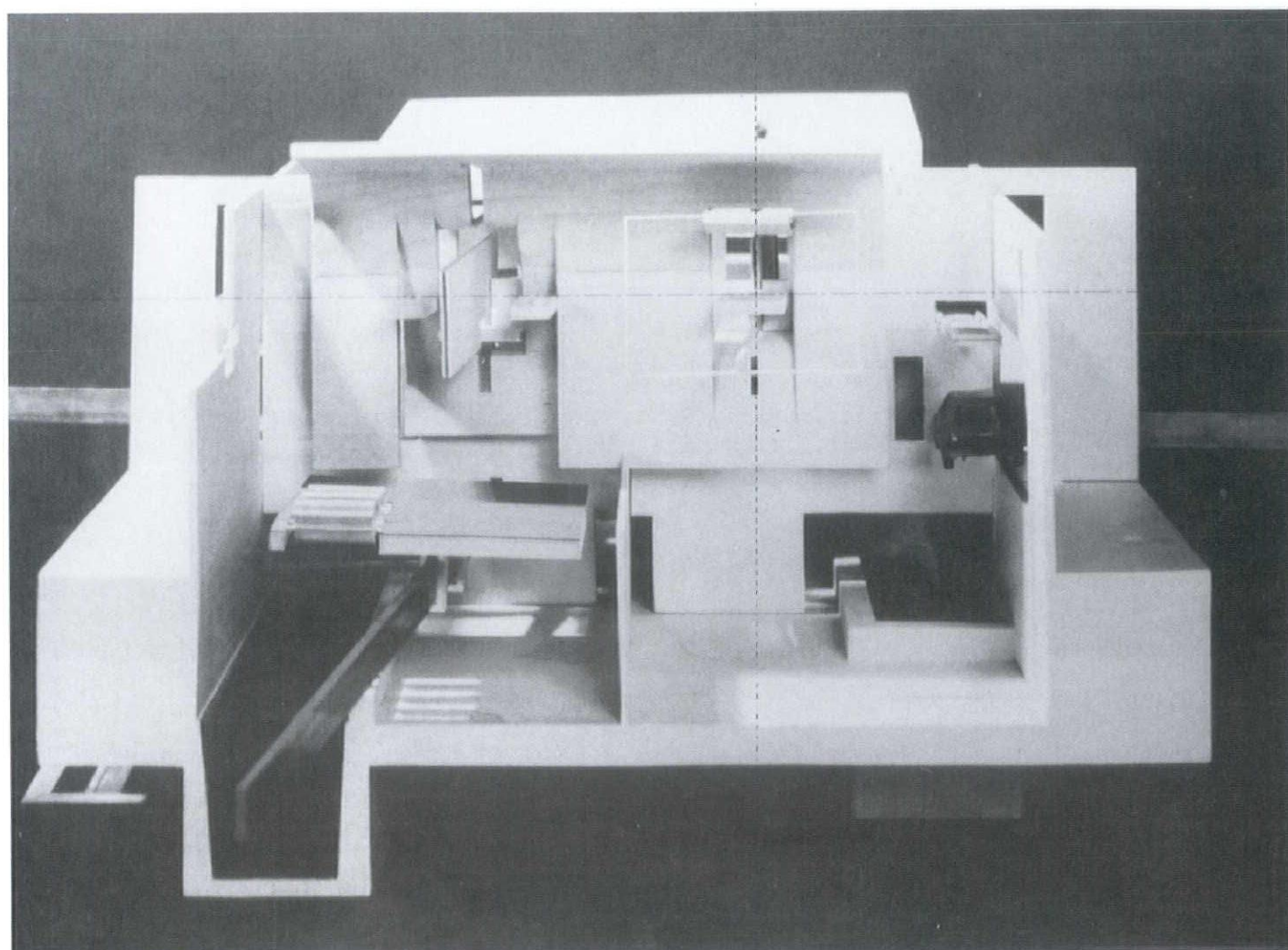
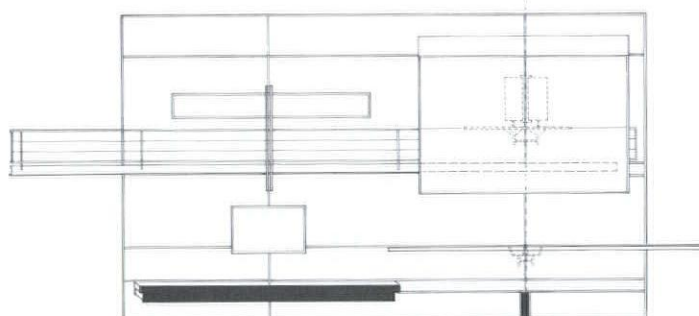
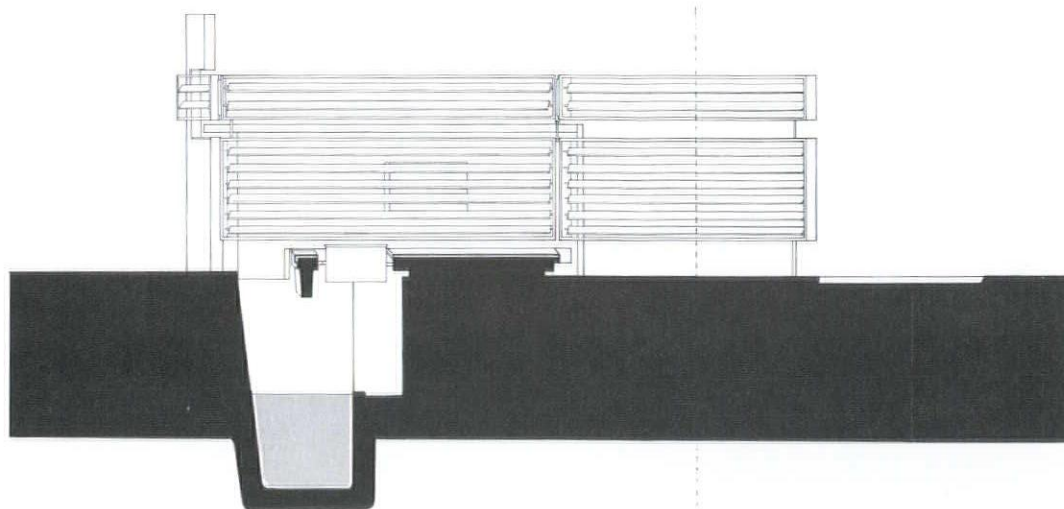
Jonathan Crary, Critic

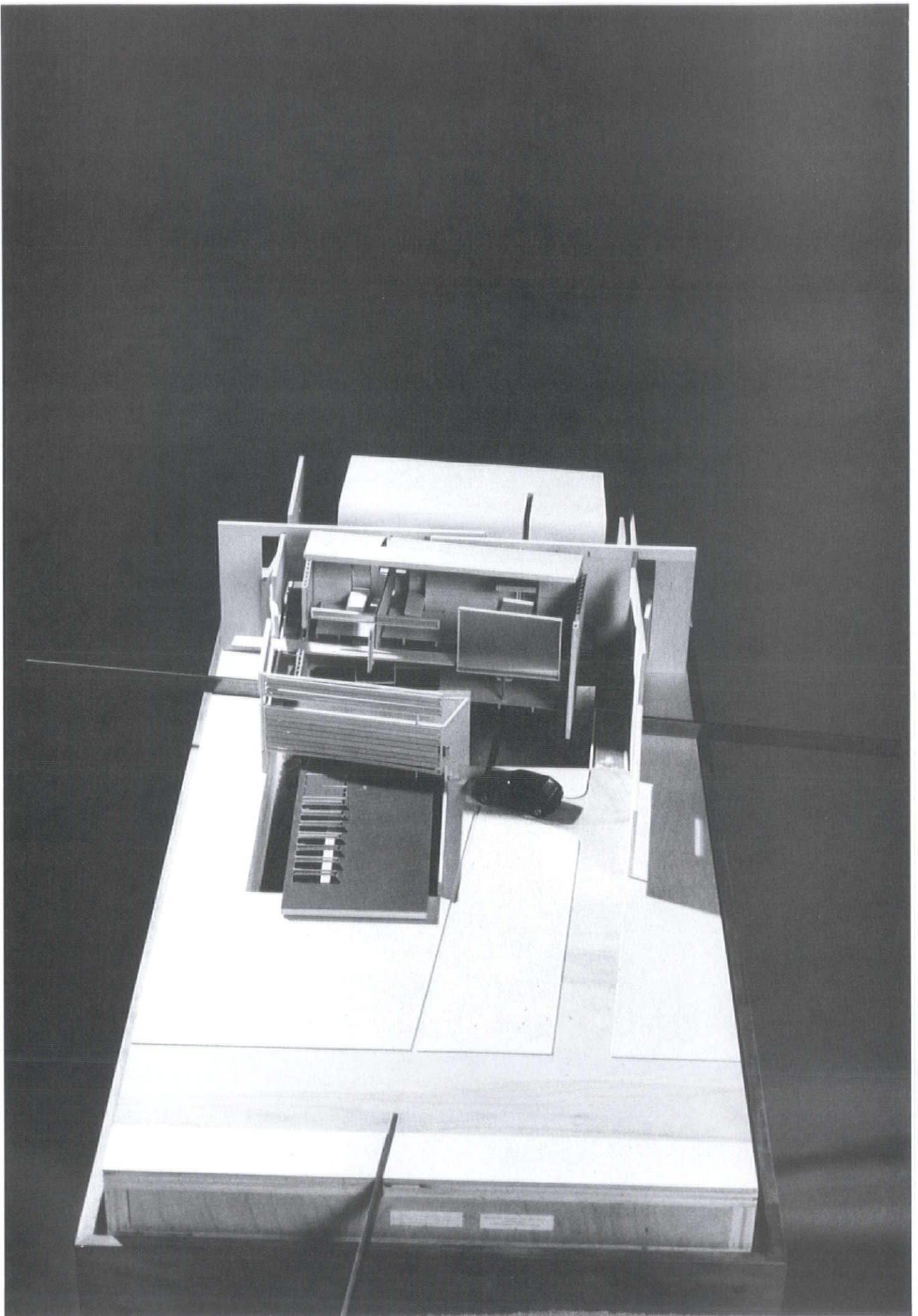
Project Team:

John Cays, Rachel Eberts, Helen Forgyson, Lisa Neely







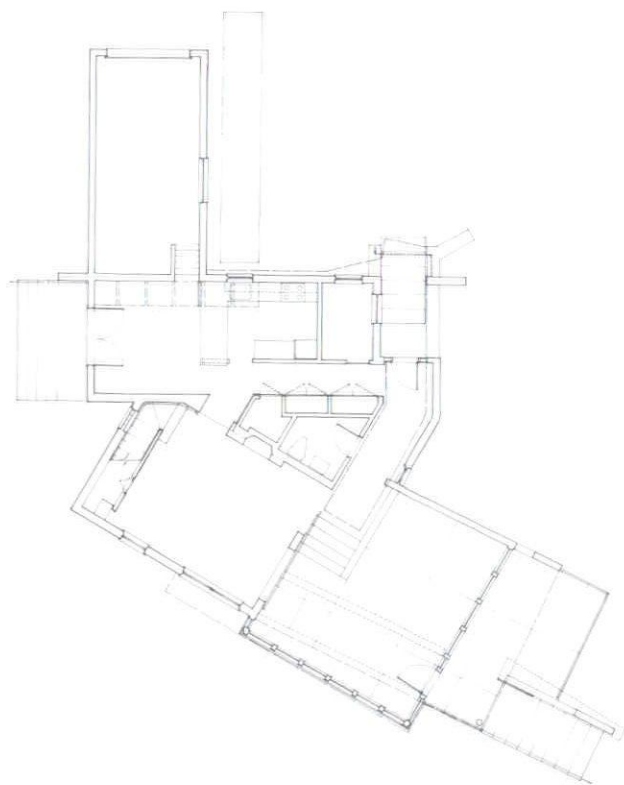
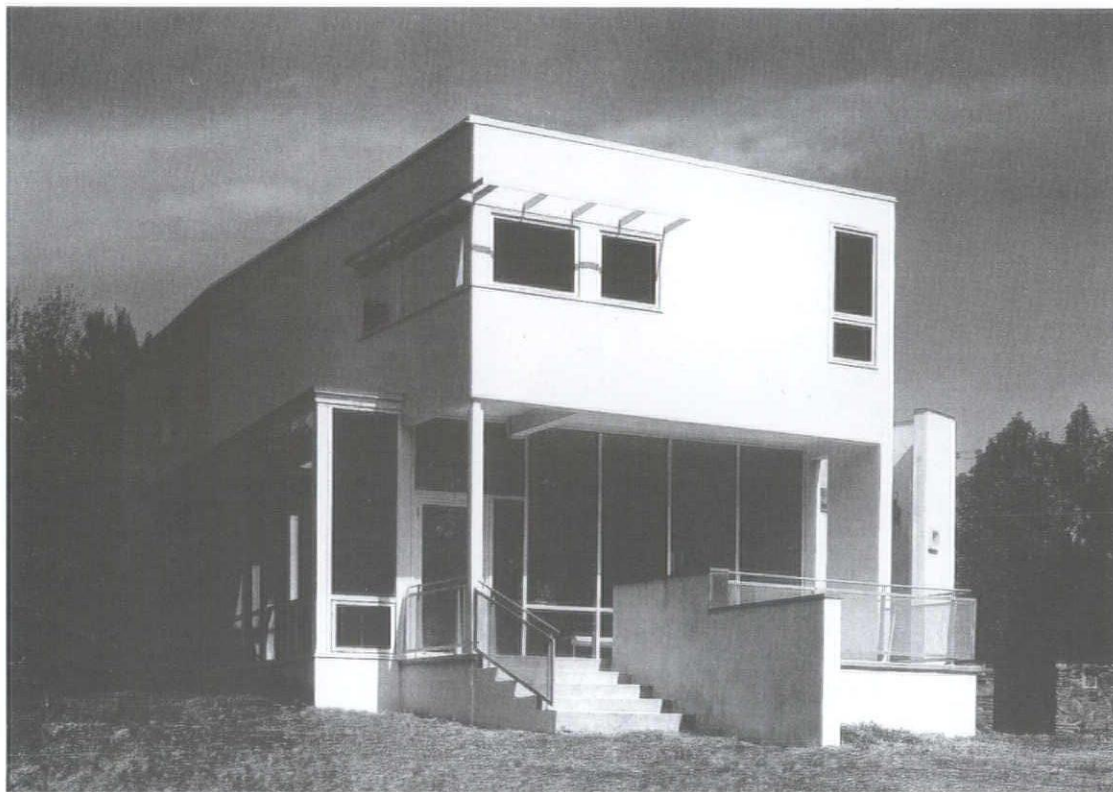


ペダーセン邸

Pedersen Residence

Lambertville, New Jersey, United States, 1994-95

Architect: Joel Sanders



ペダーセン邸計画は、アメリカの初期モダニストの画家、ビョ・ノルトフェルトが自力で作ったコンクリート製住宅の増築であり、なおかつ根底的な改築でもある。われわれはここで、家の中の視線というテーマを実際の建物でさらに探求する機会を、限られた予算ではあったが、得ることができた。

まず現存する平面計画を変え、中央にサービス・コアを持つ、ふたつの棒状形態とした。一方のウィングは通りに対して直角をなし、キッチンや食事室、

それに食事をするテラスがある。他方のウィングは、既存の小川に向かって折れ曲がり、居間や家族のための部屋がある。

開口部は、ガラスのカーテン・ウォールから装飾的なものまで色々あり、外部の自然の風景と、内部の家庭的な風景が重なるさまをフレームしている。

住宅に対して直角に走る、劇的な森の光景を捉えるため、天井高は2倍で、しかし幅が狭い通路状の空間を置いた。この空間は、東に視線がむくよう、望

遠鏡のように作用するだろう。既存部分と増設部分を繋ぎながら、このゾーンは階下の居間と階上の主寝室を統合している。外の景色を見たいという欲望は、内部の眺めをフレームする口実ともなる。視線の軸は主寝室を通っており、これはまたパブリックとプライベート、内部と外部空間を重ね合わせるものでもある。

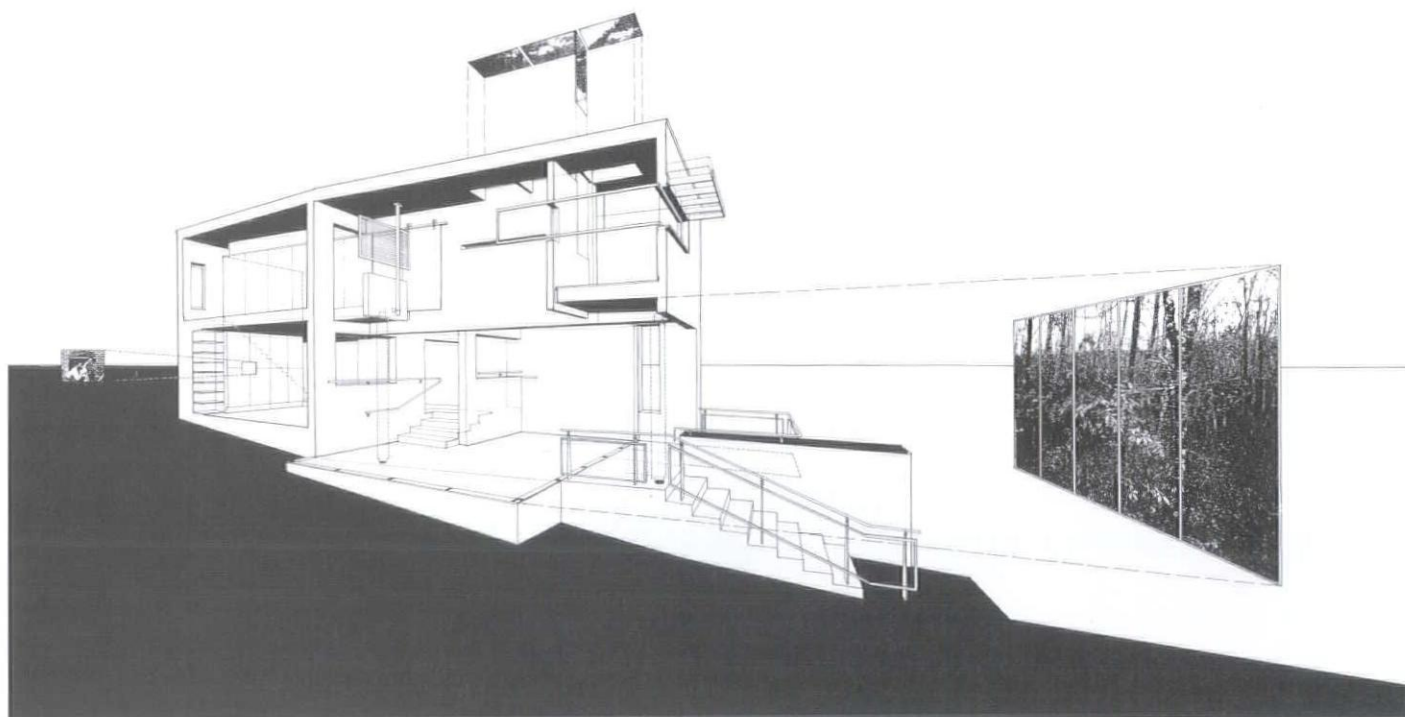
The Pedersen Residence, an addition to and gut renovation of a concrete house hand built by Bjo Nordfelt, an early American Modernist painter, provided the opportunity for us to elaborate the theme of domestic visuality in a built commission with a modest budget.

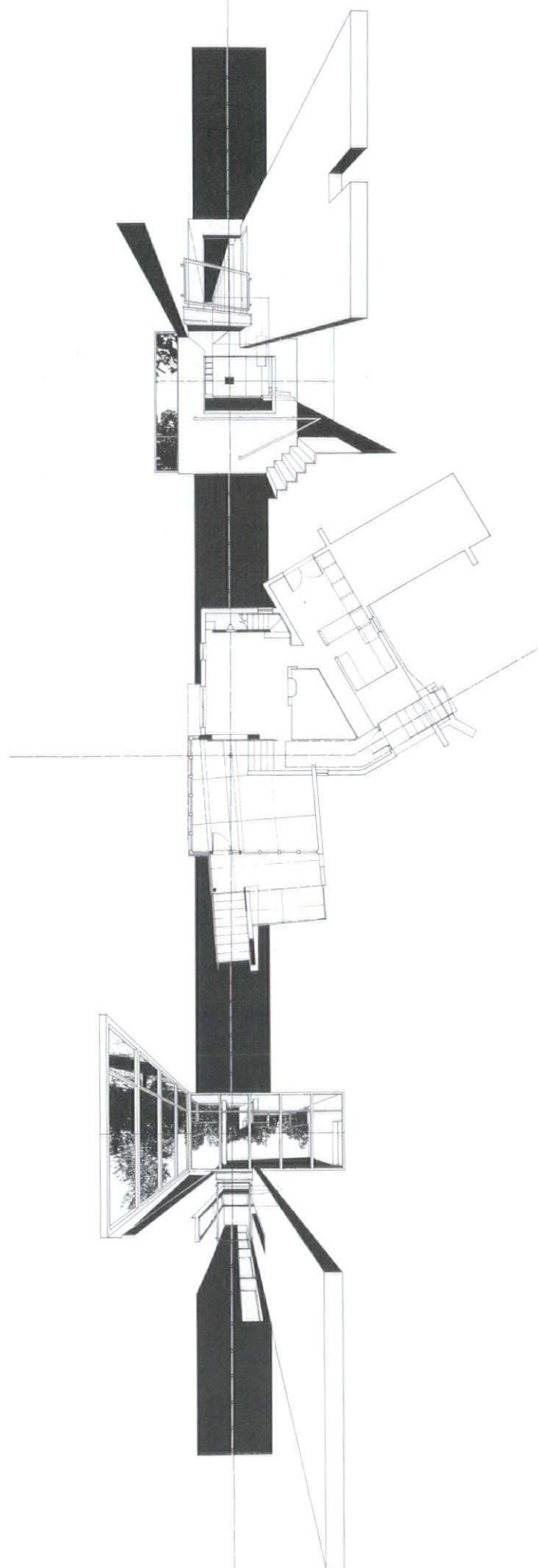
We modified the existing plan, reconfiguring the house as two bars joined by a central service core. One wing, perpendicular to the street, contains the kitchen, dining room, and

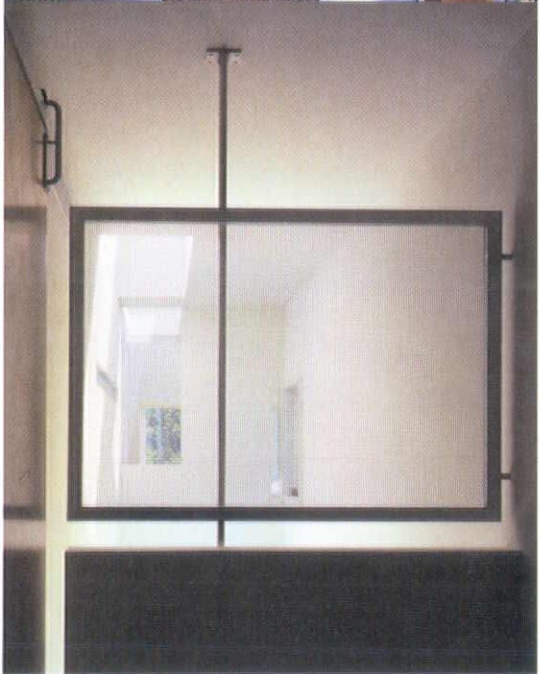
dining terrace; the other wing, inflected toward an existing stream, shelters the living and family rooms.

The project employs various kinds of apertures from glass curtain walls to figural openings to frame overlapping views of both the exterior natural and interior domestic landscapes. To capture the dramatic wooded view running perpendicular to the house, we introduced a double height slot of space that operates like a

telescope to orient the gaze in an easterly direction. Joining the old and new portions of the house, this zone integrates the living room below with the master bedroom above. The desire to see views of the exterior becomes the pretext to frame views of the interior; the visual axis passes through the master bedroom, superimposing public and private, interior and exterior space.







批評的な境界、あるいはモダニズム／

ミニマリズムからの逃走の線、スミス＝ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダースの建築への序

The Critical Boundaries, or the Escape Lines from Modernism／

Minimalism: An Introduction to the Architecture of Smith-Miller+Hawkinson and Joel Sanders

松畑 強

Tsuyoshi Matsuhata

1.
ビアトリス・コロミーナは、『プライバシーと広告』(邦題: マスメディアとしての近代建築、鹿島出版会から近刊)のなかで、近代建築に本質的なものとしての、「境界」の問題を論じている。

「近代では、こうした関係に変化があったのであり、伝統的な意味での内部、囲われた空間、外部への対立物として確立された内部というものは、失効してしまったのである。あらゆる境界はもはや変化しつつある。こうした変化はあらゆるところで明白だ。都市においてはもちろん、都市空間を定義づけているテクノロジーにおいても明らかだ」

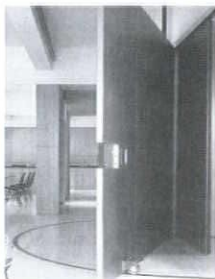
もちろん、「境界」が近代建築の問題のすべてだったということではないし、また境界の

問題は、20世紀的な都市／メトロポリスの問題と密接に結びついている以上、非・都市的建築における境界の問題は、また吟味が必要なのかもしれない。しかしながらコロミーナが指摘するように、境界は、近代建築における重要な問題のひとつだったのであり、近代は、境界をなし崩しにしていく一方では、「スクリーン」としての境界、親密なるもの／公共的なものを隔てる境界、あるいはシニフィエとシニフィアンを隔てる境界を、形成していったのである。

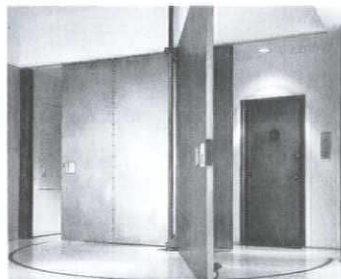
2.
スミス＝ミラー氏は、プリンストン大学で美術と美術史を、イエール大学とペンシルヴェニア大学で建築を学んだのち、リチャード・マイヤーのアソシエート・アーキテクトとして長らく勤務、1983年にホーキンソン氏と事

務所を設立し、すでにくつろぎの大学で教えている。ホーキンソン氏は、クーパー・ユニオンとカリフォルニア大学バークレー校で建築と美術を学び、ニューヨークの建築・都市研究所のディレクターなどを経て、スミス＝ミラー氏と事務所を設立、現在はコロンビア大学で教えている。

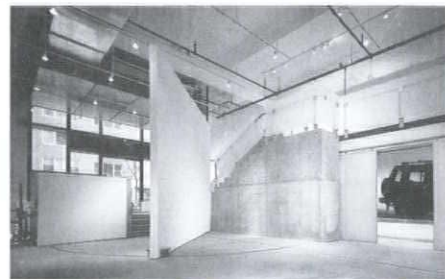
スミス＝ミラー＋ホーキンソン事務所は、アメリカではすでに名の知れた事務所で、そのきわめてソフィスティケートされたモダニズム(そして／あるいはミニマリズム)の美学を維持しているだけでなく、それらに対して批評的な立場をとっていると言えるだろう。アメリカの若手評論家、キャサリン・イングラムの言葉を借りるなら、問題はモダニズムに「対して」とか、モダニズムを「超えて」とかではなく、モダニズムの「中へ」、それもモダニズムが飽和点に到達するまでそれを加



1



2



3

1.
In her book *Privacy and Publicity*, Beatriz Colomina discusses the issue of "boundaries" as innate matter of modernism.

"With modernity there is a shift in these relationships, a displacement of the traditional sense of inside, an enclosed space, established in clear opposition to outside. All boundaries are now shifting. This shifting is manifest everywhere: in the city, of course, but also in all the technologies that define the space of the city."¹

Obviously, there are other matters to discuss in modernism besides "boundaries." As the issue of "boundaries" is closely related to the notion of "metropolis" in the 20th century, we

need to reapproach the issue when we examine un-urban structures. As Colomina points out, however, "boundaries" continues to be one of the most important topics in modernism. In the 20th century, the traditional notion of "boundaries" has been undermined. Instead, "boundaries" as "screens," limits between the private/intimate and the public, limits between signifier and signified, have been created.

2.
Mr. Henry Smith-Miller studied art and art history at Princeton University. Later, he studied architecture at Yale University and the University of Pennsylvania. He worked as an associate architect at Richard Meir's office for a while and co-founded the office with Ms. Laurie Hawkinson in 1983. He has

taught at several schools. Ms. Hawkinson studied architecture at Cooper Union and received her M.F.A. from the University of California at Berkeley. She was previously the director of Exhibitions at the Institute for Architecture and Urban Studies in New York. She now teaches at Columbia University. The office of Smith-Miller + Hawkinson is well known in the United States. They maintain sophisticated aesthetics of modernism (and/or Minimalism). On the other hand, they are also capable of applying a critical view to it. Catherine Ingraham, an architectural critic based in the United States, contends the issue is not "against" modernism nor "beyond" modernism, but "into" modernism.² In other words, we can say that modernism should be accelerated to the saturation point and imploded. Ingraham also

速していき、内破させてしまうことだとも言える。イングラーム氏はまた、建築の重さと軽さについて議論しているが、スミス=ミラー+ホーキンソンの建築は、重力からの逃走の線を引くことだと言えるかもしれない。スミス=ミラー+ホーキンソンの建築は、一般にその美学的側面から「エレガント」である、などと形容されるが、しかしそうしたモダニズムの美学から逃走の線を引くことで、単に美学的に「エレガント」であるだけではなく、批評的な位置に立つことに成功しているように見えるだろう。

もしも「境界」が、コロミーナの指摘するように、近代建築に重要な問題のひとつとするなら、例えば、スミス=ミラー+ホーキンソンの「境界」の扱いは、モダニズム的な境界のなし崩しをその飽和点まで加速することで、批評的な境界を獲得しているように見

える。例えば、その「ビッグ・ウォール/ビッグ・ドア」というシリーズである。〈モス・ロフト〉(1990年)や〈ロトンダ・ギャラリー〉(1993年)の、ヒンジ式で回転する「ビッグ・ウォール/ビッグ・ドア」は、壁なのだろうか？それともドアなのだろうか？あるいはこれは境界なのだろうか？それとも空間なのだろうか？こうした手法は、ニューヨークの〈モデル・アパート〉(1989年)でも繰り返されている。ここでは薄いスクリーン上の「壁/ドア」がヒンジ式で回転するとともに、ベッドまでが回転して動いている。さらにこのスクリーンの上に吊り下げられているのが、テレビ、つまり現代的なメディアのもうひとつの「スクリーン」なのである。あるいはスクリーンを動かすことは、テレビのチャンネルを変えるのと同じことなのであり、テレビのチャンネルを変えることは、空間のプログラム

を変えることであるかのように。

アメリカの大手映画配給会社である〈ニューライン・シネマ〉の吊り下げられた会議室では、床がガラス張りになっている。これは床なのだろうか？それとも窓なのだろうか？ここでは、最も基本的な境界と見なされてきた床が、透明なスクリーンになってしまっているのだ。あるいは透明のように見えて、厳然として境界があることを見せている点では、映画という、透明に見えて、しかしそのじつ幻想が凝縮されている境界であるメディアの、批評ともなっているかもしれない。

3.

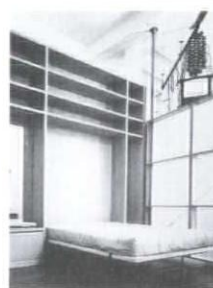
ジョエル・サンダース氏は、コロンビア大学で建築を学んだあと、ルービン+スミス=ミラー事務所やコーン・ペダーセン・フォックス事務所などを経て、1991年に事務所を設立、



4



5



6

discusses the "lightness" and "gravity" of architecture. Works of Smith-Miller Hawkinson seems to draw a line of escape from gravity.

Their works are often described as "elegant" from the aesthetic point of view. Yet, they have been successful with not only being "elegant," but also being able to sustain critical perspective.

As Colomina says, if "boundaries" are deemed to be among the most important issues in modernism, Smith-Miller + Hawkinson's designs of "boundaries" carry through the undermining limit of modernism into the saturation point where they maintain their critical standpoint. For example, the "Big Door/Big Wall" series. Are the rotating "Big Wall/Big Doors" at *Moss Loft* (1990) and *Rotunda Gallery* (1993) walls or doors? Are they limits? The

same screen design is utilized at the "Model Apartment" in New York (1989). At this apartment, the room is installed with a rotating bed with an attenuated screen. Above the screen there is a T.V. set, which is another "screen." In this room, you can rotate the screen just as you switch T.V. channels, vice-versa, you can switch channels as you rotate the screen.

The Suspended Meeting Room (1992) at New Line Cinema, a major film distribution company in the United States, has a transparent floor made of glass. Is it a floor or a window? Conventionally, floor has been the primary limit. In this room, it has become a transparent screen. This transparent but rigid limit may be critique of films. Films seem to be transparent, but after all they are the limit of condensed phantasmagoria.

3.

Mr. Joel Sanders, an emerging architect in the United States, studied architecture at Columbia University. He worked for Rubin + Smith-Miller office, Kohn Pedersen Fox, and other offices. He established his own office in 1991. He teaches at Princeton University now. His Kyle Residence Project received an award from Shinkenchiku competition in 1991 in Japan. His design is also critical as well as sophisticated. He, especially, takes up subjects related to class and gender in today's United States (and/or the world). The "Sight Specific" (named after minimalist concept "site specific") at Wexner Center in Ohio is a poignant and an elaborate criticism of typical suburban housing by developers. It also contains a sense of humor. This project not only criticizes

現在はプリンストン大学で教えている、アメリカの若手建築家の1人である。その「カイル邸」が、日本の「新建築住宅設計競技1991」にも入賞している。

サンダース氏もまた、単にそのきわめてソフィスティケートされた美学だけでなく、批評的な立場を獲得することに成功しているように見える。とりわけ彼の場合、階級やジェンダーといった、今日のアメリカ（やあるいは世界）が直面している問題にも、向き合っている。この特集にも入っているオハイオ・ウェクスナー・センターでの「サイト・スピーシフィック（Sight Specific）」（言うまでもなく、ポスト・ミニマリズムのSite Specific/場所性の概念をもじったものだ）というプロジェクトは、見れば見るほど、ディヴェロッパ型郊外住宅への、辛辣で手の込んだ批評となっていることが分かるだろう。しかし、ユーモアのセンスも忘れられていない。さらにこのプロジェクトは、単にディヴェロッパ型住宅の批評となっているだけではなく、階級やジェンダーの問題にも向き合っている。なぜなら、ディヴェロッパ型郊外住宅、あるいは「ドリーム・ホーム」とは、フォーディズム・ケインズ体制（デイヴィッド・ハーヴィー）において、階級的なシンボルだっ

たからであり、またサンダース氏は、キッチン・シンクとそれに付随する窃視的な窓が、主婦による内部/外部的空間のコントロールの装置であることを批評的に扱っているからである。この主婦の場所は、アドルフ・ロースの「婦人の部屋（Zimmer der Dame）」を髣髴させるかもしれない（隣家の居間と重ね合わされたプールは、同じくロースのジョセフィン・ペイカー邸の快楽的な露出を髣髴させるかもしれない）。

さらにここでも、メディアのスクリーンが境界をなし崩しにしていこう。外部の風景の上に重ね合わせられたメディアの光景は、内部/外部の崩壊を加速させ、さながらフロイトの書斎の窓に吊り下げられた鏡のように、内部/外部の関係をますます曖昧なものにしていこう。さらに「アート・ギャラリーのフレーミング」のひとこまでは、半透明のスクリーン（フレーム）の向こうに女性の影が投影されているのが見えるが、ジャック・ラカン風言えば、この人影はすでにスクリーンの向こうの「他者」の眼差しを意味している。境界はもはや、向こうとこちらの眼差しの闘争を示していよう。

4. モダニズム（そして／あるいはミニマリズム）の感性や美学、内在的な論理を加速し、それが内破する飽和点まで突き進むこと。そうすることによって、それが逆説的にも批評的となりうる。理論的／批評的な立場と実務的／商業的な立場を両立させるのは、今日ではなかなか難しいことのように見えるが、スミス＝ミラー＋ホーキンソンとサンダース氏は、こうした難しい領域において、その理論／批評的な立場を維持しつつ、実践を続けることに成功しているように見える。

今回は試みとして、各建築家にレイアウト案まで考えてもらい、なるべくその案を尊重するよう努めた。それぞれのレイアウトもまた、それぞれの建築家の考えを反映しているだろう。

●まつはた・つよし／建築家

* 1 Beatriz Colomina, *Privacy and Publicity*, The MIT Press, Cambridge, 1994, p12

* 2 Catherine Ingraham, "Introduction," *Smith-Miller + Hawkinson*, Editorial Gustavo Gill, Barcelona, 1994

1. 2. モス・ロフト（1990年）
3. 4. ロトンダ・ギャラリー（1993年）
5. 6. モデル・アパート・イン・ニューヨーク（1989年）
7. ニューライン・シネマの吊り下げられた会議室（1992年）
8. フロイトのスタジオの意に下げられた鏡
9. フレーミング・アート・ギャラリー



7



8



9

the suburban houses, but also addresses issues of class and gender. The houses made by developers in the suburbs, the so-called "dream houses," symbolizes the middle class in the Fordist-Keynsian Regime (David Harvey). In the "Sight Specific" project, the kitchen sink and the attached voyeuristic window are used critically as device for housewives to control the inside and the outside of their domain by their gazes. These devices invoke Adolf Loos's *Zimmer der Dame* (The hedonism and the pleasure of exposure produced through the superimposition of the pools onto neighbors' living rooms might also conjure up Loos's Josephine Baker project.)

In addition to that, the the medium screen tapers off the boundary. The landscape on the medium is imposed

on the "real" landscape outside. It would expedite the collapse of limit between the inside and the outside like Sigmund Freud's mirror hanging at his study window. In another project, "Framing an Art Gallery" (1990), we see a female silhouette on a translucent screen/frame. In Lacanian sense, the silhouette indicates a gaze of "the other" behind the screen. The screen/frame now becomes a boundary where gazes from both sides struggle.

4.

By accelerating sensibility, aesthetics, and internal logic of modernism to the saturation point, implosion could be actualized. Paradoxically, that would make our position critical. It is becoming more difficult to be theoretical/critical as well as practical/commercial

today. Both Smith-Miller + Hawkinson and Joel Sanders, however, succeed to retain their critical perspective and material practice in this difficult realm. This time, as we think the the layout could also reflect the idea of each architect, we asked the architects to submit their work with layout designs for this issue.

* 1 Beatriz Colomina, *Privacy and Publicity*, The MIT Press, Cambridge, 1994, p12

* 2 Catherine Ingraham, "Introduction," *Smith-Miller + Hawkinson*, Editorial Gustavo Gill, Barcelona, 1994

1. 2. Moss Loft, New York, 1990
3. 4. The Rotunda Gallery, Brooklyn, 1993
5. 6. Model Apartment Police Building, New York, 1989
8. Sigmund Freud's study, Berggasse, Note the mirror in the window near his work table, 1938
9. Framing the Art Gallery

図版出典 Pecthres are from

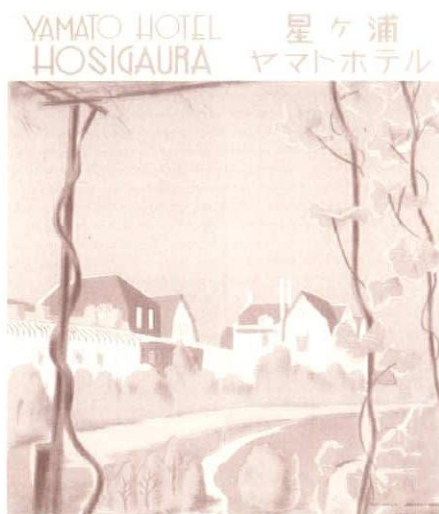
1-7 Smith-Miller + Hawkinson/Editorial Gustavo Gill, S. A., Barcelona, 1994

8 *Privacy and Publicity*/Beatriz Colomina

9 *Independent Projects/Lumen, Inc.*, 1993

第3回
リゾート／星ヶ浦ヤマトホテル
橋爪紳也

ホテル文化研究会メンバー（執筆順）
角野幸博（武庫川女子大学教授）
永井良和（関西大学助教授）
橋爪紳也（京都精華大学助教授）
竹山 聖（京都大学助教授）
毛谷村英治（京都大学助手）
横川公子（武庫川女子大学教授）



当時の星ヶ浦ヤマトホテルのパンフレット



後藤伯爵像（当時の絵はがきより）

手元に1枚の古い絵葉書がある。陽光の降りそぐ公園にあって、ひとりの紳士をモデルにした彫像が写っている。背を伸ばしてすくと立ち、遠くを眺めているのは、日本の都市計画史に名を遺す後藤新平の姿である。

後藤は通信大臣や内務大臣を歴任、大正9年に東京市長に転じてからは、かねて懸案であった都市改造計画のとりまとめに着手、関東大震災の経験を経て帝都復興案を作成したことで知られている。その成果と手腕を、肯定するにせよ否定するにせよ、現代の東京の街の基礎を描いた先達であることに間違いはない。

しかし先に紹介した彫像は、東京に建立されたものではない。昭和5年、大連近郊、風光明媚な星ヶ浦海岸を望む霧ヶ丘、アカシアの緑があざやかな林を切り開いて造成された公園に製作されたものだ。大陸における後藤の活躍を記念するために、彫刻家浅倉文夫の手によってデザインされたモニュメントである。

後藤は、外地での活躍を評価された人物でもあった。内務省の衛生官僚に採用されたのち、日清戦争後の帰還兵23万人に検疫を任される。その際に見せた行政手腕を買われて台湾の民政長官に抜てきされた。都市衛生の観点から台北を初めとする台湾諸都市のインフラ整備に腕をふるう。

つぎに後藤は大陸に居をうつす。明治39年、満州を開発するべく設立された南満州鉄道の総裁に就任するためだ。鉄道駅を中心として確保された直轄地のプランニングを急がせた。

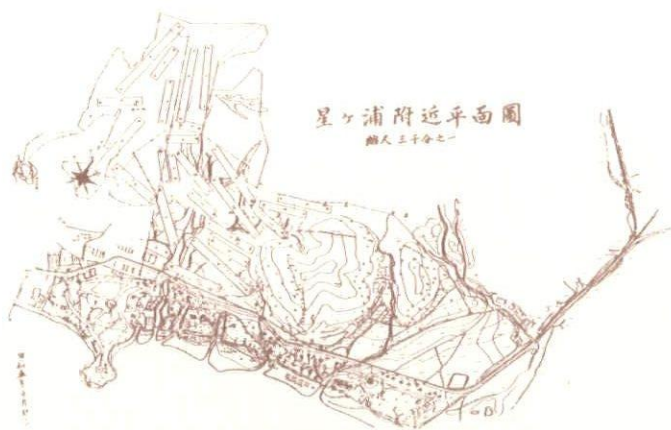
ヤマトホテルもまた、都市経営に不可欠な施設として、後藤の描く理想都市のなかに位置づけられていた。彼がホテルという施設に、どのような役割を託していたか。精密に分析する資料はない。ただ彼の伝記に次のエピソードが紹介されている。

大正8年に欧米を旅した際、日本は満州を閉鎖するつもりなのかという質問を受けた。対して後藤は、そうではなく欧米諸国に対しても開放しているはずだと答える。その証拠のひとつが、彼の肝いりで満鉄沿

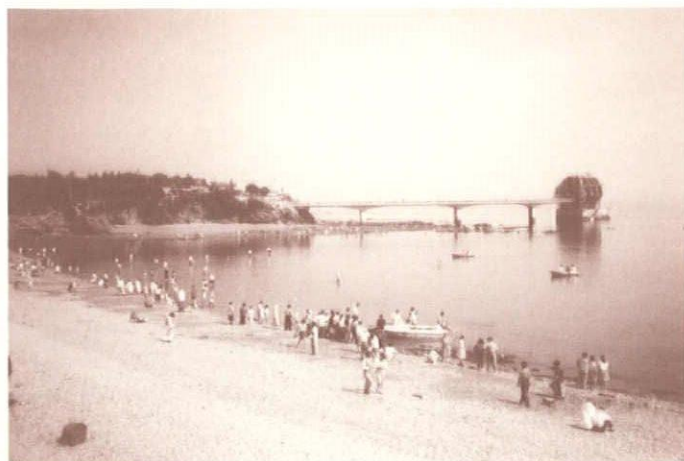
線各都市に経営したホテルチェーンであるというのだ。洋風のホテルは主として欧米人の利用を想定したものであり、日本人が欧米とともにこの新天地を開発することを望むと答えたという。欧米からの滞在者を受け入れることで、西欧列強からの資本の投下を、さらには観光客を誘致することで外貨を獲得しようという方針がうかがえる。

満州におけるホテル事業の展開が、欧米からの来客を想定していたことを裏付ける挿話はほかにもある。ある時「満鉄ホテル」の名でチェーン展開を考えてはどうか、という案が提示された。しかし後藤は、どうしても同意することはなかった。「ヤマトホテル」の名称に執着した。その理由として、「欧米人の来泊」をうながすためには日本固有な「ヤマト」がふさわしいという判断があったようだ。

各地に建設されたヤマトホテルのなかで、あきらかに欧米人の利用を前提に構想されたものがあった。それが星ヶ浦に建設されたリゾートホテルである。さきの後藤新平



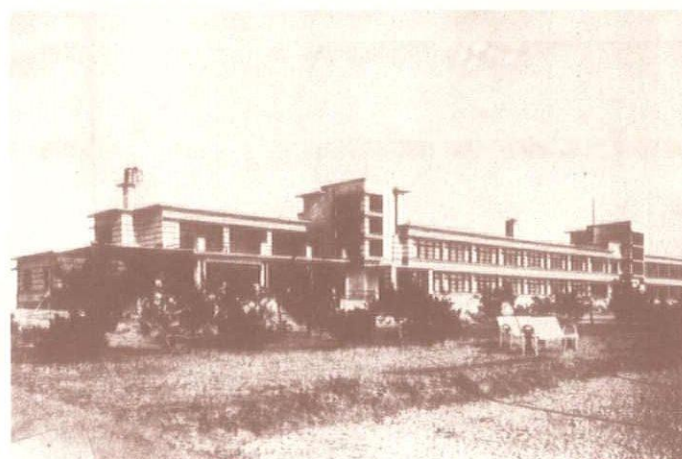
当時の星ヶ浦附近平面図（『満州建築雑誌』昭和年10月号より）



現在の星ヶ浦海岸



星ヶ浦ヤマトホテル（当時の絵はがきより）



星ヶ浦ヤマトホテル分館（当時のパンフレットより）

像は、まさにその地に建立されていた。

星ヶ浦、英語でいうと「スタービーチ」。由来を聞かずにはおられなくなる魅力的な地名ではないか。

大連市街地から西南に8kmほど。大連富士と呼ばれた臺子山の丘陵地、および海に突き出す霞半島を中心に、ホテルを核とする一大レジャーランドが構想されたのは明治42年のことだ。通信大臣に就任するために後藤が内地に戻ってから、すでに2年が経過していた。

リゾート開発の端緒は、建築家小野木孝治の回想に詳しい。明治42年の春、南満州鉄道株式会社では、社員の交歓を目的に、おおがかりなウサギ狩りを実施した。役員はじめ数百人が参加したが、獲物はわずかに一羽だけであった。少し落胆した一同は、海の見える丘にたって昼食をとった。この時、当時副総裁の職にあった国沢新兵衛が、このあたりの海岸に欧米風の海兵保養地、

そして海水浴場を造ってはどうかと発案して、場を沸かせたという。

国沢の思いつきは総裁中村是公の同意を得て事業化される。敷地は霞半島の東側にある12万2314m²の官有地を民政署から賃借、のちに西側の民有地25万m²弱を一坪40銭で強制的に接収した。設計にあたった小野木孝治と太田毅は、満鉄の首脳のほか、英国および米国領事の意見を参考に、まったく欧米風の海浜別荘地を現出させることを目標に据えた。かくして人家に乏しい、うらさびしい漁村が、いちやく満州随一の景勝地に転じるのである。

開発予定地は初代関東都督大島義昌によって、星ヶ浦と名付けられた。海岸を特徴付ける黒い岩礁群が、そもそもは隕石が落下してできたという俗説からの命名である。そのほか計画地内の名勝地には「雲井橋」「霧ヶ丘」など、もっぱら自然の事象に由来する地名が採用された。

開発の手初めは、明治42年（1909）10月に営業をはじめた貸別荘群であった。洋風5棟、和館3棟で営業をはじめた。いずれも木造で、もっぱら夏の避暑客を想定したものだ。その後、ホテルの東側に満鉄総裁用の別荘をはじめ、年間を通じて利用できる煉瓦造の別荘がオープンしている。あわせて洋風庭園・運動場・海水遊泳場・娯楽場などが整備された。

当初、一部には、計画地のシンボルでもある霞半島を「治外法権地区」と位置づけ、先端にクリックハウスを建築、地元の有力者や外交官が、社交ダンス、賭博、贅沢な飲食などを楽しむ「ブルジョワジー的な歓楽場」とするアイデアがあった。しかし結果的にこの案は実現せず、スポーツや保養を主とする健全な遊楽地として位置づけられてゆく。

翌明治43年には2階建てのホテル本館が竣工、営業を開始している。10室の客室を有し応接間・広間・食堂などからなる。バ



当時の星ヶ浦海水浴場（当時の絵はがきより）



星ヶ浦海岸の風光（当時の絵はがきより）



星ヶ浦ヤマトホテルのパーラー（当時のパンフレットより）



星ヶ浦ヤマトホテルの食堂（当時のパンフレットより）



星ヶ浦ヤマトホテルの客室（当時のパンフレットより）

パンフレットに拠れば「ジャーマン・カッテージ」風のデザインが採用された。煉瓦造、外壁は乱石積みで仕上げられている。マンサード屋根に特徴がある。

設計は、東京帝大建築学科を卒業後、満鉄建築課に入った横井謙介である。様式建築をこころざすデザイナーが多かった帝大出身の建築家達のなかにあって、軽やかなカントリーコテージ風のデザインを採用したあたりに、彼なりに海浜保養地の建築を研究した成果が見て取れる。

本館の設計に際しても、欧米領事のアドバイスを得たようだ。結果、現地地でとれる石材や材木をふんだんに利用し、野趣味を強調したという。ところが生木を使った結果、開業まもなく天井やら梁やらから、茸やカビが大量に生えてきて騒ぎとなったそうだ。

明治44年、本館の西に別館が完成、渡り廊下で連絡された。玉突き場とバーを下階に、上階を客室にあてた。同時に海水浴場

も営業を始めている。またこの頃、北沙河口から星ヶ浦遊園までの電路線も開通、一般客も海水浴に訪れるようになった。

その後、大正から昭和初期にかけて、経営地は次々に拡張し、最終的には144万7536㎡におよんだ。ホテル本館前から大連富士の裾野にかけて、18ホールのゴルフコースが造られた。施設の拡充もすすむ。洋館別荘1棟、中華風別荘1棟、29室からなる新館、日本人向け夏期簡易ホテル60室、和風料亭「星ノ家」などがあいついで新設されている。また本館の南川には総ガラス張りのサンルームおよび食堂棟、普通食堂、料場、事務室棟などが増築されている。

実際のところ、当時、日本国内はもとよりアジア諸国を見渡しても、これほどまでに見事なプランニングがなされ、なおかつ最新の施設を完備したリゾート都市は稀であったのではない。実際、南満州鉄道の社史に遺されている資料を見ると、日本人や

地元の利用者よりも、はるかに外国人の利用客が多かったことが判る。昭和7年にはリットン調査団が宿泊している。「東亜観光ルート」の一躍を担うリゾートであると同時に、満州に滞在する人々の夏の保養地を建設するという当初の目的は、ある程度、遂げられていたと見てよいだろう。

いっぽうで、母都市である大連と路面電車で結び付けられた星ヶ浦は、大衆が誰もが日帰り海水浴を楽しめる行楽地という性格も帯びていた。上流階級の夏の社交空間であるとともに、民衆娯楽のメッカでもあったわけだ。

日本でも、ホテルや公会堂・遊園地といった集客装置を核とする同じような「海浜リゾート都市」の計画があいついだ時期である。沿線への遊客誘致をはかる民間の鉄道会社が、海事思想と保健衛生の啓蒙を目的とする新聞社とタイアップ、各都市の近郊にある景色のよい海浜に上流階級向けの別荘地を分譲した。それに併せて、海水浴



現在の星ヶ浦海岸

場を核とした大衆向けの娯楽地を開発した。関西の事例で言えば、甲子園・香櫨園浜・浜寺などがその典型である。その計画思想を星ヶ浦と比べてみるとおもしろいと思う。(国内の事情は、拙著『海遊都市 アーバンリゾートの近代』白地社刊を参照されたい。)

国内の事例がモデルにしたのは、イギリスのブライトン、そしてアメリカのコニーアイランドである。前者はハイソサエティ向けの海浜保養所として、後者は大衆を対象としたビーチリゾートとしてひろく知られていた。星ヶ浦の開発にあつては、どちらかというブライトン風のリゾート都市を手本にしたように思われるが、そのあたりの情報は不足している。

昨年、機会を得て、星ヶ浦リゾートの現状を視察した。800m²の長さがある弓形の砂浜は、今日では「星海公園」と名を変えて、すっかり大衆化した行楽地になっている。

中心は海水浴場と遊園地である。海を見渡すレストラン、土産物屋などもある。海に突き出した霞半島には、望海亭、迎潮亭、探海洞などの遊び場が散在、遊歩道まで結ばれている。黄海をめぐる遊覧船も運行していた。遊客は中国東北地方全域から集まるそうだ。とりわけ内陸部で暮らす人にとっては、一生に何度もない「海水浴」を楽しめるメッカとして、ひろく認知されてい

るという。

いっぽう大連富士の山麓に目を移してみると、ゴルフ場跡は現在、医学院付属病院として転用されている。別荘地の一部は軍の用地となっていた。ヤマトホテル時代の別荘が数件、そのまま遺っているということだが今回は中に入ることができなかった。後藤新平像の消息も残念ながら確認できていない。

改めてこの夏にでも、後藤新平の、そして彼の後継者たちの夢の跡をたどり直すために星ヶ浦の地を再訪してみたいと計画している。またブライトンやコニーアイランドをモデルとした当時のリゾート都市のプランニングについて、他の事例との比較考察を試みてみたい。

付記

戦前、この一大海浜リゾートがいかなる「場」であつたのか、さらには戦後、どのような変遷を遂げたのか、より詳細を御存知な向きは、また資料などをお持ちの方は、御教示いただければ幸である。

●はしづめ・しんや／京都精華大学助教授

参考文献

『星ヶ浦ヤマトホテルパンフレット』(英文)
『満州建築雑誌』1932年10月号
鶴見祐輔編『後藤新平伝』後藤新平伯伝記編纂會刊、1937年
長谷川泉『日本ホテル館物語』プレジデント社、1994年

環境デザインは隠れデザインなどではない

「環の会：80人の環境デザイナー／その仕事と視点」展より

環の会：80人の環境デザイナー／その仕事と視点
会場：代官山ヒルサイドテラス・アサクラギャラリー
E棟ロビー&ヒルサイドプラザ（シンポジウム）
会期：平成8年1月23（火）～28日（日）

古い話で恐縮だが、今から数えれば30年近く前、大阪万国博の会場計画をしていた頃、「ストリートファニチュア」の作業をGKに頼もうという話がもちあがった。その頃、「こんなことに熱心なのは彼らしかいない」と言うことだった。当時、街の景観とか修景などという話はお寒いばかりで私どもがその重要性を吹き込んだせいもあって、博覧会当局はそんな物も大切ではないかといった意識はあっても、これを雑件としか扱ってくれなかった時代である。私たちは、これを「アーバンファニチュア」と呼んだらどうかと提言したのを記憶している。談合も競争もなく、興味を持つ人にそのまま作業を依頼した時代である。で、それを担当したひとりが大学で同僚だった西沢健さんである。会場計画のメンバーのなかでは駆け出しであった私は、会場のいわゆる通りや広場を担当したから、みなさんとの付き合いは勢い濃くなった。休憩所、売店、トイレからはじまって屋外彫刻の配置からベンチまで、すったもんだで一緒にいた。当時の問題意識から今日を思うと隔世の感がある。西沢さんはその後『ストリート・ファニチュア』なる著書を出し、すっかりこの世界の親分になってしまった。「環の会」というのはそうした活動をしている東京芸術大学デザイン科卒業の、それも「環境」と呼ばれるコースに所属していたみなさんの集まりだという。デザイン科から「環境コース」が消滅して、大講義制を取り入れてしまったからという解

説があったから、それは回顧の意味もあったのかどうか、聞きそびれてしまった。大講義制は総合選択制などと呼ばれる「大部屋型」である。より多くの教員に接する方式だから、学生にとっては情報も多くなる。が、これに對してコースを細分化し、特定の教員にだけ密度高く接する方式を、我々は「たこ壺型」などと呼んでいるが、芸大ならさしずめ「家元型」になろうか。先生の癖まで盗んで姿勢や技術を習得していくような分野ならこれが一番いい。いずれのシステムがより効果的かはその道の性格にもよるだろう。ここに集まったみなさんは、そうしたシステムを模索していた最中に巣立っていった作家達ではなかろうか。会場にはグラフィック、灰皿、サイン、家具、インテリア、照明、橋梁そして都市のプロジェクトまでがこの道の人たちらしく上品に配列され、シンポジウムも生活、芸術、都市、照明、地球と幅広い。

今、環境デザインの問題は景観行政と呼ばれるように重大な社会的要請のなかにあり、土木、建築、造園、そしてこのデザインと呼ばれる（これは奇妙な呼び名だとは思いますが）分野の活動は、お互いの領域を手探りしながら実に多面的である。それはひとつのサインやベンチを格好のいいものにする程度でなく、広く公共空間をデザインするところまで領域を広げつつある。そんなこともあって、数年前私たち（といっても私はさしたる活動もしていないが）はこの領域を横につなげ、活発

な議論もできる組織が必要ではないかということで「環境デザイン会議」なる団体が発足した。計画、建築、土木、造園、照明、そしてストリートファニチュアなどの専門家の集まりである。こちらも若い人たちを中心に活動は盛んである。今日この環境デザイン活動に共通するのは、市民社会のなかで何がデザインできるかという問題であろう。公共に対する意識が熟成しているとは思えないわが国では、いまや「ワークショップ」方式などがもてはやされる時代である。行政と市民を複眼的ににらみながら、閉塞しかねない状況もおおいにある。考えてみればすでに世紀末、西欧で諸芸術が袂を分かち、独自の道を追求してからもう1世紀近くたっている。この間「バウハウス」のようにこれを再統合する試みもあった。が、何よりわれわれにとって重要なことは、都市というには実態の軟弱なわが国にこうした情報が次々ともたらされたことだろう。以来わが国の公的空間は、混沌と危機的状況をたどり続けてきたのではなかろうか。百鬼夜行の、涙の出るような貧しい景観には、都市としての資産価値などまるでない。建築をはじめあらゆる芸術が出口を失いつつある今日、隠れデザイナーなど脱して、環境や景観を軸に、アカデミーも行政もが閉塞的になりがちな土木、建築、造園と呼ばれる分野を攪拌し、屋台骨を揺るがすような理屈や実践がこうした分野から発信されてもいい。

●曾根幸一／建築家



photos: Nacasa&Partners

もうひとつの写真空間 石元泰博展より

戦後日本の写真界に、斬新な感覚と卓越した造形力で常に新風を送り続けてきた石元泰博の近作が、昨年新しく設けられた東京国立近代美術館フィルムセンターの展示室で公開された。1921年生まれ、つまり今年75歳の石元はこの作品展で、今日なお写真家自身にとっても、広い意味で写真表現の可能性という観点からも、新しい次元を開きつつあることが示されていた。これは驚きというほかはない。

第二次大戦後間もないころ、シカゴのニュー・パウハウスで写真を学んだ石元泰博の仕事が、広く我が国で知られるようになったのは、写真集「ある日ある所」(1958年)や「シカゴ、シカゴ」(1969年)であろう。それらは、軽快な感覚をもってはいても、ある確からしさに裏打ちされた特異な存在感の作品集として、写真を志すもののみならず、ジャンルを越えて芸術界に美しい波紋を投げかけた。戦前の絵画趣味や戦中のプロパガンダ型写真の反作用で、リアリズムの嵐が吹き荒れていた往時の写真界に、写真行為における創造の理念とそこで問われる品位の問題をさりげなく問いただし、1970年代以降の写真の現場を覚醒させた石元泰博の業績は、とても大きくて重いのである。

そうした足どりの作家だから、70歳を越えてからの仕事は、いわゆる枯淡の域の仕事かと思えば、近作はけしてそうではない。モチーフは、作家の居室の窓から眺めることができる「雲」、路傍の「落ち葉」や「あき缶」、そして冬の東京でときおり楽しめる「雪のあしあと」。総数で140点が展示公開された。こうしたモチベーションをみる限りでは、先年は東京の都市景観の雑然たるさまに関心を示し

ていたこの写真家も、枯淡の境地かと思わずにはいられない。

だが丹念に、いやスピーディーにでもいい、実作に触れてみると、その作品群は生臭くはないが、ある種の蠢きを秘めている。それはちょうど晩年のポール・セザンヌの水彩が示すその感じと相通じているように思われる。セザンヌの晩年作は、淡彩で風景や彼の庭を守っている庭師を描いていて、それらは一見枯れを思わせても、一筆一筆の示す空間的な多次元性が立体的に絡み合って、後の立体派に直結する新たな表現空間を拓いていた。そのことを思い出さずにはおれなかったのが、今回の石元作品だ。

「雲」の不定形で変幻するイメージは、おうおうにして感情移入の対象となってきた。空の雲に何かの形面を見出し、何ものかに見立てて気持ちを投げかけることは、平凡で自然な行為である。だがそれは、ロマンティックであっても、はかなくもある。石元泰博はそこに写真を介入させる。雲に対して投げかけられた感情や造形的な志向は、写真という具体物として、自然界にあるものとは違った生命を賦与される。それも単独ではない。仲間がたくさん産み出される。写真家はその複数の造形的断片を、それらが自然に絡み合い、自動運動のごとくに蠢く集合体に組み替えてしまう。それが作品発表つまり写真展である。

濡れた路上に張りついたポプラやブラタナスの葉っぱたちも、雲と同じくそれぞれの表情と風情で、人間界の情緒を代弁するものたちのひとつだろう。だが、ここでも石元泰博のカメラの眼は、おおげさな感情移入の画像を造りはしない。描写は精緻だが、それは落

ち葉そのものの物質性や属性に向う描写ではなく、光、水分、葉の疲れぐあい……、つまり状況的なものの描写であり、これは雲を自然界とは別の次元に移し、もうひとつの生命を与えるのと同じ手順である。このように「あき缶」も、石元泰博の仕事においての役割を与えられる。「雪のあしあと」では、そうした感覚に加えて、シャープに温度感などが加わるが、はかなきものが役割を担う存在になるという点では共通する。

さて、このような作品のいわば段取りをして、石元は果して何を狙っているのだろうか。

蠢くモチーフを作ること、それだけが目標でないのは確かである。枯れているようで蠢いているというのは、氏の作品の状態を形容しているにすぎない。その状態が作り出されている目的をつかまねばならない。これを語るのには、じつは筆者にはとても困難なのだが、あえて思っていることを吐露してみよう。

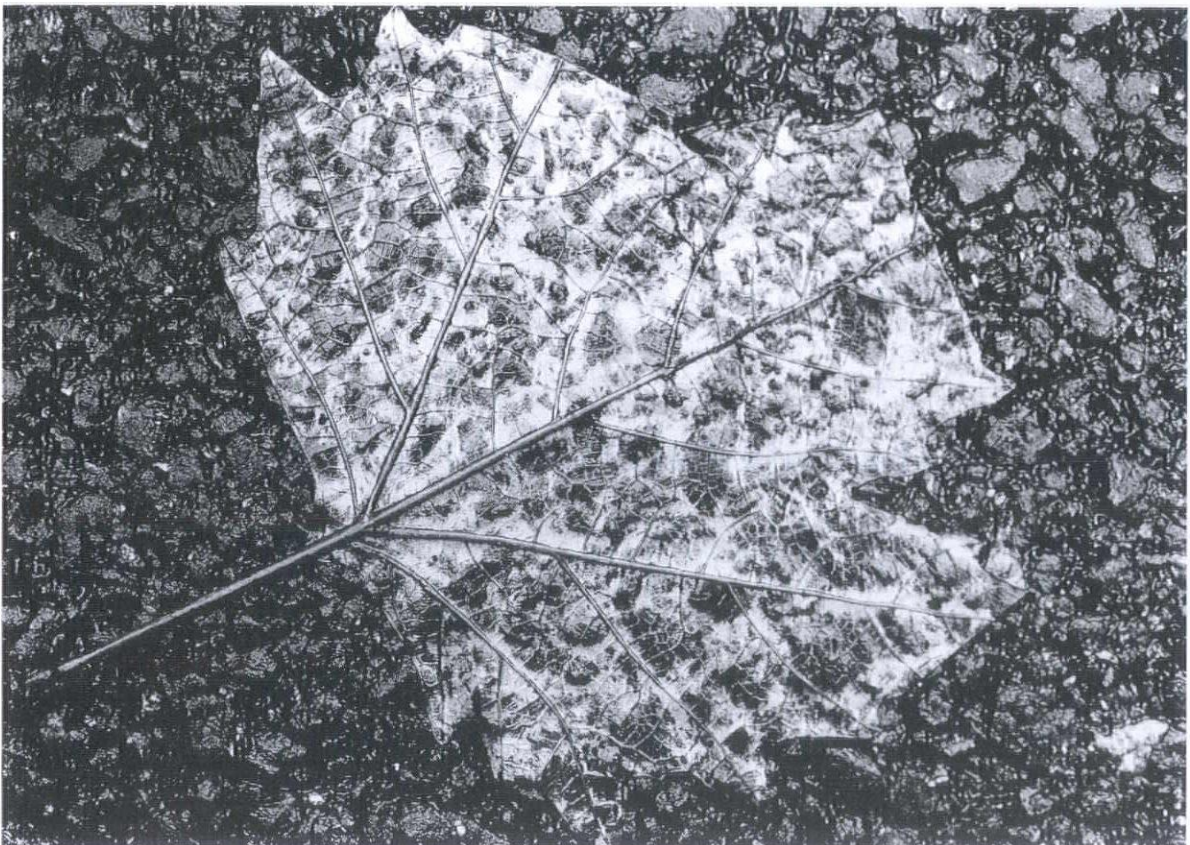
石元泰博の「現在の記憶」展が示しているのは、写真という行為の通説とは逆の側面についての意識のように思う。写真とは、現実空間を切り取り、その画像の表徴性や表象性で、何らかのメッセージを伝える手段という表の理論ではなく、写真という行為で空間を産んでゆくこと、はかなきものの形に永遠の生命を吹き込むという単純な図式ではなく、自律的な塑性とでもいおうか、それを切り開いて、絡ませることで、周知の現実空間の先に、さらに感覚的で意識的な空間を設定しようとしている、と思えてならないのだ。

●平木 収／写真論

石元泰博展——現在の記憶
会場：東京国立近代美術館フィルムセンター
会期：1996年2月14日(水)～3月30日(土)
主催：東京国立近代美術館



雪のあしあと



落ち葉

キャンパスのデザイン

「リチャード・マイヤーとフランク・ステラ：建築と絵画の接点」展より

リチャード・マイヤーとフランク・ステラ：建築と絵画の接点
会期：1996年2月2日（金）～4月7日（日）
会場：愛知県美術館
主催：愛知県美術館、毎日新聞社

1972年に出版された“FIVE ARCHITECTS”に収められた5人の建築家（P.アイゼンマン、M.グレイヴス、C.グワスマ、J.ヘイダック、R.マイヤー）の1人として世に紹介されたマイヤーは、いわゆる「ホワイト派」と呼ばれ、「ネオ・コルビュジエアン」と称されるこれらの建築家の中でも、最もコルビュジエの影響を受けており、ポストモダンやデコンストラクションには眼もくれずひたすら現在まで白く静謐な空間を生み出してきた。一方、ステラは1958年に「ブラック・ペインティング」を通してミニマリズムの騎手としてデビューを果たし、70年代以降は立体作品を中心に制作を続け、最近ではパブリック・アートも手掛けている。現在、2人はアリゾナ州フェニックスに建設される連邦裁判所を取り囲む敷地に複合施設を共同提案しているが、この建築家と画家の出会い、1960年代初頭にまでさかのぼり、2人の共通の師であるS.グリーンを介してマイヤーが作品制作の場としてステラのアトリエを一時借りたことから始まったという。この30年来の友情は、1993年にローマで開かれた「リチャード・マイヤーとフランク・ステラ：芸術と建築」展に結実し、今回の二人展が企画された。

マイヤーの建築は、基本的にエナメル塗装された金属パネルが生み出す白く光る表皮に包まれており、内部空間は拡散光に満ち溢れ、

まるでその存在を否定するかのように見える。映画「2001年宇宙の旅」に見られる宇宙船内部のようなその空間は、「魔術的で、方向感覚がなく包括的（C.ジェンクス）」であり、「中心不在の不思議な様相を示す（K.フランプトン）」と評される。マイヤーは「建物の写真になぜ人を入れないか」という質問に次のように答えている。「建築の意味は作品自体から、その知覚から由来するものであって、それが使われている時にどのような感触を持っているか、どのように見えるかによるものではない。建築は建築自身であり、それ以外の意味をそこに付加することは私にとっては意味がないことだ」。まるで絵画におけるキャンパスのように利用する人間が「図」となり、建物はつねに真っ白で「地」として存在する。「地」としてマイヤーの建築を捉えれば、金属パネルによってつくられるグリッドの存在は、きわめて重要な意味をもつことになる。

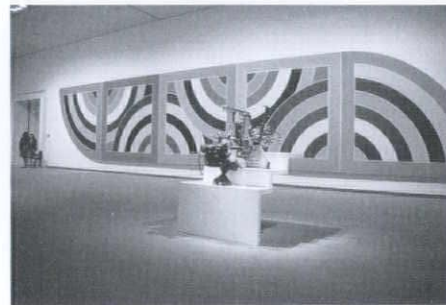
60年代のステラは、キャンパスそのものを作品に応じて幾何学的に変化させ、ストライプによる絵画と、それが規定するキャンパスとの両義性を呈示してきた。逆に言うと、ジャスパー・ジョーンズに影響を受けたというあのストライプによって、彼はキャンパスという「地」をデザインしていたということが出来る。

2人は「白」と「黒」というモノクロミー

を出発点としつつ、ステラはポリクロミカルな形態の敷きを求めて平面から立体に転向したのに対し、マイヤーはモノクロミーな世界に沈潜していった。マイヤーの建築では、構造グリッドによってつくり出された「地」に対して、優美な曲線をもって描かれた「図」や、ほんのわずかに度振れたグリッドの「図」が光によって浮き上がって見える。光はキャンパスとしての建築に、多様でポリクロミカルな「図」を描き出すのだ。

キャンパスとしての建築は、住宅からオフィスビルにいたるまでスケールの差異をほとんど感じさせず、いずれの建築もさながらスチレンボードによる模型のようである。ゲティ・センターのような巨大なスケールの場合でも、全体はあるスケールとプログラムに分割され、その中でソフィスティケートされたコルビュジエアンというデザイン言語が反復使用されているに過ぎない。換言すれば、スケールやプログラムに関係なく、自己のデザイン言語に見合った建築が再生産されているのであり、スケールやプログラムの変革に対してそのデザイン言語は十分な意味を持ち得ないだろう。既存のプログラムを超えるためには、新たなキャンパスのデザインを探らねばならない。が、キャンパスのデザインは決して白い矩形だけではないはずである。

●堀田典裕／日本学術振興会特別研究員



photos:H. Hotta

『図説近代から現代の金属製建築部品の変遷』

真鍋恒博＝著

B5判 192頁

建築技術 3800円

建築様式に注目した変遷史は数多くあるが、本書は構法システムなど技術面や建築部品の歴史について図版を多く用いて紹介したもの。スチールサッシ、鋼製ドア、固定式可動間仕切り、自動ドアといった部位ごとの歴史は、読み物としても楽しめる。上下2巻の刊行予定。



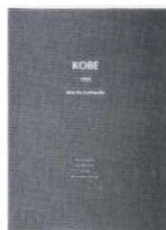
『KOBÉ 1995 After the Earthquake』

鈴木明＝編

B5版 96頁

建築・都市ワークショップ 2500円

地震発生直後の神戸の街に入り、報道写真家や技術者とは異なる視点で、その破壊の実情を捉えた写真集。神戸では震災から1年が経ち、すでにその傷跡は住宅地を除いて一掃された感もあるという。その中で、建築写真家として定評のある宮本隆二の写真は、地震の力の強さ、恐ろしさを改めて伝えている。



『スウェーデンの住環境計画』

スヴェン・ティーベ＝編著

外山義＝訳

A5判 256頁

鹿島出版会 4635円

福祉国家に向けその実現のひとつの形として、住宅建設が進められたスウェーデン。その歴史や背景、そして不況下で予算を削られるなどといった問題を抱えた現状の研究結果をまとめたもの。図版や写真が多く用いられた分かりやすい1冊。



『空から見た建築20年』

日経アーキテクチャ＝編

A4版 240頁

日経BP社 7000円

1976年4月に創刊された「日経アーキテクチャ」は当初から航空写真を多く用いてきたが、今回の写真集は、いわばこの集大成。全体は2部構成で、特にパート1「都市の変貌」は、同じ場所の時間を隔てた2枚の写真が掲載される。その変貌ぶりには改めて驚かされる。



『異文化の葛藤と同化』

都市住居研究会＝著

A5版 183頁

建築資料研究社 2400円

朝鮮半島が日本の支配下にあった1910年から約45年間に日本人によって建てられた「日式住宅」は、その歴史的背景と離れて、現代韓国の都市住居を考える上で避けて通れない。集合住宅が増加し、伝統的住居が失われつつある中、本書では、日式住宅を通して韓国における住居の近代化を論ずる。



『巨大人工島の創造——

関西国際空港／エコロジカル・アイランドへの試み』

新井洋一＝著

四六版 197頁

彰国社 2580円

関空の人工島造成現場に直接関わった著者が、そのノウハウをまとめたもの。環境強調、社会強調、臨床土木技術の3点に立脚した「ヒューマナイズド・テクノロジー」が今プロジェクトでどのように生かされているかを現場の証言とともに伝える。



『「消費する家」から「働く家」へ』

長谷川敬＋和田義行＋村田徳治＝著

A5版 200頁

建築資料研究社 2500円

OM研究所が主宰する「土曜建築学校」の講義録をもとに編集されたシリーズの第3弾。今回は「自然との共生が言われつつも、田舎然とした建築」という問題に対して、省資源の住まい方、リサイクル可能な木の家、OMソーラーシステムを軸に「住宅に何ができるか」を論じる。



『バリアフリーチェックリスト』

米国および交通機関の障壁に関する改善命令委員会＝編

八藤後猛＋曾根原純＝訳

A4版 120頁

簡井書房 1500円

本書はアクセス先進国アメリカの組織が作成したアクセシビリティ・チェックリストの翻訳書。近年日本でもアクセシビリティが注目され、生活環境の整備が進められているが、その実現の具体的な指針として示唆に富んでいる。



『ヨーロッパ50都市の環境彫刻』

樋口正一郎＝著

A4版 200頁

誠文堂新光社 9800円

1990年の『アメリカ50都市のパブリックアート』の続編。経済優先の都市設計が変換を迫られたように、現在パブリックアートも都市全体を視野に入れた作品が求められている。本書では、ヨーロッパ各国の街を彩る134人の182作品を掲載、各国事情とも密接につながったアートの状況が垣間見える。

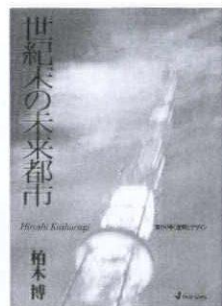


『世紀末の未来都市』

柏木博＝著

B 6判 256頁

ジャストシステム 2500円



評者＝

倉田直道

ユニバーサリズムの破綻と都市の再生

読み終えたときに何か不思議な心地よさと熱い力を感じた。それは、劇的に変化する時代と都市の状況に対する私自身の感覚の一部を、著者と共有できたことからくる不思議な安堵感にも似たものである。

著者は問う。「20世紀の都市を構成しようとしたユニバーサリズムは、はたしてその理念にしたがって都市を実現したのだろうか」と。さらに、近代都市計画の理念を体現したふたつの極に位置するコルビュジエの『輝く都市』やハワードの『田園都市』が、果たして、都市から、貧困、差別、争い、犯罪、暴力などをなくすことができたのだろうかとも、重ねて問い続ける。

世紀末を迎えた今、我々は、20世紀の産業社会＝都市社会を支えてきた近代のパラダイムが音をたてて崩れていく現実を目撃している。東西冷戦構造の崩壊と同時に多発した局地的な民族戦争、消費し続けてきた環境資源の有限性への不安、身近では、阪神大震災で明らかになった技術神話の崩壊、オウムによる無差別テロ、バブル経済の崩壊など、10年前には誰も予想しなかった眼前の出来事を通して、近代社会がよりどころとしていた発展という名のもとでの量や規模の拡大と、国家や都市に代表される大きなシステムが如何に不確かなものであるかを認識した。

近代を支えてきた規範の崩壊は、近代都市の抱えるプロブレマティックとそれを支配する力の所在も顕在化させた。社会学者故アンリ・ルフェーブルは、かつて『日常生活批判』『都市への権利』『都市革命』『空間と政治』などの著作の中で、都市空間が交換価値によって商品化され、自由な都市生活が疎外されて

いく様を指摘し、商業主義の下での手段主義的、制度的、技術主義的な「都市計画の幻想」に対する批判を展開した。著者の指摘する都市の状況は、まさにルフェーブルがその批判の対象とした状況を想起させるものがあり、都市現象と都市空間が、社会的諸関係の投影であるばかりでなく、諸戦略が相対立する場であることを実感する。

著者は、一見脈絡なくみえる、ニューヨーク、沖縄、ウラジオストーク、シリコンバレー、ロサンゼルス、上海、神戸などの世界17都市における限定的な様相を通して、世紀末を疾走する時代と都市の姿を描き出すとともに、都市の近代化が置き去りにしてきた、あるいは排除してきたマージナルな存在に将来の都市の可能性を見出している。

著者のように低い目線で都市を見ると、ユニバーサルな思考により構成されているはずのこれらの都市にも、マージナルなものによる多様な差異が存在していることが分かる。モザイク状の都市の風景を形づくるその差異は、確固たる全体という大きなシステムに従属する部分という「構成の原理」ではなく、固有性と局所性をもった都市の小さな断片と断片が相互に関係をもち、それらが重なり合っていくことで限りなく不確かな全体へ向かう「統合の原理」から生まれてくるものである。著者が明らかにしたマージナルなものの評価は、一方で、都市の再生、即ち「都市の権利」としての都市空間を生活者の手に取り戻す都市的実践として「都市のデザイン」が新しい位置を獲得する時代を予兆させる。

●くらた・なおみち／都市デザイナー

Metropolitan Library

4月の評者＝

橋爪紳也

今回のテーマは「檄文への応答」。

まず紹介したいのが、下河辺氏から意図的に建築家全般に飛ばされた檄文。30代の志ある建築関係者は、全員このインタビューを読むべし。

「学会を全部滅ぼしたい。学問体系を変えるべき時期が来ていると思う」なんて、刺激的な言葉が目飛び込んでくる。既成の枠組みを変える力を若い世代に求めている。彼が学会という世間に飛ばした「檄」に反応するのか、反駁するかはさておき、まちがいなく青年の血を熱くする文章ではある。

文中で記事に神戸の復興委員会では、熱帯雨林型の都市像が議論の場に提示されたことが紹介されていて面白い。

熱帯雨林には、木があり、草があり、花があり、鳥があり、動物がいる。その種は無数といってよい。少なくとも人智を越えることはまちがいない。それ

だけの多様性を内在させながら、すべての存在が、自らの意思をもって自在に生きている。

他所からみれば、全くの混沌であっても、そこには何らかの空間がたちづくられている。21世紀の神戸は、ある種に限定して管理栽培を行なっている、従来のようなプランテーション的な産業都市ではあってはならないとみている。

無条件で納得する。熱帯雨林モデルではなかったが、同様の多様性を内包した都市を論じる視点を持っていた。しかし、きちんと「論」を組む前に、建築や都市計画の現場に近いところに席を置く先輩から、一笑にふされてしまい憤慨した覚えがある。青年の夢を取り戻す元気はまだあるのか、と自問した。

30代の評価はさまざま。さまざまな状況にうまく適応できる「良い子」たち。「団塊の世代」と「団

『かたちに見る造形の構成
イメージ・ジェネレーターの展開』
島田良一＝編著
B5版 140頁
鹿島出版会 3502円



評者＝
戸村 浩

構成教育への熱いまなざし

ベルリンの壁から始まった、旧体制の崩壊は、あらゆるところで起こった。今まで当たり前と思っていた常識や概念が崩れ落ち、または暴露され、新しい萌芽を待つかのように、捕らえ所のない混沌が広がっている。我々に多大な影響を与えたバブルの崩壊は、崩壊したことが問題なのではなく、なぜバブルのごとき虚構が、これほどまでに泡立ち膨張したかが問題なのである。それは、急速に発達したOAとコンピューターの発達によって、手軽に入る情報への過信が、現実感喪失現象というべき状況を生み出したからである。よって、バブルが弾けるのは当然の帰結であったろう。

コンピューターの出現は、確実に科学技術を発展させ、政治、経済以外にも、驚異的な革命を引き起こした。その高度なデータ処理能力は新発見や諸説新説を生み、諸学問を活性化して、分野相互の関係を密にした。特に、科学と芸術とは、お互いに歩み寄り、またシンメトリーや形に対する興味が高まって、科学と芸術についてのシンポジウムが盛んに行われるようになった。一昨年の秋、筑波大学で開催された国際シンポジウム「かたちの知・知のかたち」も、その一つである。

そのシンポジウムを推進したのは、やはりコンピューターの発達による数値・造形表現への新たな展開であった。コンピューターの使用によって、絶対不可能と言われていた4色定理の証明が成功したのは有名だが、近年では、最小の表面積を持ち空間を埋め尽くす、充填多面体の14面体が新たに発見された。特に後者は、コンピューター・グラフィックの威力なしでは達成出来なかった成果である。同じくそのCGによって展開されたのは、フラクタル・パターン、ペンローズ・パターン、3G、カオス、多様体などなどである。

「イメージ・ジェネレーターの展開」という副題がつけられた本書「かたちに見る造形の構成」は、東京都立大学建築工学科で、長ら

く学生の指導にあたる著者の、豊富な教育的経験を踏まえて論じられている。そのイメージ・ジェネレーターとは、著者の命名によるイメージを発生させる装置のことだ。それは造形能力を増強、刺激するものであれば、なんでもよいのだが、その最たるものとしてのコンピューターが、本書のイメージ・ジェネレーターとなっている。

大学の建築工学科では、建築を前提とした学科の性質上、機能・構造・材料・風土などに重きをおいた教育訓練がなされる。だが、そのために、形に対する自由な発想力、造形能力が十分に発揮出来ない場合があるのではないか。それらの制約に囚われず、まずは、機能・構造から独立して操作する、イメージ・ジェネレーターの有効性を説き、それを通じて「かたち先行仮説」を提唱しているのが本書である。その仮説とは、イメージ・ジェネレーターとしてのコンピューターが、最もその効果を発揮するのだが、造形表現において、かたちこそが、機能・構造に先行して、イメージされる重要性を説いたものである。

この「かたち先行仮説」を中心として、形、かたち、カタチ、記号、言語と、あらゆるかたちのイメージ論と造形論が繰り広げられ、後半には、それらの実証として、学生のCGによる数々の労作が並ぶ。

感服するのは、前述のペンローズ・パターンなどのトピック的なテーマは扱わず、「構成」という理念が全体を貫いていることである。純粋で論理的な空間把握に基づく造形や構成の影は薄れ、構成が一種のコラージュとなり、イラスト化してしまっている現在、その言葉は、実に新鮮である。後は、水彩で書かれた絵が水彩画であるように、如何に変換されようとCGはCG画であり、現実感喪失現象が起これぬようにと祈るだけである。

●とむら・ひろし／造形美術家

魂ジュニア」には生まれた「沈黙」の世代。ただ、現在、もっとも注目を集めているジェネレーションであることはまちがいない。

既存のシステムに反発し、従来の常識にとって代わる新たな都市像を提示できるのか。またそれを誰もが共有できるヴィジョンとして認知させてゆくことができるのか。高度成長期に生を受けた「豊かさ」を知る世代の真価が、今、問われだしている。

違う世代から届けられている「機」にいかにかに反応するのか。各領域で活躍する30代の反応を見届けたい。

もうひとつの「機」が山本哲士の近著である。20年来の「読み」の成果から、ミッシェル・フーコーの「方法論」を平易に説いている。

著者は、フーコーのプラチック史論が展開された地平をイメージしつつ、「マルクスの時代」が終わっ

て、「フーコーの時代」に入ったと説く。意外と穏やかな語り口がくせものののだが、読み方によっては、ありとあらゆる既成の学問の系に対して、挑戦状を叩きつけているように読める。

「フーコー読みの文化普及」によって、「建築学」の枠組みを組み替えてみよという重いメッセージとして、筆者は受け取った。ありとあらゆる分野において、この国がこれまで維持してきた組織の有り様、評価のシステム、加えて暮らしを支える価値感の再編が要請されている。「知」の生産現場にあっても例外ではない。

学会の審査論文でのみ業績を評価する既成の「学問の場」と、便利屋的な効率のよい仕事を要望する「現実」のはざまにあって、この数年身を置くとことろを見出だせなかった。より自在に「知」の有り様を探求する「磁場」に、自らを置く喜びを素直に取

り戻したい。できることなら、まさに熱帯雨林に育つ生物のように、既存の枠にしばられず、ランダムに出現する可能性のある「夢」を領有してゆきたい。それが筆者なりの「応答」と考えている。

『建築雑誌』1996年1月号
下河辺淳著「インタビュー：復興計画の夢」
日本建築学会 1300円
「フーコーの「方法」を読む」
山本哲士著
日本エディタースクール出版部 2369円

第5回照明探偵団・連続講座 「ついでに良かった—真夜中まで真っ白で強力なコンビニの光に、君は狂喜するか自爆するか」

日時：4月19日(金) 18:00開場
会場：東京デザインセンター
品川区五反田5-25-19 Tel.03-3445-1121
ゲストパネラー：泉麻人(コラムニスト)
コーディネーター：面出薫
探偵レポーター：泉ルミ
応募方法：往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・連絡先を記入の上、「東京デザインセンター照明探偵団係」まで。4月5日(金)必着。
問い合わせ：東京デザインセンター
Tel.03-3445-1121

OZONEリビングデザインギャラリーイベント

「横田礼、浦野伸也、佐藤美知代3人の家具展」
会期：4月4日(木)～4月9日(火) 10:30～18:30
「セブ島で生まれた家具展」
会期：4月11日(木)～4月16日(火) 10:30～18:30
「箱という劇場—横山正の箱コレクション」
会期：4月18日(木)～4月23日(火) 10:30～18:30
会場：リビングデザインギャラリー、入場無料
新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー6F
問い合わせ：リビングデザインセンター
Tel.03-5322-6500 担当/萩原、伊藤

GA JAPAN '96

現代の日本を代表する建築家による最新プロジェクトを模型、ドローイングで紹介。
会期：4月13日(土)～5月26日(日)
会場：GAギャラリー
渋谷区千駄ヶ谷3-12-14 12:00～19:00、月曜休館
出展建築家：安藤忠雄、石山修武、横文彦、原広司、磯崎新、妹島和世、長谷川逸子、伊東豊雄、高松伸、早川邦彦、北川原温、山本理顕、池原義郎、葉祥栄、黒川紀章
入場料：500円
問い合わせ：GAギャラリー
Tel.03-3403-1581 担当/後藤

「アンディ・ウォーホル 1956-86:時代の鏡」展

会期：4月17日(水)～6月23日(日)、月曜休館
会場：東京都現代美術館
江東区三好4-1-1 Tel.03-5245-4111
入場料：1000円、高校生以下500円
記念シンポジウム：マーク・フランシス(アンディ・ウォーホル美術館キュレーター) 4月20日(土)13:30～
ギャラリートーク：毎週金曜 19:00～
問い合わせ：東京都現代美術館
Tel.03-5245-4111 担当/塩田、橋本

タイ・日本建築科学生ワークショップ+ E.T.C.J.A/バンコク展

会期：ワークショップ3月24日(日)～4月6日(土)
作品展：4月8日(月)～4月23日(火)
会場：ASA(タイ建築家協会)本部ビル
THE ASSOCIATION OF SIAMESE ARCHITECTS UNDER ROYAL PATRONAGE 248/
1 Soi Rong Yapun Rama 9 Rd, Huakwang, Bangkok 10310
Tel.662-319-4124
日本側出展者・講演者：
岸和郎、北山恒、妹島和世、トム・ヘネガン、内藤廣、原尚、古市徹雄、古館克明、古谷誠章、村松伸
問い合わせ：E.T.C.J.A 委員会
港区南青山2-4-16 Tel.03-3403-5710

建築家武田正義の視界展 —N.Y.・マダガスカル・ブータンを経て福岡へ

会期：4月1日(月)～4月27日(土) 10:00～20:00
会場：ADEKATZビル 入場無料
福岡市中央区薬院2-14-28 Tel.092-524-9080
問い合わせ：EXHIBIT50実行委員会
Tel.092-524-9080

HRフォーラム WAZA(和座) —自然の素材を生かす生活のかたち

日時：5月18日(土) 13:30～17:00
会場：京都私学会館 入場無料
京都府京都市下京区室町通高辻上ル
講演者：梅原猛(哲学者)、中村昌生(京都伝統建築技術協会理事)、エルマー・ヴァインマイヤー(哲学者)、加藤力(京都工芸繊維大学助教授・インテリアプランナー)、佐藤友美子(サントリー不易流行研究所課長)、三澤康彦(Ms建築設計事務所主宰)
定員：300名(当日先着順)
問い合わせ：ヒューマンリソースナレッジ研究所
Tel.03-3438-0931 担当/中野

インテリア・プランニング賞'96作品募集

審査委員長：大高正人
賞金：建設大臣賞100万円ほか
応募資格：当該インテリアの設計者であって、インテリアプランナー資格者またはインテリアプランナーの推薦を受けたもの。
募集対象：1994年4月から1996年3月までに完成した国内の作品で、既に雑誌等で発表されていても可。
応募方法：概要書A4判及び説明図A1判を郵送。
応募期間：4月24日(水)～5月24日(金)
問い合わせ：建築技術教育普及センター事務局
Tel.03-3505-1831

Emerging Architects in Japan —Epigenetic Scene ロンドン展

会期：3月25日～4月16日 8:00～18:00(火・木は21:00)
会場：RIBA Gallery (英国王立建築家協会)
出展建築家：隈研吾、妹島和世、北川原温、大江匡、堀池秀人、芦原太郎、園紀彦
記念講演
テーマ：「日本の文化と現代建築」
講師：黒川紀章 3月26日(火) 18:00～
テーマ：「日本現代建築の目指すもの」
講師：鈴木博之 4月2日(火) 18:00～
会場：RIBA(英国王立建築家協会)
問い合わせ：日本建築学会 Tel.03-3456-2051

JIA市民大学講座 「街・人・建築—OVER70の提言」

21世紀を目前にして、建築界はさまざまな意味で混沌の時代を迎えている。70歳を越える現在も活躍する建築家が、原点に立ち戻って街と建築、人生を考える。
開催日と講演者
・4月19日(金)：山西喜雄
・4月23日(火)：棚田正信
・4月25日(木)：清家清
・5月16日(木)：高橋航一
・5月23日(木)：向井正也
・5月24日(金)：横尾義貴
※いずれも18:30～20:30の計6回。講演日程は、予定。
会場：大阪府立文化情報センター
大阪府北区中之島3-2-18
参加費：各回1000円
申込み先：(社)新日本建築家協会近畿支部
Tel.06-229-3371、FAX:06-229-3374

建築Next Phase研究会公開セミナー 「多層建築の究極的構造モデル— せんだいメディアテークでの提案」

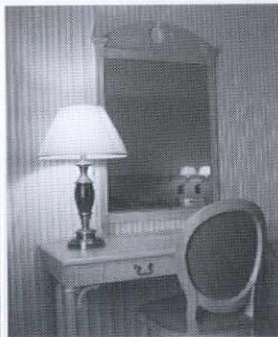
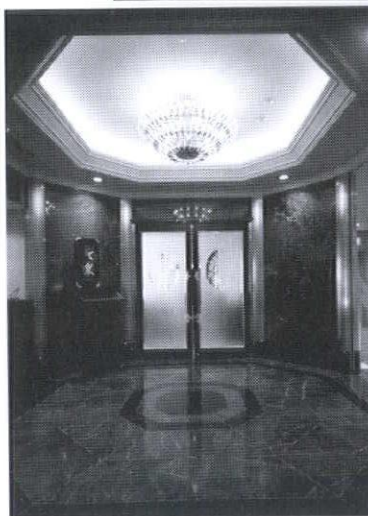
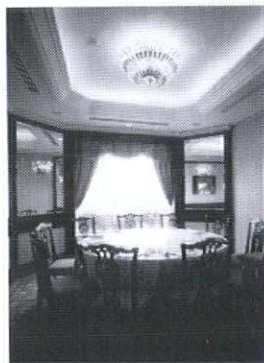
日時：3月27日(水) 18:30～20:30
会場：東京デザインセンター
講演者：伊東豊雄
申し込み・問い合わせ：東京デザインセンター
建築Next Phase研究会係 Tel.03-3445-1125

公開セミナー 「21世紀型サービス産業としての商環境」

日時：4月19日(金) 16:00～18:00
会場：アドヴァン原宿ショールーム8Fホール
講演者：飯島直樹、大江匡、出崎徹
問い合わせ：シームインターナショナル
Tel.03-3498-0831

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



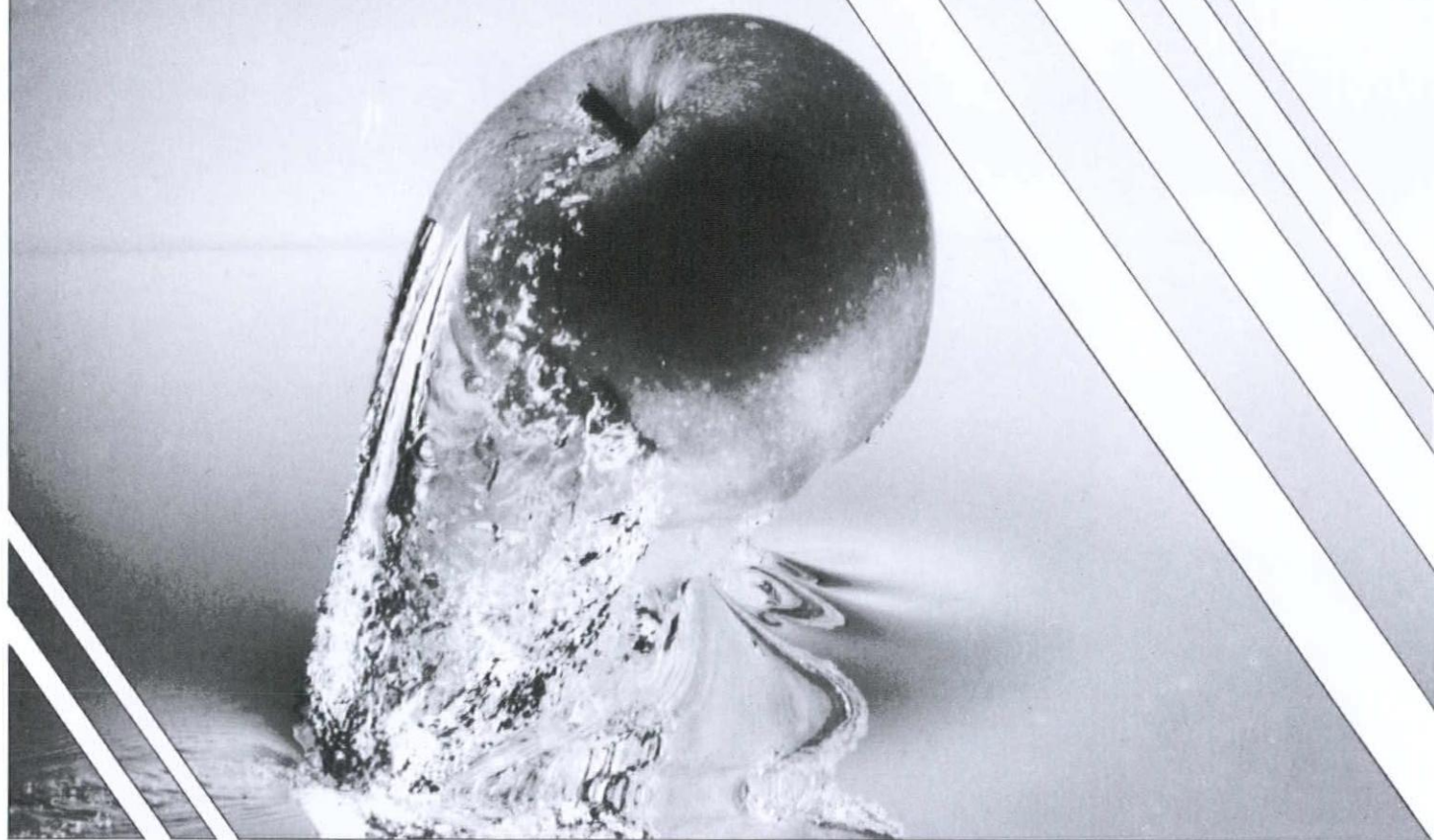
ハウステンボス JR 全日空ホテル (長崎)

yamada
山田照明株式会社

本 社/ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161	横浜支社/ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731
仙台支社/ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630	大阪支社/ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635	名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル) TEL.052-252-5161
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442	千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL.043-244-2540
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119	鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (東和ビル) TEL.0992-58-0031
宇都宮出張所 〒352 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381	長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420
	札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三条 4-2-3 TEL.011-811-2215
	静岡営業所 〒422 静岡市稲川 3-12-4 (山中ビル) TEL.054-283-9788
	秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (ナカムラビル) TEL.0188-65-2550

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

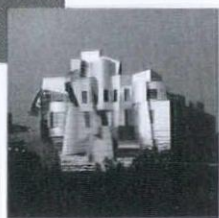
本社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富 1163

明石工場 ▶ 〒673-01 明石市二見町南二見 21 番 3 号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

岡部克哉
紫雲照英
田上健一
丸橋浩一
村上誠一



建築が扱う情報（あるプロジェクトを構想する上で検討のためのピックアップされる項目）は、フラットな関係のまま単純に増え続けている。それと同時に建築を成立させる上で必要な価値観（情報に対しての判断基準）の幅は拡がり、情報インフレとも呼べるような状態にある。ひとつ一つの価値観を支えるリアリティ（根拠）を問題にすることができない、情報の均質化へ向かってしまっているように感じられることさえある。例えば、増大した情報を何とか全て扱おうとしてヒエラルキーを導入して分類したりするのは、そうした価値観を生産している文脈への無関心を助長することになる。かといって、大量にある全ての情報をただあるものとして無分別に受け入れてしまうことは、それらの情報を支えている価値観そのものを無力化することになる。

各建築毎に新たなプログラムを想定し、その建築の与条件に加えてみたり、プログラム上不確定な部分をあえて残し、新たなプログラムの発生に期待するというようなプログラム主義的な方法も、建築が扱う情報が拡がっていることに対応するひとつの方法として導入された

海外建築情報リミックス

みることができる。形式化する建築の方法に対しての反動ともとれるこうした方法は、それぞれの建築毎に扱わなければならない情報を再確認し整理するためには有効に働いたが、結局は平面的な形式（単純な図式）に置き換えることのできる、ある特定のグループの情報へのみ強い眼差しが向けられその一方で、それ以外の情報を排除する方向へと向かうことになった（どんな方法も、方法として確認された時から形式化への道を進む）。プログラム主義的な方法は価値観を生産している文脈に対してより鈍感になっていく状態をつくりだしたと見ることもできるほどだ。

必要なのは、例えばプログラム主義的な方法のように、建築に関わる情報を単純化して扱うことではなく、情報を支える価値観のリアリティに対しての正確さを保つことではないか。つまり、それぞれの計画が関わっているいくつもの対象やいろいろな現象を注意深く観察しなければならない。そうすることで、特定の情報以外の事柄を排除するのではなく、どんな情報でも関係なく取り込もうということでもない建築を取り巻く情報に対して、正確な建築として出現させる方法を見つけることができるのではないか。平面的に拡がる大量の細かい情報をそれらの間の文脈を読み取り、組み上げることでフラットな状態の情報に外形を与えることが可能になる。関心があるのは、この情報に外形を与えるに至るまでのプロセスだ。

このような情報が建築へと具体化していくプロセスをトレースしてみたい。そのためのひとつの方法として「エ

ンベロプ」（＝建築の外側の表面）のつくられ方／現れ方に注目したい。ひとつの建築をつくり上げる時の構想のプロセスの中で、形式化した機能の扱い方や構成をつくるための習慣化した方法からは、エンベロプのつくられ方を説明することは難しいはずだ。エンベロプの現れ方を問題にした建築がつくられるとしたら、様々な情報に向けられた眼差しが建築の外表面の状態に特に強く引きつけられた場合だろう。建築をヴォリューム（建築全体の構成のつくられ方に注目した建築の捉え方）、また境界線（外の環境と建築の関係に注目した建築の捉え方）の関係としてでもない、「エンベロプ」＝表面そのものの現れ方の側面から注目することで、その建築が関わる様々な情報に対してどのような価値判断がなされたのかを読み取ることができるのではないだろうか。「エンベロプ」を今年3回のテーマとして、形態的な関心や空間的な問題を越えた建築の表面そのものが引き寄せるイメージに対しての価値観（知覚の距離）を問題にしていきたい。

表面を構成している素材表面に描かれるパターンや色表面が担っている機能などいろいろな角度から建築の外表面に注目することが可能だが、1回目である今回は「単一素材」をテーマとして、その建築に働いた価値観と単一素材化へ至るプロセスを考えてみたい。建築の外装の

Theme: エンベロプ その1「単一素材」

仕上げ材料が、屋根も壁もひたすら同じ材料で覆われているような建築に注目したい。外装材が全部同じ材料でできていることだけに限定するわけではないが、ひとつの材料で構成しようという強い意図が働いているプロジェクトを問題にする。扱い得るあらゆる素材の中から、あるひとつの素材を選択し、そしてその素材で全体を包んでしまおうということに対して、どのような建築家の判断が働いているのか議論の対象となる。そこにはひとつの建築が現れる時のその現れ方の強いイメージが浮かび上がってくるはずだ。あるいは複雑な構成を持たせながらそれら全体を単一素材化することで、分節のないものに見せようとするような屈折したコントロールの結果で、簡単にはそのプロセスが読み取れない場合も多いだろう。そのあるひとつの材料がもつ性格やそれが引き寄せるイメージと、全体が単一の素材で包まれている状態との両方を可能な限り正確に読み取り、素材の単一化を引き起こした要因を追跡することで、それぞれの計画にどのような価値観が働いたのか。言い換えればその計画にどのような情報を取り込もうとしているのかを浮かび上がらせることが、今回「単一素材」をテーマとすることでの最終的な目的である。各論では、あるひとつのプロジェクトに対しての思い切った深読みを期待したい。

曾我部昌史

昨年1年間、「政治・経済」をテーマとして扱った「タイポグラフィ」「ぐにゃぐにゃもの」では、いずれも建築の外側の表面のつくられ方が問題となっていた。建築と社会的な事柄との関係が明確に現れてくる側面としてこれらをテーマとしてきたが、引き続き今年も、建築の外側の表面そのもの＝「エンベロプ」のつくられ方をテーマとする。エンベロプに向けられた建築家の眼差しを読み解くことが目的である。

コア・スタッフ'96
今井公太郎
岩下暢男
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

AA: L'architecture
d'aujourd'hui
ar: The Architectural
Review
d: domus
EC: EL CROQUIS

単一素材で覆われた建築について語る前に、ざっと単一素材で覆われた建築として扱って、と私が考える建築の周辺のコンディションを整理することから始めたい。というのも、問題にすべき点は、そのコンディションを鑑みて、単一素材で建築を覆うという建築家の意志の所在、そしてそれがどのように表現され、機能しているかを検証することと考えるからだ。

まず最初に形態と素材について、単一のヴォリュームによって規定される建築と、複数のヴォリュームのコンプレックスによって構成されている建築が、仮に両方とも単一素材で覆われているとすれば、おそらく後者の方が、より単一素材で建築を覆うことに対して意図的である。

次に建築の自立性について。第3者が形態の決定因をひとつに限定することは不可能だろうが、どの因子が形態決定においてプライオリティとされたかという問題については、作家のステイメントなどから確認できる場合もある。例えば、レンゾ・ピアノ・ビルディングワークショップによる関西空港旅客ターミナルビルでは、あの流れるような形態は、内部空間の空気の流れから導き出されたと作家は語る。当然、形態決定には他のパラメーターも想定され、検討されたはずだし、厳密には、そこに作家の形態に対する恣意性が働いていたかもしれないが、少なくとも、結果としてのあの形態が（より正確に言えば、その形態に合体している天井から吊られたオープンエアダクトと呼ばれる膜の形態が）空気の流れを円滑にすることに貢献していることは確かだろう。ここに、内部と外殻の整合性がみてとれる。

これに対して、内部の空間の論理だけからいったら、決して整合性を持たない外殻をもつ建築がある。アーキテクチュア・スタジオによるJules Verne High Schoolなどはその好例だろう。パリの北30kmほどの所に建つこの建築は、2本の幹線道路に囲まれ、

その一方に面する側は構造材であるコンクリートで覆われ、他方は金属パネルを用いた緩やかな曲線によって構成される1枚の外殻でほぼ全体を覆われているものの、内部空間はそれとは自立したグリッドに従ったプランになっている。このパネルで覆われた建築の部分と、閑空のような建築を比べた場合、前者の方が、後者よりも単一素材の外殻という点に関して、意図的であるといえる。では、この意図の根拠は何なのであろうか。少ない情報の中から、その根拠を限定するのは非常に困難なことに思えるが、いくつか考えられることはある。それを探ってみよう。まずひとつは、周辺の道路との関係だ。かつて、高速道路と建築の関係について語っていたのはロバート・ヴェンチュリだったと思うが、確かに建築の外殻とそれを認識する人間の移動する視点という関係を考えて、移動のスピードが速くなればなるほど、人間の認識できるディテールはすっ飛んでいき、おおまかな建築の表面の仕上げや形態が認識されるだけになる。このときの形態はまた、定点で観測したときのファサードとは大きく異なることは言うまでもない。移動する視点のスピードの高低により、認識される像を変える建築は、建築と視点の位置の関係で言えば、近景・中景・遠景の違いのようなものに近いだろう。余談だが、このハイスクールの他にも、机の上のオブジェをそのまま肥大させたような、近づいても近づいても遠景のようにしか見えない建築（浅草にあるアサヒ・スーパードライホール、パリのベルシーショッピングセンター）が、高速道路の脇にあることを思い出す。ともあれ、いかに良いディテールをもつ建築でも、それを認識する視点の移動のスピードが高く、そのディテールの存在にすら気づかないようなら、もうそのディテールはサブリミナル（認識し得ない情報）の領域に属している。相対的にこのサブリミナルの少ない世界のひとつが、高速で移動する視点で観ると

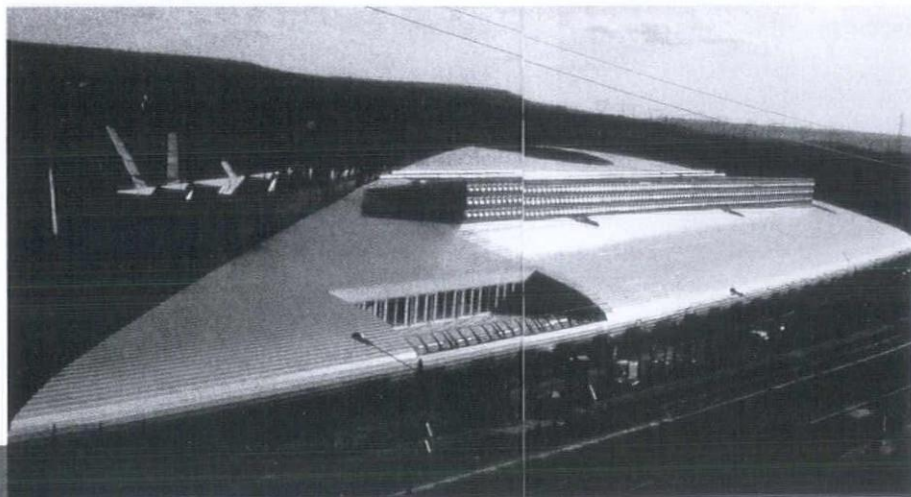
いう状況の中で接するJules Verne High Schoolのような単一素材で覆われた建築なのかもしれないし、それはまた音楽で言えば、人間の可聴領域のデータしか入っていないCDのようなものかもしれない。

道路との関係から、内部空間と整合性のない外殻の根拠を探してみたが、建築家（アーキテクチュア・スタジオ）がそれを試みた別の根拠のひとつは、その内部はどうであれ、空を映し込み、玉虫色に輝く金属の1枚の布で建築を柔らかに覆ってしまうということだったのかもしれない。もっと言えば、それにより建築の存在感が希薄になることを期待したのかもしれない。単一素材の外殻とは、無分節とそれに伴う無構成、無コントラスト、無ディテールを包含し、都市の構成要素としてさらに下位のエレメントをもつ建築と、それをもたない建築の境界を成立させる要素となる。そしてそれは夥しい情報の氾濫の中で、「無……」（無という接頭語）の記号性の獲得へと繋がる。「無……」。フィクションとして、無いということにより広がるイメージは豊饒だ。クリストの幾つかの梱包作品が、見えなくすることにより、見ることに對する強い欲望を喚起するように（クリストはこの点に関してあまり関心はないらしいが）。しかし、一見他の記号よりも上位に位置するかのように見えるこの「無……」という記号性も価値相対主義の中で、時間の経過とともに、「無印という印」という単なる記号へと回収されていくだろう。ここが、クリストの期間限定作品と在り続けなければならない建築との差だ。それでも、そうになったら開き直って、ロンドンで「MUJI」といった名のブランドで売り出され人気を博している無印良品のようにコノテーションを削ぎ落として生き残る手はあるだろう。

ハイウェイ・アーキテクチャ

岡部克哉

Jules Verne High School
architect: Architecture Studio
1'ARCA9512



「はだざわり」「はだが合う」「ひとはだ脱ぐ」「はだを許す」「はだ寒い」「はだ寂しい」など、どうも日本人にはこういった表現を好む傾向があるらしい。「はだ」とは皮膚のことであり、皮膚とは即時的な物質的組織であるにも関わらず、日本人は皮膚と呼ぶ。「はだ」と呼ぶ。これらは単なる触覚的な意味に限定された皮膚感覚を問題にしているのではなく、対人的、対社会的、対世界的な自己の有り様を含意した表現であり、それによって独特の意味を際立たせているようである。

建築を人間のボディと同様だという考えをすれば、建築を覆う屋根や外装は人間の皮膚に相当するものと言い換えることができる。身体全体を包み込み、単一の素材（医学的には人間の皮膚は表面の表皮と真皮、その下部の皮下組織によって形成されている）であるところの皮膚はまさに、今回のテーマとなったエンベロプそのものではないか。事実、皮膚とは内部と外部の境界にあって、肉を包み、外に対して内を守る甲冑であるし、自分という存在を他者から分かち、個性と肉体的プライバシーを保障する物質的基盤であることからその相似性が分かる。

と、なると「はだ」が建築においてどのような姿を見せるか、そして見せようとしていられるのか問題になってくる。

ドミニク・ペローによるフランスの国立図書館(図

1)、小図書館の増築計画は、そのカーテンウォールの明瞭性・透明性が語られることが多いが、実はその内側の木製建具によって、建築の「はだ」が規定されているのは衆知であろう。冷たくつるんとしていたはずのガラスのカーテンウォールの「はだざわり」は、規則的に配列された木製建具によりほのかにあったかようなものになっている。医学用語で言うところの表皮の下の真皮といったところか。ここでは対環境的な機能条件、そして機能を越えた対社会的な価値はガラスのカーテンウォールと木製建具の両方がバランスよく分担し合っているといつてよい。特にカーテンウォールと建具との間にある隙間はかえって我々に強烈に「はだ」を意識させることになっている。これは「はだ」の持つネガティブな対他性を反転させて「はだ」、つまりガラスと木を意識的に顕在化させることで、むしろ本来の「はだ」の持つはずの質感を獲得して「はだ」の有機化の可能性を暗示しているようである。そして、その純然たる表層性によって、かえって建築というボディの量塊性を際立たせる奇妙な存在感を獲得し得ている。

「はだ」という表現を用いて単一素材で覆われている建築の「はだざわり」の有り様が記述可能だとしたら、ヘルツォーク&ド・ミュロンによるリコラ社倉庫(図2)は亜鉛メッキのシートメタルと木製キャンティレバーがいかにもざらざらしていそうな

「さめはだ」、ラファエル・アラнда、カルメ・ビヘンのマルガリータ邸(図3)は樹脂系吹き付けタイヤがぶらぶらの「もちはだ」、ジャン・ヌーベルのカルチェ財団(図4)は突けば壊れそうな「やわはだ」といったところか。これらの作品すべてに共通して言えることは、建築の個性という問題を超えて、「はだ」の操作により実体としての建築のボディを表現させることにある。

ただし、「はだ」はそれが健康な筋肉や充実したボディを包んでいる限りにおいて機能する。肉から離れて自立したりすると即座に抜け殻になってしまう。とはいうものの、「はだ」は個別的な存在を保障する境界で、内部と外部とのオルガスムの交換の場、環境との複数の交換の場、受容の表面であると同時に表現の道具であることは間違いない。

人は対他的な拒否感情を「とりはだ」を立てることによって表明することができるが、「はだ」はまた、建築家にとって社会システムの中での唯一の自己顕示、または他者嫌悪、世界拒否の特権的表出の場となり得るかもしれない。

建築の「はだざわり」

田上健一

Bibliothèque National de France—①

architect: Dominique Perrault
AA300

Storage Building for Ricola—②

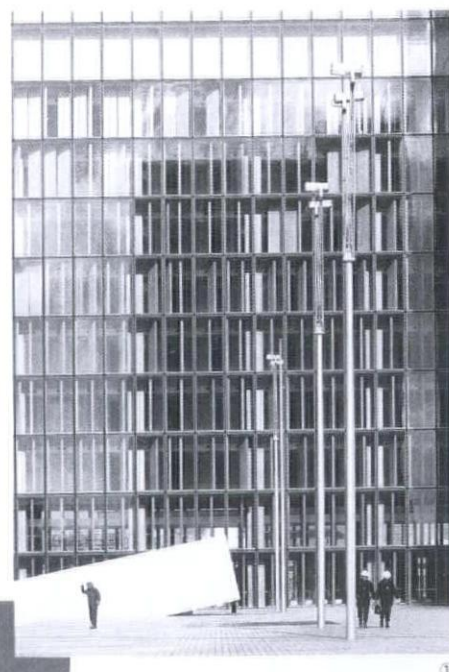
architect: Herzog & de Meuron
a+u 9509

Casa Margarida—③

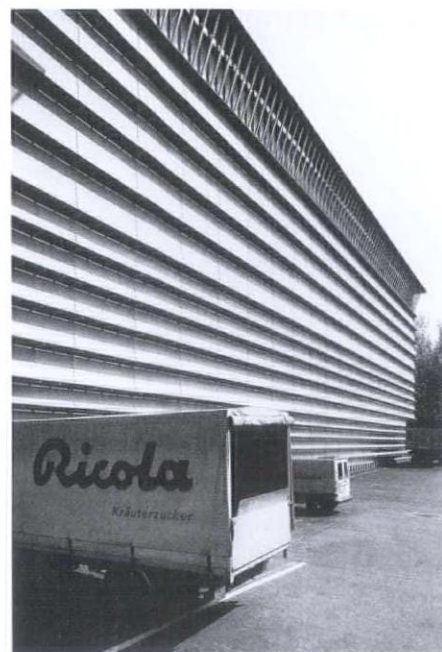
architect: Rafael Aranda, Carme Pigem y Ramón Vilalta
EC62/63

Fondation Cartier d Paris—④

architect: Jean Nouvel
AA296



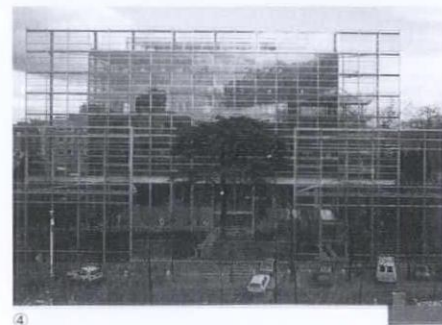
①



②



③



④

並んだヴォールト屋根を持つミュンスターの工場建物は、部分的に完成したものの、長い間使われずに放置されていた。ドイツの建築家Bolles-Wilson & Partnersは、オリジナルの煉瓦造建物をアルミニウムの被膜で覆い、Yellow Mobil社の家具倉庫として再生した。オリジナルの建物の壁および屋根の防水上の機能は健全であった。

下地となる煉瓦壁には手を加えずにアルミニウムの被膜で覆うというやり方は、古くなり痛んだ防水層をそのままにし、その上に新たな防水層を設ける屋根改修工事とよく似ている。Bolles-Wilson & Partnersによるこの改修は、防水などという機能を果たさなくなったことがその契機ではなく、既存の建物に全く別のものの外見を与えたいという欲求によるものである。ファサードは取り換え自由の仮面のように貼り付けられている。

この仮面は、建物に要求される壁の機能を果たすという意味で、技術的に合理的につくられている。少なくとも、そのように見える。

長手方向に120mという長い壁面を、やや下向きとやや上向きに角度をつけた鏡面仕上げのアルミ波板で被覆し、ヴォールト屋根を同様なアルミ折板で覆った。内側に防水性のある煉瓦壁を持つので、アルミ波板の外皮は通常の場合程の防水の完全性を要求されない。それゆえ、アルミ波板の端部の処理は出入口だけにとどめられ、その他の部分は笠木などを設けることなく切りっ放しである。

壁面は、立面として上下に分割されている。断面詳細からわかるように、大きな割合を占める上部の

外皮は、建物の外側に向かって傾きをもつ。このために雨樋の巧みな処理が可能となった。また、下部の袴状の外皮は、上向きに傾けて取り付けられているわけだが、この傾きが雨水処理の上で以下のような役割を担っている。先に述べたように波板の端部は、切りっ放しで笠木がないために、金属雨樋と斜めに傾いた上部の外皮との取り付け部分に隙間（ギャップ）が生じてしまう。この隙間から侵入した雨水が上部の外皮の裏面をつたって流れ落ち、それを袴状の下部の外皮の表面が受ける仕組みになっているのである。

一般に仮面というものは、その取り付けられる素顔と、固有の結び付きを持っていない。

アルミ波板の仮面は、立面に表れていた堅樋を、プレーンな被膜で覆い尽くしている。この仮面も例外ではなく、あらゆる1層の工場建物にもあと付けで貼り付けることができる。

それでは建築家は、なぜこのような断面を持つ特殊な被膜を設計したのであろうか？ もっとはっきり言えば、仮面をかぶせずに、組石造の素顔に銀色の白粉（おしろい）で化粧をしただけでもよかったではないか？

この疑問に答えるには、120mにわたって、このような比較的特殊な被覆の仕方をした、その意図は何かということを読み取ってみなければならない。この建物を見てまず気付くのは、面積としてはより少ない部分を占めているに過ぎない、下部の袴状の外皮の太陽光を反射した輝きである。設計者が最も実現したかった知覚上の効果とは、地面すれすれに

水平方向に広がった「光の帯」なのだろうと思われる。連続した光の帯は、堅樋の存在によって分断されたのでは、その視覚的效果は半減してしまう。それゆえ、堅樋は念入りに被膜の裏側に隠された。堅樋を収まりよくするために、上部の外皮はやや下向きの傾きを持つことになった。

このように考えると、決定された断面詳細は、「太陽光の反射により接地部分を走る『光の帯』の具現化のための、傾いた袴状の外皮」という、ひとつのアイデアから演繹的に紡ぎだされたのであるといえよう。

建物の周りに茂る白樺の木々のつくる垂直線に対して、長い水平の光の帯を置くことは、コンポジションからの要求でもある。

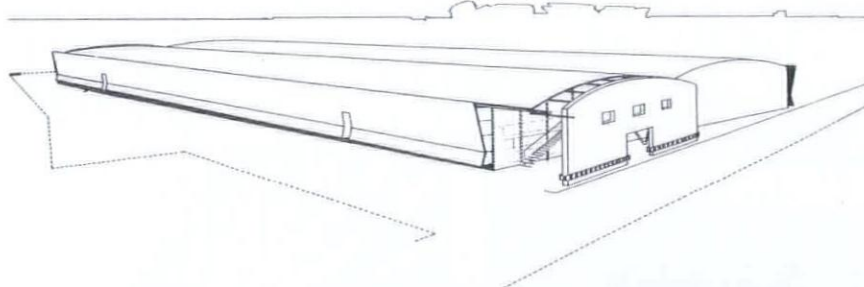
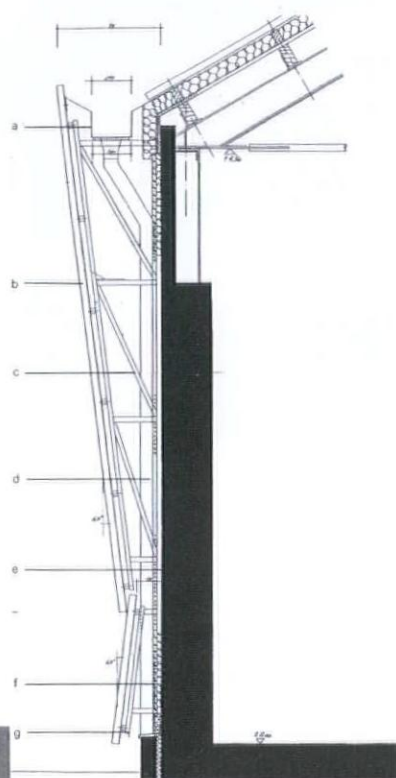
仮面は、取り換え自由であり、別の場所の別の建物にも貼り付けることはできる。しかし、「反射する」ということが、ひとつの機能であると捉えた場合、この機能はミュンスターのこの場所でこそ生きるのではないだろうか。とすれば、この光の帯という仮面は、この建物に最も相応しい固有の顔というべきものとも考えることもできよう。

いずれにしろ、白樺の林の向こうに、その木々のゆらぎの反映を受けて、水平の光の帯がまたたく。笠木を持たない切りっ放しの端部が鋭く切れの良い印象を与えている。この建物は、まばらに白樺の生い茂る寂しい平原に、水平線のきらめきを添えたのだ。

反射すること

紫雲照英

Yellow Furniture Warehouse and Showroom
Münster, Germany, 1990-1991
architect: Bolles-Wilson & Partners
ar9509



何であれ建築として境界を持つ以上、外観は存在します。例えばプログラム論的な視点によって建築が組み立てられていようと、その外観によって建築がたちづくられていることは事実です。そこで、その外観の解釈の仕方を、単に建築の組み立てられ方(手法)や、理論によって統一的(一義的)な説明を与えるよりも、自由で多様な解釈を促した方がより建築を豊かにするのではないかというのが、今回のお題目でもあるわけです。プログラム主義にしるフォルマリスティックな建築にしる、図像をそのまま鵜呑みにするような解釈方法は退屈極まりません。それこそが害悪の根源です。

外観(正確には外皮)の問題は、建築のつくられ方や内部のプログラムに対して、全く切り放して語ることが可能です。そのような読み取りの態度は、建築をより大きな枠組みの中で捉えることを強要し、必然的に建築という従来の枠組みに捉われない多様な解釈を可能とします。

外皮ということでは、クリストの作品などその典型といえるでしょう。彼の作品の構造は、ものを覆うという極めて単純なものです。そして使用するオブジェクト(素材)も、いわば薄っぺらの布1枚だけです。彼が投入する新たな外皮は、もの(対象物)を覆い、隠蔽することによって、逆説的にそのものの存在やそれにまわりついた意味を浮かび上がらせ、新たな別のオブジェクトとして新しい意味を産出させています。そこにおいて我々は、いかに外皮が多様な意味に引きずられているかを容易に認識することが可能でしょう。薄っぺらの表層のその表層性に注目することによって、そこに逆説的に深層心理や意味を浮かび上がらせようとする試みは、シュルレアリズムが開発した技法であります。クリストの功績とは、それをより大きな環境的な出来

事へと拡張したことにあると私は考えます。彼の作品とは、環境に置かれたオブジェクトを一旦環境から引き離すことによって、意味や関係を再編成するものだといえることが可能でしょう。そのときに作品は芸術という枠組みに限らず、より様々な環境に散らばるテキストを否定なしに引き付けてきているのです。いわば外皮である薄い布=表面は、環境のあらゆるものの関係や意味が再編される場=インターフェイスであるといえるのではないのでしょうか。ここで取り上げるHild & Kaltwasserの塗料の倉庫は、プレキャストのコンクリート板のパーツの組み合わせによってつくられた独特のパターンのファサードによって、クリストの作品と同様の効果をもたらしていると見る事ができます。Domus誌の評者は、苦勞してそのファサードのパターンを倉庫内のスチール棚の荷物の上げ下げのパターンだとか、光に変化をつけるためだとか説明していますが、そのファサードが引き起こしている現象について可能な考察に比べれば、ファサードの構成理由などあまり興味深い事柄ではないように私には思えます。この倉庫のファサードは、その独特のパターンによる過剰な自立性ゆえにそれが環境に投入された時に、周りとの関係を一旦切断したような状態から、環境とオブジェクト(建物)の距離が測れない状況を引き起こしています。つまり、その過剰な自立性が周りの環境をも平たい距離のないものとしてしまい、建物と環境との関係が不明確化してしまっていると考えられます。しかし、その時にオブジェクトは、逆説的に単一性や自立性から解放され、環境(テキスト)の中に溶け込んでいっている、あるいは環境がオブジェクトの中に入り込んできていると考えることはできないでしょうか。それは異化だとか、カムフラージュとは、また別の水準のものであるよう

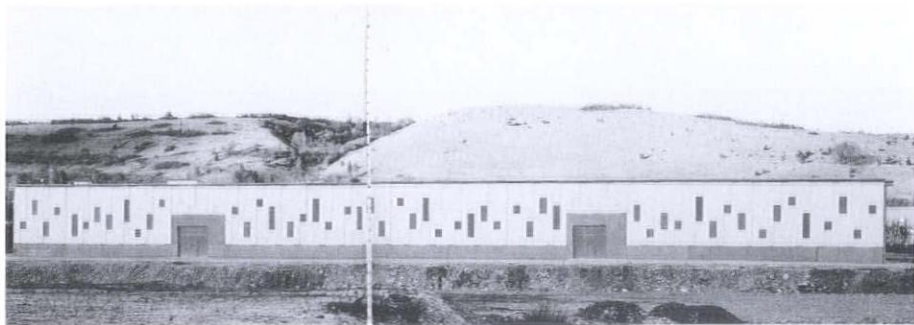
に私には思えます。よく私たちは劇的な風景などを見ると、「絵のような風景」という表現をすることがあります。それはその景色が超現実的であったり、構図が決まりすぎるほど決まっていたり、あるいは今までに見たことのなかったような色彩であったりするのだけれど、それらの大本にあるものとは、環境との距離が測れないこと(関係が測れないこと)ではないでしょうか。通常では距離をもって立ち現れていたものが、全て同一の平面にのってしまいつべての意味が等価で薄っぺらい2次元の絵になってしまっていることを表現しているのではないのでしょうか。普通私たちは2次元よりも3次元の方が上位の次元であり、より多くの意味を有する(よりリアルである)と考えがちです。しかし、考えてみると3次元とは、3つのベクトルによって距離を測り構造づけし、ものを空間に規定することにほかなりません。そうしてみると距離の破壊された「絵のような風景」とは、自由な意味の組み替えや読み取りを可能とする場として考えることができるでしょう。

少なくともこのファサードは、泥炭を埋め立てた周りの殺風景な環境に対してうまく機能しています。倉庫という外皮だけでの建物(それゆえに社会的に外皮に少し色を添える程度にしか建築家の職能が認知されていない悲劇・喜劇的な状況をラディカルに批判しうるテキスト)も、環境(テキスト)に対して、これだけの建築の再編が可能であることをこの作品は指し示しております。おにぎりもその表面を覆うのりが乾いていてバリバリしているか、時間がたってベチョベチョになっているかで全然味が変わってしまうように、建築の外皮も多くのテキストを引き寄せる重要なものであることをこの建物はあらためて教えてくれます。

インターフェイスとしての外皮

丸橋 浩

Industrial building in Eichstätt, Germany—①
architect: Hild & Kaltwasser
d776
Wrapped Reichstag—②
Berlin, 1995
artist: Christo & Jean-Claude



①

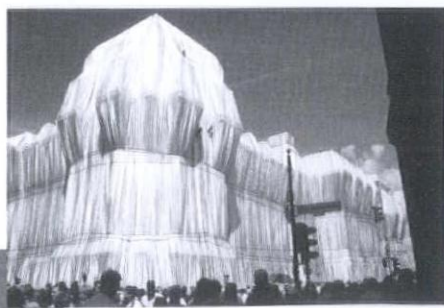
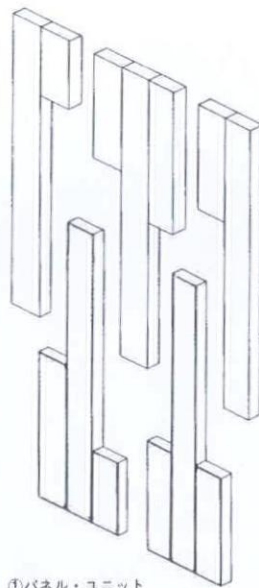


Photo: E.Okuno

②



①パネル・ユニット

外装材は、外部環境から建物を守る保護材料であり、建物を表す顔となり、時には外部の人々にその用途を理解させる表現材料にもなる。その条件として美観や耐久性が要求され、自ずと高価なものとなる。しかも、それが茶室ともなれば、一品ずつ厳選された素材が用いられることになり、環境破壊で材料の入手が困難になったことと、職人の人材不足から、近年の茶室は異常とも言えるほど高価なものとなっている。

しかしながら、出江寛が設計したこのトタン茶屋・范々庵は、屋根と外装が小波スレート（天然スレートではない）でできている。スレートと言えば、安価、工業製品、割れる、断熱性不良、水密性不良という代物であって、決してほめられた材料ではないと思っていた。住宅と呼んで良いのだろうか分からないが、一応住宅の形式を取っている石山修武の〈ドラキュラの家〉にもスレートが使われている。こちらは坪単価50万円を切るローコストもので、農地の中に立つ姿はまるで農業倉庫、いや、何かに似ている。Oh！それはオウム真理教の「サティアン」ではないか。実際、それと間違われて家宅捜査が行われたとの噂も聞いた。我々が知るスレートとはこのような倉庫や工場などのローコスト建築という事情の上に成立するものであり、これまで茶室のような値の張る建物の外側にわざわざ使う人はいなかった。

この茶室、見れば見るほど不思議な茶室である。に

じり口の扉には赤錆付き鋼板、「トタンの茶室・范々庵」の名前は、3畳台目の茶室内部に張られトタンからきており、点前畳側の壁には古新聞が貼られている。天井には3重に重ねたアルミ・エキスパンドメタル、床柱はH型鋼、床の間の壁は黒皮鉄板、唯一まともな使われ方をしているのは畳くらいである。元来、利休にあっては、茶室を構成する素材は野山で採れる、質素な素材を用いられていたため、精神論からするとこれらのマイナーな材料の利用は的外れではないが、いくら何でも茶室にスレートをねえ……。しかし、出江寛は、スレートに美を見出している。材質感、色合い、小波の形に粋と解し、待庵に見立てる大胆さである。この非常識な取り合わせの中には、何とも言えない魅力が潜んでおり、見れば見るほど面白く見えてくる。その他の作品にも、出江寛はその独特な組み合わせを見せており、彼を表す言葉に「無頼」の単語が伺えるが、このように大胆な素材の組み合わせや、独自の設計手法を見れば納得できる表現である。これらの材料の和風への見立て方（解釈）は、すでに述べられているので、スレートについての見立ての仕方を、文中から借用させていただくことにする。

「スレートの本質は、材質感から言っても「いき」である。それは無機的でベタベタせず、色合いも灰色でなかなかよい。一途中略一そしてスレートの、繊維が透けて見えるのが、見様によっては待庵の藁すさのように見え、装飾といえない装飾の役を果たしている。」（『JT』9411号より）

我々が驚きを感じる条件のひとつは、既成概念と事実とのギャップがある場合である。その差が大きければ大きいほど驚きは増加する。ここでは、スレートの持つ既成の「安物＝不良品」というイメージに対して、安物の中に「美」という全く新たな評価軸が与えられている。この新たな評価軸とその材料の組み合わせが、利休の精神に通じるのかもしれない。安藤忠雄がコンクリートという人工の無機的材料を用いて、自然素材以上により自然感を表現することにも、共通した精神が存在するように思える。

ローコスト材料のスレートに新たな和の解釈を与え、茶室に応用する行為は、材料の価値観の再認識で終わるものではない。それは、創造の意志と創作の情熱の「数奇の精神」の復活であり、若手建築家がいそいそと入っていけない領域と化した伝統的和風建築の世界へ、新たな現代茶室の展開するフィールド・オフィサーのような存在である。スレートの茶室と聞けば、「俺にも設計できそうだな」という勇気が湧いてくるのではないかな。ただし、ここで断っておかなくてはならないことがあるのだが。この范々庵の建築コストは、290万円/坪と、決して安いものではない。もちろん茶室の世界からすれば少ない金額であるが、〈ドラキュラの家〉の50万円/坪からすると、比較にならない（比較してはいけないのかもしれないが）差である。たかがスレートであるが、その奥は深いものがあり、「スレート侮るべからず」である。

ストレートにスレート

村上誠一

トタンの茶室／范々庵——①

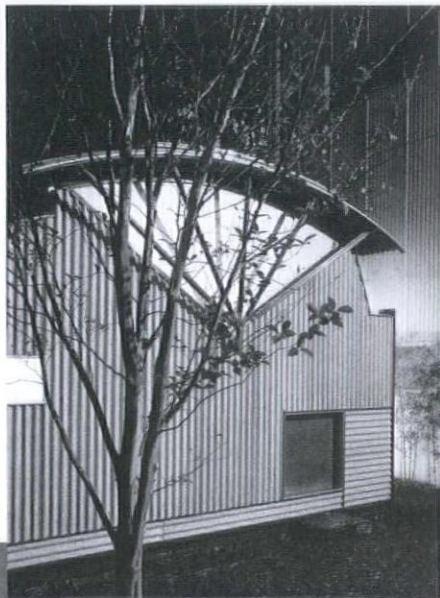
設計：出江寛

JT9411

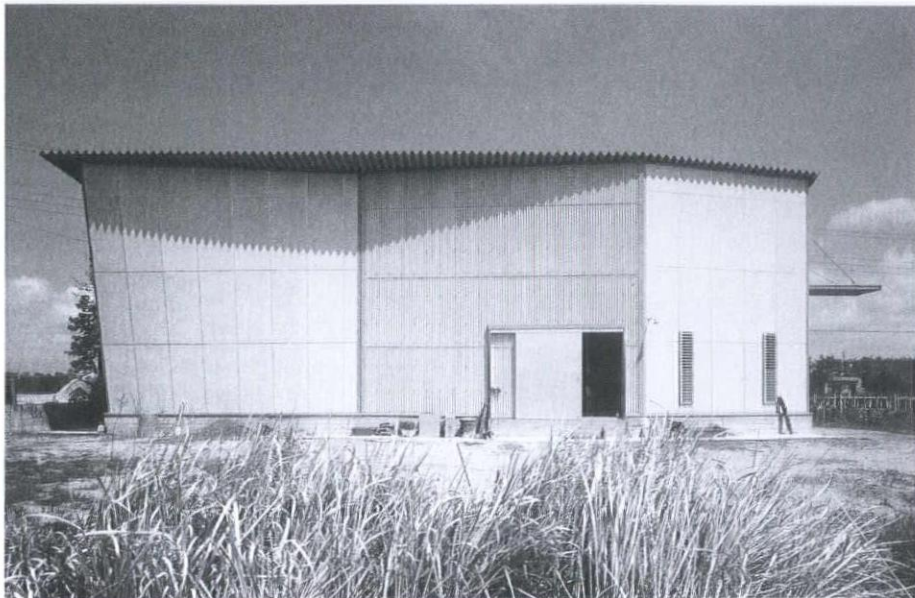
ドラキュラの家——②

設計：早稲田大学石山修武研究室

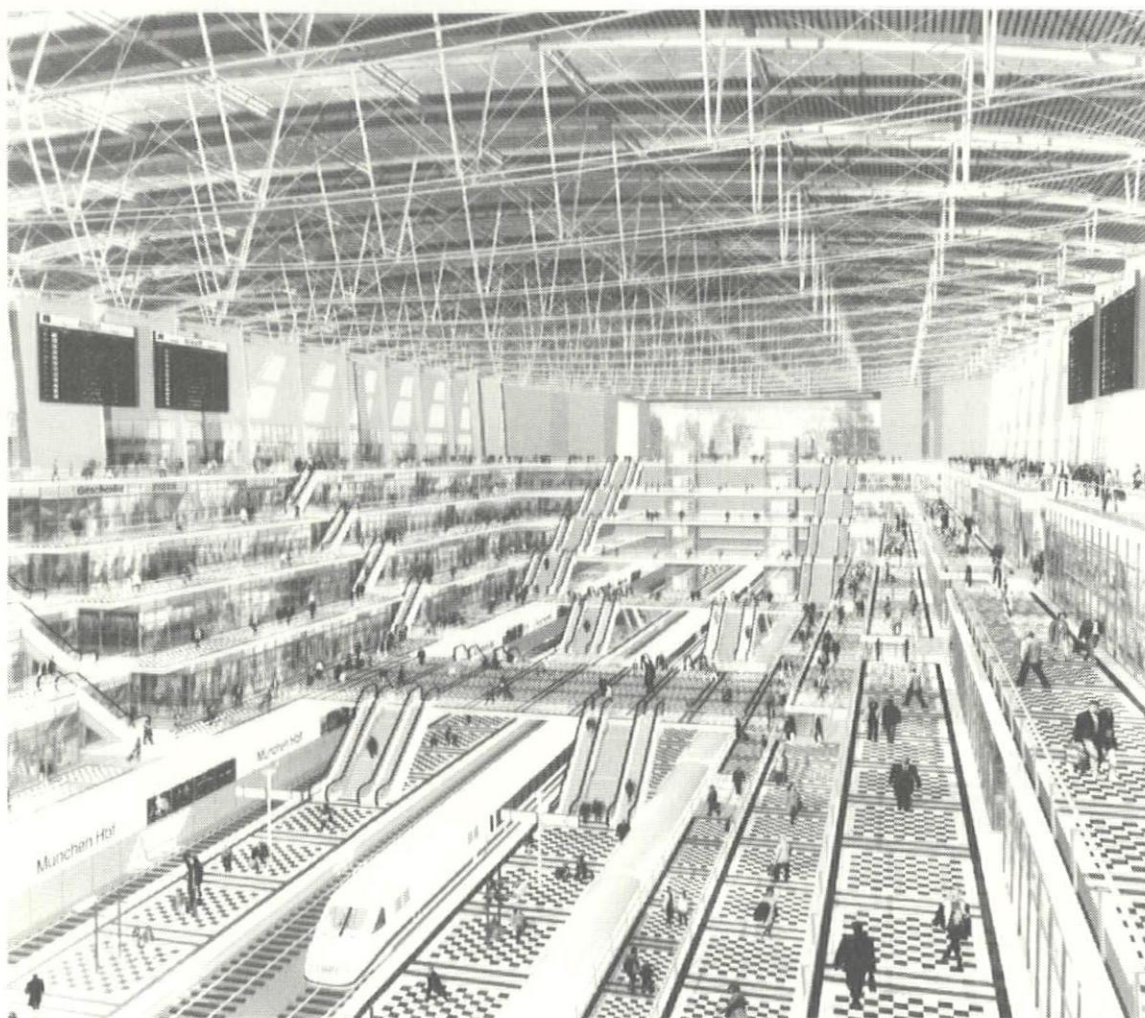
JT9506



①



②



ミュンヘン21・プロジェクト

9605

特集

多様性と調和の建築：ゲルカン+マルクの最新作

1978年の国際コンペ「パーレビ国立図書館」最優秀賞受賞を機に、その名が世界に知られたゲルカン+マルク。その後今日まで、家具デザインから住宅、オフィス、市庁舎、空港、都市計画とオールマイティな建築家として実績を残し、現在ドイツを代表する建築事務所となった。本特集では、場所性や都市との調和を設計理念とし、大規模建築を手掛ける彼らの'90年代の最新作・プロジェクトを紹介する。

[作品]

エルブショセー139、ミロ・データシステム・ビル、サラマンダー・ハウス、ドイチェ・レヴィジオン、
チューリッヒ・ハウス、レーベック音楽・会議ホール、独日センター、ライブツィッヒ・メッセ、ハノーバー・メッセ、
ベルリン・レールター駅、シュツットガルト21・プロジェクト、ミュンヘン21・プロジェクト

[文]

マインハルト・フォン・ゲルカン、クラウス・ディーター・ヴァイス、山下昌彦

鈴木了二の佐木島プロジェクト+佐木島の住宅

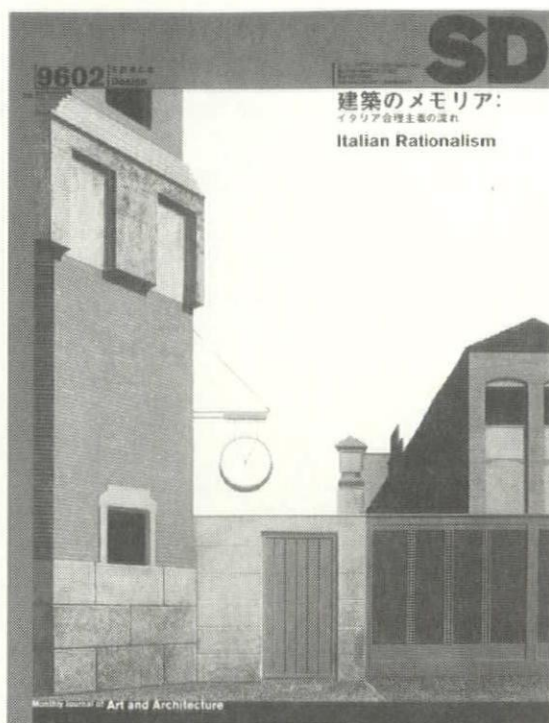
長年、素材と空間の関係を追求し設計を続けてきた鈴木了二の「物質試行」シリーズ最新作。広島県佐木島の住宅と店舗+宿泊施設をグラフィカルな写真とともに紹介する。

[文] 飯島洋一

[撮影] 安斎重男

連載：トムの時空形象学7／戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼4／竹山 聖



9602

特集

建築のメモリア: イタリア合理主義の流れ

ポストモダンやデコンとも明らかに一線を画し、歴史的文脈からアプローチする手法を通して、現代イタリア建築の一翼を担っている合理主義建築。本特集では、6人の建築家の仕事と思考に触れ、現代におけるイタリアン・ラショナルイズムの流れを考察する。

[建築家]

アントニオ・モネスティローリ、フランコ・ステッラ、マリノ・ナルボッツィ、ウンベルト・シオーラ、アルド・ウイーノ・カンターフォラ、ニコラ・ディ・パッティスタ

[論文]

アルド・デ・ポーリ、櫻井義夫

新連載

ヤマト・ホテル巡礼: 都市とホテルの空間文化誌

ある都市文明が、異なる都市文明との接触を試みるとき、そのための装置としてホテルが重要な役割を果たしている。この連載では、第二次世界大戦前に日本が中国に展開した5つのヤマト・ホテルを、現地取材した筆者たちが拠点、異国、リゾート、様式などの観点から考察しようとするものである。

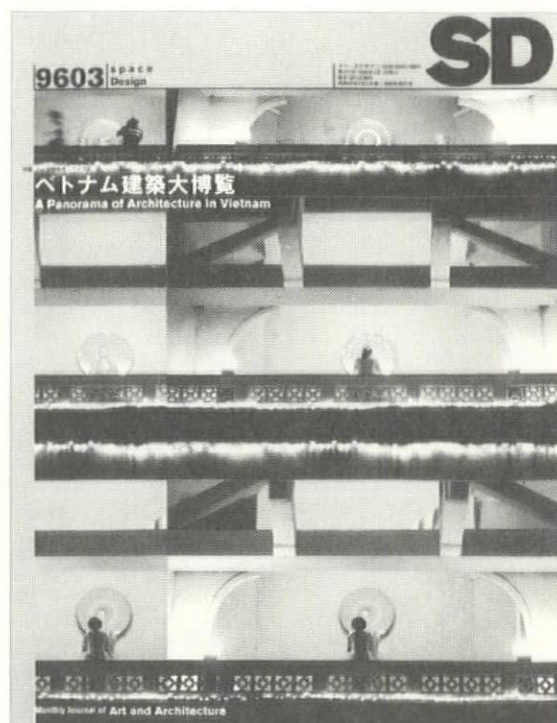
[筆者]

角野幸博、永井良和、橋爪紳也、竹山聖、毛谷村英治、横川公子、全6回のリレー連載

連載: apple tomology トムの時空形象学 5

文=戸村 浩

定価=1,950円/本体1,893円



9601

特集

アジア同時代シリーズ 2

ベトナム建築大博覧

近年めざましい経済成長を見せるベトナムでは、その都市と建築に対する学術的、実業的な関心の眼を世界中から集め始めている。もちろん日本からも各時代の建築、都市の調査研究、保存・修復、または、都市開発、起業投機と各分野でのアプローチは盛んである。本特集では、ベトナムの都市と建築の現在を紹介するにあたり、最も話題に上っている事項を、都市別、テーマ別に整理した。ベトナム主要地区の建築ガイドマップ収録(写真、解説付き、全221件)。

ベトナムの都市と建築

1. ハノイ/東京大学生産技術研究所藤森研究室+東京大学都市工学科西村研究室
2. フエ/中川武十早稲田大学アジア建築研究室
3. ホイアン/千葉大学・福川裕一、昭和女子大学・友田博通、他
4. チャンパ遺跡/日大片桐研究室・重枝豊
5. ホーチミン/東大生産技術研究所藤森研究室

ベトナム少数民族の住まい/ベトナム南部のオクエオ文化と前アンコール期の建築遺跡/ベトナムの木造架構/フエ・グエン朝王宮の修復保存/ベトナムの都市住宅/「建築家なし」のミニ・ホテル/ベトナムの工業団地/発熱・ベトナム現代建築事情

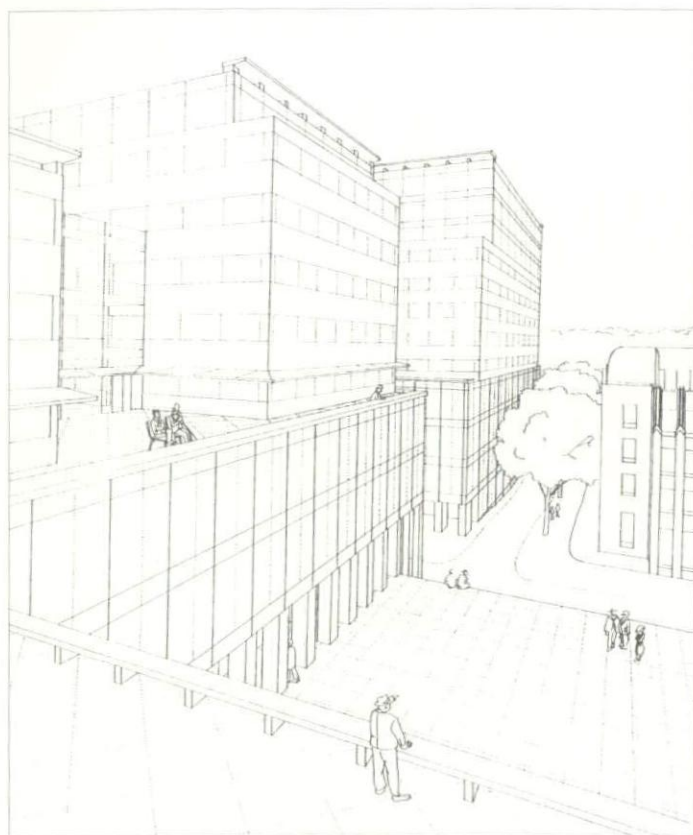
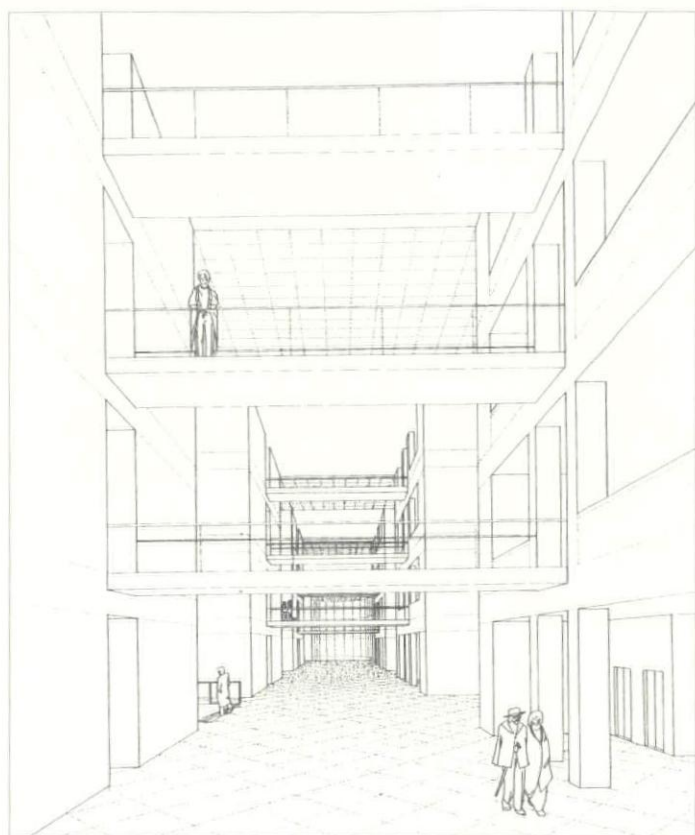
[ベトナム建築史論文] 重枝豊+中沢信一郎+村松伸

[写真] 鈴木豊

連載: apple tomology トムの時空形象学 6 [文] 戸村 浩

連載: ヤマトホテル巡礼 2 [文] ホテル文化研究会、永井良和、照明探偵団: 連続実践講座レポート 1

特別定価=2,500円/本体2,427円



SD別冊28 好評発売中

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発

判形：A4判変形

総頁：176頁

定価：3900円

教育と研究の最高学府としての大学を取りまく環境は、大きく変わりつつある。それに対応した改革の必要性は高く、現実に様々な策が講じられている。キャンパスを構成する物理的な環境も例外ではない。本別冊では、東京大学本郷キャンパスの再生計画の一端を担っているグループが、次世代のキャンパスのあり方を探るべく、欧米の諸大学を実地に調査した記録をベースとして、様々な角度からキャンパスの発展のかたちをスタディしたものである。

それらは多くの問題を抱えながら再生を図ろうとしている日本のキャンパス計画だけでなく、より一般的に、既存街区の保存、再生、増設などについての多様な方法の実例としても興味深く、役立つものである。

論文：

香山壽夫（東京大学建築学科教授）、岸田省吾（同助教授）、他

実例：

フランスの最新プロジェクト——リヨン大学、ストラスブール大学、アミアン大学、他

中世都市にたつ大学——ハイデルベルク大学、ケンブリッジ大学、サラマンカ大学、他

アメリカのキャンパス——ハーバード大学、プリンストン大学、ワシントン州立大学、他

モダンキャンパス——サッセックス大学、イーストアングリア大学、ベルリン自由大学、他

東京大学本郷キャンパス——外構、食堂、工学部14号館、1号館、2・3号館、将来計画

'95年 刊行図書一覧

シリーズ

SDライブラリー⑪

デザイン・ドリームス 映画に見る近代建築

D.アルブレヒト著 萩 正勝訳 A5判・272頁 定価4,017円

SDライブラリー⑫

アダムの家 建築の原型とその展開

ジョセフ・リクワート著 黒石いずみ訳 A5判・296頁 定価4,120円

SDライブラリー⑬

圏外からの建築 映画・写真・鏡・身体

ダイアナ・アグレスト著 大島哲哉訳 A5判・240頁 定価3,708円

SDライブラリー⑭

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハービン著 浜田邦裕訳 A5判・208頁 定価3,193円

ハイテック・コンストラクションI

ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アラン・J.ブルックス クリス・グレッグ共著 難波和彦、佐々木睦朗監訳

B5判・148頁 定価4,635円

ハイテック・コンストラクションII

スーパーシェッズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦、佐々木睦朗監訳 B5判・144頁 定価4,635円

[現代の建築家]

原 広司

SD編集部編 A4変判・174頁 定価4,429円

[インテリアデザイナーのための]

住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・192頁 定価2,266円

[物語 ものの建築史]

門のはなし

山田幸一監修 佐藤 理著 四六判・128頁 定価1,339円

[すぐに役立つ]

建築基準法の知識 (新訂版)

建築基準法実務研究会編著 B6判・212頁 定価2,266円

建築

インテリア・デザインの美学

スタンリ・アバークロンビー著 芦川 智、紀子訳 A5判・192頁 定価2,781円

桂離宮 ブルーノ・タウトは証言する

宮元健次著 四六判・184頁 定価2,369円

中空スラブ設計要覧

松井源吾、O.R.S.事務所著 A5判・152頁 定価3,605円

建築語源考 技術はコトバなり

飯塚五郎蔵著 四六判・164頁 定価2,163円

都市と建築のパブリックスペース

ヘルツベルハーの建築講義録

ヘルマン・ヘルツベルハー著 森島清太著 B5判・272頁 定価6,901円

[新版] **もめごとなしに住宅を建てる法**

はじめて家をつくる人のために

島田良一、藤森正男共著 四六判・184頁 定価1,854円

超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松 伸著 四六判・272頁 定価2,575円

今話題の建築技術を見る

近畿建築士会協議会編集 大阪府建築士会編集委員会技術小委員会執筆 四六判・194頁 定価2,060円

演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ編 A4変判・178頁 定価5,871円

都市と建築の解剖学 形態分析によって(設計戦略)を読む

J・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

かたちに見る造形の構成 イメージ・ジェネレーターの展開

島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

サントリーミュージアム天保山

安藤忠雄、三宅理一共著 A5判・80頁 定価1,950円

住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋、新まちづくり研究会編著 A5判・256頁 定価3,296円

都市・景観

ランドスケープデザイン

野生のコスモロジーと共生する風景の創造

吉村元男著 A5判・176頁 定価2,884円

子どものための遊び環境

ロビン・ムーア他編著 吉田徹也、中瀬典共訳 A5判・300頁 定価4,532円

テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片木 篤著 四六判・224頁 定価2,987円

庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、W.ターンブル・ジュニア共著 有岡 孝訳

A5判・304頁 定価4,841円

城下町の近代都市づくり

佐藤 滋著 A5判・232頁 定価4,326円

一般書・他

架空旅行記

池内 紀著 四六判・200頁 定価2,575円

生きている経済の知識

踏み迷う経済原則、ミラクル経済原理を論評

細野耕以知著 四六判・256頁 定価2,884円

スウェーデンの 住環境計画

スヴェン・ティーベ編著 外山義訳
A5判・296頁 定価 4,635円

スウェーデンにおける住宅史、近年の家族形態の急激な変化に対応する政策、とりわけユーザニーズの必要性を説き、新しい住宅形態の計画理念と設計手法を詳細な図面とデータにより紹介。

劇場

舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム著 劇場技術研究会訳
B5判・256頁 定価 6,386円

英国舞台技術者協会との協力のもとに書かれた劇場の計画と設計のための入門書。劇場の一般技術解説にとどまらず、劇場にかかわる全ての事象を明確に説く。

高齢者住宅の企画と設計

M. ヴァリンス著 湯川利和訳
B5判・160頁 定価 5,768円

コーポラティブ・ハウジング

神谷宏治、池沢 喬、延藤安弘、中林由行共著
四六判・226頁 定価 2,884円

ハウジング・デザイン

理論と実践

I. コフーン、P. フォーセット共著 湯川利和監訳
B5判・376頁 定価 12,051円

音楽のための建築

17世紀から現代にいたる建築家と音楽家と聴衆

M. フォーサイス著 長友宗重、別宮貞徳共訳
B5判・328頁 定価 12,360円

ホールの計画と運営

伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝著 四六判・248頁 定価 2,987円

SD選書195 劇場の構図

清水裕之著 四六判・268頁 定価 1,854円

[SDライブラリー]②0

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハーピソン著 浜田邦裕訳
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開

島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立を探り、また現代建築の巨匠であるアールト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

ハイテック・コンストラクション3

スーパーシェッズ

大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史的変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

インテリアデザイナーのための

住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン



9603号 目次

●特集●新しい経営戦略の再構築へ

- わいどあぐる ●地方回帰—大都市サラリーマン人口の減少が加速／表意のメリット—脳の漢字認識はカナより素早い／爆発的売行き—バンソウコウの在庫がなくなった
- 霞が関ホットライン ●企業合併促進へ経審条件緩和／景気先行きに明るさ／一般競争入札対象工事、大幅引下げ
- 阪神復興 ●兵庫県下被災分譲マンション、6割強復旧にめど／復興への重点プロジェクト発表
- 他社が始めた新商売 ●日韓合併企業が建材部門に進出
- 列島を拓く ●大阪府が年度内に既存建築物耐震改修促進計画策定／都来年度予算原案総額は12兆1,677億円
- 学会・協会・業界 ●国際調達体制整備進む／免震構造普及へ評定手数料改定
- 海外建設事情 ●深圳にテクノセンター／ポーランドで2,600㎡の高速道路計画
- こんなモノつくりました ●簡易処理装置で建設汚泥大幅減量／1台で各種計測—山岳トンネル向け自走式車両
- こんな方法考えました ●街区まるごと免震構造／SS無線でトンネル内作業状況把握
- コンピュータ ●稟議書などの社内文書を電子決裁／建物の履歴DB化でリニューアル営業支援

▶今月の「拾出し」▶2年後に首都機能移転先決定 誘致合戦いよいよ激化

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

DALTON 定期購読申込書

□新規購読申込

SD

フリガナ お名前	
〒 ご自宅 住所	
お勤め先 (職種)	該当のものに ○印を
購読期間(☑印をつけてください)	□1年 □3年

購読のお申し込みは今すぐに!

大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

(株)鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

- 定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。



9412 SD Review 1994: Featuring SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Viogor de Mieux par Takubo 2.** ¥1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9504 Scenes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9505 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sotssass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriya City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru Yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesco D'Artico, etc.. ¥1,950



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeda, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyoo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

セラミック板

黎明

日本板硝子株式会社



日本板硝子株式会社では、焼き物が持つ高級感を備えた、軽量かつ耐火性を有する世界最大級のセラミックス建材、黎明を新発売した。この大型セラミックス建材は、非常に細かい珪砂質の微粉を主成分とした特殊原料を成形し、1100℃以上の高温で焼成・焼結させたもので、「比重1.2」という軽量化を図るとともに、焼成時の収縮率を1%以下に抑えることにより、大型でかつ高い寸法精度の実現に成功した。現在のパイロットプランでは、世界最大級の、厚さ60mm、タテヨコ900mm×3,000mmの寸法まで製造することができる。

特長

- ①高温焼成されたセラミックス材料であるため、耐久性・耐薬品性に優れ、塗装、塗り替えが不要な完全メンテナンスフリーの材料である。
- ②注型成形が可能で、深い凹凸を付与でき外観デザインが自由、釉薬仕上げにより本物の焼き物としての高級感が得られる。
- ③凍害性に優れ、耐火1時間性能をもつ。
- ④大寸法かつ軽量のため施工の工期短縮につながる。
- ⑤廃棄の際は不活性、無公害なエコマテリアルである。

日本板硝子株式会社 硝子建材開発部

東京都港区海岸2丁目1番7号

〒105 Tel 03-5443-9540

駐車場床用防水

MPパーク

水谷ペイント株式会社



水谷ペイント株式会社では、本格的な駐車場床専用の防水材およびシステムを新発売した。耐久性に優れた駐車場床用複合防水床工法である。都市およびその周辺では、駐車場が不足し、ビルの屋上および地下を駐車場として利用するケースが増えている。車の激しい出入りに耐え、かつ、優れた防水機能のあるものをとの要求に応え、同社では、各々特性のあるウレタン樹脂をその用途に従い様々に組み合わせ、あるいは、ブレンドすることにより、抜群の強度と耐久性を発揮する特殊二層構造強ウレタン塗膜防水材を開発した。

特長

- ①幅広い温度域における塗膜の伸びが、型枠用デッキプレート上のRC床など、軽量構造床をはじめ、下地コンクリートのクラックにも破断することなく追従し、優れた防水性能が得られる。
- ②強靱の強ウレタン樹脂が環境変化に対する高い抵抗性を持つため、優れた耐久性を発揮する。
- ③シームレスな露出工法のため、従来のアスファルト防水に比べコンクリート押えが不要、軽量化と工期の大幅な短縮およびコスト低減が可能である。
- ④骨材のグリップ性に優れているため、耐摩耗性および耐衝撃性に富み、ノンスリップが可能である。

水谷ペイント株式会社 関東本部

東京都千代田区神田佐久間町2丁目11番1号

〒101 Tel 03-3865-8177

舗装材

トレスルー

東レ株式会社



東レ株式会社では、雨水をそのまま地中に戻す透水性舗装材、トレスルーを開発した。原料は、ビルの外壁などに使用されるセラミックタイルの廃材を再利用している。その磁器質タイルを細粒状に砕き、のり成分を混ぜ、成型し、1,200℃の窯で焼いて仕上げている。厚みは6cmで、上層部5mmは0.5～1mmのごく小さい粒、その他は1～2.3mmほどの大きさの粒がくっついて固まった状態で作られている。多孔質のため、非常に軽く施工性に優れている。雨水は、この粒の間をじわじわと伝わって地中に戻され、雨水を含んでも形状・強度にはなんの変化もない。透水性の他に保水性があげられ、水をかけると水はすうっと内部に吸い込まれ、表面は、さらっとした状態を保ち、しかも下から水が落ちてくるまでにはかなりの時間がかかる。1㎡あたり約18ℓ保水ができ、相当激しい雨が降っても歩行に支障をきたさず、不快な泥はねもほとんどない。下水道の負担を軽減し、中小河川の氾濫を防ぐ。表面温度が上がりにくく、真夏でも快適な路面温度にし、水をまけば長時間内部に保水し、表面温度を下げる。ブロックを敷き詰めた状態に施工できるため、色を違えて模様を作ったり、光る石を表面にちりばめるなど、豊富なカラーバリエーションで都市空間を演出する。

東レ株式会社 広報室

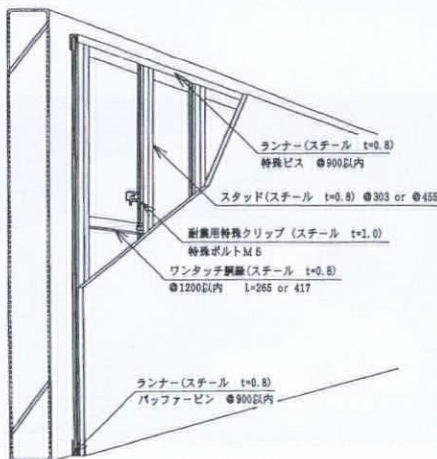
東京都中央区日本橋室町2丁目2番1号

〒103 Tel 03-3245-5177

耐震用フカシ壁

ジシンサク30

株式会社マンテン



立面展開図

㈱マンテンでは、耐震用フカシ壁、ジシンサク30を開発した。阪神大震災では、多くのビルが崩壊し、大変な被害にあった。内装についても、震度7に追随するフカシ壁があれば被害も最小限に食い止められたのではないかと考えられる。一般の壁、特に避難通路としての階段室、エレベーターホール、廊下の壁面には地震で脱落崩壊しない耐震壁が必要である。

特長

- ①壁厚の仕上がり寸法の小さい鋼製薄型乾式工法(仕上厚30mm・下地17.5mm、ボード12.5mm)で、室内空間を有効に活用できる。
- ②外壁からの振動に左右されない「耐震用特殊クリップ」採用により、地震の振動による内壁面の損傷を防ぐ。(層間変位1/60に対応)
- ③施工が容易である。使用部材は4種類と少なく、胴縁がワンタッチで着脱できる。
- ④壁の高さは、3,500mmまで可能である。

価格

3,350円/m²(材工共、標準設計価格)

金属製内外装材

コンパチ

東邦シートフレーム株式会社



東邦シートフレーム㈱では、石目調で外壁のコーディネートができる、金属製内外装材、コンパチを新発売した。コンパチは、単色・ツートンの2種類。石目調を生かし、例えば、1階はツートンコンパチ、2階は単色コンパチ。1階は窯業サイディング、2階はコンパチ。1階がコンパチ、2階がハリUP。腰壁はツートンコンパチ、その上はタテ張りナナハン、など住まいのおしゃれは相性のよいアイテムを選ぶことである。

特長

- ①地球にやさしい、ノンフロン断熱材を使用している。
- ②単色はネオグレー、ネオページュ、ネオブラウンの3色。ツートンは、ストーングレー、ストーンページュ、ストーンブラウンの3色と選びぬかれたカラーバリエーション。
- ③彫りのあるデザイン。
- ④リフォームにもおすすめ。
- ⑤施工性が良く、工期もスピーディ。
- ⑥ヨコ・タテ兼用張り。

金属製内外装材

コアサンド

三晃金属工業株式会社



三晃金属工業㈱では、サンドイッチパネルの特性を極めた外壁材、コアサンドを新発売した。コアサンドは、落ち着いた艶消しの表面処理鋼板の間に、圧縮剛性・耐水性にすぐれたコアをサンドイッチしたノンフロンの外装パネルである。その特長は、高い剛性と強度、断熱性を合わせ持ち、仕上がりはシンプルで美しいフラット面と、ボルトレスのジョイント部が優雅に演出できる。施工も軽くて簡単である。いま、外壁に求められるあらゆる条件に適合した乾式工法である。種類は、一般タイプ、防火タイプ、耐火タイプがある。表面材標準色(つや消し4色)ホワイトグレー、ホワイトページュ、クリーム、ライトグリーン。裏面材標準色(つや消し2色)ホワイトグレー、ホワイトページュ。体育館、工場、倉庫、イベント施設、事務所、店舗などの用途に適応する。

株式会社マンテン

大阪市浪速区日本橋東1丁目10番6号

〒556 Tel 06-644-2151

東邦シートフレーム株式会社

東京都中央区日本橋3丁目12番2号

〒103 Tel 03-3274-6211

三晃金属工業株式会社

東京都中央区京橋2丁目9番2号

〒104 Tel 03-3567-3551

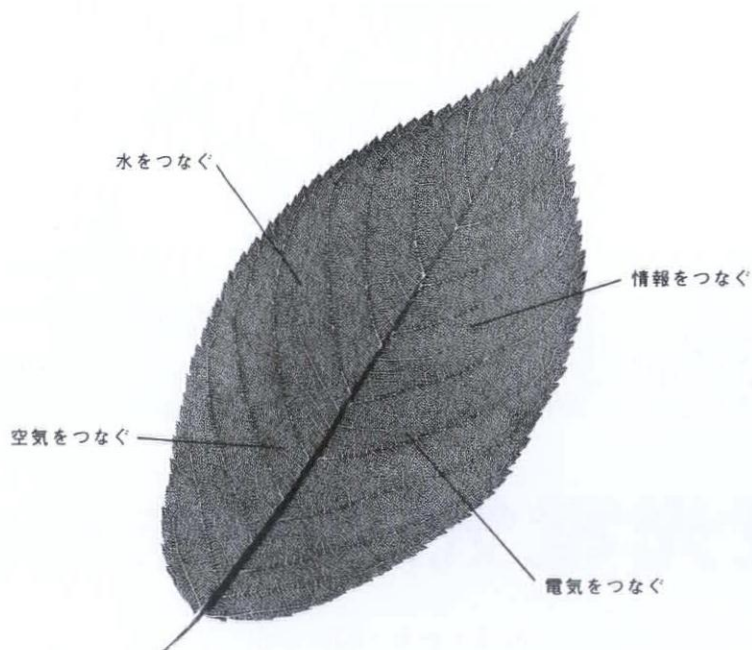
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



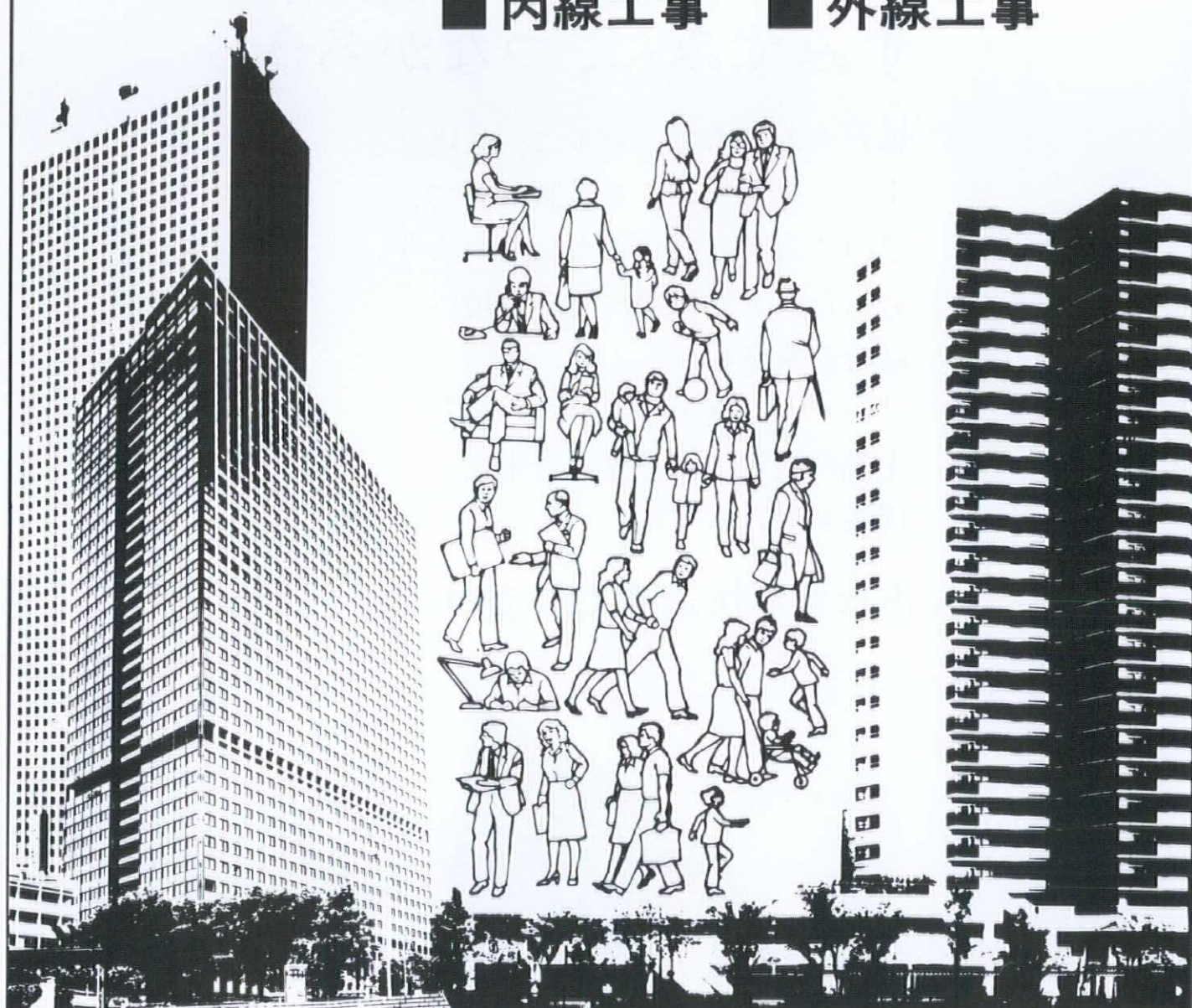
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06 (537) 3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03 (3454) 7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

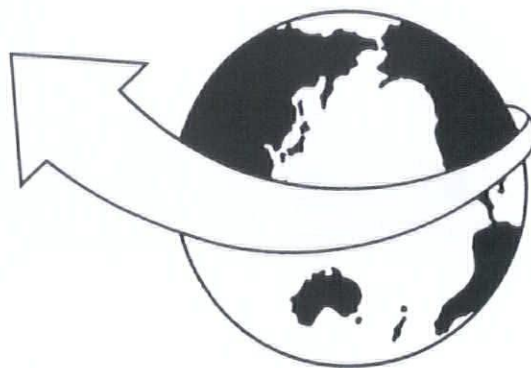
取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 〒101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

未来に向けて...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 千105 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 千532 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



奥山化学工業株式会社

本 社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL 03(3571)2703 代 FAX 03(3571)0264
大阪事務所 TEL 06(391)1081-2 FAX 06(395)2109 名古屋出張所 TEL 052(811)3660
横浜営業所 TEL 045(320)4832 FAX 045(320)4765 厚木出張所 TEL 0462(21)1761 FAX 0462(23)1341
埼玉営業所 TEL 048(774)2845-6 茨城出張所 TEL 0292(28)0878 FAX 0292(28)2614

テトカッパー防水層

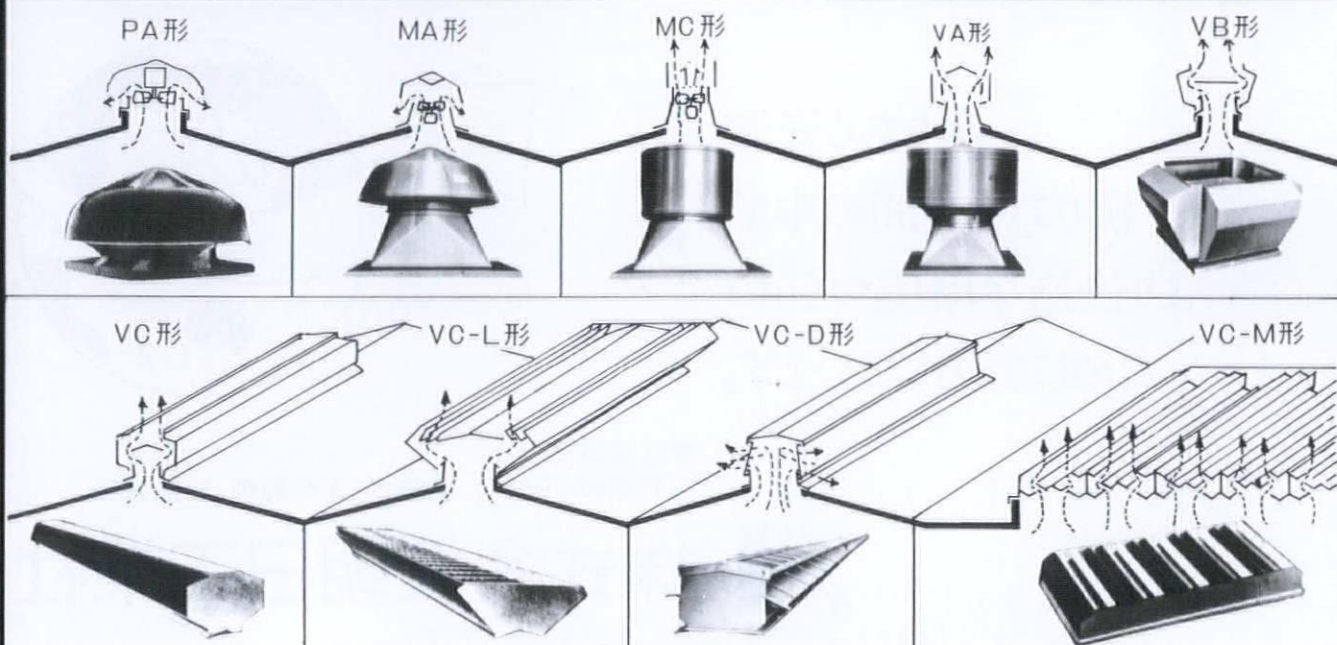
カッパー防水帯

コーパータイト・オクロン防水帯

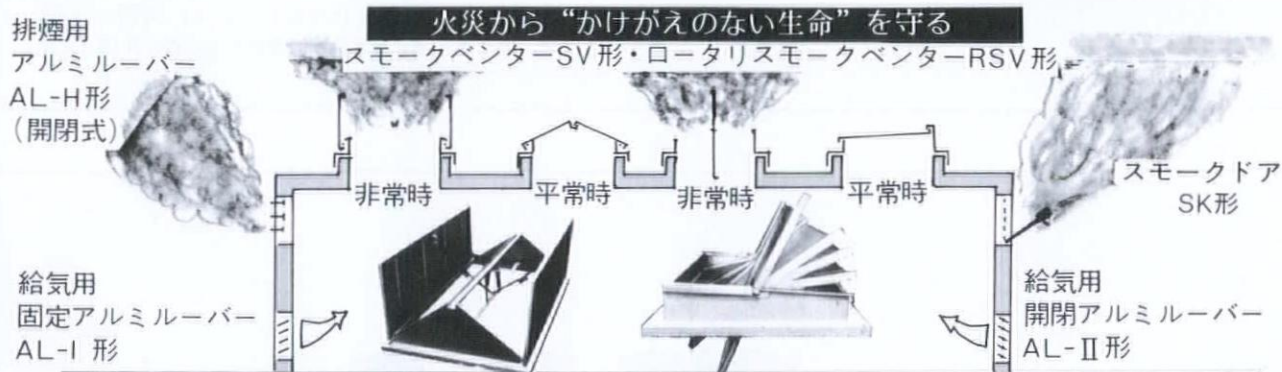
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

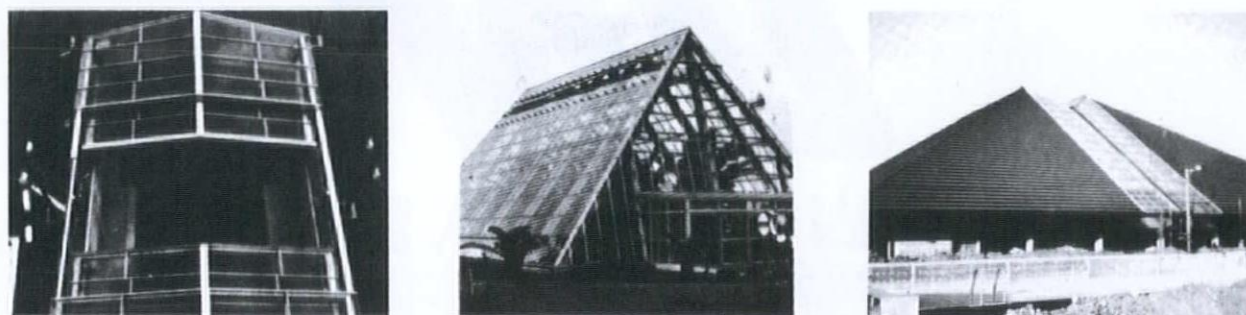


排煙・ルーバー装置



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト

採光装置



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご
用命ください (五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03 (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンピアンビル (3865) 6011(代)

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	株朝日工業社	A21
オ	奥山化工業株	A21
カ	株関電工	A3
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
コ	株弘電社	A13
サ	三機工業株	73
	株坂本商会	A22
シ	新日軽株	表4
	昭和銅機株	118
	新菱冷熱工業株	A14
ス	住友電設株	A19
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A7
チ	株中電工	A15
ト	株トーエネック	A15
	東洋熱工業株	80
	東光電気工事株	A20
	株東芝	A24
ニ	日本電気株	A9
	日新工業株	A10
	株西原衛生工業所	A11
ヒ	株日立製作所	表2
フ	株ブリヂストン	A1
ホ	ホテルイースト21	A8
マ	松下電器産業株	A2
ミ	美和ロック株	76・77
ヤ	矢崎総業株	A16
	山田照明株	117
	株ヤナセ	A12

TOSHIBA

エネルギー・エレクトロニクス

E&Eの東芝

優しくされて、人は輝やく
人と環境のあたかなふれあい。
ルミナスの美学が、ここにある。

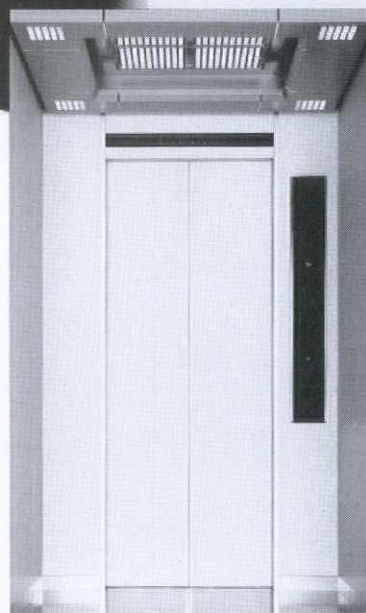
ルミナス・アメニティ。

- 人と環境の美しい調和をモチーフに設計された、ゆとり感覚あふれるニューデザイン。
- 快適な移動のために情報システムで制御された数々のインテリジェント機能を搭載。
- ヘリカルギヤを新採用し、大幅な省エネルギー化とランニングコストの低減化を実現。
- IGBTの採用と制御回路のデジタル化により、より静粛で滑らかな走行性能を発揮。

人と環境のあたかなふれあい

東芝ニューコンセプト標準形エレベーター

エレメイト ルミナス・
Luminous



●お問い合わせは… 株式会社 東芝 昇降機事業部 本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) ☎(03)3457-4613

北海道支社(011)214-2451 東北支社(022)264-7640~1 東関東支社(043)299-1017 神奈川支社(045)664-8611 北陸支社(0762)24-2815 中部支社(052)564-8510~4
関西支社(06)440-2261~3 中国支社(082)246-3090~1 四国支社(0878)25-2440~2 九州支社(092)735-3056